

# 研究紀要 39

## 目 次

小原俊行・鈴木 茂・関口博幸 ……………	1
後期旧石器時代の環境変遷史とテフラ年代の現状 —萩原遺跡の分析結果を中心に—	
谷藤保彦 ……………	21
群馬県出土の縄文時代土製耳飾り —中期から後期前半—	
友廣哲也 ……………	41
群馬県の墓制 —弥生時代後期の位置づけ—	
杉山秀宏 ……………	59
金井東裏遺跡 3号祭祀遺構の再検討	
高島英之 ……………	79
墨書・刻書土器の動向から見た 古代上野国吾妻郡の歴史的展開について	
石守 晃 ……………	99
一点だけでも「こも編み石」に認定できるか？	
板垣泰之 ……………	119
江戸時代の出土金属製品の材質分析について —天明泥流により被災した煙管を中心に—	

2021

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 研究紀要 39

2021

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 後期旧石器時代の古環境変遷とテフラ年代研究の現状

## — 群馬県萩原遺跡の分析結果を中心に —

小原 俊行<sup>1)</sup>・鈴木 茂<sup>2)</sup>・関口博幸<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 群馬県地域創生部文化財保護課・<sup>2)</sup> 日本大学文理学部非常勤講師・<sup>3)</sup> (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 1. はじめに         | 4. 古環境研究とテフラ研究の現状 |
| 2. 萩原遺跡の概要と土層   | 5. おわりに           |
| 3. 萩原遺跡での自然科学分析 |                   |

## — 要 旨 —

ある地域における遺跡数や遺物の出土量を通時的に概観すると、特定の時期に遺跡数・遺物量が激増もしくは激減する傾向が認められる場合がある。何故、時期によって遺跡数などが増減するのかを説明するためには、単にその傾向を地域内・地域間で比較するだけではなく、古気候・地形発達史の広域・局地的な時空間的変遷を整理した上で、考古資料との経時的・空間的な対応関係を整理する必要がある。

特に、後期旧石器時代の人類は遊動型狩猟採集民であり、生業活動を展開する上で、主に動植相や石材資源の環境といった生態学的要因に適応することが強く求められたと想定されることから、人類を取り巻いていた古環境を捉えることの重要性は大きい。

本論の分析対象地となる関東平野北西部では、榛名山や浅間山を供給源としたテフラの堆積が顕著である。そのため、テフラ年代に関する研究は、考古編年や古環境変遷の実年代を検討する上で大きな役割を果たしてきた。

本論では既に報告書が刊行されている太田市萩原遺跡における発掘調査で実施された花粉分析と、榛名箱田テフラ(以下、Hr-HA)等のテフラの降下年代に関する分析のうち、未報告となっていたものを新たに公表した。そして、この結果を踏まえて、関東平野北西部において得られていたテフラの降下年代を整理した。

各テフラ間の年代幅については、Hr-HA～始良Tn火山灰(以下、AT)は36-30ka cal BP、AT～室田軽石(以下、MP)は30-28ka cal BP、MP～前橋泥流発生は28-26ka cal BP、前橋泥流発生～浅間白糸軽石(以下、As-Sr)は26-24ka cal BP、As-Sr～浅間大窪沢軽石群(以下、As-Ok Group)は24-21ka cal BP、As-Ok Group～陣馬泥流発生は21ka cal BP前後、陣馬泥流発生～浅間板鼻黄色軽石(以下、As-YP)は21-16ka cal BP、As-YP～高崎泥流発生は16-14ka cal BPとするのが現在妥当であると判断した。最後に、前論までに整理した当該地域の古環境変遷について、テフラ年代を参照してその年代観を提示した。

### キーワード

対象時代 後期旧石器時代  
対象地域 関東平野北西部、群馬県域  
研究対象 テフラ年代、花粉分析、  
放射性炭素年代測定、古環境変遷

1. はじめに

近年、旧石器時代に関する研究では、自然環境の変動と人類社会の変化における関係性を把握して、その歴史的意味を探ることが課題となっている(町田 2011、佐藤宏・山田・出穂 2011、工藤 2019、長井・高橋・徳永ほか 2019など)。

群馬県域である関東平野北西部では、榛名山や浅間山を供給源とするテフラの堆積が顕著に認められる。そのため、後期旧石器時代に関するテフラ年代の基礎的整理(関口・早田・下岡 2011)や地形発達史の整理(矢口 2011)にみられるように、当該地域のテフラの降下年代が石器群の年代観の追究に活発に利用されてきた。しかし、関口・早田・下岡の研究以降、テフラの降下年代に関する情報が新たに蓄積されている。また、以下で論じるように萩原遺跡でこれまで未報告であったテフラ年代等に関する情報を公開することで、改めて整理する必要性が生じている。

当該地域における古環境変遷は小原(2020)において既にまとめた。そのため、本論では当該地域における各テフラの降下年代を検討して得られた実年代を基にして、古環境変遷を解明することを目的とする。

以下では、萩原遺跡の発掘調査において実施された花粉分析やテフラの降下年代に関して報告する。その次に、関東平野北西部で検出されるテフラの年代値について整理した後、将来的な課題を提示する。

(小原俊行)

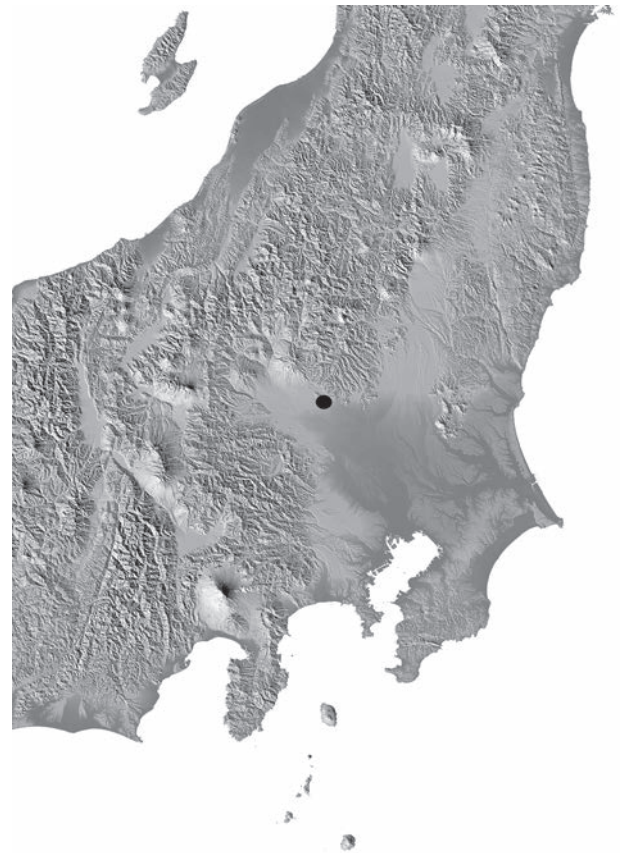
2. 萩原遺跡の概要と土層

2-1. 経緯

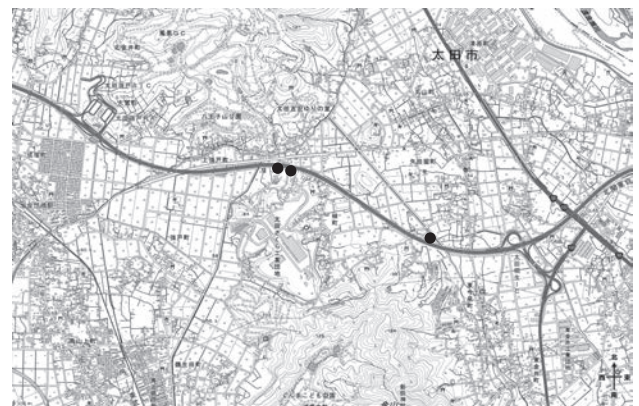
萩原遺跡は、北関東自動車道の建設に伴って2004～2007年に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって調査され、報告書は2010年に刊行された(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010c)。また、テフラ分析や花粉分析、植物珪酸体分析等の自然科学分析も複数の調査区で実施し、分析結果は報告書に掲載した<sup>(1)</sup>。しかし、報告書編集や紙数等の関係により、分析結果については調査段階で実施したうちの一部しか報告書に掲載できなかった。

すでに調査から16年、報告書刊行から10年が経過したものの、萩原遺跡の自然科学分析データは旧石器時代の古環境復原において現在でも有効性は高いといえる。また、分析結果を追加報告することにより既存のデータとの比較検証も可能となる。

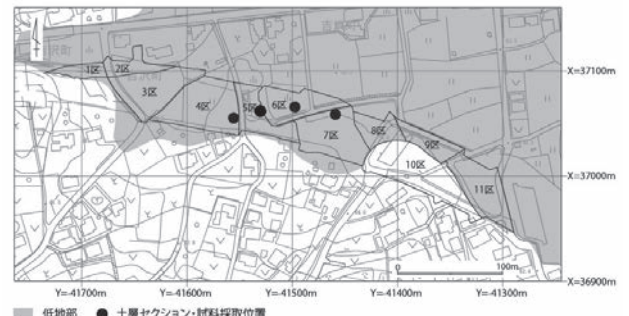
そこで、本論で報告書に掲載できなかった未報告の自然科学分析結果(花粉分析、放射性炭素年代測定)について報告することとした<sup>(2)</sup>。本論では、テフラに挟まれた粘土層から検出された試料にもとづく花粉分析結果について報告する。また、花粉分析とともに榛名箱田テフ



第1図 萩原遺跡位置図(●)



第2図 周辺の旧石器時代遺跡  
(1:萩原遺跡 2:峯山遺跡 3:八ヶ入遺跡)



第3図 調査区と土層セクション採取位置図  
(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010cを改変)

ラ(早田 1996、以下Hr-HA)に係る放射性炭素年代測定も報告する。これによりHr-HAの降下年代の特定だけでなく関東地方北西部における群馬旧石器編年Ⅰ期前半期(関口・早田・下岡 2011)の年代や環状ブロック群の年代の把握にも活用できる。このように、古環境復原と数値年代の研究基盤の着実な整備につながる。

## 2-2. 概要

遺跡は群馬県太田市緑町に所在する(第1図)。北緯36°20′11″、東経139°22′03″に位置し、関東平野北西部の渡良瀬川扇状地最西端部に立地する。北側は八王子丘陵、西側は金山・八王子丘陵を挟んで大間々扇状地(藪塚面)である。遺跡は金山の東側裾野末端部の丘陵地と平坦な低地で構成されるが、大部分は渡良瀬川扇状地の低地が占めている。低地の標高は約64mである。

2004年の調査で540基あまりの古墳時代の粘土採掘坑と良好な堆積の粘土層が検出された<sup>(3)</sup>。粘土採掘坑は土器の原料である粘土の採取・供給方法、採取地の特定など、太田市周辺地域における古墳時代の土器製作の様相を解明する手がかりの一つになると考え、粘土採掘坑とともに粘土層についても詳細に調査した<sup>(4)</sup>。

粘土採掘坑と粘土層の検出が自然科学分析のきっかけとなったわけであるが、同時に粘土層は後期旧石器時代の堆積層の可能性が高く、粘土層に挟在するテフラを特定して粘土層の堆積年代を把握し、その粘土層の花粉分析により後期旧石器時代の古環境と変遷過程を復原できると考え自然科学分析を実施した。

## 2-3. 周辺の旧石器時代遺跡(第2図)

渡良瀬川扇状地地域の主な後期旧石器時代の遺跡には、峯山遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009a)、八ヶ入遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010d)、東長岡戸井口遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999b)、石神遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015)、御正作遺跡(大泉町教育委員会 1984)などがある。大間々扇状地(桐原面)地域や赤城山南麓地域に比べれば遺跡数はとても少ない。ここでは、峯山遺跡と八ヶ入遺跡の概要を紹介する。

峯山遺跡は、萩原遺跡のすぐ西側に隣接する丘陵上に立地する。第1文化層は黒曜石を主体とする石器群で、切出形石器、角錐状石器を組成する群馬旧石器編年Ⅲ期に相当する(関口・早田・下岡 2011)。第2文化層はチャートを主体とする石器群で同旧石器編年Ⅰ期後半期に相当する。丘陵上に形成された峯山遺跡と、低地の萩原遺跡という位置関係でとらえることができるから、本論で示す花粉分析データは各文化層が形成された時期の古環境を復原するうえで有効性が高い。

八ヶ入遺跡は、南東へ約1.3kmの渡良瀬川扇状地に位

置する。平坦な扇状地の中の小さな微高地から硬質頁岩を主体とする削片系細石刃石器群が検出された。浅間板鼻黄色軽石(新井房 1962、町田・新井房 1992・2003、以下、As-YP)の直下から出土し、削片系細石刃石器群とAs-YPとの層位的な前後関係を直接確認できた重要な遺跡である。なお、遺跡間の距離は1.3km程、低地の萩原遺跡の方がよりテフラの堆積条件は良いと考えられるものの、As-YPについては萩原遺跡では確認できなかった。降下後の水による流出の可能性が考えられ、渡良瀬川扇状地の狭い範囲の中でも地点によってテフラの残存状況が違っていることがわかる。

(関口博幸)

## 3. 萩原遺跡での自然科学分析

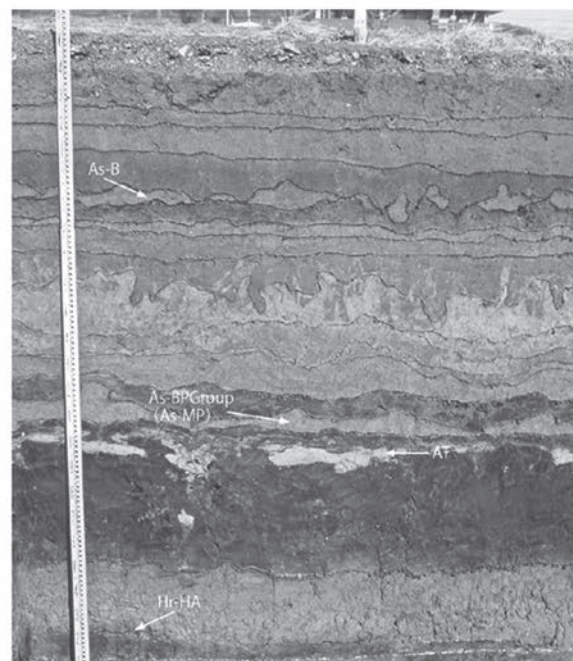
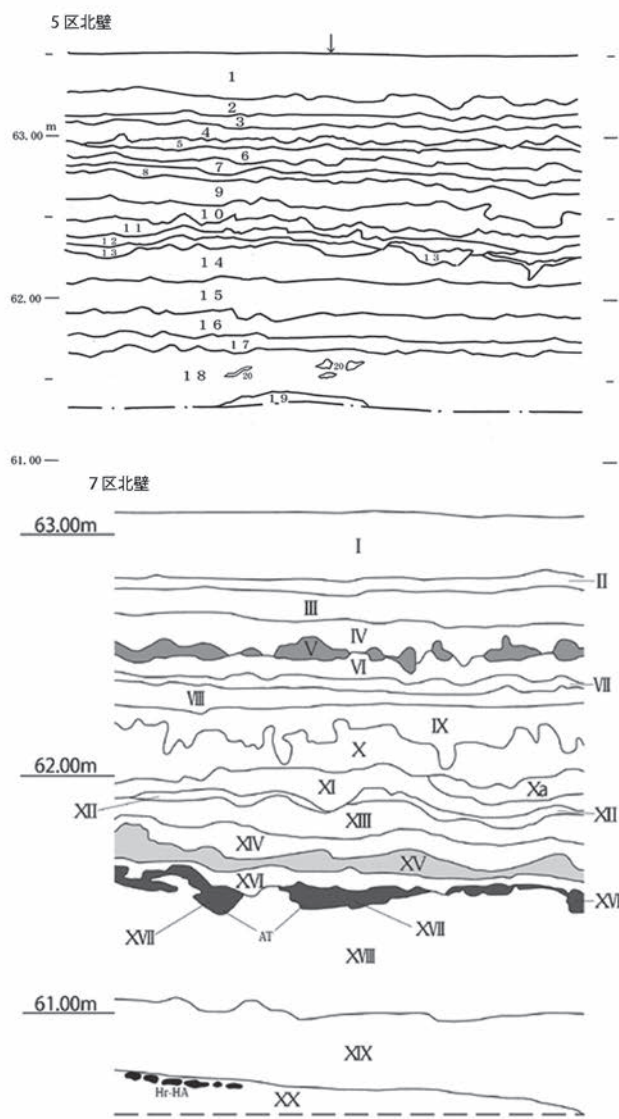
### 3-1. 分析の概要

萩原遺跡の4区・5区・6区・7区において深掘り調査が実施され(第3図)<sup>(5)</sup>、29-26 ka BPに噴出したと考えられているATが検出された。また、このテフラの下位において1~2mにおよぶ有機質な粘土層が認められ、花粉化石が良好な状態で保存されていることが予想された。この時期におけるこのように連続した堆積層はあまり知られておらず、最終氷期の古環境を検討するうえで非常に重要な堆積層と考えられる。こうしたことから、5区と7区より柱状で堆積物を採取した。以下にはこの柱状試料より分割採取した土壌試料について行った花粉分析結果を示し、最終氷期における萩原遺跡周辺の古植生について検討を試みた。

### 3-2. 試料

分析用試料は、5区と7区の深堀北壁断面(第4図)より採取された31試料である。以下に各土層について簡単に記す。

5区(19試料)：最上部1層は黒褐色の砂質シルト(現耕作土)、2層は暗褐色の砂質シルト、3層は暗褐色のシルト質砂である。4層(試料5-1)は黒褐色の粘土で、浅間B軽石(Aramak i 1963、荒牧 1968、新井房 1979、以下、As-B)が多く混入しており、白色の軽石粒も認められる。5層(5-2)も黒褐色粘土で、軽石粒が散在している。6層(5-3)は褐灰色粘土で、細粒の白色軽石(浅間C軽石(Aramak I 1963、荒牧 1968、以下、As-C))が少し認められる。7層(5-4)も褐灰色粘土、8層(5-5、5-5')も褐灰色粘土、9層(5-6)は暗灰黄色のテフラ層(浅間板鼻褐色軽石群(新井房 1962、町田・新井房 1992・2003、関口・下岡・早田 2011、以下、As-BP Group))で、多くは酸化して赤褐色を呈している。その中黒灰色粘土が線状、いもむし状に混入しており、この部分を試料とした。10層(5-7)は黒色粘土で、細かな植物遺体が点在~散在し、テ



第4図 土層断面図と写真(上段：5区、下段：7区)(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010c)

第1表 土層一覧表(上段：5区、下段：7区)

土層No	色調	土層	備考
1	7.5YR3/2	黒褐色土層	表土
2	7.5YR3/3	暗褐色土層	
3	10YR3/3	暗褐色土層	
4	10YR3/1	黒褐色土層	As-B混土
5	10YR3/2	黒褐色土層	
6	10YR4/1	褐灰色粘土層	
7	10YR4/1	褐灰色粘土層	
8	10YR4/1	褐灰色粘土層	
9	2.5YR5/2	暗灰黄色火山灰層	As-BPGroupの一次堆積層
10	10YR2/1	黒色粘土層	
11	2.5YR6/2	灰黄色火山灰層	MPの一次堆積層
12	10YR4/1	褐灰色粘土層	
13	10Y7/1	灰白色火山灰層	ATの一次堆積層
14	10YR3/2	黒褐色粘土層	泥炭
15	10YR3/1	黒褐色粘土層	泥炭
16	10Y3/2	オリーブ黒色粘土層	
17	10Y4/2	オリーブ灰色粘土層	
18	10YR3/2	暗灰色粘土層	泥炭
19	10Y4/1	灰色粘土層	泥炭、植物遺体含む
20	10YR7/1	灰白色火山灰層	Hr-HA

土層No	色調	土層	備考
I層	10YR3/4	暗褐色土層	表土
II層	2.5Y4/2	暗灰黄色土層	
III層	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色土層	
IV層	10YR3/1	黒褐色土層	As-B混土層
V層	10YR6/1	褐灰色火山灰層	As-Bの一次堆積層
VI層	N2/	黒色粘土層	
VII層	5YR5/1	褐灰色粘土層	
VIII層	2.5GY5/1	オリーブ灰色粘土層	Hr-FA、As-C混土層
IX層	10GY4/1	暗緑灰色粘土層	
X層	10BG6/1	青灰色粘土層	
Xa層	10BG6/1	青灰色シルト質粘土層	
XI層	10YR5/2	灰黄褐色シルト質層	
XII層	10YR5/2	灰黄褐色シルト質層	
XIII層	10Y5/1	灰色シルト質層	
XIV層	N3/	暗灰色粘土層	
XV層	7.5Y7/3	浅黄色火山灰層	MPの一次堆積層
XVI層	N3/	暗灰色粘土層	
XVII層	10Y8/2	灰白色火山灰層	ATの一次堆積層
XVIII層	N3/	暗灰色粘土層	
XIX層	5G4/1	暗緑灰色粘土層	
XX層	10YR3/3	暗褐色粘土層	上部にHr-HA(一次堆積)

フラのレンズ(下位層テフラの二次堆積?)が認められる。11層は灰黄色のテフラ層(室田軽石(森山 1971、早田 1990、以下、MP))、12層(5-8)は褐灰色の砂質粘土、13層は灰白色のテフラ層(始良Tn火山灰(町田・新井房 1976、以下、AT))である。14層(5-9)は黒褐色粘土、15層(5-10、-11)も黒褐色粘土で、細かな植物遺体が多く混入している。16層(5-12)はオリーブ黒色の泥炭質粘土で、灰色粘土が斑状に多く混入している。17層(5-13)はオリーブ灰色の粘土で、黒色の泥炭質粘土が斑状に混入している。18層(5-14、5-15)は暗灰色～黒褐色の粘土質泥炭で、上部を中心に灰白色テフラ(Hr-HA)がレンズ状に散在している。19層(5-16、5-17、5-18)は灰色～オリーブ褐色の粘土で、植物遺体が縦方向に散在している。また上位との境界より41cm下位に灰白色テフラ(榛名八崎軽石(新井房 1962、以下、Hr-HP))がレンズ状(20層)に認められる。

7区(12試料)：最上部I層は暗灰色の砂質シルト(現耕作土)、II層は暗灰黄色の砂質シルト、III層は暗オリーブ灰色のシルト質砂、IV層は黒褐色粘土で、As-Bが多く混入している。V層はAs-Bの一次推積層、VI層は黒色粘土、VII層は褐灰色粘土、VIII層(試料7-1)はオリーブ灰色の粘土で、白色テフラが散在している。IX層(7-2)は暗緑灰色粘土で、白色テフラが点在している。X層(7-3)は青灰色粘土で、灰色粘土が斑状に混入している。XI層は灰白色のテフラ層で、黒灰色粘土が縦方向に認められる。XII層(7-4)は灰色粘土、XIII層は灰白色テフラ層で、黒灰色粘土が線状に認められる。XIV層(7-5)は暗灰色粘土で、上部に赤味を帯びた灰白色テフラがレンズ状(二次堆積)に認められる。XV層は浅黄色テフラ(As-BP Group)の純層、XVI層(7-6)は暗灰色粘土で、中央部に灰白色テフラがレンズ状に認められる(二次堆積?)。XVII層は灰白色のテフラ(AT)、XVIII層(7-7、7-8、7-9)は暗灰色粘土で、細かな植物遺体が散在している。XIX層(7-10、7-11)は暗緑灰色粘土で、下部10cm付近に白色テフラ粒子が点在している。最下部XX層(7-12)は暗褐色の粘土である。

また、4・5・7地区において放射性炭素年代測定を行い、その結果を第2表と第3表に示した。なお、年代測定試料について記すと、5区では、MP(11層)の上位の10層中央部(試料番号A-1)とAT直下(A-2)、Hr-HAの上位層準(A-3)の3層準、7区ではAs-BP Group(XV層)の上位XIV層中央部(A-4)とAs-BP Group直下(A-5)、AT直上(A-6)、AT直下(A-7)の4層準である。

### 3-3. 分析方法

上記した31試料について次に示した手順に従って花粉分析を行った。

試料(湿重約3～5g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフランニンにて染色を施した。

### 3-4. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉47、草本花粉38、形態分類を含むシダ植物胞子5、コケ類1の総計91である。これら花粉・シダ植物胞子・コケ類の一覧を第4表に、それらの分布を第5図(5区)、第6図(7区)に示した<sup>(6)</sup>。

観察の結果、両地区ともほぼ同様の変化が認められ、層準により花粉化石の検出に違いが認められたことから下位よりI～VIの花粉化石群集帯を設定し、以下にその特徴について示す。

花粉帯I(5区:5-14～-18、7区:7-12)はニレ属一ケヤキ属とトネリコ属のやや目立った産出で特徴づけられる。最も多く検出されたのはハンノキ属で、5区では40～50%を示している。次いでトウヒ属が多く、10%前後得られている。その他ツガ属、マツ属単維管束亜属(チョウセンゴヨウやハイマツなどのいわゆるゴヨウマツ類)、クルミ属、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属が本帯の全試料で1%を越えている。草本類ではイネ科が上部に向かい明瞭に増加する傾向を示しており、カヤツリグサ科も同様の産出傾向を示している。反対に単条型胞子は上部に向かい減少しているが、本帯最上部では出現率を上げている。

花粉帯II(5-9～-13、7-7～-11)はゴヨウマツ類、コナラ亜属の増加とニレ属一ケヤキ属、トネリコ属の減少で特徴づけられる。最も多く得られているのはやはりハンノキ属で、両調査区とも下部2試料では70%前後の出現率を示し、上部に向かい減少している。その他ツガ属、トウヒ属、カバノキ属などが5%前後を示しており、そのうちカバノキ属は緩やかな増加傾向を示している。草本類ではやはりイネ科とカヤツリグサ科が目立ち、両分類群とも下部で出現率を下げるものの上部では回復傾向を示しており、7区のカヤツリグサ科は20%を越えている。また単条型胞子がピークを作るように上部に向かい増加・減少している。

花粉帯III(5-7、5-8、7-4～-6)はトウヒ属の増加と最優占で特徴づけられる。また、カラマツ属も

第2表 測定試料および処理

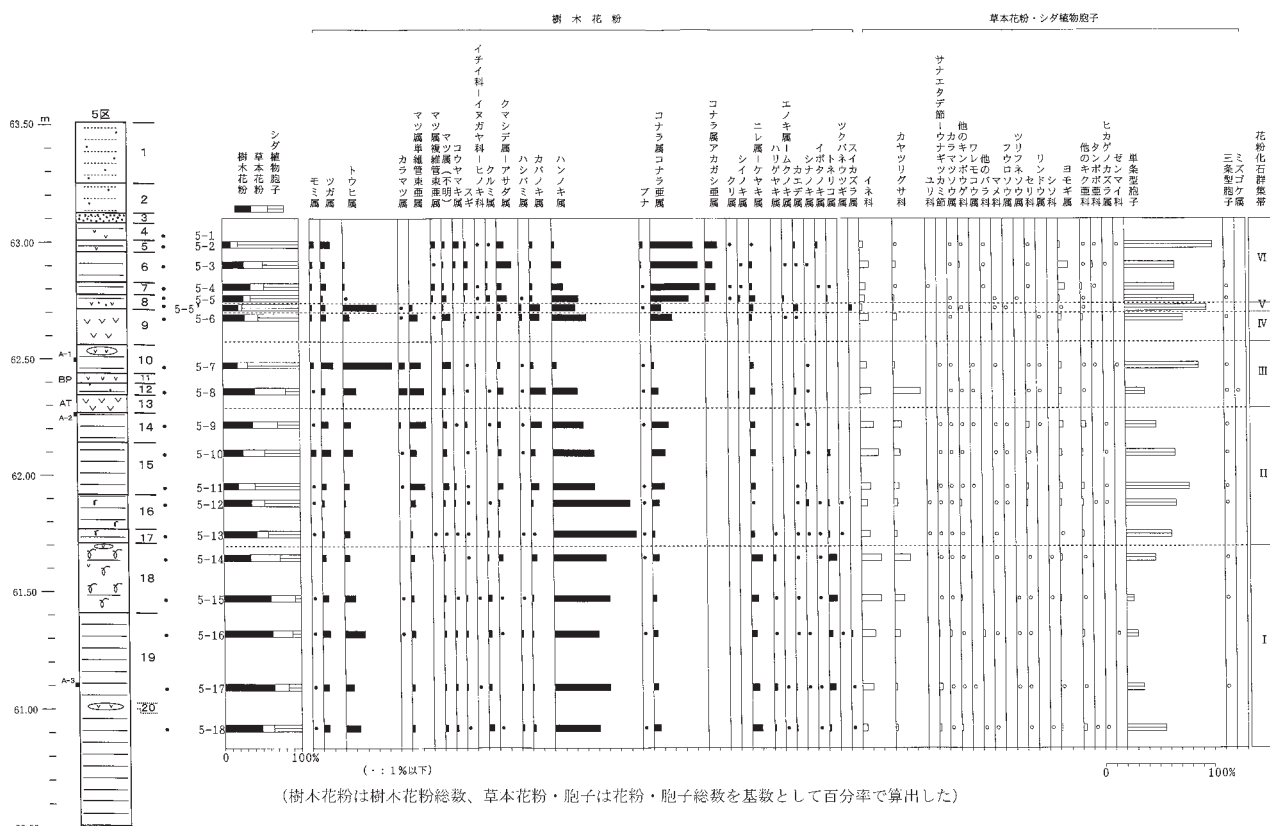
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-3301	位置：4区 その他：Hr-HA直上	種類：その他 試料の性状：不明 状態：wet	処理備考：2万年
PLD-3302	位置：4区 その他：Hr-HA下位	種類：その他 試料の性状：不明 状態：wet	処理備考：2万年
PLD-4100	位置：調査5区基本土層 遺構：深堀 層位：10層 その他：As-BP Group 直上	種類：その他(A-1) 試料の性状：不明 状態：wet 依頼注意：植生変遷の時間軸にしたい	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)
PLD-4101	位置：調査5区基本土層 層位：14層 その他：AT直下	種類：その他(A-2) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)
PLD-4102	位置：5区 層位：19層 その他：Hr-HA ? 上位	種類：その他(A-3) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：0.1 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L) 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)
PLD-4103	位置：調査7区基本土層 遺構：深堀 層位：XIV層 その他：As-BP Group 上位	種類：その他(A-4) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)
PLD-4104	位置：7区 層位：XVI層上部 その他：As-BP Group 直下	種類：その他(A-5) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L) 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)
PLD-4105	位置：7区 層位：XVI層下部 その他：AT直上	種類：その他(A-6) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L) 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)
PLD-4106	位置：7区 層位：XVIII層最上部 その他：AT直下	種類：その他(A-7) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸洗浄(塩酸：1.2 mol/L)

第3表 萩原遺跡4区・5区・7区における放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

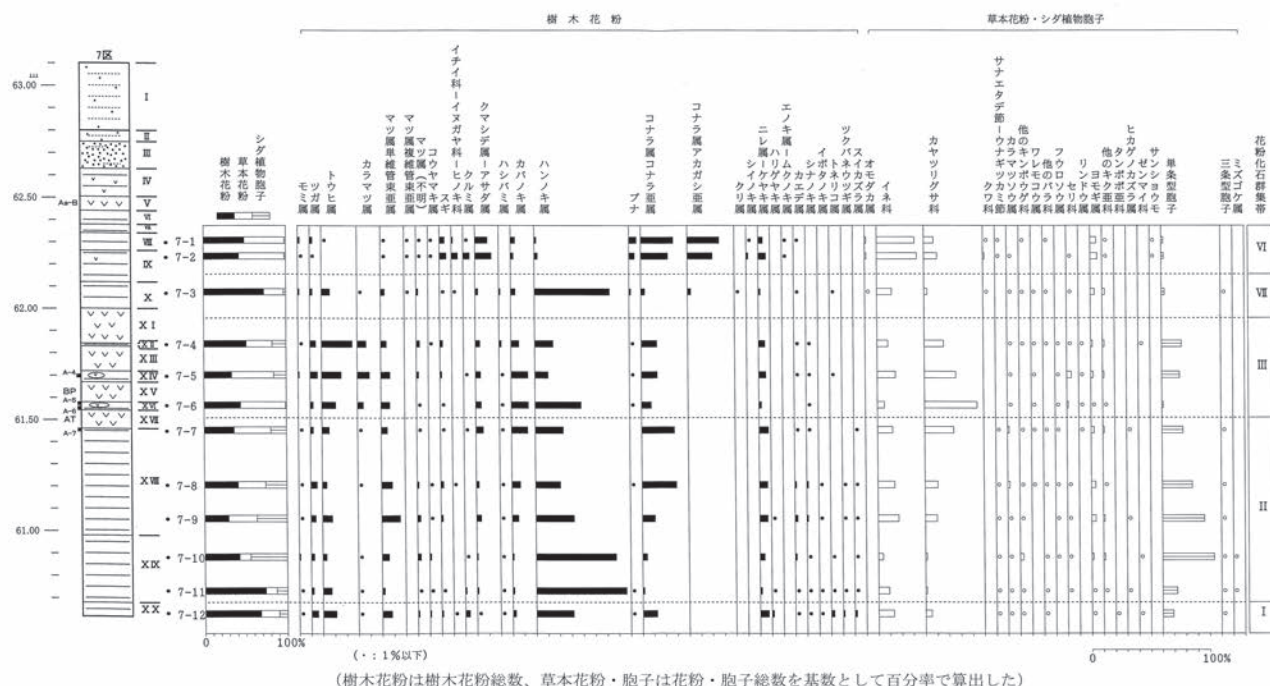
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-3301	-27.58 $\pm$ 0.12	31,616 $\pm$ 127	31,620 $\pm$ 130	36,190-35,830 cal BP (68.3%)	36,280-35,580 cal BP (95.4%)
PLD-3302	-25.53 $\pm$ 0.11	35,848 $\pm$ 172	35,850 $\pm$ 170	41,150-40,820 cal BP (68.3%)	41,270-40,620 cal BP (95.4%)
PLD-4100	-25.53 $\pm$ 0.15	19,717 $\pm$ 72	19,720 $\pm$ 70	23,840-23,460 cal BP (68.3%)	23,880-23,400 cal BP (95.4%)
PLD-4101	-25.90 $\pm$ 0.15	20,990 $\pm$ 75	20,990 $\pm$ 80	25,540-25,180 cal BP (68.3%)	25,610-25,130 cal BP (95.4%)
PLD-4102	-28.75 $\pm$ 0.17	19,870 $\pm$ 78	19,870 $\pm$ 80	23,960-23,790 cal BP (68.3%)	24,130-23,760 cal BP (95.4%)
PLD-4103	-26.97 $\pm$ 0.15	17,545 $\pm$ 63	17,550 $\pm$ 60	21,330-21,060 cal BP (68.3%)	21,400-20,970 cal BP (95.4%)
PLD-4104	-27.62 $\pm$ 0.15	23,639 $\pm$ 92	23,640 $\pm$ 90	27,840-27,720 cal BP (68.3%)	27,940-27,650 cal BP (95.4%)
PLD-4105	-27.70 $\pm$ 0.16	19,328 $\pm$ 70	19,330 $\pm$ 70	23,670-23,090 cal BP (68.3%)	23,720-23,020 cal BP (95.4%)
PLD-4106	-26.34 $\pm$ 0.14	22,495 $\pm$ 83	22,500 $\pm$ 80	27,040-26,490 cal BP (68.3%)	27,100-26,450 cal BP (95.4%)







第5図 萩原遺跡5区における主要花粉化石分布図



第6図 萩原遺跡7区における主要花粉化石分布図

推測され、便宜的にⅦ帯とした。

花粉帯Ⅵ(5-1~5、7-1、7-2)はコナラ亜属の優占で特徴づけられる。またアカガシ亜属も7区試料では、コナラ亜属と同じような出現率を示すなど多く検出されている。また、スギやクマシデ属-アサダ属がこれまでの花粉帯中最も高い出現率を示している。草本類やシダ類胞子の産出は5区と7区で大きく異なり、7区ではイネ科が多産し、単条型胞子はやっと1%を越えた程度である。また、水生植物のオモダカ属が1%を越える出現率を示している。一方5区のイネ科は5%前後と少なく、単条型胞子は40~80%と多産している。

### 3-5. 遺跡周辺の植生変遷

#### (1)各花粉帯の時期について

19層の中央部付近において放射性炭素年代測定(試料番号A-3:PLD-4102)が行われており、2σ暦年代範囲24,130-23,760 cal BCという数値が得られている。しかしながら、年代試料A-3は、新編火山灰アトラス(町田・新井房 2003)によると29-26 ka BPに噴出したAT(13層)の下位1m強の層準であることから、得られた結果はかなり新しい年代値を示している。この要因としては、植物の根などにより上位の新しい堆積物が混入している可能性が推察される。よって、A-3の年代値については参考程度にみて頂きたい。なお、上記した5区や7区と同様の堆積層が4区においても認められており、その4区の第3トレンチ下部層においても放射性炭素年代測定が行われている。層準は5区18層の上部に認められる白色テフラ(Hr-HA)の直下と、さらに50cmほど下位の2層準である。その結果、テフラ直下(試料No.HG 3-1:PLD-3301)で2σ暦年代範囲36,280-35,580 cal BPが、その下位約50cm(HG 3-2:PLD-3302)で2σ暦年代範囲41,270-40,620 cal BPが得られている。これらのことから、花粉帯Ⅰの時期については不明であるが、4区の年代を参考にすると、およそ41-35 ka BPの期間の可能性が推測される。花粉帯Ⅱの上限はATの直下であることから29-26 ka BP、下限はおおよそ35 ka BP頃と推察される。花粉帯ⅢはATやAs-BP Groupの降下時期を中心とした時期と考えられ、およそ20 ka BPを中心に、下限が29-26 ka BP頃と推察される。花粉帯Ⅵの上限はAs-B直下の年代が考えられ、下限はAs-C降下頃と推察される。これらのことから、Ⅵ帯は古墳時代~平安時代末頃と推測される。

#### (2)萩原遺跡周辺の植生変遷

花粉帯Ⅰ期:時期については不明であるが、4区の年代測定結果を参考にすると、およそ41-35 ka BPの期間が推測される。この時期の遺跡周辺丘陵部ではトウヒ属を中心にツガ属、ゴヨウマツ類を交えた亜寒帯性針葉樹

林が形成されており、一部にスギ林もみられたであろう。また、ニレ属-ケヤキ属を中心にカバノキ属やコナラ亜属などの落葉広葉樹林も林分を広げていたとみられる。一方、低地部ではハンノキ属を主体にクルミ属やトネリコ属を交えた湿地林が形成されていた。

花粉帯Ⅱ期:時期について、上限が29-26 ka BP、下限がおおよそ35 ka BPと推察される。遺跡周辺丘陵部では依然として針葉樹林や落葉広葉樹林が成立していたとみられるが、その様相としては少し異なっていたようである。すなわち針葉樹林ではトウヒ属に代わりゴヨウマツ類がやや林分を広げたことが推測され、落葉広葉樹林ではコナラ亜属を中心とした森林となった可能性が推察される。低地部に形成されていた湿地林も様相が異なり、クルミ属やトネリコ属は縮小し、ほぼハンノキ属のみの湿地林となったと推察される。また、この湿地林は次第に縮小したとみられ、代わってカヤツリグサ科やイネ科などが生育する草本性の湿地が拡大したと推察される。

花粉帯Ⅲ期:挟在するテフラ層の年代から、およそ20 ka BPを中心に、下限がおおよそ29-26 ka BPとした時期と推察される。遺跡周辺丘陵部ではトウヒ属を中心にカラマツ属やツガ属、ゴヨウマツ類などの亜寒帯性針葉樹林が広く成立していた。一方、コナラ亜属やクマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹林はかなり縮小したとみられる。また、低地部に形成されていたハンノキ属の湿地林はさらに縮小したとみられ、草本類のカヤツリグサ科やイネ科も生育地を狭め、シダ植物が目立つ植生になったことが推測される。

花粉帯Ⅳ期:時期については不明であるが、下限は20 ka BPと推測される。この時期になるとトウヒ属やカラマツ属を中心とした亜寒帯性針葉樹林は縮小し、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が林分を広げたようである。また低地部ではハンノキ属の湿地林が再び拡大したとみられる。

花粉帯Ⅴ期:トウヒ属が再び多産しており、このトウヒ属を主体とした亜寒帯性針葉樹林が一時期勢力を盛り返したとみられる。こうした現象は世界各地で知られており(11-10.3 ka BPの新ドリアス期など)、日本においても北海道などで晩氷期の終わり頃にはっきりとした寒暖の変化が認められている(小野・五十嵐 1991)。関東地方においても最近こうした現象を示していると考えられる花粉分析結果が示され(鈴木茂・石綿・村田 2004)、13 ka BPを中心とした時期に寒の戻りを推測させるトウヒ属やゴヨウマツ類が目立つ花粉組成が示されている。しかしながら、現時点においてこの花粉帯Ⅴ期については1試料のみの結果であり、上位Ⅵ帯との境界は同じ8層内にあること、また7区においては認められていないことなどを考え合わせると、さらに十分な検討が必要と考え、今後の課題としたい。

花粉帯VI期：時期は、浅間山起源のテフラ層から、古墳時代～古代頃と推測される。この時期の遺跡周辺丘陵部ではコナラ亜属を主体にクマシデ属-アサダ属やニレ属-ケヤキ属などを交えた落葉広葉樹林が広く成立していたと推察される。またアカガシ亜属やシノキ属などの常緑広葉樹林も一部に形成されていたとみられる。さらに、スギやヒノキ類(イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科)、ニヨウマツ類(アカマツやクロマツなどのマツ属複雑管束亜属)といった針葉樹類も一部に生育していたであろう。一方、低地部では一部水田稲作が行われるようになり、この水田内にはオモダカ属やサンショウモなどの水田雑草類もみられるようになったと推測される。また、植物珪酸体分析からヨシやツルヨシといったヨシ属も多く生育していたとみられ、水田周辺の水路や湿地などに大群落を形成していたと思われる。

(鈴木 茂)

### 3-6. 小結

萩原遺跡の自然科学分析結果について、報告書掲載分(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010c、関口 2010、以下、報告分)と本論での結果の整合性について確認する。

火山灰分析は6区と11区で実施されている。6区では表土をI層として、XIII層まで層序区分がされている。その内、IIa層が二次堆積のAs-YPと浅間大窪沢第1・第2軽石(中沢・新井房・遠藤 1984、中沢 1989、以下、As-Ok 1・As-Ok 2、総称でAs-Ok Group)のうちAs-Ok 1の混土、III層がAs-BP Groupの混土、V層がMPの一次堆積、VII層がATの一次堆積、XII層がHr-HAの一次堆積であると判明した。また、11区では表土下においてAs-Bの一次堆積と、榛名二ツ岳渋川テフラ(新井房 1979、早田 1989、以下、Hr-FA)とAs-Cの混土が認められている。

本論で推定されたテフラ層序は、報告分での火山灰分析と整合性の取れたものとなっている。特に、5区11層と7区V層で報告されたAs-BP Groupは、As-BP Group最下部のMPであると推定される。

本論の分析において、Hr-HA直下の泥炭層の年代値が提示され、Hr-HAは少なくとも35 ka cal BP前後に降下したと推定される。Hr-HAに関する年代値はこれまで少数しか得られていなかった。Hr-HA直上は本地域における後期旧石器時代前半期の石器群が出土する層位であることから、その年代値が得られた意義は大きい。

報告分における花粉分析ではHr-HAからMP前後の時期を5つの花粉帯(HGS-I～V帯)に区分している。

Hr-HA降下以前であるHGS-I帯ではコナラ亜属やニレ属-ケヤキなどの冷温帯落葉広葉樹林とマツ属、ツガ属、モミ属などの亜寒帯針葉樹林が分布する。また、落葉広葉樹林のブナ属が極めて少ない冷涼でやや乾燥した

気候である。

HGS-II帯であるHr-HA以降AT降下以前の前半では、トウヒ属、ツガ属、マツ属などの亜寒帯針葉樹林がやや拡大し、冷温帯落葉広葉樹林が縮小する。また、ハンノキ属の湿地林が拡大するといったように、気候の寒冷化が認められる。

その後、HGS-III帯であるHr-HA以降AT降下以前の後半では、コナラ亜属とカバノキ属などの冷温帯落葉広葉樹林が拡大し、マツ属、ツガ属などの亜寒帯針葉樹林が多く分布する。ハンノキ属の湿地林が縮小し、気候の冷涼化と乾燥化が進行する。

HGS-IV帯はAT降下以降からMP降下以前であり、カバノキ属である冷温帯落葉広葉樹林、トウヒ属である亜寒帯針葉樹林が拡大する。気候は寒冷化と乾燥化が進行し、カヤツリグサ科を主とするイネ科の湿地性草本が繁茂する。

HGS-V帯はMP降下以降の時期が該当する。マツ属、トウヒ属、ツガ属などの亜寒帯針葉樹林が拡大し、カバノキ属、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が分布する。気候も寒冷化と乾燥化し、シダ植物が分布する乾燥地が拡大する。

本論での花粉分析の結果においてもHr-HA下からAs-B下までの期間を6つの花粉帯で区分しているが、その区分はやや異なる。花粉帯I期とHGS-I帯は対応するものの、花粉帯II期はHGS-II帯とHGS-III帯、花粉帯III期はHGS-IV帯とHGS-V帯が対応するといったように、本論での花粉分析の結果と比較すると、報告書掲載分の方が花粉帯は細分されている。しかし、本論5区の花粉末ダイアグラムにおけるカバノキ属やハンノキ属、コナラ亜属といった主要花粉の増減の傾向は報告書掲載分の6区の結果の変遷と大よそ対応するため、報告分と、本論のものは整合性が高いと判断される。

(小原俊行)

## 4. 古環境研究とテフラ研究の現状

### 4-1. 関東平野北西部におけるテフラの年代観

本地域は浅間山や榛名山などの火山に囲まれていることから、中部・上部ローム層中から数多くの火山灰や軽石、火砕流堆積物が検出される。そのため、後期旧石器時代に関係する各テフラや泥流堆積物等の研究史、噴出年代等の研究史がまとめられた関口・早田・下岡(2011)や矢口(2011)からわかるとおり、数多くの研究が蓄積されている。加えて、近年では、前橋泥流堆積物の埋木を対象とした放射性炭素年代測定が実施されるなど、テフラや泥流の年代に関わるデータが加えられた。本論でもHr-HA降下年代に関するデータなどが新たに得られた。そのため、本項では後期旧石器時代に特に関わる本地域で検出されるテフラの降下年代を整理する<sup>(7)</sup>。

### (1) AT下位のテフラ(第5表)

本地域の暗色帯より下層に認められるテフラとしては、Hr-HPと、Hr-HPより上位に認められる赤城鹿沼軽石(新井房 1962、以下Ag-KP)が挙げられる。しかし、本地域ではこれらのテフラが発掘調査によって検出される事例は少なく、年代学的研究も少ない(関口・早田・下岡 2011)。

Hr-HPの降下年代については、同一の噴火によって堆積したと考えられる白河火砕流堆積物(新井房 1962)から得られた炭化木片を用いて放射性炭素年代測定が実施されており、49-46 ka cal BPに収まる(下司・大石 2011)。

Ag-KPの降下年代については、青木らが鹿島沖海底コアの底生有孔虫の殻の酸素同位体比カーブを標準的な酸素同位体比カーブ(Martinson et al. 1987)と対比させることで、 $44.2 \pm 4.5$  ka yBPという年代値を導き出している(青木・入野・大場 2008)<sup>(8)</sup>。

そのため、Hr-HPの降下年代は49-46ka cal BP、Ag-KPの降下年代は47-40ka cal BPの期間と考えられる。

Hr-HAはAg-KPやHr-HPよりも上位に位置し、暗色帯下位から検出される<sup>(9)</sup>。本論のほかに、吹屋遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007a)と波志江中宿遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001)において本テフラの直下出土の炭化物や腐植質土壌、荒砥北原Ⅱ遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007b)では本層直上の黒泥を用いて放射性炭素年代測定が実施されている。数値にまとまりがあるとは言えないが、供給源である榛名山に最も近い吹屋遺跡でHr-HA直下出土の炭化物を試料とした値が39-36ka cal BP、Hr-HA直上の黒泥土の試料を用いた荒砥北原Ⅱ遺跡の値が35-33ka cal BPを示す。萩原遺跡での一次堆積のHr-HA直下の炭化物の年代値が36-35 ka cal BPであることも考慮すると、噴出年代は37-33ka cal BPの間、特に36-35ka cal BPの期間であると考えられる。

本地域の後期旧石器時代の石器群はいずれもHr-HAより上位にて検出されるため、少なくとも36-35ka cal BPより新しい時期のものであると考えられる<sup>(10)</sup>。

暗色帯上位にはATが検出される。特に、浅間山からのテフラの供給の多い碓氷川流域から榛名山南麓の地域では、中野谷松原遺跡(安中市教育委員会 1998)や三ツ子沢中遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000a)の例のように、ATの一次堆積層が一定の厚さをもつか、パッチ状に検出される。ATの降下年代は近年では、30-28ka cal BPと考えられる(工藤 2014、下岡 2016)。特に、水月湖の年縞堆積物の試料から得られたATの年代値などを考慮すると、その年代値は30ka cal BPに近い

ものと考えられる(Smith et al. 2013、工藤 2014)。

本地域でも三和工業団地Ⅰ遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999a)や富田宮下遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008)、波志江中屋敷東遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002)などでAT下暗色帯の炭化物を試料にして放射性炭素年代測定が実施されている。年代値の幅が大きいのが、概ね全国的な傾向と一致すると思われる。

### (2) AT上位のテフラ(第6表)

ATより上位にはAs-BP Groupの堆積が認められる<sup>(11)</sup>。赤城山西麓や榛名山南東麓では、As-BP Groupは2~3枚の間層を挟んで検出される。加えて、AT層準とAs-BP Groupの最下部であるMPも多くの場合、間層を挟んで検出される。対照的に赤城山南麓では、殆どの場合、As-BP Groupは部分的な堆積、もしくは間層を挟まない状態で検出される。

As-BP Groupの降下年代の内、最下部であるMPの年代値については、八崎日影山遺跡・分郷八崎上浅ヶ原遺跡(渋川市 2015)、吹屋遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007a)、上ノ台遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009c)、今宮遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016)で数値が得られている。吹屋遺跡ではAs-BP Group中・上部の最下部直下、上ノ台遺跡ではAs-BP Group中・上部より下層から試料が採取されている。As-BP Groupの下部と中部の境界がMP中にあることを考慮すると、MPの降下年代は28ka cal BP前後であると考えられる。

また、As-BP Group降下期間中、浅間山系の黒斑火山が山体崩落を起こし、前橋泥流が発生した(新井房 1967、早川 1995、竹本・久保 1995・2003、前橋市教育委員会 2016)。この泥流堆積物は現在の前橋・高崎市街域に広がる前橋台地・高崎台地を形成している<sup>(12)</sup>。

吹屋遺跡において認められたAs-BP Group層中の前橋泥流堆積物の流れ込みの出土層位から、泥流の発生時期はAs-Mt 4~6の期間であると考えられる(早田 2016、後藤 2016)<sup>(13)</sup>。

As-BP Group層中の前橋泥流の発生年代については、泥流堆積物の露頭で確認される埋木(新井房 1967、久保 2017)から採取した木片を対象に、放射性炭素年代測定が実施されている(新井房 1967、佐藤興・南・中村ら 2018、佐藤興・南・中村ら 2019)。また、上細井蟬山遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013)では前橋泥流下位相当層出土の炭化物から年代値が得られている。これらの結果から、前橋泥流発生年代幅は27-26ka cal BPにまとまる<sup>(14)(15)</sup>。

As-BP Groupの降下年代については上述した遺跡のほか、滝遺跡(藤岡市教育委員会 1999)や田場Ⅰ遺跡(桐

生市教育委員会 2010)、上白井西伊熊遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010a)などでAs-BP Groupの前後の堆積層中から検出された炭化物を対象に放射性炭素年代測定が実施されている。下岡はこれらの遺跡で得られたAs-BP Groupの年代観を整理している(下岡 2016)。今回、萩原遺跡でもAs-BP Group直上・上位の年代値が得られた。As-BP Groupの降下期間はこれまで得られた数値を考慮すると28-24ka cal BPの範囲に収まると考えられる<sup>(16)</sup>。

As-BP Groupより上位には浅間白糸軽石(町田・新井房・小田ほか 1984、町田・新井房 1992・2003、以下、As-Sr)の堆積が前橋市以北の地域を中心に認められる。前述した上白井西伊熊遺跡では前橋泥流堆積物とAs-Srの間層から瀬戸内技法関連資料と男女倉型有樋尖頭器が出土している。これらの石器を含む石器集中部と重複して検出した礫群の礫に付着した炭化物を試料として年代測定が実施されている。また、 $\delta^{13}C$ 値を用いた同位体比分別補正が行われていないが、長野県南軽井沢地方の

露頭で得られたAs-Sr直下出土の植物片とフミン酸でも放射性炭素年代測定が行われている(中村俊・辻・竹本ほか 1997)。後述するAs-Ok 1の推定降下年代も勘案すると、As-Srの降下年代は24-21ka cal BPの期間に収まると推定される。

As-Srより上位にはAs-Ok Groupが堆積する。富田下大日遺跡では男女倉型有樋尖頭器がAs-Ok 1を含む層中から検出されている(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008)。石器集中部と重複して検出された炭化物集中部の試料では放射性炭素年代測定も実施されており、較正年代では24,220-23,850 cal BP・23,960-23,460 cal BP・23,840-23,390 cal BPを示す<sup>(17)</sup>。また、小暮東新山遺跡では、As-SrとAs-Ok 1の間層に「住居状遺構」とされるものが検出されており、そのピットから得られた炭化物は22,060-21,460 cal BPを示す(群馬県教育委員会 2011)。

As-Ok 2については、 $\delta^{13}C$ 値を用いた同位体比分別補正が行われた放射性炭素年代測定値はない。長野県佐

第5表 関東平野北西部における後期旧石器時代前半期のテフラ年代(関口・早田・下岡 2011を基に追記・修正)

テフラ	測定試料のテフラとの層位関係	試料	測定方法	<sup>14</sup> C年代(yrBP)	$\delta^{13}C$ (0/00)	補正 <sup>14</sup> C年代(yrBP)	暦年較正 <sup>14</sup> C年代(Intcal20.0x-cal4.4)(cal BP, 2σ)	測定コード	遺跡	文献	
始良Tn火山灰AT	直上	泥炭	β計数法	21,040±150	-27.1	21,010±150	25,720-25,010	Beta-92778	三和工業団地遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999a	
	直上	不明	AMS	19,330±70	-27.70±0.16	19,328±70	23,720-23,020	PLD-4105			
	直下	不明	AMS	20,990±80	-25.90±0.15	20,990±75	25,610-25,130	PLD-4101	萩原遺跡	本報告	
	直下	不明	AMS	22,500±80	-26.34±0.14	22,495±83	27,100-26,450	PLD-4106			
	下位	泥炭	β計数法	21,840±170	-23.8	21,860±170	26,440-25,840	Beta-92779			
	AT下暗色帯	炭化物	AMS	24,990±140	-26.0	24,970±140	29,710-28,840	Beta-95946 Geo-3181		三和工業団地遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999a
	AT下暗色帯	炭化物	AMS	29,860±240	-26.3	29,840±240	34,740-33,860	Beta-150646	富田宮下遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008	
AT下泥炭中	腐植質堆積物	β計数法	24,750±300	-22.7	24,790±300	29,900-28,410	Beta-133214	波志江中屋敷東遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002		
ハヶ岳新期第4テフラ Yt-Pm 4	-	-	-	-	-	14 ky	-	-	FT法	ハヶ岳団体研究グループ 1976	
	-	黒曜岩片	-	-	-	13,000±650	-	-	FT法	Suzuki 1974 ハヶ岳団体研究グループ 1988	
	中	木片	β計数法	23,490±1,150	-	-	-	Gak-11825		稲田 1986	
	-	-	-	-	-	29 ky	-	-	層序	大石・鈴木 2004	
	遺構BL 2	炭	AMS	31,650±190	-24.8	31,650±190	36,360-35,550	Beta-109376			
	遺構BL 2	炭	AMS	30,950±170	-25.4	30,950±170	35,760-34,760	Beta-109377			
	遺構BL 5	炭	AMS	30,570±160	-28.9	30,510±160	35,290-34,540	Beta-109378	長野県香坂山遺跡	長野県埋蔵文化財センター 2001	
	遺構BL 6	炭	AMS	31,630±180	-25.3	31,630±180	36,330-35,510	Beta-109379			
	直下	炭化木片	AMS	-	-26.46±0.12	30,667±130	35,350-34,670	PLD-19042		大石 2015	
	下位(Xb層)	炭化物	AMS	34,840±250	-23.7	31,860±250	36,810-35,610	Beta-86229			
	下位(Xb層)	炭化物	AMS	32,220±260	-24.2	32,240±260	37,160-36,100	Beta-86230			
	下位(Xb層)	炭化物	AMS	31,380±230	-26.4	31,360±230	36,770-35,640	Beta-86231	長野県八風山山遺跡	佐久市教育委員会 1999	
下位(Xb層)	炭化物	AMS	32,200±260	-25.6	32,190±260	37,110-36,060	Beta-86232				
下位(Xb層)	炭化物	AMS	32,180±260	-25.1	32,180±260	37,100-36,050	Beta-86233				
榛名箱田テフラ Hr-HA	二次堆積中	腐植質土壌	β計数法	26,390±510	-26.3	26,360±510	31,560-29,680	Beta-134980	波志江中宿遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001	
	直上	黒泥	AMS	29,780±400	-27.0	29,750±400	35,140-33,370	Beta-156580	筑碓北原II遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007b	
	直下	炭化物	AMS	32,470±450	-27.7	32,430±450	38,540-35,910	Beta-195080	吹屋遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007a	
	直下	不明	AMS	31,660±128	-27.58±0.12	31,620±130	36,280-35,580	PLD-3301			
	下位	不明	AMS	35,858±173	-25.53±0.11	35,850±170	41,270-40,620	PLD-3302	萩原遺跡	本報告	
	下位	腐植質土壌	AMS	29,620±450	-29.0	29,550±450	35,120-33,020	Beta-133215	波志江中宿遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001	
下位	腐植質土壌	AMS	35,230±840	-28.7	35,230±840	42,030-38,770	Beta-133216				
下位	腐植質土壌	AMS	16,380±90	-27.2	16,350±90	19,970-19,510	Beta-98819	下植木志町田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団1999c		
赤城鹿沼軽石 Ag-KP	-	-	-	-	-	32,000±4,000	-	-	栃木県星野遺跡	鈴木 1975	
	-	-	-	-	-	31,000±8,000	-	-	FT法		
	-	-	-	-	-	44.2±4.5 ka	-	-		青木・入野・大場 2008	
白川火砕流堆積物	中	炭化木片	AMS	-	-20.56±0.4	44,740±450	48,100-46,050	IAAA-870783			
	中	炭化木片	AMS	-	-31.99±0.97	45,030±620	48,700-46,030	IAAA-82291		下司・大石 2011	
榛名八崎軽石 Hr-HP	上位	不明	AMS	19,870±80	-28.75±0.17	19,870±78	24,130-23,760	PLD-4102	萩原遺跡	本報告	
	直上	泥炭	β計数法	>24,810	-	-	-	GaK-13864	二之宮千足遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992	
	直下	泥炭	β計数法	14,380±210	-	-	-	GaK-15171			
	-	-	-	-	-	44,000±4,500	-	-	栃木県星野遺跡FT法	鈴木正 1975	

着色部はテフラ年代の参考とした暦年較正值

第6表 関東平野北西部における後期旧石器時代後半期のテフラ年代(関口・早田・下岡 2011を基に追記・修正)

テフラ	測定試料のテフラとの層位関係	試料	測定方法	<sup>14</sup> C年代(yrBP)	δ <sup>13</sup> C (0/00)	補正 <sup>14</sup> C年代(yrBP)	暦年較正 <sup>14</sup> C年代(Intcal20, Oxcal4.4)(cal BP, 2σ)	測定コード	遺跡	文献
浅間板鼻黄色軽石 As-YP	上位	泥炭	β計数法	11,230±250	-	-	-	GaK-11684		辻・木越 1992
	上位	植物片	AMS	12,820±190	-	-	-	NUTA-1879		中村俊・辻・竹本ほか 1997
	上位	フミン酸	AMS	12,340±150	-	-	-	NUTA-2108		
	上位	腐植質土壌	β計数法	12,720±80	-28.6	12,670±80	15,350-14,610	Beta-117058	高崎情報団地II遺跡	高崎市教育委員会 2002
	直上	黒泥	β計数法	11,490±150	-	-	-	GaK-17372		
	直下	木材	β計数法	14,000±230	-	-	-	GaK-17373	元総社寺田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
	直下	木本質泥炭	β計数法	13,040±130	-	-	-	GaK-17374		
	直下	樹木黒色泥炭	β計数法	13,130±230	-	-	-	GaK-159		新井房 1964
	直下	泥炭質土層内樹木	β計数法	12,290±280	-	-	-	GaK-7829	日高遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
	直下	泥炭	β計数法	13,200±130	-	-	-	GaK-15172	二之宮千足遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
	直下	樹木	β計数法	13,620±290	-	-	-	GaK-15464		早川 1992
	直下	木材	AMS	13,710±130	-	-	-	NUTA-1458		
	直下	木材	AMS	13,550±160	-	-	-	NUTA-1455		中村俊・辻・竹本ほか 1997
	直下	木材	AMS	13,390±170	-	-	-	NUTA-1456		
	直下	木材	AMS	13,320±130	-	-	-	NUTA-1457		
直下	木材	β計数法	16,640±450	-	-	-	GaK-11681		辻・宮地・新井房 2004	
直下	泥炭	β計数法	16,150±250	-	-	-	GaK-19300		楡井・林 2004	
直下	木片	β計数法	13,590±80	-29.8	13,510±80	16,550-16,030	Beta-125278	中内村前遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003	
直下	泥炭層中樹木片	β計数法	13,740±80	-26.4	13,720±80	16,930-16,350	Beta-175733	荒砥前田II遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009b	
直下	樹木片	β計数法	14,750±170	-27.8	14,710±170	18,280-17,420	Beta-112829	高崎情報団地II遺跡	高崎市教育委員会 2002	
浅間大窪沢第2軽石 As-Ok2	直下	泥炭	β計数法	15,400±240	-	-	-	GaK-15463		早川 1992
	直下	木炭片	AMS	16,250±180	-	-	-	NUTA-1515	下茂内遺跡	長野県埋蔵文化財センター 1992
	直下	泥炭	β計数法	16,500±440	-	-	-	GaK-11682		辻・宮地・新井房 2004
浅間大窪沢第1軽石 As-Ok1	直上	植物片	AMS	16,720±160	-	-	-	NUTA-1503		中村俊・辻・竹本ほか 1997
	Sr上、Ok1下住居状遺構	炭化物	AMS	17,930±60	-23.6	17,950±60	22,060-21,460	Beta-121133	小暮東新山遺跡	群馬県教育委員会 2011
	Ok1混層	炭化材	AMS	20,019±67	-24.68±0.16	20,020±70	24,220-23,850	PLD-5962		
	Ok1混層	炭化材	AMS	19,786±60	-26.87±0.19	19,790±60	23,960-23,460	PLD-7753	富田下大日遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008
	Ok1混層	炭化材	AMS	19,665±59	-26.96±0.15	19,670±60	23,840-23,390	PLD-7754		
	直下	泥炭	β計数法	16,820±250	-	-	-	GaK-15462		早川 1992
浅間白糸軽石 As-Sr	直下	泥炭	AMS	16,880±130	-	-	-	NUTA-1491		中村俊・辻・竹本ほか 1997
	直下	泥炭	β計数法	16,490±270	-	-	-	GaK-19301		楡井・林 2004
	直下	植物片	AMS	22,110±260	-	-	-	NUTA-2302		中村俊・辻・竹本ほか 1997
前橋泥流堆積物	直下	フミン酸	AMS	20,610±260	-	-	-	NUTA-2353		
	泥流上、Sr下	炭化物	AMS	17,750±70	-25.3	17,750±70	21,870-21,270	Beta-195730		
	泥流上、Sr下	炭化物	AMS	20,030±80	-23.9	20,050±80	24,250-23,850	Beta-195731	上白井西伊熊遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010a
	泥流上、Sr下	炭化物	AMS	5,380±40	-22.8	5,420±40	6,300-6,020	Beta-195732		
	泥流上、Sr下	炭化物	AMS	9,490±40	-23.5	9,510±40	11,070-10,600	Beta-195733		
	中	木片	β計数法	24,000±650	-	-	-	GaK-725		新井房 1967
志桑(塚原)泥流堆積物	中	木片	β計数法	19,560±790/-720	-	-	-	HR-571		建設省土木研究所砂防研究室 1991
	中	木片	β計数法	20,030±840/-760	-	-	-	HR-572		
	中	樹木片	AMS	-	-25.2	22,570±60	27,170-26,450	NUTA2-24511		佐藤興・南・中村俊ほか 2018
	中	樹木片	AMS	-	-27.5	22,590±80	27,200-26,450	NUTA2-26139		
	中	樹木片	AMS	-	-26.9	22,570±80	27,180-26,450	NUTA2-26140		佐藤興・南・中村俊ほか 2019
	中	樹木片	AMS	-	-23.8	38,780±170	42,730-42,370	NUTA2-26142		
	中	木片	β計数法	21,250±140	-	-	-	KSU-1263		
	中	木片	β計数法	22,500±240	-	-	-	KSU-1519		樋口 1990
	中	木片	β計数法	23,700±290	-	-	-	KSU-1495		
	中	樹木片	AMS	-	-23.0	22,357±65	26,940-26,400	NUTA2-25209		
浅間板鼻褐色軽石群 As-BP Group	直上	泥炭	β計数法	15,700±130	-26.5	15,680±130	19,280-18,730	Beta-92025	三和工業団地I遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999a
	上位	不明	AMS	17,550±60	-26.97±0.15	17,545±63	21,400-20,970	PLD-4103		
	直上	不明	AMS	19,720±70	-25.53±0.15	19,717±72	23,880-23,400	PLD-4100	萩原遺跡	本報告
	中層	炭化物	AMS	19,940±340	-	-	-	NUTA-2483	北山B遺跡	軽部 1994 藤岡市教育委員会 1995
	中層	炭化物	AMS	19,260±490	-	-	-	NUTA-2526		
	中	炭	AMS	22,740±100	-25.1	22,740±100	27,290-26,490	Beta-109027	滝遺跡	藤岡市教育委員会 1999
	中部あるいは上部より下層	炭化物	AMS	23,480±140	-25.6	23,470±140	27,840-27,350	Beta-251362, ITNH-00023	上ノ台遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009c
	前橋泥流下位相当	炭化物	AMS	22,390±90	-25.44±0.71	22,385±93	27,000-26,400	IAAA-92853		
	前橋泥流下位相当	炭化物	AMS	22,660±100	-26.11±0.58	22,641±99	27,240-26,460	IAAA-92854		
	前橋泥流下位相当	炭化物	AMS	23,140±100	-25.64±0.75	23,127±99	27,660-27,240	IAAA-92855	上細井嶺山遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013
	前橋泥流下位相当	炭化物	AMS	22,990±100	-24.48±0.63	22,998±102	27,570-27,150	IAAA-92856		
	MP上、他のBPG下	炭化物	AMS	23,460±120	-27.1	23,430±120	27,810-27,360	Beta-368511	八崎日影山遺跡・分梨八崎上茂ヶ原遺跡	渋川市 2015
	MP上、他のBPG下	木炭	AMS	22,570±80	-23.32±0.51	22,602±78	27,210-26,460	IAAA-160386	今宮遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016
	層中	木炭	AMS	26,130±110	-22.24±0.41	26,176±106	30,790-30,130	IAAA-160385		
	中～下層	土壌	AMS	19,450±290	-	-	-	NUTA-2527		
	中～下層	土壌	AMS	19,880±330	-	-	-	NUTA-2482	北山B遺跡	軽部 1994 藤岡市教育委員会 1995
	中～下層	炭化物	AMS	20,420±330	-	-	-	NUTA-2528		
	中・上部の最下部直下	炭化物	AMS	23,160±210	-24.6	23,170±210	27,770-27,180	Beta-193203	吹屋遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007a
直下	不明	AMS	23,640±90	-27.62±0.15	23,639±92	27,940-27,650	PLD-4104	萩原遺跡	本報告	
直下	炭化材	AMS	23,500±130	-25.7	23,490±130	27,850-27,370	Beta-174454	田場遺跡	桐生市教育委員会 2010	

着色部はテフラ年代の参考とした暦年較正值

久市下茂内遺跡のAs-Ok 2層下部から検出された炭化物集中の試料の分析されている(長野県埋蔵文化財センター 1992)。また、長野県南軽井沢地方の露頭におけるAs-Ok 1の直下で得られた木片と、直上で得られた植物片に対して分析されている(中村俊・辻・竹本ほか 1997)。

富田下大日遺跡と小暮東新山遺跡での年代値が大きく異なる点を検討しなければならない。富田下大日遺跡ではAs-Ok 1の混土層中にAs-Srが含まれる可能性があり、石器群の年代値を示す試料としては信頼性が高いものの、テフラの降下年代を参照する際には数値を信頼するには慎重を要する。よって、As-Ok Groupの降下年代は少なくとも24-21ka cal BPの期間に収まり、小暮東新山遺跡の年代値を参考にすると21ka cal BP前後である可能性が高い<sup>(18)(19)</sup>。

ローム層最上部にはAs-YPが堆積する。高崎情報団地Ⅱ遺跡(高崎市教育委員会 2002)ではAs-YP下位層から得られた樹木片と上位層の腐植質土壌、中内村前遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003)ではAs-YP直下出土の木片、荒砥前田Ⅱ遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009b)ではAs-YP下位の泥炭層中から得られた樹木片を試料として、それぞれ放射性炭素年代測定が行われている。また、 $\delta^{13}\text{C}$ 同位体比分別補正が行われていないが、長野県南軽井沢地方の露頭におけるAs-YP直下から得られた木材を試料に分析されている(中村俊・辻・竹本ほか 1997)。これらの結果から、As-YPの降下年代は18-16ka cal BP前後であると考えられ、特に16ka cal BPに近い年代になると想定される。

また、As-YP降下以降には、内陸性の大地震に伴って、烏川や碓氷川、秋間丘陵、岩野谷丘陵、榛名山麓で同時多発的に土砂崩落が発生した(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000b、中村正 2003、竹本 2008)。そのうち、高崎台地(新井雅・矢口 1994)や烏川・井野川を中心に認められる泥流堆積物は井野川泥流堆積物(早田 1990)、高崎泥流堆積物(新井雅・矢口・中村正ほか 1993)と呼称される。発生年代は上述した高崎情報団地Ⅱ遺跡での、15,350-14,610 cal BPが高崎泥流堆積物直下から検出された試料の数値のため、15-14ka cal BPの期間であると推定される。

### (3)各テフラ間の年代幅

以上のことを勘案すると、各テフラ間の年代幅はHr-HA～ATは36-30ka cal BP、AT～MPは30-28ka cal BP、MP～前橋泥流発生は28-26ka cal BP、前橋泥流発生～As-Srは26-24ka cal BP、As-Sr～As-Ok Groupは24-21ka cal BP、As-Ok Group～陣馬岩屑なだれ発生は21ka cal BP前後、陣馬泥流発生～As-YPは21-16ka cal BP、As-YP～高崎泥流発生は16-14ka cal

BPとするのが現在妥当であると判断される。

### 4-2. テフラ年代を基にした古環境変遷の年代観

関東平野北西部における後期旧石器時代の花粉分析の傾向と古環境変遷については既にまとめた(小原 2020)。そのため、本項では前論では触れられなかった、人類活動と自然環境の対応関係に関する近年の見解に言及すると共に、前項で得られたテフラ年代と古環境変遷の年代観を照合する<sup>(20)</sup>。

前項で整理したテフラの年代観を基にして、関東平野北西部における後期旧石器時代の古環境変遷史を整理すると、以下のとおりとなる。

#### 1 Hr-HA降下後～：36-32ka cal BP

より後出する時期と比較して温暖であるが、相対的な温暖期と寒冷期を繰り返す。植生はコナラ属などの冷温帯広葉樹の中に亜寒帯性針葉樹が混在する。

#### 2 ～AT降下前：32-30ka cal BP

1と比較して急激に寒冷・乾燥化する。コナラ亜属が減少し、カバノキ属が微増する。

#### 3 AT降下後～MP降下前：30-28ka cal BP

気候は28-24ka cal BPが最終氷期最盛期(Last Glacial Maximum、以下LGM)に含まれるため、後期旧石器時代中、最も寒冷化が進んだ時期であると考えられる。植生はこの間、トウヒ属などの亜寒帯性針葉樹林が主に分布する。

#### 4 MP降下後～前橋泥流発生前：28-26ka cal BP

28-27ka cal BPであるMP降下後、気候が短期間ではあるが温暖化する。植生は前時期と同様、トウヒ属などの亜寒帯性針葉樹林が主に分布する。28-27ka cal BPの期間ではコナラ属コナラ亜属が増加する。

27-26ka cal BPには前橋泥流の発生により、泥流堆積物が利根川扇状地を覆って堆積する。この影響により、古利根川の流路が現在の井野川流路に変化する。

#### 5 前橋泥流発生後～As-Sr降下前：26-24ka cal BP

前橋泥流堆積物上はヨシを主体とする湿原もしくは荒涼地となる。

気候は引き続き寒冷ではあるが、As-Mt10降下以降、24ka cal BP前後から若干ではあるが温暖化する。植生はトウヒ属などの亜寒帯性針葉樹が分布する。

#### 6 As-Sr降下後～As-Ok Group降下前：24ka-21ka cal BP

LGMの後半に当たるため、気候は基本的には寒冷であるが、前時期と比較して若干温暖化する。前橋泥流堆積物上はヨシを主体とする湿原から水生植物が豊富な止水域を伴った環境の多様な湿原へと変化する。

植生はトウヒ属やマツ属単維管束亜属、モミ属などの亜寒帯性針葉樹林が分布する一方、ハンノキ属などの冷温帯性落葉広葉樹が伴う。



## 7 As-Ok Group降下後～：21ka-19ka cal BP

前橋泥流物堆積範囲は水生生物が豊富な止水域を伴った環境の多様な湿原からスゲ類を主体とする開けた湿原に変化する。植生は6の時期と大きく変化しない。

## 8 ～As-YP降下前：19ka-16ka cal BP

19 ka cal BP 前後から、気候は徐々に温暖化する。前橋泥流物堆積範囲はスゲ類を主体とする開けた湿原である。また、周辺の植生も周辺地域にはマツ属単維管束亜属やトウヒ属、モミ属などの亜寒帯性針葉樹林の分布が広がる一方、カバノキ属やハンノキ属などの落葉広葉樹も分布を広げる。カバノキ属が増加することから、特に赤城山南麓での気候は乾燥化する傾向にあったと推定される。

(小原俊行)

## 5. おわりに

萩原遺跡における花粉分析・テフラ年代分析結果を報告すると共に、関東平野北西部におけるテフラ年代における現状を整理した。今回、Hr-HAを中心に新たに降下年代値が得られたことは、当該地域の後期旧石器時代の研究を進めることに大いに寄与すると考えられる。

最後に、テフラ年代を考古資料で参照する中で、今後の課題となる点も提示したい<sup>(21)</sup>。

編年研究において、テフラの降下年代の参照が有効であることに変わりはない。しかし、考古資料の実年代の時間的解像度をテフラ年代に依存するという事は、その資料の年代の上限と下限を考える上で有効ではあるものの、その資料の実年代の追究自体は行っていない。近年、考古資料における放射性炭素年代測定値の蓄積と、時間的解像度の高精度化はますます進んでいる。この状況下において、出土資料の年代値がテフラの降下年代に制約されることは、広域編年対比の際に支障となる。

石器等の考古資料の時間的変化・変異はテフラの降下に合わせて起きるものではない。考古資料の実年代比較には、その年代を直接的に反映している可能性の高い数値が今後必要となる。そのため、資料の年代決定では既に判明しているテフラの降下年代にのみ依存するのではなく、様々な観点から検討できるように情報を蓄積させる必要がある。

自然災害の人類社会への影響に関する研究は、近年注目を浴びる分野である。本地域では、前橋泥流という大規模な自然災害が人類活動に壊滅的な打撃を与えたという仮説(関口 2008)は説明の容易さ、印象深さもあってか、石器群の変化や遺跡数の増減という現象に対する原因として説明されることが多い(橋本 2017、早田 2019、佐藤興・南・柴田ら 2020)。しかし、前橋泥流といった時空間的に影響する範囲が限定される自然災害

による石材・食糧資源の枯渇を遺跡数減少の原因と見做すのは、かつてATの全国的な降下を環境変化の要因を結び付けた論(白石 1983、辻 1991など)と同様に、本来異なる時空間スケールで検討すべき事象を混同している。

時期によって遺跡数が増減するといった現象が起きる要因を説明するためには、単に該当する時期の遺跡数を地域間で比較するだけではなく、古気候・地形発達史の広域・局地的な時空間的変遷を整理した上で、石器群などの考古資料との経時的・空間的な対応関係を整理する必要がある。石器群の変化や遺跡数の粗密といった表層的な現象の背後にある旧石器集団の居住行動を捉えるためには、このような時空間スケールでの変遷を評価した上で進めなければならない。

近年では古環境変遷を復原するなど、総合的な観点から分析をした上で、特定地域の旧石器社会の様相を解明する研究が成果を上げている(小野・島田・橋詰など編 2016、池谷・佐藤編 2020など)。旧石器研究においては今後、考古資料のみを研究対象とするのではなく、総合科学的な立場から地域を研究することが期待される。

(小原俊行)

## 謝辞

本論の執筆に関し、群馬県から資料借用許可並びに掲載許可をいただいた。記して感謝申し上げる。

また、以下の方々から多大なる御協力、御教示を頂いた(五十音順、敬称略)。感謝申し上げます次第である。

麻生敏隆、岩崎泰一、佐藤宏之、下岡順直、早田勉、高屋敷飛鳥、津島秀章、長崎潤一、楡井尊

## 註

(1)テフラ分析は(株)古環境研究所、花粉分析は(株)古環境研究所と(株)パレオ・ラボが実施した。本論で報告する分析は(株)パレオ・ラボが実施したものである。(株)古環境研究所の分析結果については報告書に掲載してある。

(2)本論での公表に際し、群馬県の許可を得た。また、本論での掲載に際し、許可を得て当時の分析結果報告について一部修正している部分がある。

(3)2004年度に粘土採掘坑と粘土層を調査した。当時、関口は担当として調査全般に携わり、鈴木茂は現地にて分析試料の採取とその後の分析に携わった。本論に係る分析報告は2004年度に鈴木茂が(株)パレオ・ラボにて行ったものである。

(4)540基もの粘土採掘坑は4区で密集した様相で検出された。掘削深度はいずれも遺構確認面から比較的浅く、青灰色粘土層を最深部にしてことから、粘土採掘坑は青灰色粘土層の粘土を採掘した痕跡と考えられる。青灰色粘土層より下位にも粘土層は堆積しているが採掘した痕跡は確認できなかった。青灰色粘土層はMPよりも上位に堆積しており、MP降下以後に形成された粘土層といえる。

また、太田市周辺地域で青灰色粘土層が古墳時代の土器材料として、どのように利用されていたのかを考古学的に検証できるようにするために、2004年度の調査段階で青灰色粘土層を分析試料として土器材料分析を行っている。しかし、これも報告書では掲載できなかったのが今後

機会を改めて公表していきたい。

(5) 4区、6区、7区については報告書(群馬県埋蔵文化財調査事業団2010、関口2010c)を参照。

(6) 分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉とシダ植物孢子・コケ類孢子は全花粉・孢子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本を作成し、各々にPLC.SS番号を付して形態観察用および保存用とした。

(7) 放射性炭素年代値のうち、測定値に同位体比分別効果に対する補正を行っていないものが多く散見される。未補正の試料に関しては、最大で400年程度の誤差が生じる可能性が想定されるため、試料の正確度の観点からみても、暦年較正の意味をなさないとされる(中村俊 2001)。後期旧石器時代の石器群の編年は千年単位のスケールで分析を進めるため、大きくは支障をきたさないと考えられるが、議論の信頼性・正確性を担保するために未補正の年代はあくまで参考としてのみ扱う。そのため、現状では年代測定が数多く実施されているのに関わらず、参照可能な試料数が極端に少ないと言わざるを得ない。

以上のことから、暦年較正は $\delta^{13}\text{C}$ 値による同位体比分別補正が行われたことが明記されている放射性炭素年代データのみに対して実施した。暦年較正の算出にはIntcal20データセット(Reimer et al. 2020)を用いてOxCal4.4プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。また、算出値は2 $\sigma$ 値の下一桁を四捨五入して示した。本論では暦年較正した年代値(cal BP = calibrated Before Present)を中心に用いるが、試料数が少ないテフラについては、未較正の年代値(yBP)も併せて言及する。また、テフラの年代値の表記はka (1 ka = 1,000 years)を用いる。

(8) 赤城火山を供給源とする過去20万年間のテフラ層序については鈴木毅彦(1990)、年代の再検討には山元(2016)の研究があるが、赤城山での大規模な噴火はAg-KPと一連の火山噴火によって噴出した水沼石質降下火砕岩(守屋 1968)を最後に認められていない。

(9) 本テフラは当初、榛名八崎火山灰(新井房 1989)と命名されていた。分郷八崎遺跡(北橋村教育委員会 1986)などの赤城山西麓を中心に分布が認められている。

(10) 本地域での報告事例は少ないものの、Hr-HAと同時期に降下したテフラとして八ヶ岳新期第4テフラ(中谷 1970、大石・鈴木毅 2004、大石 2015、以下Yt-Pm 4)が挙げられる。本地域では、江戸時代後期に発見された富岡市上黒岩のヤベオオツノジカの化石(中東 1982)の推定出土地点の泥炭層調査で検出されている(稲田 1989)。Yt-Pm 4の降下年代は長野県香坂山遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2001)と八風山II遺跡(佐久市教育委員会 1999)の発掘調査時に放射性炭素年代測定が実施されており、その結果から降下年代は37-34 ka cal BPの間、特に36-35 ka cal BPの期間に収まると考えられる。香坂山遺跡ではATとYt-PM 4の間層から、八風山II遺跡ではYt-PM 4より下位層から後期旧石器時代初頭の石器群が検出されている。そのため、Yt-Pm 4はHr-HAと共に本地域においても後期旧石器時代の始まりを考える上で重要なテフラである。

(11) As-BP Groupは元来、噴出年代が異なる別々のテフラの便宜的総称である(早田・下岡・若井 2016)。これらは火山ガラスと斜方輝石の屈折率から、下部・中部・上部の3つに区分された(町田・新井房 1992・2003)。しかし、この区分の追証が実際には困難であることが指摘されている(関口・下岡・早田 2011、早田 2016)。

As-BP Groupの細別は近年では、安中市松井田町横川大林の露頭で観察された12層の土層を基に、最下部をMP、より上位のAs-BP Groupを下位から浅間松井田テフラ1~11(以下、As-Mt 1~Mt11)と呼称することが提唱され(早田 2016)、斜方輝石の屈折率を基にして前述した3区分との対比が行われている(関口・早田・下岡 2011、早田・下岡・若井 2016、下岡・早田・青木ほか 2020)。関口ら、早田ら、下岡らの対比によれば、町田・新井房によって設定されたAs-BP Group下部と中部及の境界はMP層中にある可能性が指摘されている。また、早田ら、下岡らによればAs-BP Group中部と上部の境はAs-Mt 9とMt10の間におかれている可能性が高い。

(12) 前橋泥流堆積物の分布範囲や層厚については、吉田による一連の研究(吉田 2004a・2004b・2006)や、竹本と吉田の討論(竹本 2008、

吉田 2008)、前橋泥流によって運搬された浅間山の火山岩塊である国指定天然記念物「岩神の飛石」に関する一連の調査(前橋市教育委員会 2016)などに詳しい。

(13) 前橋泥流が南軽井沢地域の塩沢泥流、佐久地域の塚原泥流、吾妻川流域の応桑泥流と同一であると考えられることから(白尾 1998、竹本・久保 1995・2003)、As-Mt 5からAs-Mt 6の期間に絞られる可能性がある(早田 2016)。

(14) 試料の一部に43-42ka cal BPと他試料と比較して大幅に古い年代値を示すものが認められる(佐藤興・南・中村ら 2019)。同一堆積物と推定される応桑泥流堆積物から得られた試料も同様の傾向を示すことから、年代値の古い試料は前橋泥流が流下の途中で既存の泥流堆積物から取り込んだものと推定される(佐藤興・南・中村ら 2019)。また、「岩神の飛石」を対象に、熱ルミネッセンスによる年代測定が行われている(下岡・菅原・早田ら 2019)。この結果では33±8 ka BPと、想定される年代よりも古い数値が得られているが、過去に噴出した溶岩が、その後発生した前橋泥流によって運搬されたと考えられる(下岡・菅原・早田ら 2019)。

(15) 関東平野北西部では当該期において、関東平野内の他地域と比較して、遺跡数とその規模が極端に減少する(小菅 1994、小菅・中島・軽部 1996、小菅・大工原・麻生 2004、小菅・西井 2011)。対照的に、南西部では遺跡数が急増する(安藤 1985)。この減少傾向が前橋泥流を起因とする説(関口 2008)は、当該期遺跡で確認できる現象を地形発達史の中で理解しようと試みる点で意義深い。

しかし、本人も言及するように当該地域内の遺跡数の減少傾向は、AT降下直後から既に認められる(関口 2008、早田 2008)。後期旧石器時代の前半期から後半期にかけての移行期は、関東平野を生業域としていた集団の移動領域が縮小した可能性が提示されている点(角張 1991、田村 1992など)を考慮すると、当該集団の生業戦略や資源獲得戦略が大きく変更されていった時期であると想定される。

(16) 下岡らはAs-BP Group層中から得られた放射性炭素年代測定の結果を整理して、その降下期間を約28-26 ka cal BPと考えた(下岡・早田・青木ら 2020)。しかし、下岡らがまとめたAs-BP Groupに関する年代値は、MPや前橋泥流の発生年代に関するものが中心であり、As-BP Group直上の層序から得られた試料については言及していない。本論では今回得られた萩原遺跡の試料ほか、上白井西伊熊遺跡の試料も判断に加えているため、下岡らの提示した年代幅よりも期間が長くなっている。

(17) 富田下大日遺跡における報告書の記述では、有樋尖頭器が含まれる土層には「As-Ok 1混」とのみしか記述がない。その一方、出土層位に関する記述には同一層が「As-Sr・As-Ok 1混層」とされる記載も報告書内に認められ、齟齬がある。本遺跡に隣接する遺跡でのテフラ分析をみると、今井道上II遺跡ではAs-SrとAs-Ok 1が同一層序で検出される一方、荒砥北三木堂II遺跡ではAs-Srが検出されていない(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008)。そのため、赤城山南麓ではAs-Srの検出が不安定であるといえる。本遺跡自体ではテフラ分析を実施していない点を考慮すると、有樋尖頭器の出土層位にはAs-Sr・As-Ok 1の両テフラが混在している可能性が考えられる。

(18) As-SrとAs-YP間において、榛名山では相場山溶岩ドームの形成に伴って山体崩落が発生した(大島 1986、下司・竹内 2012)。この際の泥流堆積物は榛名山南東麓から前橋市総社町付近の利根川沿いで認められており、陣馬泥流堆積物と呼称される(大島 1986、新井房 1962、森山 1971、早田 1990、新井雅・矢口 1994、澤口 1995、久保・鈴木幸・中島 2011)。新井雅・矢口は陣馬泥流のラハールがAs-SrとAs-Ok 1の間層にあると更に限定するのに対し(新井雅・矢口 1994、早田 2003)、竹本は陣馬泥流の発生年代をAs-Ok 1降下後としており(竹本 2008)、発生年代の見解には研究者間で異なる。

前橋泥流の発生後には縄文時代草創期までの期間、前橋泥炭層(新井房 1964)と呼称される低湿地堆積物が形成される(辻・吉川昌・吉川純ほか 1985、辻・木越 1992、早田 2000)。前橋泥炭層の形成は陣馬泥流による利根川の流路変更の影響を受けている可能性が高い点(矢口 2011)や、前橋泥炭層の形成がAs-Ok 1降下以降であるとの指摘(早田 2000)、As-Ok 1以降に前橋泥流堆積物後の湿原の環境が変化する点(林 2005)を考慮すると、陣馬泥流の発生年代は少なくともAs-Ok 1降下前後である可能性が高い。そして、上記のテフラの年代から、陣馬泥流は少なくともAs-Sr降下後からAs-Ok 1降下前後、つまりは24-21ka cal

BP前後に取まると見做せる。特に、前橋泥炭層の形成など、利根川の旧河道の環境の変化自体はAs-Ok 1 降下前後である21ka cal BP前後から起きたと考えられる。

(19)早田はATからAs-YP間の指標テフラの産状が良好な高崎市内の露頭を基に、火山灰土の形成速度が一定であると仮定して主要テフラの年代値を算出している(早田 2019)。論中で早田は放射性炭素年代測定値からATを30 ka cal BP、As-YPを16 ka cal BPとして計算し、MPを28 ka cal BP、As-BP Groupを28-24 ka cal BP、As-Srは22-21 ka cal BP、As-Ok 1 は20-19 ka cal BP、As-Ok 2 は18 ka cal BPの期間に降下したと推定している。

早田の提示した各テフラの降下期間のうち、特にAs-SrからAs-Ok Groupのものをみると、本論と比較して新しい年代値が提示されている。しかし、堆積速度の計算方法や根拠とした露頭のデータが提示されていない点などを考慮すると、降下年代を限定するには慎重な判断を要する。いずれにせよ、As-SrからAs-Ok Group降下期間に関しては、本地地域のテフラ年代値の中でも参考となる年代値が特に乏しいため、今後とも蓄積が必要である。

(20)小野は旧石器時代の人類活動が自然環境とどう関わっていたかを論じるにあたり、自然環境を階層的に捉えて、マクロの「純粋な環境史」と、人類の働きかけが可能な「有効環境(effective environment)」に区分した(小野 2011)。そして、「純粋な環境史」は人類活動を探る上での所与の条件として受け入れなければならない前提であり、直接人類活動と対応させて説明することは無意味であるとする。そのため、自然環境と人類活動の関係の解明には、人類の働きかけが可能な有効環境の領域を考古学的に解明することが課題となる。これらのことから、旧石器時代では、当該期の狩猟採集民が獲得した動植物資源由来の道具素材を分析する以外に方法は殆どないとした(小野 2011)。

それに対し、工藤は小野の議論を踏まえつつも、純粋な環境史の領域の変化も人類の適応行動に変化を与える「きっかけの一つ」となったと推定されることから、いつ、どのような変化が起こったのかを把握することの必要性を指摘する(工藤 2018)。工藤は長期的な視点での環境変化と人類活動の関係性を捉える場合、重要なのは考古学的な議論から復原される社会などの変化と純粋な環境史の「相関関係」を追究することではなく、両者の「時間的対応関係」を第一義に捉えることが重要であるとした。

従前までの花粉分析などで得られた古環境変遷は、中緯度地域などより広域な観点の環境変動と大よそ対応することから、マクロな環境変動が関東平野北西部においても反映されていると考えられる(小原 2020)。当然、これらの分析結果にも時空間的に局地的な環境変遷や各時期の古環境復原の詳細を追究する余地は残されている。しかし、本論における萩原遺跡での放射性炭素年代測定値の結果から推察されるとおり、植栽痕などによる土壌攪乱などの要素が花粉分析や年代測定の結果に与える影響は著しい。そのため、古環境変遷の大枠を把握することは可能であったとしても、その詳細を区分するためには、土壌攪乱の影響が比較的少ないなどの追究可能な試料が得られる条件が整わない限り、実質的に困難である。

そのような条件を考えた場合、本地域では、前述したとおり榛名山・浅間山起源のテフラが良好な状態で検出される点が特徴であると共に、その降下年代に関する研究も蓄積されている。また、晩氷期の時期ではあるが、前橋泥炭層等の比較的條件が整った泥炭層から得られた試料を基にした古環境変遷に関する研究も蓄積されている(新井房 1964・1967、田中・中島・磯田ほか 1980、辻・木越 1992、辻・吉川昌・吉川純ほか 1985、矢口 1999、林 2005など)。そのため、本地域ではAT降下以前の前半期は大枠でしか捉えられないものの、後半期から縄文時代草創期では石器群の編年と古環境変遷との時間的対応関係を、テフラの降下年代などを参照しながら実年代を用いて詳細に対比することが可能と考えられる。

(21)旧石器時代研究における古環境分析の課題については小原(2020)に示した。

#### 引用文献

青木かおり・入野智久・大場忠道 2008「鹿島沖海底コアMD01-2421の後期更新世テフラ層序」『第四紀研究』47(6) pp.391-407 第四紀学

会

新井房夫 1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学研究紀要 自然科学編』10-4 pp. 1-75 群馬大学

新井房夫 1964「前橋泥炭層の絶対年代と旧石器包含層の年代」『地球科学』21 p37 地学団体研究会

新井房夫 1967「前橋泥流の噴出年代と岩宿 I 文化期」『地球科学』70 p46 地学団体研究会

新井房夫 1979「関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ」『考古学ジャーナル』157 pp.41-52 ニューサイエンス社

新井房夫 1989「II 科学分析 1. テフラの同定」『勝保沢中ノ山遺跡 II』pp.265-266 群馬県埋蔵文化財調査事業団

新井雅之・矢口裕之 1994「榛名山火山の後期更新世末から完新世の噴火史」『第四紀学会講演要旨集』24 pp.174-175 第四紀学会

新井雅之・矢口裕之・中村正芳・早川由紀夫・高崎地学愛好会 1993「およそ 1 万年前に発生した高崎泥流の分布と起源」『日本地質学会第 100 年学術大会講演要旨』p296 日本地質学会

荒牧重雄 1968「浅間火山の地質」『地団研専報』14 pp.1-45 地学団体研究会

安中市教育委員会 1998『中野谷松原遺跡—縄文時代遺物本文編—』

安蒜政雄 1985「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集 日本原史』pp.193-216 吉川弘文館

池谷信之・佐藤宏之編 2020『愛鷹山麓の旧石器文化』敬文舎

稲田孝司 1986「旧石器文化と動物相」『九州の旧石器文化(II)』pp. 7-19 九州旧石器文化研究会

稲田孝司 1989「哺乳類動物化石の産状と旧石器文化 岡山大学文学部研究叢書 2」岡山大学文学部

大泉町教育委員会 1984『御正作遺跡』

大石雅之 2015「八ヶ岳火山の最新軽石噴火による Yt-Pm 4 テフラの放射性炭素年代」『火山』60(4) pp.477-481 日本火山学会

大石雅之・鈴木毅彦 2004「八ヶ岳火山を起源とする新規テフラ群の層序と噴火史」『火山』49(1) pp. 1-12 日本火山学会

大島治 1986「榛名山」『日本の地質 3「関東地方」』pp.222-224 共立出版

小野昭 2011「旧石器時代の人類活動と自然環境」『第四紀研究』50(2) pp.85-94 第四紀学会

小野昭・島田和・橋詰潤・吉田明弘・公文富士夫編 2016『長野県中部高地における先史時代人類誌 広原遺跡群第 1 次～第 3 次調査報告書』明治大学黒曜石研究センター

小野有五・五十嵐八枝子 1991『北海道の自然史 氷期の森林を旅する』北海道大学図書刊行会

角張淳一 1991「黒曜石原産地遺跡と消費遺跡のダイナミズム—後期旧石器時代石器群の行動論的理解—」『先史考古学論集』1 pp.25-82 安齋正人編

軽部達也 1994「関東地方における岩宿時代編年と古環境復元の方向性について—関信地域の編年の接点と遺跡の古環境調査について—」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』5 pp.81-93 名古屋大学年代測定総合研究センター

桐生市教育委員会 2010『新里地区遺跡群発掘調査報告書 I』

工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社

工藤雄一郎 2014「後期旧石器時代の広域編年対比に向けて—14C 年代測定の高精度化と較正年代による年代観の変化—」『旧石器研究』10 pp.11-22 日本旧石器学会

工藤雄一郎 2018「先史学と第四紀学」『第四紀研究』57(4) pp.99-108 第四紀学会

工藤雄一郎 2019「赤井谷地における古環境調査—福島県笹山原遺跡の生態系復元を目指して—」『第33回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』pp.98-101 東北日本の旧石器文化を語る会

久保誠二 2017「群馬県南部に分布する前橋泥流堆積物中の埋もれ木」『群馬県立自然史博物館研究報告』21 pp.55-56 群馬県立自然史博物館

久保誠二・鈴木幸枝・中島正裕・宮沢公明 2011「榛名山南東麓の地質」『群馬県立自然史博物館研究報告』15 pp.115-127 群馬県立自然史博物館

- 群馬県教育委員会 2011『小暮東新山遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982『日高遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『二之宮千足遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『元総社寺田遺跡Ⅲ』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999a『三和工業団地Ⅰ遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999b『東長岡戸井口遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999c『下植木吉町田遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000a『三ツ子沢中遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000b『中里見遺跡群』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『波志江中宿遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『波志江中屋敷東遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『中内村前遺跡(2)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『波志江西宿遺跡Ⅱ(縄文時代・旧石器時代編)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007a『吹屋遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007b『荒砥北原Ⅱ遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上武道路・旧石器時代遺跡群(1)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009a『峯山遺跡-旧石器・縄文時代編-』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009b『荒砥前田Ⅱ遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009c『上ノ台遺跡(2)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010a『上白井西伊熊遺跡-旧石器時代編-』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010b『上武道路・旧石器時代遺跡群(2)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010c『萩原遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010d『八ヶ入遺跡Ⅰ-旧石器時代編-』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『上武道路・旧石器時代遺跡群(3)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013『上細井蟬山遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015『石神遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016『今宮遺跡』
- 下司信夫・竹内圭史 2012『榛名山地域の地質 地域地質研究報告 5万分の1地質図幅』地質調査総合センター
- 下司信夫・大石雅之 2011「榛名山の後期更新世及び完新世堆積物から得られた炭素14年代」『地質調査研究報告』62-3 pp.177-183 産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 建設省土木研究所砂防研究室 1991「堆積物の年代測定結果」『浅間火山泥流災害調査報告書』pp.42-43
- 後藤佳一 2016「赤城山西南麓における浅間板鼻褐色軽石群層序と石器群」『岩宿フォーラム 2016 ナイフ形石器文化の発達期と変革期-浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群-』pp.42-50 岩宿フォーラム実行委員会
- 小原俊行 2020「後期旧石器時代の石器製作技術の変化と古環境変遷の対応関係の解明に向けて-関東平野北西部における古環境分析を中心に-」『研究紀要』38 pp. 1-20 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小菅将夫 1994「Ⅱ期-BP降下期のナイフ形石器文化」『第2回岩宿フォーラム 群馬の岩宿時代の変遷と特色』pp.30-32 岩宿フォーラム実行委員会
- 小菅将夫・大工原豊・麻生敏隆 編 2004『群馬の旧石器』みやま文庫
- 小菅将夫・中島誠・軽部達也 1996「北関東地方」『石器文化研究』5 pp.101-114 石器文化研究会
- 小菅将夫・西井幸雄 2011「三 関東地方北部」『講座 日本の考古学Ⅰ 旧石器時代 上』pp.354-380 青木書店
- 佐久市教育委員会 1999『八風山遺跡群 ガラス質黒色安山岩原産地跡』
- 佐藤興平・南雅代・中村俊夫・柴田賢・児嶋美穂・武者巖 2018「木片の14C年代測定による前橋泥流堆積時期の再検討(予察)」『群馬県立自然史博物館研究報告』22 pp.95-101 群馬県立自然史博物館
- 佐藤興平・南雅代・中村俊夫・柴田賢・安部久・武者巖・池田信二 2019「火山泥流に含まれる14C不一致年代:前橋泥流と塚原泥流の例」『群馬県立自然史博物館研究報告』23 pp.57-64 群馬県立自然史博物館
- 佐藤興平・南雅代・柴田賢・安部久 2020「巨石のSr同位体比と埋没木片の14C年代からみた前橋泥流」『群馬県立自然史博物館研究報告』24 pp.31-42 群馬県立自然史博物館
- 佐藤宏之 2016「更新世の日本列島における自然・資源環境の変動と人類行動の応答」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』pp.199-214 中国書店
- 佐藤宏之・山田哲・出穂雅実 2011「旧石器時代の狩猟と動物資源」『野と原の環境史』pp.51-71 文一総合出版
- 澤口宏 1995「第1章 地形・地質」『群馬町誌 資料編4 自然』pp. 3-40 群馬町誌編纂委員会
- 下岡順直 2016「浅間板鼻褐色軽石群と前橋泥流の年代観-放射性炭素年代を中心に-」『岩宿フォーラム2016 ナイフ形石器文化の発達期と変革期-浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群-』pp.20-26 岩宿フォーラム実行委員会
- 下岡順直・菅原久誠・早田勉・宮沢竜一・能登健 2019「群馬県前橋市に所在する「岩神の飛石」の熱ルミネッセンス年代測定」『地球環境研究』21 pp.119-123 地球環境研究センター
- 下岡順直・早田勉・青木かおり・若井明彦 2020「浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)の岩石記載と放射性炭素年代」『地球環境研究』22 pp.57-65 立正大学地球環境科学部
- 渋川市 2015『八崎日影山遺跡・分郷八崎上浅ヶ原遺跡』
- 白尾元理 1998「4.4 浅間火山の形成史」『写真でみる 火山の自然史』pp.67-72 東京大学出版会
- 白石浩之 1983「考古学と火山灰層序-特に関東地方を中心とした旧石器時代の層位的出土例と石器群の様相-」『第四紀研究』23(3) pp.185-198 第四紀学会
- 鈴木茂・石綿しげ子・村田泰輔 2004「東京湾多摩川河口付近の環境変遷」『日本植生学会第19回大会講演要旨集』pp.18-19 日本植生学会
- 鈴木毅彦 1990「テフロクロノロジーからみた赤城火山最近20万年間の噴火史」『地学雑誌』99-2 pp.60-75 東京地学協会
- 鈴木正男 1975「フィッシュ・トラック」『日本の旧石器文化Ⅰ総論編』pp.138-157 雄山閣
- 関口博幸 2008「後期旧石器時代における前橋泥流をめぐる遺跡形成史」『岩宿フォーラム2008 更新世の地形発達史と遺跡群の形成』pp.36-43 岩宿フォーラム実行委員会
- 関口博幸 2010「第6章 成果(1)自然科学分析の成果」『萩原遺跡』pp.125-130 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関口博幸・早田勉・下岡順直 2011「群馬の旧石器編年のための基礎的研究-関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ層序、通知年代の整理と検討-」『研究紀要』29 pp. 1-20 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 早田勉 1989「6世紀における榛名山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27(4) pp.297-312 第四紀学会
- 早田勉 1990「群馬の自然と風土」『群馬県史 通史編1』pp.37-129 群馬県
- 早田勉 1996「関東地方~東北地方南部の指標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』7 pp.256-267 名古屋大学
- 早田勉 2000「火山活動の影響を受けた利根川扇状地の地形」『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』pp.191-194 東京大学出版会
- 早田勉 2003「火山灰の風土」『新編高崎市史通史編1』pp.39-54 高崎市史編さん委員会
- 早田勉 2008「TV成果と展望 討論」『考古学リーダー 14 後期旧石器時代の成立と古環境復元』pp.183-200 六一書房
- 早田勉 2011「榛名地域の自然環境とその歴史」『榛名町誌 通史編上巻』pp.7-56 榛名町誌編さん委員会
- 早田勉 2016「浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group)の層序と前橋泥流堆積物の層位」『岩宿フォーラム 2016 ナイフ形石器文化の発達期と変革期-浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群-』pp.6-14 岩宿フォーラム実行委員会
- 早田勉・下岡順直・若井明彦 2016「浅間板鼻褐色軽石群に含まれる火山ガラスと斜方輝石の屈折率特性に関する新資料」『岩宿フォーラム 2016 ナイフ形石器文化の発達期と変革期-浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群-』pp.15-19 岩宿フォーラム実行委員会
- 早田勉 2019「北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化」『岩宿フォーラム2019 岩宿遺跡と日本列島の旧石器時代研究』pp.19-25 岩宿フォーラム実行委員会
- 高崎市教育委員会 2002『高崎情報団地Ⅱ遺跡(縄文時代編)』

- 竹本弘幸 2008「吉田論文(2004)「浅間火山を起源とする泥流堆積物とその関東平野北西部の地形発達に与えた影響」の問題点」『地理学評論』81-6 pp.506-515 日本地理学会
- 竹本弘幸・久保誠二 1995『群馬の火山灰』みやま文庫
- 竹本弘幸・久保誠二 2003「浅間火山, 応桑岩屑なだれ堆積物のテフラ層序」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』38 pp.55-64 日本大学文理学部自然科学研究所
- 田村隆 1992「遠い山・黒い石ー武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態的一考察」『先史考古学論集』2 pp.1-46 安齋正人編
- 田中宏之・中島孝守・磯田善義・山岸勝治 1980「群馬県高崎市南部群馬の森の地質と材・花粉・珪藻化石」『群馬県立歴史博物館紀要』1 pp.69-100 群馬県立歴史博物館
- 辻誠一郎 1987「最終間氷期以降の植生史と変化様式ー将来予測に向けてー」『百年・千年・万年後の日本の自然と人類』pp.157-183 古今書院
- 辻誠一郎 1991「自然と人間ーAT前後の生態系をめぐる諸問題ー」『石器文化研究』3 pp.225-229 石器文化研究会
- 辻誠一郎・木越邦彦 1992「前橋泥炭層の放射年代」『植生史研究』1-1 pp.27-28 日本植生史学会
- 辻誠一郎・宮地直道・新井房夫 2004「南軽井沢地域の浅間火山テフラ層序と編年ー環境・災害史研究の基礎としてー」『国立歴史民俗博物館研究報告』118 pp.165-192 国立歴史民俗博物館
- 辻誠一郎・吉川昌伸・吉川純子・熊城修一 1985「前橋台地における更新世末期から完新世初期の植物化石群集と植生」『第四紀研究』23(4) pp.263-269 第四紀学会
- 富樫茂子 1983「浅間火山第1軽石流堆積物中の炭化木の14C年代」『火山』2 pp.263-269 日本火山学会
- 中沢英俊 1989「浅間火山のテフラ層序」『信州理科』15 pp.14-16 信州理科教育研究会
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 1984「浅間火山, 黒班期〜前掛期のテフラ層序」『第四紀学会講演要旨集』14 pp.69-70 第四紀学会
- 中谷進 1970「ハケ岳東麓のテフラー特に八邦池軽石流を覆うテフラ層中の軽石ー」『軽石学雑誌』3 pp.30-35 万国軽石学会
- 中東耕志 1982「富岡市上黒岩出土のオオツノシカー出土記録を中心として」『群馬県歴史博物館紀要』3 pp.141-162 群馬県立歴史博物館
- 中村俊夫 2001「放射性炭素年代とその高精度化」『第四紀研究』40(6) pp.445-459 第四紀学会
- 中村俊夫・辻誠一郎・竹本弘幸・池田晃子 1997「長野県, 南軽井沢周辺の更新世最末期の浅間テフラ層の加速器14C年代」『地質学雑誌』103(10) pp.990-993 日本地質学会
- 中村正芳 2003「高崎の台地をつくる地層」『新編 高崎市史 通史編1』pp.73-100 高崎市
- 長野県埋蔵文化財センター 1992『上信自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1 下茂内遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2001『香坂山遺跡』
- 長井謙治・高橋央輝・徳永司・角田朋行 2019「山形県南陽市北町遺跡の発掘調査(2018-19年度)」『第33回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』pp.84-90 東北日本の旧石器文化を語る会
- 楡井尊・林成多 2004「群馬県高崎市の上部更新統前橋泥炭層の花粉化石群集と古気候変動」『自然環境科学研究』17 pp.43-49 平岡環境科学研究所
- 橋本勝雄 2017「東日本における国府系石器群の地域的様相ー関東地方を中心としてー」『考古学ジャーナル』698 pp.10-14 ニューサイエンス社
- 早川由紀夫 1995「浅間火山の地質見学案内」『地学雑誌』104(4) pp.561-571 日本地質学会
- 早川由紀夫 1992「火山の地質巡検案内1:浅間山と草津白根山」『群馬大学教育学部紀要 自然科学編』40 pp.65-81 群馬大学教育学部
- 林成多 2005「群馬県高崎市における前橋泥炭層の昆虫化石群集と古環境」『群馬県立自然史博物館研究報告』9 pp.93-99 群馬県立自然史博物館
- 樋口和雄 1990「浅間山活動史の研究」『千曲』66 pp.15-33 東信史学会
- 藤岡市教育委員会 1995『A9藤岡北山B遺跡』
- 藤岡市教育委員会 1999『F27 滝遺跡』
- 北橋村教育委員会 1986『分郷八崎遺跡』
- 前橋市教育委員会 2016『国指定天然記念物 岩神の飛石環境整備事業報告書』
- 町田洋 2011「第四紀後期の関東ローム層に記録された古環境:古土壌と考古学研究的基礎として」『地球環境』16-2 pp.189-202 国際環境研究協会
- 町田洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰ー始良Tn火山灰の発見とその意義ー」『科学』46 pp.339-347 岩波書店
- 町田洋・新井房夫 1992『火山灰アトラスー日本列島とその周辺』東京大学出版会
- 町田洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラスー日本列島とその周辺』東京大学出版会
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984「テフラと日本考古学」『古文化財の自然科学的研究』pp.865-928 同朋社出版
- 守屋以智雄 1968「赤城火山の地形及び地質」前橋營林局
- 森山昭雄 1971「榛名火山東・南麓の地形ーとくに軽石流の地形についてー」『地質学報告』36・37 pp.105-116 愛知教育大学地理学会
- 矢口裕之 1999「群馬県徳丸仲田遺跡の縄文時代草創期包含層の層序と古環境」『研究紀要』17 pp.17-34 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 矢口裕之 2011「関東平野北西部, 前橋堆積盆地の上部更新統から完新統に関わる諸問題」『研究紀要』29 pp.21-40 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ハケ岳団体研究グループ 1976「ハケ岳火山活動の概要ーとくに中期洪積世以降の火山活動についてー」『地球科学』30 pp.87-94 地学団体研究会
- ハケ岳団体研究グループ 1988「ハケ岳山麓の上部更新統」『地団研専報』34 pp.91-109 地学団体研究会
- 山元孝広 2016「赤城火山軽石噴火期のマグマ噴出率と組成の変化」『地質学雑誌』122-3 pp.109-126 日本地質学会
- 吉田英嗣 2004a「浅間火山を起源とする泥流堆積物とその関東平野北西部の地形発達に与えた影響」『地理学評論』77-8 pp.544-562 日本地理学会
- 吉田英嗣 2004b「既存柱状図とGISを用いた前橋泥流堆積物の体積の推定」『地形』25-1 pp.67-73 日本地形学連合
- 吉田英嗣 2006「前橋泥流が埋積した利根川扇状地の地形と泥流堆積物量の再検討」『地形』27-4 pp.477-480 日本地形学連合
- 吉田英嗣 2008「竹本氏の討論に対する見解ー発達地地形学研究における前報の意義に触れてー」『地理学評論』81-6 pp.516-529 日本地理学会
- Aramaki, S. 1963 Geology of Asama volcano, *Journal of the Faculty of Science University of Tokyo, Section II*, 14: 229 - 443.
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon Dates, *Radiocarbon*, 51-1:337-360
- Martison, D.G., N. G. Psisas, J. D. Hays., J. Imbrie, T. C. Moore, Jr. and N. J. Shackleton 1987 Age Dating and the Orbital Theory of the Ice Ages: Development of a High-Resolution 0 to 300,000-Year Chronostratigraphy, *Quaternary Research*, 27:1-29
- Reimer, P.J., W. E. N. Austin, E. Bard, A. Bayliss, P. G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, M. Butzin, H. Cheng, R. L. Edwards, M. Friedrich, P. M. Grootes, T. P. Guilderson, I. Hajdas, T. J. Heaton, A.G. Hogg, K. A. Hughen, B. Kromer, S. W. Manning, R. Muscheler, J. G. Palmer, C. Pearson, J. van der Plicht, R. W. Reimer, D. A. Richards, E. M. Scott, J. R. Southon, C. S. M. Turney, L. Wacker, F. Adolphi, U. Buntgen, M. Capano, S. M. Fahrni, A. Fogtmann-Schulz, R. Friedrich, P. Köhler, S. Kuds, F. Miyake, J. Olsen, F. Reinig, M. Sakamoto, A. Sookdeo and S. Talamo 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0 - 55 kBP), *Radiocarbon*, 62-4: 725-757
- Smith, V. C., R. A. Staff, S. P. E. Blockley, C. B. Ramsey, T. Nakagawa, D. F. Mark, K. Takemura, T. Dnhara and Suigetsu 2006 Project Members 2013 Identification and correlation of visible tephra in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/ west Pacific paleoclimatic

研究紀要39

records across the last 150 ka, *Quaternary Science Reviews*, 67:121-137

Suzuki, M. 1974 Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan, *Journal of the Faculty of Science UnIversity of Tokyo, Section V*, 4:395-469

# 群馬県出土の縄文時代土製耳飾り

— 中期から後期前半 —

谷 藤 保 彦

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |                                    |              |
|------------------------------------|--------------|
| 1. はじめに                            | 4. 施文文様      |
| 2. 土製耳飾りの主な出土例<br><北毛地域・西毛地域・東毛地域> | 5. 時期的な傾向と特徴 |
| 3. 形態分類                            | 6. おわりに      |

## — 要 旨 —

縄文時代の中でも装身具としての耳飾り研究について、これまでも多くの先学によって研究対象とされてきたことは周知のとおりである。中でも、1941年の樋口清之博士による「滑車形耳飾考」(『考古学評論』4)は、耳飾り研究における最も代表される論考の一つである。また、近年では、玉文化研究会による玦状耳飾りの全国的な集成が進められ、縄文時代後・晩期の耳飾りが多量に出土した長野県松本市エリ穴遺跡の本報告書が2018年に刊行されたことは、記憶に新しいところである。

群馬県内においても縄文時代の耳飾りはよく知られている。重要文化財に指定されている桐生市千網谷戸遺跡や榛東村茅野遺跡で出土した耳飾りは著名で、他にも多くの遺跡から出土している。しかし、その実態は、殆ど把握されていないのが現状である。筆者は、以前に群馬県内出土の玦状耳飾りを対象に集成を行ってきた(谷藤2002・2010)が、それは縄文時代前期までの資料集成であった。そこで、中期以降の土製耳飾りを対象に資料集成を図ることで、県内における耳飾りの実態を明らかとすることを目的に、本稿では中期から後期前葉の資料を集成し、若干の検討を加えることとした。その結果、通常とは異なる四角柱を呈する特異な形状の存在や、臼形と滑車形の耳飾りが先行して存在し、集成中で最多の鼓形は加曾利E 2・3式期にピークがあり、スタンプ形もその同時期の限定される状況にある。そうした中、別な視点からの今後の検討課題も見えてきた。

### キーワード

対象時代 縄文時代  
対象地域 群馬県  
研究対象 土製耳飾り

## 1. はじめに

縄文時代の中でも装身具としての耳飾り研究は、これまでも多くの先学によって研究対象とされてきた。中でも、1941年の樋口清之博士による「滑車形耳飾考」(『考古学評論』4)は、耳飾り研究における最も代表される論考の一つである。また、近年では、玉文化研究会による玦状耳飾りの全国的な集成、縄文時代後・晩期の耳飾りが多量に出土した長野県松本市エリ穴遺跡の本報告書が刊行されたことは記憶に新しいところである。しかし、近年における土製耳飾り研究は低迷で、その集成もほとんど行われていないのが現状である。

筆者は縄文時代の土器を扱う中で、広域な交差編年、地域間交渉、地域性を考えるにあたり、土器以外でも同様な現象を見出すことができれば、より補完することができると考え、これまでも「関東内陸部における縄文時代中期末・後期初頭の「土製貝輪形腕輪」(谷藤2011)や「群馬県内におけるヒスイ製大珠と垂飾り」(谷藤2012)、「縄文時代前期前葉の「コの字形石敷炉」(谷藤他2014)、「縄文時代前期初頭を画期とする玉飾り」(谷藤2016)、「群馬県出土の三角壺形土製・石製品」(谷藤2017)など、様々な遺物・遺構について集成してきた。

今回は群馬県内出土の土製耳飾りについて集成し、その形態や文様等の時期的な変遷、さらには周辺地域との差異を検討し、地域的な様相を明らかとすることを研究目的とした。しかし、集成量はかなりの量に上ることが予測されることから、時期的な分割を図ることとした。そこで本稿では、縄文時代中期から後期前葉までの土製耳飾りを対象とした群馬県内の集成し、遺構内出土土器からの時期の確定、形態および文様の分類を行い、この時期における耳飾りの様相を明らかとしたい。

なお、集成にあたっては、報告資料を中心に、計測値は報告の記載に従っているが、新たに図から計測したものも多い。

## 2. 土製耳飾りの主な出土例

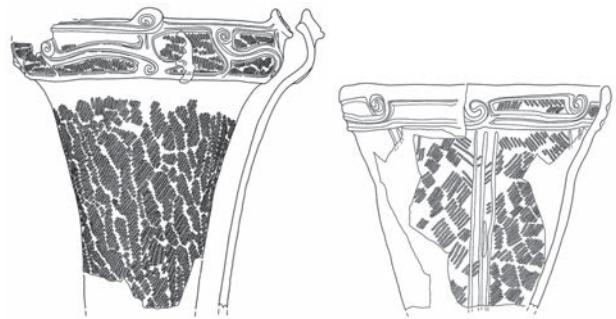
現段階(2020年10月)で集成できた中期から後期前葉の土製耳飾りは、54遺跡215点であった。他にも集成しきれていない資料はあると思われるが、後日、集成に加えたい。以下、土製耳飾りの時期を確認するため、遺構に伴い出土した事例を中心に、地域ごとに記す。

### <北毛地域>

#### 渋川市道訓前遺跡

J-16号住居からは、下図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.3とした表裏面が凸状を呈し、表裏面に同様の3方向の2重弧線文と刺突文を施した耳飾りが

出土している。

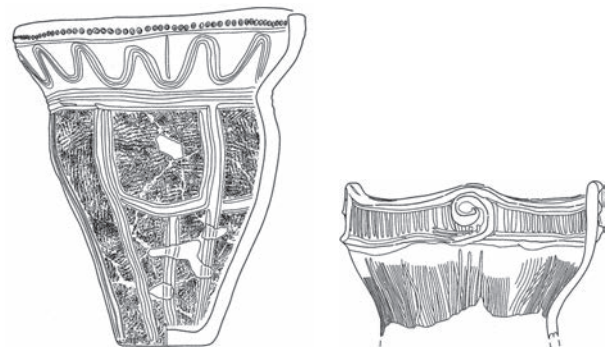


#### 渋川市小室高田遺跡

J-9号住居(2005年報告)からは、下図に示した加曾利E2~3式の土器と共に、No.6とした表面がやや凹状となり、表裏面に同様な放射状の沈線文を施した耳飾り。No.7とした表面がやや凸状を呈し、表裏面に同様な刺突文を施した耳飾りの計2点が出土している。



J-29号住居(2005年報告)からは、下図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.8とした表裏面がやや凸状を呈し、表裏面とも同様な刺突文を施した施した耳飾り。No.9とした表裏面が平坦となる滑車形の耳飾りとの計2点が出土している。

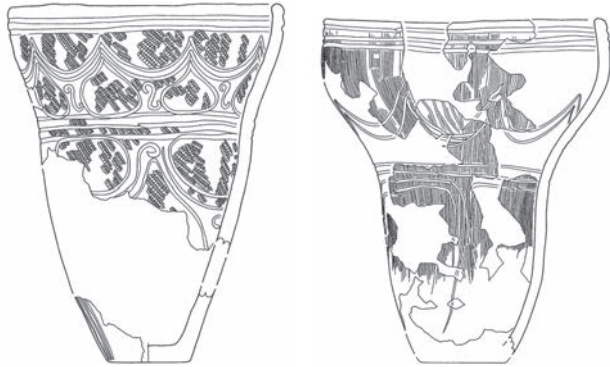




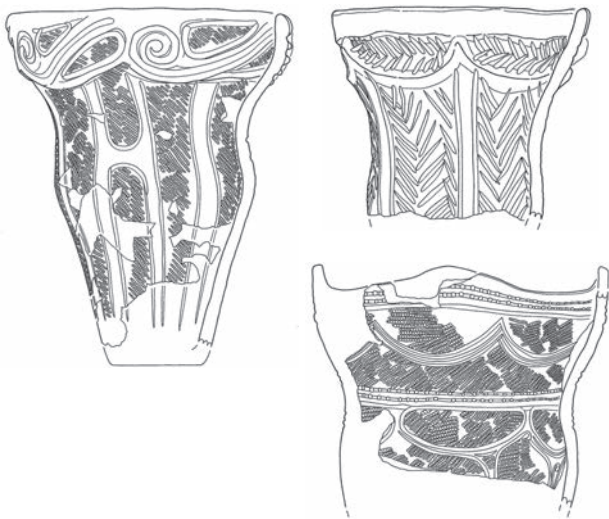
J-3号住居(2006年報告)からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.10とした表裏面が平坦を呈し、表裏面とも同様な刺突文を施した施した耳飾りが出土している。



J-8号住居(2006年報告)からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.11とした表裏面が平坦となる滑車形の耳飾りが出土している。

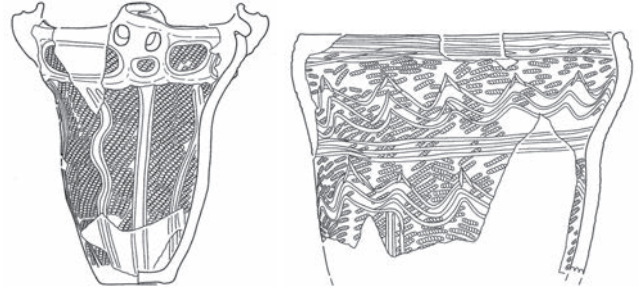


J-16号住居(2006年報告)からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.12・13とした表裏面が平坦となり、表裏面とも同様な刺突文を施した施した耳飾り。No.14とした表裏面がやや凸状を呈し、表裏面とも同様な渦巻文と刺突文を施した耳飾りの計3点が出土している。



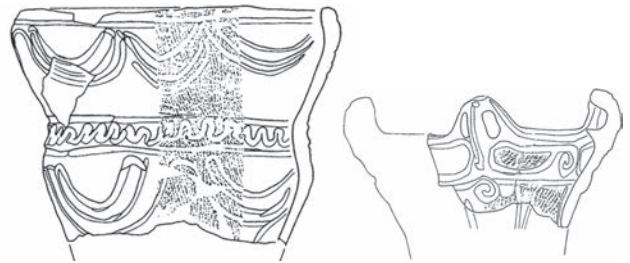
J-17号住居(2006年報告)からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.15とした表面がやや凸状

となり、3方向に2重の弧線文を施した施した耳飾り。No.16とした表裏面は平坦で、表裏面とも同様な渦巻文を施した施した耳飾り。No.17とした表面が凸状で、裏面はやや凸状を呈し、表裏面とも同様な3方向の弧線文と刺突文を施した耳飾りの計3点が出土している。



### 渋川市三原田遺跡

3-7住居からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.21とした表裏面が平坦となり、表裏面とも同様に2方向の2重弧線文を施した耳飾りが出土している。

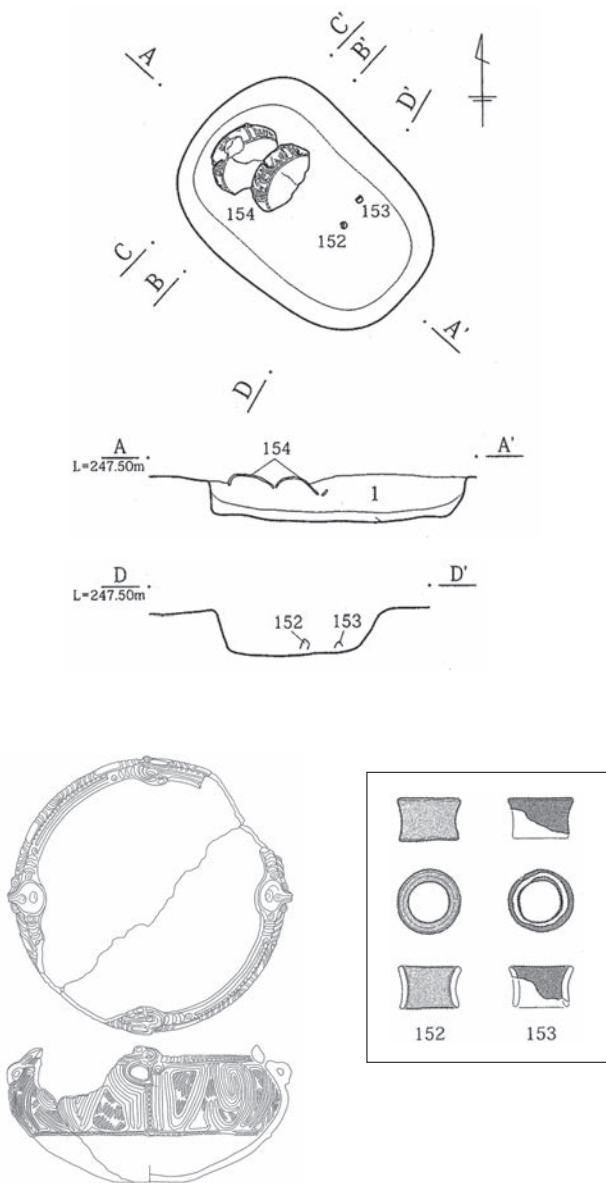


2-2住居からは、下図に示した称名寺Iの土器と共に、No.26とした裏面は平坦で、刺突文を施した耳飾りの半欠品が出土している。



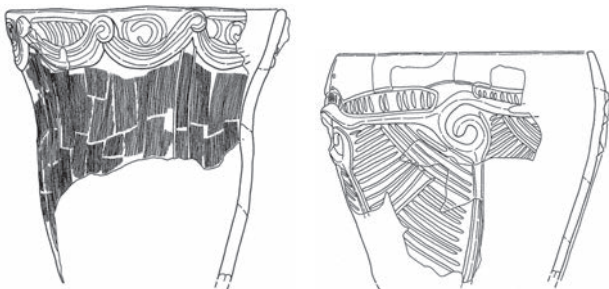
### 榛東村十二前遺跡

SK-328として報告された土坑からは、下図に示したように頭部位置と思われる両側に一対の耳飾りと二つに分割された堀之内1式の浅鉢土器出土しており、土壙墓内における土器の供伴例に注目が寄せられている。出土した耳飾りは、造り・大きさ共に同じで、しかも赤彩が施されている。本集成では、この2点の耳飾りをNo.57・58として扱っている。



長野原町長野原一本松遺跡

5-156号住居からは、下図に示した加曽利E 2併行の土器と共に、No.69とした表裏面がやや凸状を呈し、表裏面とも同様な入組状の渦巻文を施した耳飾りが出土している。

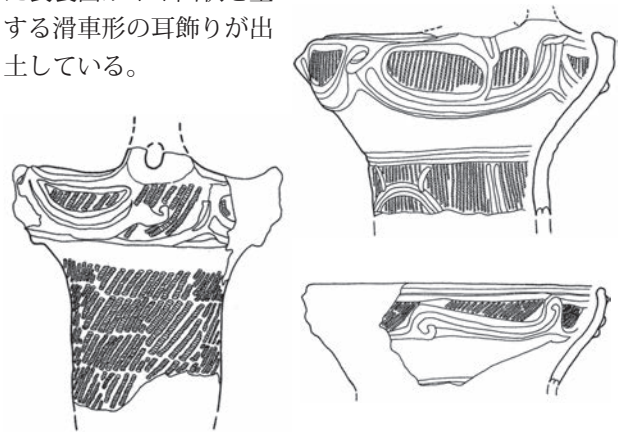


上記以外にも同地域では、渋川市下遠原遺跡C区J-12号住居で加曽利E 1~2式に伴うNo. 2、東吾妻町上郷岡原遺跡IV区436号土坑で称名寺I式に伴うNo.65、長野原町横壁中村遺跡28区18号住居での称名寺I式に伴うNo.72の耳飾りがそれぞれ出土している。

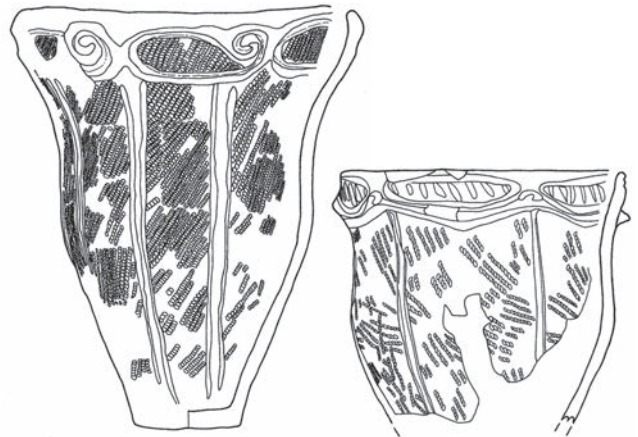
<西毛地域>

高崎市白川傘松遺跡

4号住居からは、下図に示した加曽利E 1~2式の土器と共に、No.81とした表裏面がやや凸状を呈する滑車形の耳飾りが出土している。



14号住居からは、下図に示した加曽利E 3式の土器と共に、No.82とした表裏面が概ね平坦で、表面に2方向の重複する弧線文を施した耳飾りが出土している。



同遺跡からは、他に23号住居で加曽利E 3式に伴うNo.83・84、72号住居から加曽利E 3に伴うNo.85の耳飾りがそれぞれ出土している。

安中市大道南II遺跡

J-3号住居からは、下図に示した加曽利E 3式の土器と共に、No.120とした表面が凸状で、裏面は平坦を呈し、表面に渦巻文を施した耳飾りが出土。

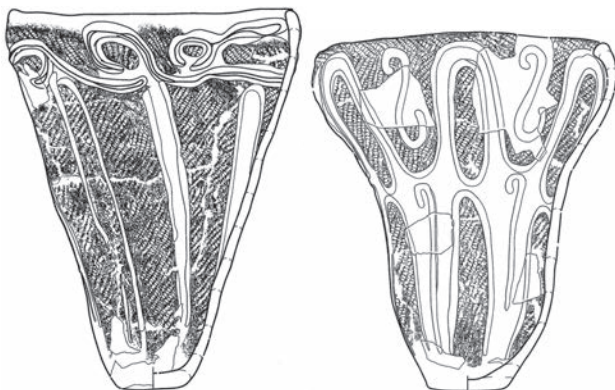


J-6号住居からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.121とした表面は凸状で、裏面はやや凸状を呈し、表面に2方向の2重弧線文と刺突文を施した耳飾りが出土している。



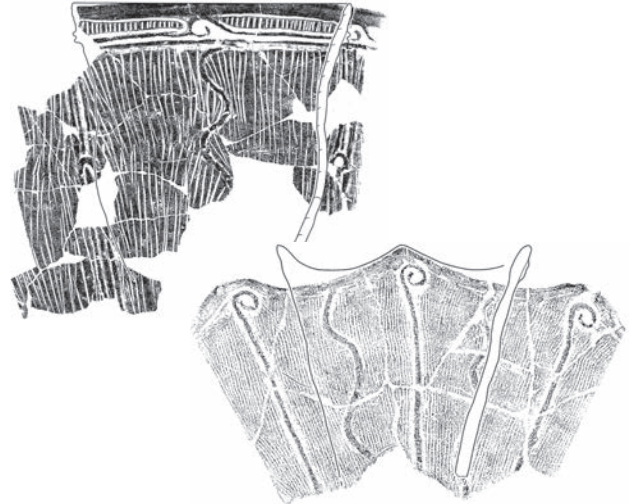
**安中市人見東中原遺跡**

J-5号住居からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.131とした凸状となる下面に渦巻文と細い刺突文を施し、もう一方の端部を欠損したもので、スタンプ形を呈する。



**安中市二軒在家原田遺跡**

J-27b号住居からは、下図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.132とした表面が凸状で、裏面はやや凸状を呈し、表裏面とも同様な刺突文を施した耳飾りが出土している。



J-47号住居からは、下図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.133とした表面が凸状で、裏面は平坦となり、表裏面とも同様な刺突文を施した耳飾りが出土している。



D-25号土坑からは、下図に示した加曾利E2~3式の土器と共に、No.134とした表裏面がほぼ平坦となる滑車形の耳飾りが出土している。

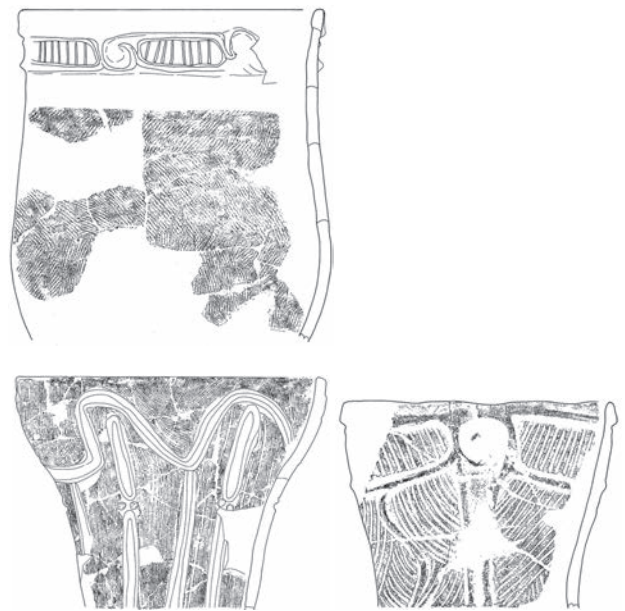
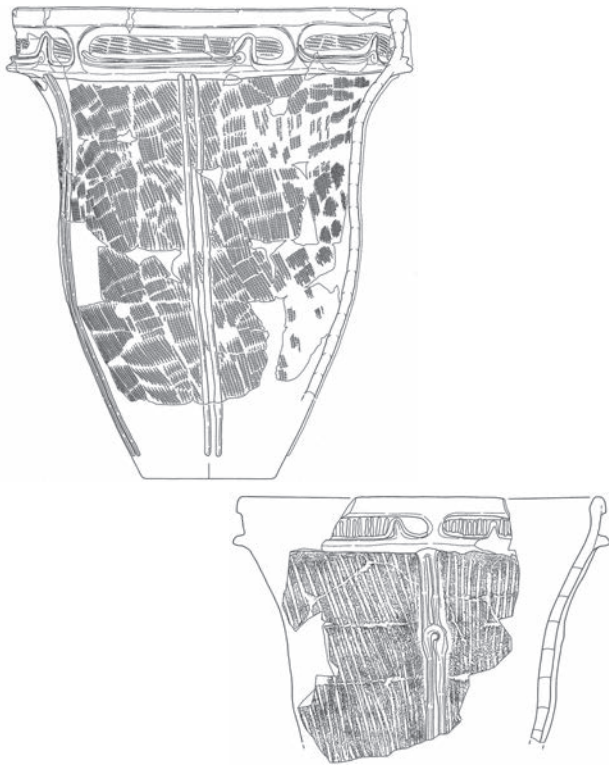


**安中市二軒在家原田II遺跡**

J-17号住居からは、下図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.136とした表面が凸状で、裏面は平坦を呈し、表裏面とも同様な刺突文を施した耳飾りが出土している。



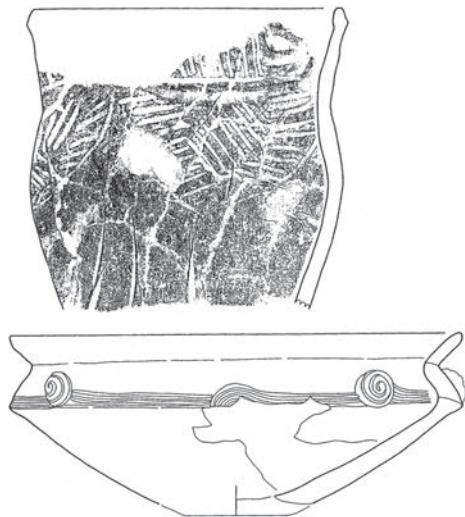
J-27号住居からは、下図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.137とした表裏面がやや凸状を呈し、表面には刺突文、裏面に渦巻文を施した耳飾りが出土している。



104号住居からは、下図に示した加曾利E 2～3式の土器と共に、No.143とした滑車形の耳飾りが出土している。

安中市新堀東源ヶ原遺跡

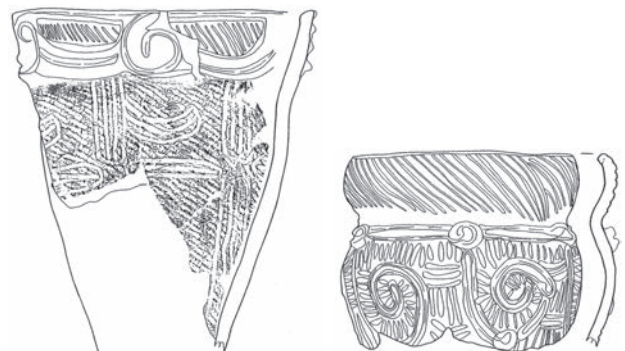
9号住居からは、下図に示した加曾利E 2式の土器と共に、No.139としたやや凸状となる下面に刺突文を施し、側面の括れは明瞭で、上端部がやや膨らむスタンプ形を呈するものが出土している。



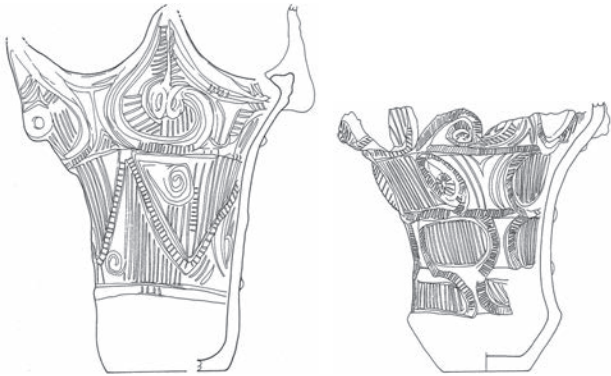
163号住居からは、下図に示した加曾利E 3式の土器と共に、No.144とした凸状となる下面に刺突文を施し、側面の括れは不明瞭で長く、上端部が窄まるスタンプ形を呈するものが出土している。



91A号住居からは、下図に示した加曾利E 3式の土器と共に、No.142とした凸状となる下面に刺突文を施し、側面が明瞭に括れで、上端部の長いスタンプ形を呈するものが出土している。



164号住居からは、下図に示した勝坂3式の土器と共に、No.145とした赤彩の滑車形を呈する耳飾りが出土している。



他にも、35号住居からは加曾利E2式土器とNo.140、793号土坑からは加曾利E2式土器とNo.147の耳飾りが、それぞれ出土している。

**富岡市中里下原遺跡**

82号住居からは、右図に示した加曾利E2式の土器と共に、No.160とした表裏面が平坦で、括れ部中央がやや膨らみぎみとなる滑車形の耳飾りが出土している。



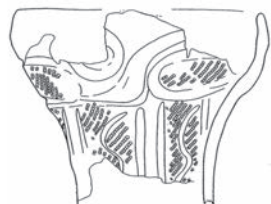
81号土坑からは、右図に示した加曾利E1式併行の土器と共に、No.161とした表面が凸状で、裏面が平坦となる滑車形の耳飾りが出土している。



他にも、215号土坑からは加曾利E2式土器と共に、No.162大型の滑車形を呈する耳飾りが出土している。

**下仁田町下鎌田遺跡**

220号住居からは、右図に示した加曾利E3式土器と共に、No.167とした表裏面が大きく凹状となる臼状を呈した耳飾りが出土している。



上記以外にも同地域では、高崎市上野国分僧寺・尼寺中間地域A区30号住居で加曾利E3式に伴いNo.73、同市三ツ子沢中遺跡18号住居で称名寺I式に伴いNo.107、安中市砂押Ⅲ遺跡J-68号住居で加曾利E3式に伴うNo.123の耳飾りが、それぞれ出土している。

**<東毛地域>**

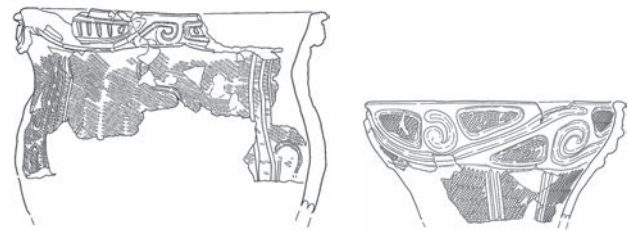
**前橋市清里・長久保遺跡**

13区5号住居からは、右図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.176とした表裏面とも凸状で、表裏面に同様な渦巻文を施した耳飾りが出土している。



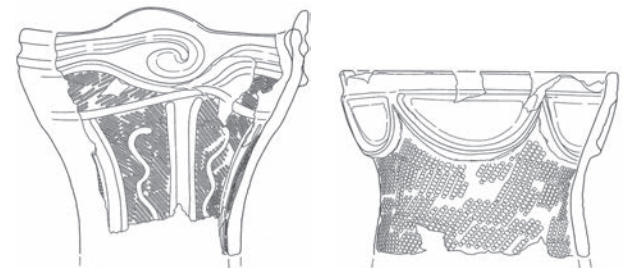
**前橋市元総社蒼海遺跡群(116)遺跡**

J-1号住居からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.179とした凸状となる下面に渦巻文と周縁に刺突文し、上端部に厚みをもったスタンプ形を呈するものが出土している。



**前橋市元総社蒼海遺跡群(123)遺跡**

J-11号住居からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.180とした表裏面が平坦で、表裏面とも同様な2方向の2重弧線文を施した耳飾りが出土している。



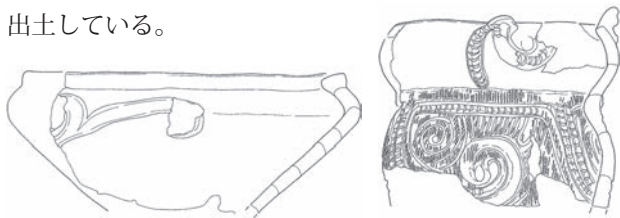
**前橋市荒砥二之堰遺跡**

27号住居からは、下図に示した称名寺Ⅱ式の土器と共に、No.181とした凸状となる表面の中央に貫通しない狭い凹み(孔状)をもった耳飾りが出土している。



伊勢崎市三和工業団地Ⅱ遺跡

76号住居からは、下図に示した勝坂3式の土器と共に、No.191とした滑車形の耳飾りが出土している。



他に、978号土坑からは勝坂3式土器と共にNo.192とした白状の耳飾り、1650号土坑では加曾利E3式土器と共にNo.193の滑車形の耳飾りが、それぞれ出土している。

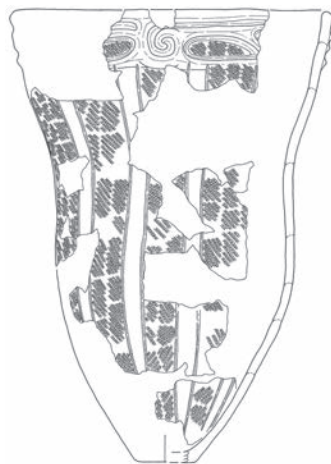
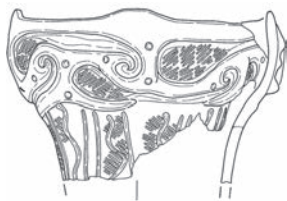
伊勢崎市下田遺跡

Ⅱ区20号住居からは、右図に示した称名寺I式の土器と共に、No.203とした平坦な表面に渦巻文、凸状となる裏面に渦巻文と周縁に2重の刺突文を施した耳飾りが出土している。



伊勢崎市天ヶ堤遺跡

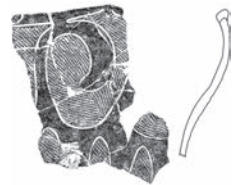
本線Ⅲ区J-54号住居からは、下図に示した加曾利E3式の土器と共に、No.209とした表裏面が凹状となる滑車形の耳飾りが出土している。



本線Ⅲ区J-56号住居からは、下図に示した称名寺I式の土器と共に、No.210とした表裏面の狭い平坦部に刺突文と沈線文を施した大型の滑車形耳飾りが出土している。



Ⅳ・4区128号土坑からは、右図に示した加曾利E4式の土器と共に、No.212とした白状の耳飾りが出土している。



Ⅳ・4区1号不明遺構からは、右図に示した称名寺Ⅱ式の土器と共に、No.213・214とした大きさの異なる滑車形の耳飾り2点が出土している。



上記以外にも同地域では、前橋市茂木山神Ⅱ遺跡J9号住居で加曾利E1式併行の土器とNo.190、太田市細谷合ノ谷遺跡3区3号住居で称名寺Ⅱ式に伴いNo.215の滑車形耳飾りが、それぞれ出土している。

以上、時期の確定できる遺構に伴い出土した事例として、28遺跡54遺構から計63点を示すことができた。これらの中には、1遺構に複数個(2点あるいは3点)の出土を認められた例が7遺構存在していた。

3. 形状分類

先述してきたように、中期から後期前葉にかけての耳飾りには様々な形状のものが存在する。円柱形で、側面が括れ、表面(上面)および裏面(下面)の状態によって鼓形と白形に分かれ、さらに中央に孔をもつ滑車形。片面のみが円盤をもった茸状を呈する所謂スタンプ形と称される類。そして、四角柱状を呈したものも存在した(第1図参照)。

鼓形の形状を呈する耳飾りは、計103点を数え最も多い形状である。その分別では、鼓A1類とした表裏面が共に平坦なもの44点、鼓A2類とした表面が凸状で裏面が平坦となるもの26点、鼓A3類とした表裏面とも凸状となるもの33点であった。

白形の形状を呈する耳飾りは、計15点と少ない。分別では、白A1類とした表裏面が共に浅く(僅かに)凹状を呈するもの5点、白A2類とした表裏面とも大きく凹

状を呈するもの4点、白A3類とした表面が浅く裏面が大きく凹状を呈するもの3点、白B類とした表面に中央に貫通しない孔を有するもの3点である。

滑車形の形状を呈する耳飾りは、計79点と鼓形に次いで多い形状である。その分別は、滑A1類とした器厚が薄く表裏面に平坦面をもたないもの32点、滑A2

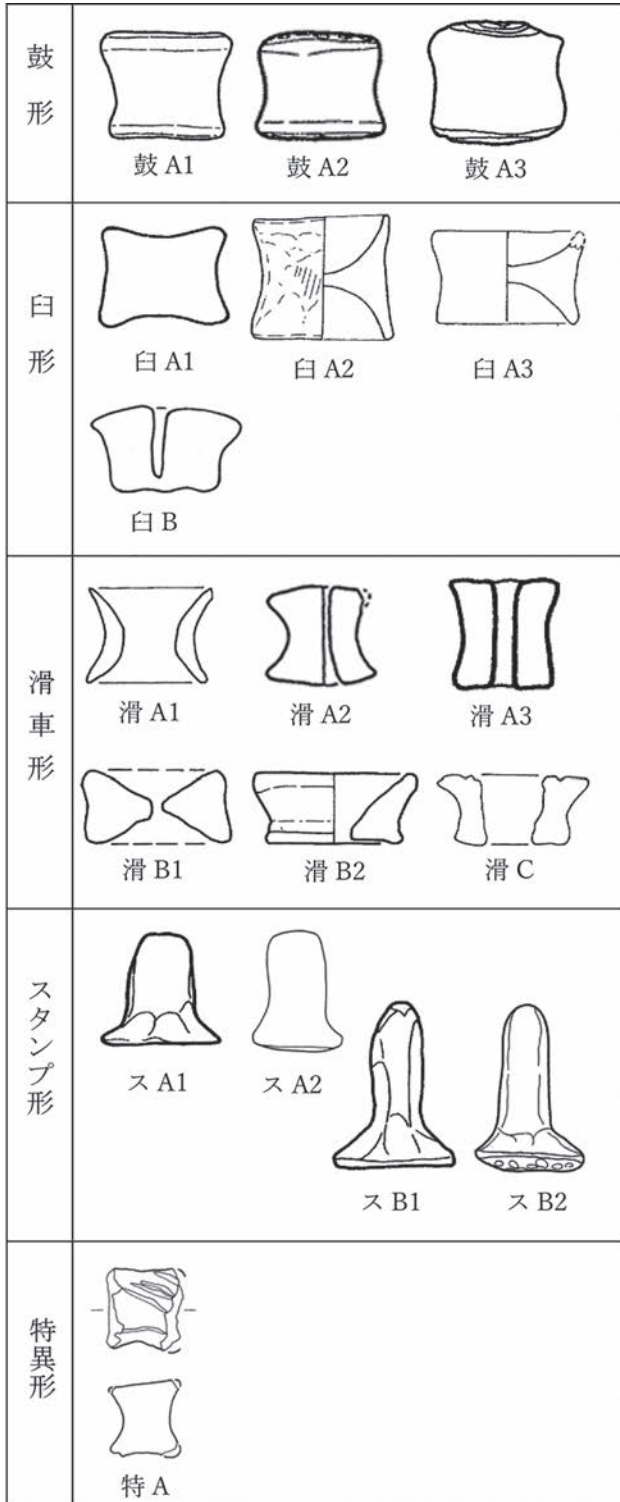
類とした中心孔が狭く表・裏面が凸状となるもの9点、滑A3類とした器厚が厚く表裏面に平坦面をもつもの28点、滑B1類とした中央に孔をもちながらも白状を呈するもの7点、滑B2類とした中央に孔をもちながらも片面のみが大きく凹むもの1点、滑C類とした大型で表裏面の径の異なる例やその平坦面に文様をもつもの2点を確認した。

スタンプ形を呈する耳飾りでは、計16点と少ない。分別を見ると、スA1類とした下面が平坦で上端部の短いもの4点、スA2類とした下面が凸状となり上端部の短いもの8点、スB1類とした下面が平坦で上端部が長く窄まるもの2点、スB2類とした下面が凸状となり上端部が長く窄まるもの2点ということであった。

なお、四角柱状を呈したものは1点は特異形(特A)として扱った。

#### 4. 施文文様

一方、耳飾りに施される文様についてみると、文様を施す形状は鼓形やスタンプ形を主に、他の形状にも僅かにみられる。主な文様として先ず刺突があり、そして沈線による放射状、渦巻、弧線・曲線といった文様に集約され、それらのバラエティーおよび組み合わせによって構成されていることが明らかとなった。特に文様のバラエティーでは、弧線にその種類は圧倒的に多い。先ず弧線には一重、二重、三重があり、それらの弧線は対向する2方向の弧線、3方向弧線、4方向弧線、あるいはC字状となるような弧線とがある。また、渦巻と刺突を



第1図 土製耳飾り形状分類図



第2図 土製耳飾りの主な文様分類と組み合わせ図

組合わせた文様、弧線と刺突を組合わせた文様、渦巻と弧線と刺突を組合わせた文様、さらに沈線と刺突を組合わせた文様が存在する（第2図参照）。

もちろん、無文の場合も多く、表裏両面が無文の例や片面(裏面)が無文となるものが確認できている。

これらの各文様を量的にみると、刺突のみを施すもの50点と最も多く、次いで渦巻のみを描いたもの34点で、渦巻と刺突を組合わせたものは5点あった。また、様々な種類の弧線の中でも弧線のみを描いたものは18点であるが、刺突等の文様と組合わせた場合では13点を確認できた。放射状沈線を施したものは1点のみで、端部への沈線と刺突を組合わせた文様のものも滑車形に限定されて2点と少なかった。

## 5. 時期的な傾向と特徴

ここでは、遺構出土の時期の確定できる耳飾りから、各形状および文様について、時期的な傾向と特徴を掻い摘んでみておく。

まず、鼓形であるが、総じて中期後半の加曾利E2式期から後期初頭の称名寺I式期までの間に多くみられ、分別した鼓A1～3類は共存する。また、この鼓形に施される文様をみると、各時期を通じて刺突や渦巻の文様が主体的に施文され、弧線は加曾利E3式期に多くみられるようである。特に、渦巻と刺突を組合わせた文様は加曾利E3式期から称名寺I式期にみられるのが特徴的である。

白形は、数は少ないものの中期中葉の勝坂3式期以降に散漫に存在し、白B類は称名寺II式期にも確認されている。また、白A1類には弧線等の文様を施す例も存在する。

滑車形については、中期中葉の勝坂3式期以降、後期前葉の堀之内1式期までの間に万遍なく存在している。特に滑A1類と滑A3類は各時期を通じて存在し、滑A2類は加曾利E1～E3式期にみられる特徴が窺える。また、滑C類は中期にはみられず、後期初頭に存在することが確認できた。併せて、後期初頭に位置づけられるNo.210やNo.215からは、形状および施文文様・文様位置が、その後続く耳飾りに想起することができよう。

スタンプ形は、スA類およびスB類ともに加曾利E2・E3式期に限定されるようで、施文される文様も刺突や渦巻、そして両者を組合わせた文様がほとんどである。なお、このスタンプ形は、その形状から耳飾りと一線を画する扱いもあるが、円盤状の部分を表側(前面)とした耳飾りとしての装着は十分に考え得る形状であること。また、大きさ的な面でも耳飾りと径がさほど変わらず、施文される文様まで同じであることからすれば、耳飾り

として扱うことが妥当と考えられる。

特異形とした四角柱状を呈したもの(特A)は1点のみで、他に例を見ない。ここでは、円柱状を成す鼓形に対し、四角柱状の耳飾りの存在を認めることとして扱った。類例を待って、検討する必要があるだろう。

## 6. おわりに

本稿では、群馬県内出土の縄文時代土製耳飾りを対象に、中期から後期前葉までの資料計215点を集成し、遺構内出土土器からの時期の確認。形状分類として、鼓形・白形・滑車形・スタンプ形・特異形に大別し、さらに計18類に細別した。併せて、耳飾りに施文される文様についても、刺突、そして沈線による放射状、渦巻、弧線・曲線等の文様に集約され、それらのバラエティーおよび組合わせによって構成されていることが解った。また、各形状の耳飾りについて、その時期的な位置づけと文様を絡めた特徴が垣間見えてきた。そうした中、先述の特異形とした新たな形状のものについて、周囲の類例と比較せざるを得ないことが明らかとなった。

時期の確認できた耳飾りからは、最も古くは勝坂3式期に白形と滑車形のもの少数みられ、両形状はその後の後期にまで続く。集成資料の中で最も数の多かった鼓形は、加曾利E2式期以降にみられるが、そのピークは加曾利E2・3式期にある。また、スタンプ形は、加曾利E2・3式期に限定される状況で興味深い。この鼓形とスタンプ形に施文される文様は、刺突や渦巻の文様が主体となり、弧線は時期を限った鼓形に多く、渦巻と刺突を組合わせた文様は加曾利E3式期以降であることも解った。

今後、こうした群馬県内の状況を周辺地域と比較することによって、地域性を含めたその差異を浮き彫りにすることができよう。

他方、別な視点からすれば、今回の集成で分かったことに、1遺構内から複数個の耳飾りの出土例もあり、耳飾りへの基本的な問題として、その装着数ないし保有数といったことも今後の検討課題となろう。その意味でも、十二前遺跡での耳飾りの出土事例は、堀之内1式期の装着事例として注視しておきたい。さらには、前代の所謂「玦状耳飾り」とは異なる、土製耳飾りの初現期の耳飾りが群馬県内に存在し得るのか、という点も今後の課題となろう。

さて、今回に続く後期中葉以降の耳飾りについては、その集成も含め、現在、精力的に進めている。

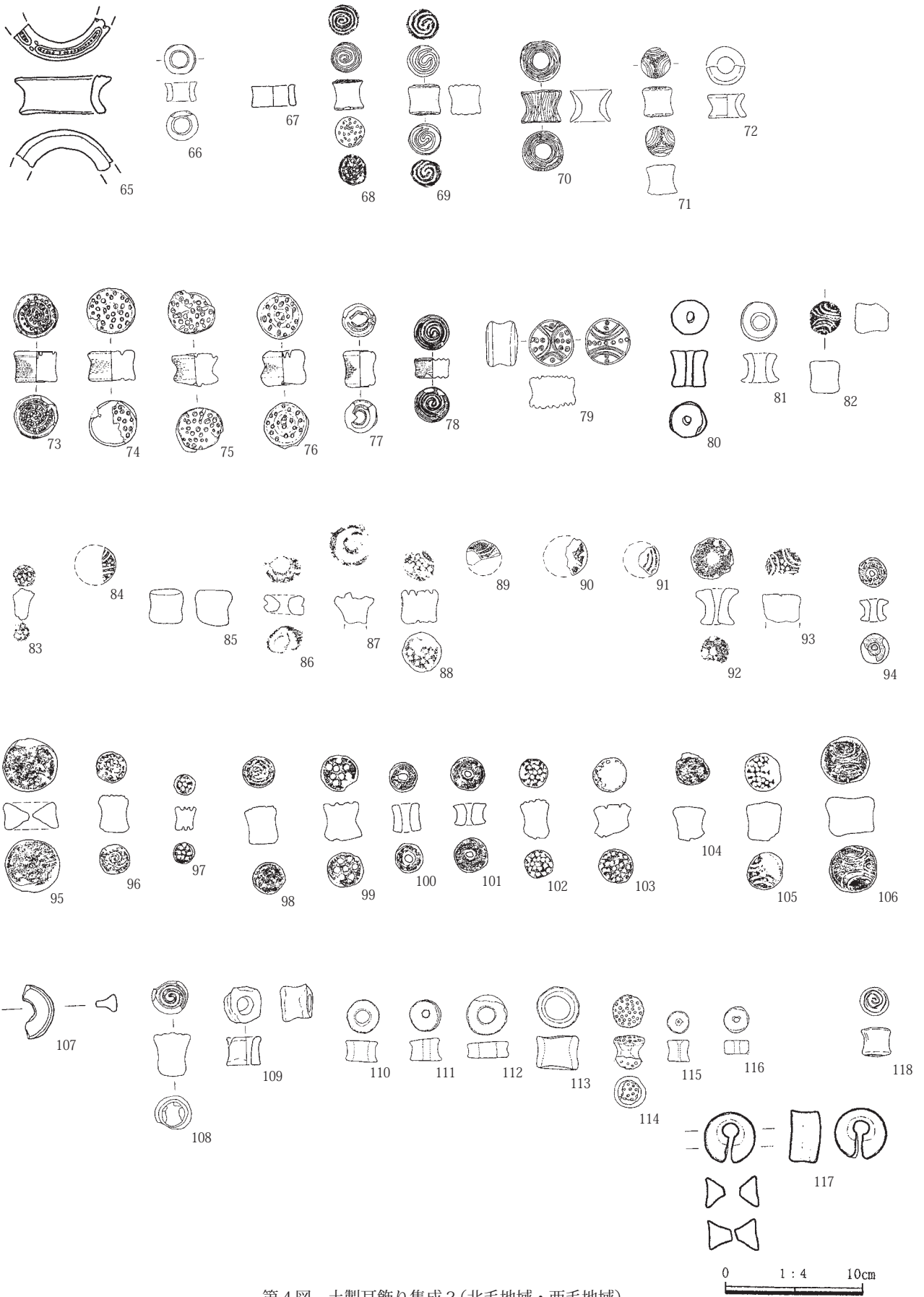
なお、引用・参考文献については、紙面の都合から割愛することとした。



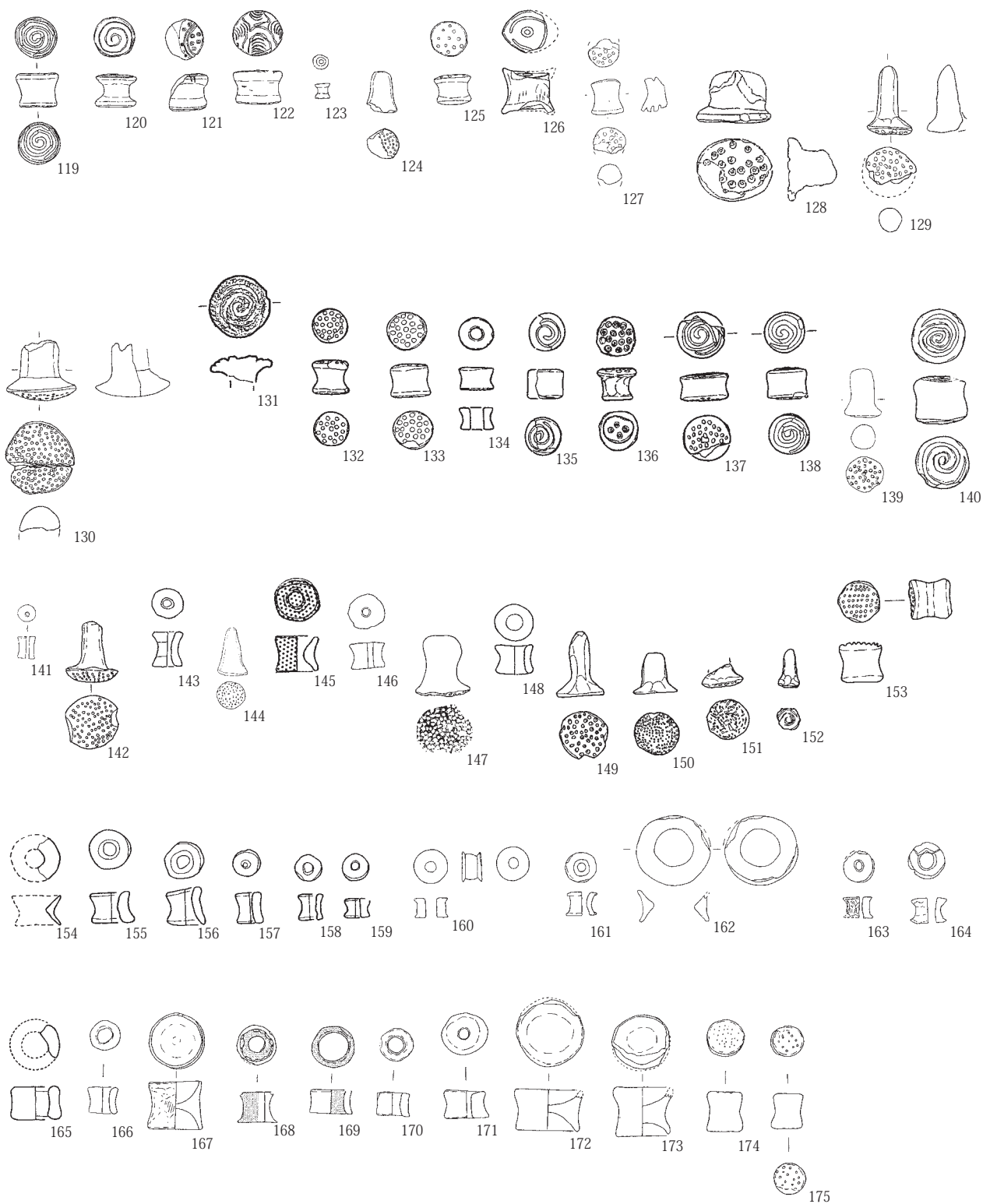
## 資料出典文献

- 1 『空沢遺跡(第3次)』1982 渋川市教育委員会
- 2 『下遠原遺跡A・C区』2008 渋川市教育委員会
- 3 『道訓前遺跡』2001 北橘村教育委員会
- 4 『小室高田遺跡I - ii』2005 北橘村教育委員会
- 5 『小室高田遺跡I - i・II』2006 北橘村教育委員会
- 6 『前中後遺跡I・II・III・IV区』2010 渋川市教育委員会
- 7 『三原田遺跡 第3巻』1992 群馬県企業局
- 8 『中郷遺跡(2)』2010 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 9 『十二前遺跡II』2015 山下工業株式会社
- 10 『沼南遺跡』1999 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 11 『長久保大畑遺跡 新田入口遺跡』2000 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 12 『上組北部遺跡群』2009 みなかみ町教育委員会
- 13 『布施上原遺跡』2000 新治村遺跡調査会
- 14 『上郷岡原遺跡(3)』2009 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 15 『立馬II遺跡』2006 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 16 『榎木II遺跡(2)』2009 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 『長野原一本松遺跡(5)』2009 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 18 『長野原一本松遺跡(6)』2013 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 19 『長野原一本松遺跡(7)』2014 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 20 『横壁中村遺跡(8)』2009 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 21 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』1986 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 22 『棟高西弥三郎街道遺跡』2019 株式会社測研(文化財研究室)
- 23 『白川笹塚遺跡 白岩浦久保遺跡 白岩民部遺跡』2000 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 24 『白川傘松遺跡』1997 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 25 『三ツ子沢中遺跡』2000 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 26 『高浜広神遺跡』1999 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 27 『E14 保美地区遺跡群』1994 藤岡市教育委員会
- 28 『北山遺跡』『群馬県史 資料編1』1988
- 29 『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』2003 安中市教育委員会
- 30 『中野地区遺跡群2』2004 安中市教育委員会
- 31 『天神林遺跡・砂押III遺跡・大道南II遺跡・向原II遺跡』2004 安中市教育委員会
- 32 『中野谷松原遺跡』1998 安中市教育委員会
- 33 『落合II遺跡2・平塚遺跡2・三本木II遺跡2・三本木III遺跡2』2016 安中市教育委員会
- 34 『小日向地区遺跡群』2010 安中市教育委員会
- 35 『西横野東部地区遺跡群』2014 安中市教育委員会
- 36 『西横野中部地区遺跡群』2017 安中市教育委員会
- 37 『新堀東源ヶ原遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
- 38 『中里下原遺跡II・中里中原遺跡II(縄文時代編) 中里宮平遺跡・中里原遺跡・二本杉遺跡 松義中部地区遺跡群IV』2017 富岡市教育委員会
- 39 『杣瀬I遺跡 杣瀬II遺跡 杣瀬III遺跡』1994 下仁田町遺跡調査会
- 40 『下鎌田遺跡』1997 下仁田町遺跡調査会
- 41 『清里・長久保遺跡』1986 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 42 『元総社蒼海遺跡群(116) 元総社蒼海遺跡群(123)』2019 前橋市教育委員会
- 43 『荒砥二之堰遺跡』1985 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 44 『堀越並木(A・C地点)遺跡』2004 大胡町教育委員会
- 45 『堀越並木D地点遺跡 堀越丙諏訪遺跡』2006 大胡町教育委員会
- 46 『天神遺跡』『群馬県史 資料編1』1988
- 47 『上ノ山遺跡』1992 大胡町教育委員会
- 48 『茂木山神II遺跡』2001 大胡町教育委員会
- 49 『三和工業団地II遺跡』2004 伊勢崎市教育委員会
- 50 『下元屋敷遺跡・下田遺跡(1)』2007 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 51 『下田遺跡(2)』2008 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 52 『天ヶ堤遺跡V』2006 伊勢崎市教育委員会
- 53 『天ヶ堤遺跡(1)』2007 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 54 『天ヶ堤遺跡(2)』2008 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 55 『福沢新田遺跡 細谷合ノ谷遺跡 細谷八幡遺跡』2007 群馬県埋蔵文化財調査事業団



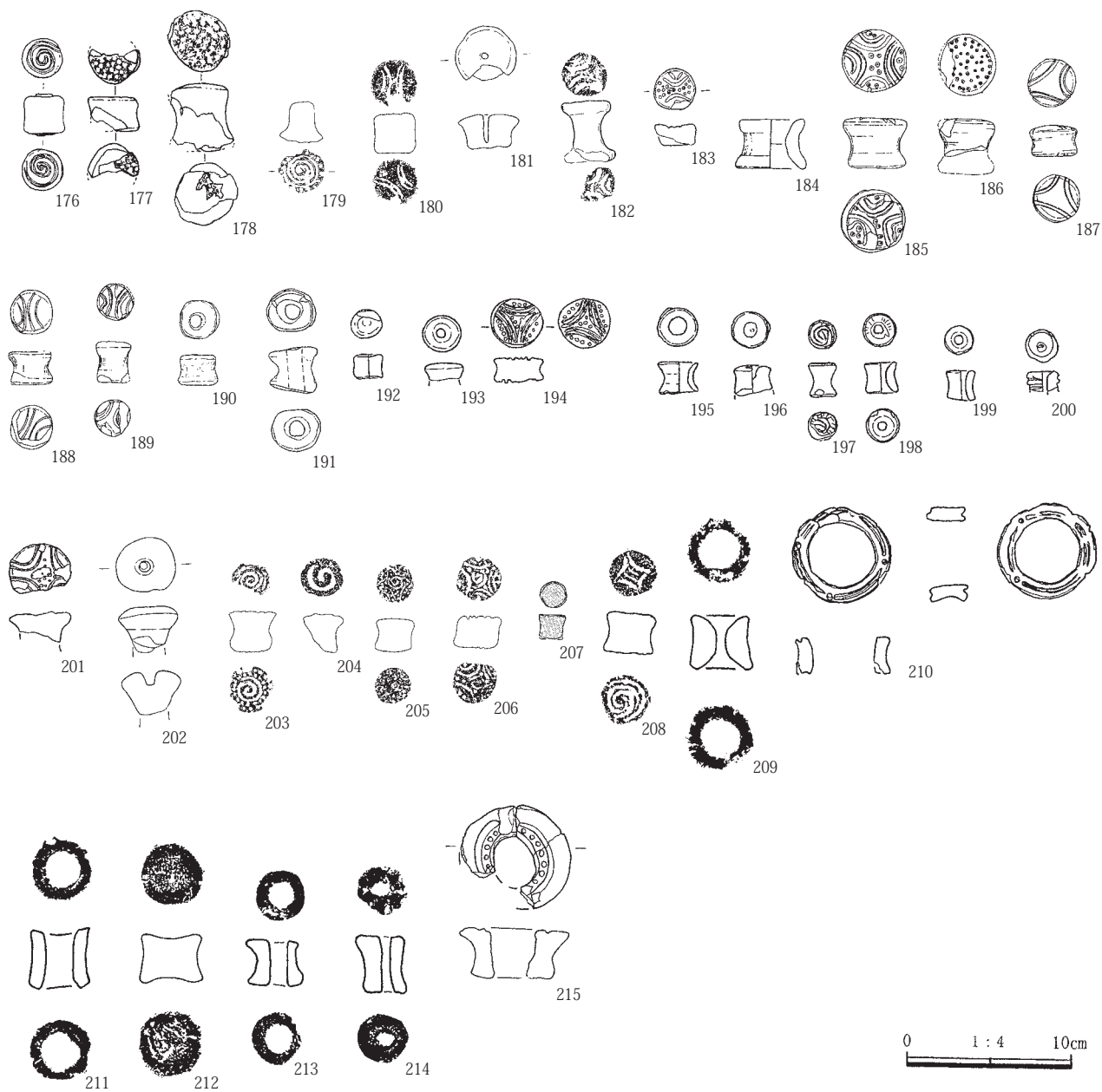


第4図 土製耳飾り集成2(北毛地域・西毛地域)



0 1 : 4 10cm

第5図 土製耳飾り集成3(西毛地域・東毛地域)



第6図 土製耳飾り集成4(東毛地域)

表1 土製耳飾り集成表

	遺跡名	所在地	出土遺構	形態分類	計測値(cm)					特徴・文様	時期	出典文献
					外径	括れ径	内径	端部径	高さ			
1	空沢遺跡	渋川市行幸田	遺構外	滑B1	(4.5)	(4.9)			1.9	表裏面は凹状となり、側面はやや膨らむ。	中期後半	出典1
2	下遠原遺跡	渋川市北橋町真壁	C区J-12号住居	滑A1	2.6	2.4	0.5		2.1	表裏面は僅かに凹状。	中期後半	出典2
3	道訓前遺跡	渋川市北橋町上箱田	J-16号住居	鼓A2	2.8	2.0			2.9	表面は凸状で裏面はやや凸状。表裏面には同様の3方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	出典3
4			遺構外	鼓A1	2.4	1.9			2.5	表裏面は平坦。表裏面に同様の渦巻文。	中期中葉～中期後半	
5			遺構外	白A2	1.5	1.2			1.9	表裏面は凹状となる。	中期中葉～中期後半	
6	小室高田遺跡	渋川市北橋町小室	J-9号住居	鼓A1	2.8	2.7			2.2	表面はやや凹状で裏面は平坦。表裏面には同様な中心からの放射状沈線。	中期後半	出典4
7			J-9号住居	鼓A2	2.3	2.0			2.0	表面はやや凸状で裏面は平坦。表裏面には同様な刺突文。	中期後半	
8			J-29号住居	鼓A1	2.0	1.6			2.4	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
9			J-29号住居	滑A3	2.2	1.7	0.8		1.5	表裏面は平坦。	中期後半	
10			J-3号住居	鼓A1	2.7	2.1			2.5	表裏面は平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	出典5
11			J-8号住居	滑A3	2.2	1.6	0.9		1.6	表裏面は平坦。	中期後半	
12			J-16号住居	鼓A1	3.1	2.9			2.0	表裏面は平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
13			J-16号住居	鼓A1	3.4	-			2.1	表裏面は平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
14			J-16号住居	鼓A3	2.7	2.1			2.6	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な渦巻文と刺突文。	中期後半	
15			J-17号住居	鼓A2	2.4	1.7			-	表面はやや凸状で、3方向に2重の弧線文。	中期後半	
16	J-17号住居	鼓A1	2.9	2.8			1.7	表裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半			
17	J-17号住居	鼓A3	2.6	1.9			2.6	表面は凸状で裏面はやや凸状。表裏面とも同様に3方向の弧線文と刺突文。	中期後半			
18	前中後遺跡	渋川市北橋町八崎	遺構外	滑A3	(4.0)	3.4	1.1		1.2	表裏面は平坦。	中期後半～後期前葉	出典6
19	三原田遺跡	渋川市赤城町三原田	遺構外	鼓A1	3.6	-			-	表面は平坦で、4方向に2重の弧線文。	中期後半～後期初頭	出典7
20			遺構外	鼓A1	2.8	2.2			3.0	表裏面は平坦。表面に2方向の2重の弧線文。	中期後半～後期初頭	
21			3-7住居	鼓A1	2.6	1.8			2.8	表裏面は概ね平坦。表裏面とも同様に2方向の2重の弧線文。	中期後半	
22			遺構外	鼓A2	2.7	1.9			2.2	表面は凸状で裏面は平坦。表面は3方向の弧線文と刺突文。裏面は3方向の弧線文。	中期後半～後期初頭	
23			遺構外	鼓A2	3.0	2.4			2.5	表面はやや凸状で裏面は平坦。表裏面とも同様に3方向の弧線文と刺突文。	中期後半～後期初頭	
24			遺構外	鼓A2	3.0	2.9			3.5	表面はやや凸状で裏面は平坦。表面に刺突文。	中期後半～後期初頭	
25			遺構外	鼓A3	2.4	2.1			2.1	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半～後期初頭	
26			2-2住居	鼓A1	2.9	-			-	裏面は平坦で、刺突文。	後期初頭	
27			6-C' 19(ハ) - 1pit	鼓A1	2.4	1.8			2.3	表裏面は平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
28			遺構外	鼓A3	2.1	1.7			2.2	表面は凸状で裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半～後期初頭	
29			6-32住居	鼓A2	3.0	2.8			1.6	表面は凸状で裏面は平坦。表面に刺突文。	中期後半～後期初頭	
30			遺構外	鼓A1	2.6	2.2			2.3	表裏面は平坦。表面は渦巻文。裏面は渦巻状の刺突文。	中期後半～後期初頭	
31			遺構外	鼓A3	1.9	1.7			2.6	表裏面は凸状。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半～後期初頭	
32			遺構外	鼓A3	1.8	1.4			2.3	表裏面は凸状。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半～後期初頭	
33			遺構外	鼓A2	2.1	1.8			2.1	表面はやや凸状で裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半～後期初頭	
34			遺構外	鼓A1	2.0	1.5			1.8	表裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半～後期初頭	
35			遺構外	鼓A2	(2.3)	1.6			1.7	表面はやや凸状で裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半～後期初頭	
36			遺構外	鼓A2	2.4	2.2			1.7	表面は凸状で裏面は平坦。表面に渦巻文。	中期後半～後期初頭	
37			遺構外	鼓A1	2.2	1.8			-	裏面は平坦で、渦巻文。	中期後半～後期初頭	
38			3-V22-Bpit	滑A1	3.4	2.9	1.4		1.4	側面に縄文を施す。	中期後半～後期初頭	
39			遺構外	滑A3	2.6	2.2	1.1		2.0	表裏面は平坦。赤彩。	中期後半～後期初頭	
40			1-22住居	滑A1	2.4	1.9	0.5		-	孔は狭い。	中期後半～後期初頭	
41			8-6住居	滑A1	2.2	1.8	0.4		2.1	孔は狭い。	中期後半～後期初頭	

	遺跡名	所在地	出土遺構	形態分類	計測値(cm)					特徴・文様	時期	出典文献
					外径	括れ径	内径	端部径	高さ			
42			遺構外	滑A2	2.1	1.2	0.3		1.9	表裏面はやや凸状で、孔は極めて狭い。	中期後半～後期初頭	
43			遺構外	滑A1	2.2	1.7	0.5		2.0	表裏面は僅かに凹状。	中期後半～後期初頭	
44			1-K10-3pit	滑A1	2.0	1.4	0.6		2.0		中期後半～後期初頭	
45			1-V82-Apit	滑A1	1.8	1.3	0.5		1.5		中期後半～後期初頭	
46			遺構外	滑A1	1.8	1.5	0.2		-	孔は極めて狭い。	中期後半～後期初頭	
47			遺構外	白A3	2.5	2.1			2.7	表面はやや凹状で、裏面は大きく凹状。	中期後半～後期初頭	
48			遺構外	白A2	2.6	1.8			-	表裏面は凹状となる。	中期後半～後期初頭	
49			遺構外	スA1	2.6	1.6		1.8	3.1	下面は平坦で、渦巻文。側面は僅かに括れ、上端は厚みをもつ。	中期後半～後期初頭	
50	中郷遺跡	澁川市中郷	11区遺構外	鼓A1	2.5	2.3			2.4	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様にC字状の弧線文と刺突文。	中期後半	出典8
51			11区遺構外	鼓A3	3.0	2.5			2.7	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様なC字状の弧線文。	中期後半	
52			11区遺構外	特A	(2.5)	1.6			2.7	形状はサイコロ状を呈し、表面は平坦で、裏面は僅かに凹状。表面に沈線。	中期後半	
53			11区遺構外	白A1	3.0	2.6			2.3	表裏面はやや凹状。表面に2方向の2重弧線文、裏面に4方向の弧線文。	中期後半	
54			12区遺構外	白A3	(3.3)	-			1.9	表面はやや凹状で、裏面は大きく凹状。	中期後半	
55			12区遺構外	鼓A2	3.0	2.7			-	表面は凸状で、2方向の弧線文。	中期後半	
56			12区遺構外	滑A3	2.0	1.8	0.7		1.6	表裏面は平坦。	中期後半	
57	十二前遺跡	榛東村新井	SK-328(土坑)	滑A1	3.0	2.8	2.0		2.0	薄く丁寧な作り。内外面に赤彩。	後期前葉	出典9
58			SK-328(土坑)	滑A1	3.0	2.8	2.0		2.0	薄く丁寧な作り。内外面に赤彩。	後期前葉	
59	沼南遺跡	吉岡町大久保	遺構外	滑A1	1.6～1.2	1.3	0.6		2.4	形状は管玉状を呈すが、側面が僅かに括れる。	中期後半	出典10
60			遺構外	鼓A2	2.2	1.5			2.8	表面は凸状で、裏面は平坦。表面は渦巻文。裏面は刺突文。	中期後半	
61	長久保大畑遺跡	吉岡町大久保	遺構外	滑B2	4.0～3.4	3.1	0.8		1.7	表面は大きく凹状で、裏面は僅かに凹状。	中期	出典11
62	深沢B遺跡	みなかみ町月夜野	遺構外	鼓A2	(2.2)	1.6			2.5	表面はやや凸状で渦巻文、裏面に曲線文。	中期後半～後期前葉	出典12
63	布施上原遺跡	みなかみ町布施	遺構外	鼓A1	2.7～2.9	2.5			2.8	表面は平坦で、裏面はやや凸状。表面に刺突文。	中期後半～後期前葉	出典13
64			遺構外	鼓A3	2.5～2.8	2.1			2.8	表裏面は凸状。表面に2方向の弧線文と刺突文。裏面に3方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半～後期前葉	
65	上岡原遺跡	東吾妻町三島	IV区436号土坑	滑C	7.2～6.6	5.6	4.7		2.8	大型。表面の平坦面上に、細沈線で長楕円区画と細刺突による文様。	後期初頭	出典14
66	立馬II遺跡	長野原町林	遺構外	滑A3	2.2	1.9	1.2		1.3	表面は平坦。	中期	出典15
67	楡木II遺跡	長野原町林	遺構外	滑A1	3.1	3.0	2.2		1.5	内面に赤彩。	中期後半～後期前葉	出典16
68	長野原一本松遺跡	長野原町長野原	遺構外	鼓A3	2.1	1.7			2.3	表裏面はやや凸状。表面は渦巻文。裏面は刺突文。	中期後半	出典17
69			5-156号住居	鼓A3	2.2	2.0			2.3	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な入組み状の渦巻文。	中期後半	出典18
70			遺構外	滑A1	2.9	2.2	1.3		2.4	薄く丁寧な研磨。	中期後半～後期前葉	
71			遺構外	鼓A3	2.1	1.8			2.2	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様に3方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	出典19
72	横壁中村遺跡	長野原町横壁	28区18号住居	滑A1	2.8	2.0	1.2		1.7	薄く丁寧な作り。	後期初頭	出典20
73	上野国分僧寺・尼寺中間地域	高崎市東国分町	A区第30号住居	鼓A1	3.1	2.8			2.2	表裏面は平坦。表裏面とも同様の渦巻文と刺突文。	中期後半	出典21
74			遺構外	鼓A1	3.4	3.0			2.2	表裏面は平坦。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
75			遺構外	鼓A3	3.4	2.6			2.4	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
76			遺構外	鼓A1	3.2	2.8			2.5	表裏面は僅かに凹状。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
77			遺構外	鼓A1	2.4	2.0			2.6	表裏面は概ね平坦。表裏面とも同様な凹状の弧線。	中期後半	
78			遺構外	鼓A3	2.6	2.4			1.5	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半	
79	棟高西弥三郎街道遺跡	高崎市棟高町	97号土坑	鼓A3	3.4	2.9			2.3	表裏面はやや凸状。表面は4方向の弧線文と刺突文。裏面に2方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	出典22
80	白川笹塚遺跡	高崎市箕郷町白川	97号土坑	滑A3	2.7	2.1	0.5		2.7	表裏面は平坦。	中期後半～後期初頭	出典23
81	白川傘松遺跡	高崎市箕郷町白川	4号住居	滑A2	2.5	1.7	0.8		2.2	表裏面はやや凸状。	中期後半	出典24
82			14号住居	鼓A1	2.2	1.9			2.4	表裏面は概ね平坦。表面に2方向の重複する弧線文。	中期後半	

	遺跡名	所在地	出土遺構	形態分類	計測値(cm)					特徴・文様	時期	出典文献
					外径	括れ径	内径	端部径	高さ			
83			23号住居	鼓A3	(2.2)	1.1			2.3	表裏面は凸状。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
84			23号住居	鼓A	(3.0)	-			-	片面に2方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	
85			72号住居	鼓A1	2.7	2.3			2.5	表裏面は概ね平坦。	中期後半	
86			遺構外	滑A1	2.9	2.5	1.1		1.4	表裏面はやや凹状。	中期後半	
87			遺構外	鼓A2	2.9	1.6			-	表面は凸状となり、太い渦巻文。	中期後半	
88			遺構外	鼓A1	2.7	2.5			2.4	表裏面は平坦。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
89			遺構外	鼓A	(2.6)	-			-	片面に2方向の2重弧線文。	中期後半	
90			遺構外	鼓A	(3.0)	-			-		中期後半	
91			遺構外	鼓A	(2.8)	-			-	2重の弧状沈線(渦巻文か)。	中期後半	
92			遺構外	滑A2	3.1~2.5	1.6	0.4		2.7	表面はやや凸状で径が大きく、裏面は平坦で径が小さい。	中期後半	
93			遺構外	鼓A1	2.8	2.5			-	表面は概ね平坦で、3方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	
94			遺構外	滑A2	2.2~1.9	1.3	0.5		1.7	表裏面はやや凸状となり、表面の径がやや大きい。	中期後半	
95			遺構外	滑B1	3.9	3.7	0.3		1.9	表裏面は大きく凹状となり、孔は小さい。	中期後半	
96			遺構外	鼓A3	2.2	1.8			2.7	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半	
97			遺構外	鼓A1	1.6	1.2			1.7	表裏面は平坦。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
98			遺構外	鼓A2	2.3	2.0			2.8	表面は凸状で、裏面は平坦。表面は渦巻文。	中期後半	
99			遺構外	鼓A1	2.6	2.0			2.8	表裏面は概ね平坦。表裏面とも同様に刺突文。	中期後半	
100			遺構外	滑A3	2.0	1.8	0.6		2.0	表裏面とも僅かに凸状。	中期後半	
101			遺構外	滑A2	2.5	1.9	0.4		1.6	表裏面とも僅かに凸状。	中期後半	
102			遺構外	鼓A3	2.1	1.6			2.9	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
103			遺構外	鼓A3	2.7	2.1			2.4	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
104			遺構外	鼓A3	2.4	1.7			-	表裏面ともやや凸状。	中期後半	
105			遺構外	鼓A3	2.6	2.3			2.8	表面は凸状で、裏面は平坦。表面は刺突文。裏面は2ないし3方向の2重弧線文。	中期後半	
106			遺構外	白A1	3.6	3.3			2.8	表裏面はやや凹状。表裏面とも同様な2方向の2重弧線文。	中期後半	
107	三ツ子沢中遺跡	高崎市三ツ子沢町	18号住居	滑B1	(4.2)	-	(1.4)		1.2	表裏面は大きく凹状となり、側面は膨らみきみ。	後期初頭	出典25
108	高浜広神遺跡	高崎市高浜町	遺構外	スA2	2.7~2.5	2.4			3.1	表裏面はやや凸状。表面に渦巻文。	中期後半	出典26
109	平塚台遺跡	藤岡市保美	遺構外	滑A3	2.4	2.1	0.5		2.0	表裏面は平坦。	中期後半~後期初頭	出典27
110	北山遺跡	藤岡市藤岡	遺構外	滑A3	2.3	2.0	0.9		1.5	表裏面は平坦。	中期後半~後期前葉	出典28
111			遺構外	滑A3	2.3	1.8	0.5		1.6	表裏面は平坦となり、孔は極めて狭い。	中期後半~後期前葉	
112			遺構外	滑A3	3.0	2.7	1.2		1.1	表裏面は平坦。	中期後半~後期前葉	
113			遺構外	滑A1	1.7	1.3	0.2		1.5	表裏面は平坦。	中期後半~後期前葉	
114			遺構外	鼓A3	2.2	1.5			2.5	表裏面とも凸状か。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半~後期前葉	
115			遺構外	滑A3	1.8	1.7	0.4		0.9	表裏面は平坦。	中期後半~後期前葉	
116			遺構外	滑A3	3.1	2.9	1.8		2.3	表裏面の端部がやや歪む。	中期後半~後期前葉	
117	野村遺跡	安中市東上秋間	遺構外	滑B1	3.7	3.6	1.1		2.1	表裏面は大きく凹状。側面はやや括れ、孔は片側に寄る。	中期後半~後期初頭	出典29
118	北原Ⅱ遺跡	安中市東上秋間	遺構外	鼓A3	2.1	1.8			2.2	表裏面は凸状。表面に渦巻文。	中期後半	
119	中島Ⅰ・Ⅱ遺跡	安中市中野谷	J-9号住居	鼓A1	2.9~2.6	2.3			2.4	表裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半~後期初頭	出典30
120	大道南Ⅱ遺跡	安中市中野谷	J-3号住居	鼓A2	2.8	1.7			2.4	表面は凸状で、裏面は平坦。表面に渦巻文。	中期後半	出典31
121			J-6号住居	鼓A3	2.6	2.3			2.5	表面は凸状で裏面はやや凸状。表面に2方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	
122			遺構外	鼓A3	3.3	2.7			2.4	表裏面はやや凸状。表面に4方向の重弧線文。	中期後半	
123	砂押Ⅲ遺跡	安中市中野谷	J-68号住居	滑A3	1.0	0.7	0.3		1.0	表裏面は平坦で、孔は狭い。	中期後半	
124			P-41	スA1	2.3	1.6		1.4	2.9	下面は平坦で、刺突文。側面の括れは不明瞭で、上端は厚みをもってやや太い。	中期後半	
125			遺構外	鼓A3	2.5	1.9			2.1	表裏面は凸状。表面に刺突文。	中期後半	
126	中野谷松原遺跡	安中市中野谷	遺構外	滑B1	3.7	2.8	0.5		3.3	表裏面は大きく凹状。側面はやや括れ、孔は狭い。表面に円状の沈線文。	中期後半~後期初頭	出典32
127	三本木Ⅱ遺跡	安中市鷺宮	遺構外	鼓A3	2.2	1.7			2.4	表面は凸状で、裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	出典33
128	小日向田中西遺跡	安中市松井田町小日向	遺構外	スA1	6.2	4.6			-	大型で、平坦な下面には刺突文。側面の括れは明瞭であるが、上端は欠損。	中期	出典34



	遺跡名	所在地	出土遺構	形態分類	計測値(cm)					特徴・文様	時期	出典文献
					外径	括れ径	内径	端部径	高さ			
129	人見枝谷津遺跡	安中市松井田町人見	遺構外	スB2	(3.7)	1.4	1.2		4.7	凸状となる下面には刺突文。側面の括れは細く明瞭で、上部は長く上端は尖る。	中期後半	出典35
130	人見東原Ⅱ遺跡	安中市松井田町人見	J-8・9号住居	スA2	4.7	2.5			-	凸状となる下面には刺突文。側面の括れは明瞭であるが、上端は欠損。	中期後半	
131	人見東中原遺跡	安中市松井田町人見	J-5号住居	スA2	4.2	2.0			-	凸状となる下面には渦巻文と細い刺突文。側面の括れは明瞭であるが、上端は欠損。	中期後半	
132	二軒在家原田遺跡	安中市松井田町二軒在家	J-27b号住居	鼓A3	2.5	1.8			2.4	表面は凸状で、裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	出典36
133			J-47号住居	鼓A2	2.7	2.3			2.3	表面は凸状で、裏面は平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
134			D-25号土坑	滑A3	2.3	1.9	0.9		1.5	表裏面はほぼ平坦。	中期後半	
135			遺構外	鼓A1	2.6	2.4			2.0	表裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半	
136			二軒在家原田Ⅱ遺跡	安中市松井田町二軒在家	J-17号住居	鼓A2	2.8～2.3	1.8			2.2	
137			J-27号住居	鼓A3	2.3	2.0			1.9	表裏面はやや凸状。表面は刺突文で、裏面に渦巻文。	中期後半	
138			M-1号溝	鼓A2	2.7	2.5			2.2	表面は凸状で、裏面は平坦。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半	
139	新堀東源ヶ原遺跡	安中市松井田町新堀	9号住居	スA2	2.5	1.5		1.6	3.3	やや凸状となる下面には刺突文。側面の括れは明瞭で、上部はやや膨らむ。	中期後半	出典37
140			35号住居	鼓A3	3.5	3.2			3.2	表裏面は凸状。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半	
141			77号住居	滑A3	1.2	1.0	0.2		1.5	小型。表裏面は平坦で、孔は狭い。	中期前半～ 中期中葉	
142			91A号住居	スA2	3.6	1.5		1.4	4.2	凸状となる下面には刺突文。側面の括れは明瞭で、上部は長い。	中期後半	
143			104号住居	滑A1	2.0	1.4	0.5		2.4		中期後半	
144			163号住居	スB2	1.9	1.3		0.7	3.3	凸状となる下面には刺突文。側面の括れは不明瞭で、上部は長く徐々に窄まる。	中期後半	
145			164号住居	滑A1	2.8	2.4	1.0		2.4	内面赤彩。	中期前半～ 中期中葉	
146			621号土坑	滑A3	1.7	1.4	0.3		1.3	表面はやや凸状で、裏面は平坦。孔は狭い。	中期前半～ 中期中葉	
147			793号土坑	スA2	3.7	2.1		2.5	4.2	やや凸状となる下面には刺突文。側面の括れは明瞭で、上部はやや膨らみ長い。	中期後半	
148			1004号土坑	滑A1	2.5	2.0	1.1		1.9		中期	
149			遺構外	スB1	3.2	1.2		1.4	4.4	平坦な下面には刺突文。側面の括れは明瞭で、上部は長くやや膨らみ、上端は尖る。	中期	
150			遺構外	スA1	3.0	1.7		1.5	2.7	平坦な下面には刺突文。側面の括れは明瞭で、上部は厚みをもつ。	中期	
151			遺構外	スA2	2.8	-		-	-	凸状となる下面には刺突文。側面の括れは明瞭であるが、上端は欠損。	中期	
152			遺構外	スB1	(1.7)	1.0		0.9	2.6	小型で、平坦な下面には渦巻文。側面の括れは明瞭で、上端は尖る。	中期	
153			遺構外	鼓A2	2.9	2.4			2.7	表面は凸状で、裏面は平坦。表面に刺突文。	中期	
154			遺構外	滑B1	(3.3)	-	(1.3)		2.0	表裏面は大きく凹状。薄く、丁寧な作り。	中期	
155			遺構外	滑A1	2.9	2.3	0.8		2.1		中期	
156	遺構外	滑A1	2.6	2.0	0.9		2.6		中期			
157	遺構外	滑A3	1.8	1.4	0.3		2.2	孔は極めて狭い。	中期			
158	遺構外	滑A1	1.7	1.3	0.6		1.8		中期			
159	遺構外	滑A2	1.7	1.3	0.5		1.3		中期			
160	中里下原遺跡	富岡市妙義町中里	82号住居	滑A3	2.3	1.9	0.7		1.3	表裏面は平坦で、括れ部中央がやや膨らみぎみ。	中期後半	出典38
161			81号土坑	滑A2	2.1	1.4	0.6		1.6	表面は凸状で、裏面は平坦。	中期中葉	
162			215号土坑	滑B1	4.9	4.3	3.7		2.2	大型で、表裏面は大きく凹状。丁寧な研磨。	中期後半	
163			268号土坑	滑A3	2.1	1.6	0.5		1.4	表裏面は平坦で、丁寧な研磨。	中期中葉～ 中期後半	
164			273号土坑	滑A2	2.4	1.7	1.0		1.8	表裏面ともやや凸状。	中期中葉～ 中期後半	
165	杣瀬Ⅱ遺跡	下仁田町馬山	遺構外	滑A1	(3.3)	(3.1)	(0.8)		1.2		中期	出典39
166	下鎌田遺跡	下仁田町馬山	137号住居	滑A1	2.0	1.7	1.0		1.8		中期	出典40
167			220号住居	白A2	3.6	3.3			3.2	表裏面は大きく凹状。	中期後半	
168			192号土坑	滑A2	2.7	1.8	1.2		2.0	表面は凸状となり、裏面は平坦で径が大きい。内面赤彩。	中期	
169			551号土坑	滑A1	2.8	2.6	1.9		1.6	内面赤彩。	中期	
170			1183号土坑	滑A3	2.3	2.1	1.0		1.6	表裏面は平坦。	中期	
171			1221号土坑	滑A3	3.0	2.5	0.7		1.9	裏面はやや凹状で、裏面は平坦。	中期	
172			遺構外	白A3	4.6	4.0			2.8	大型で、表裏面は大きく凹状。	中期	
173			遺構外	白A2	4.0	3.1			3.3	大型で、表裏面は大きく凹状。	中期	
174			遺構外	鼓A1	2.4	2.0			2.7	表裏面は平坦。表面に刺突文。	中期	
175			遺構外	鼓A1	2.2	1.7			2.4	表裏面は概ね平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期	

	遺跡名	所在地	出土遺構	形態分類	計測値(cm)					特徴・文様	時期	出典文献
					外径	括れ径	内径	端部径	高さ			
176	清里・長久保遺跡	前橋市青梨子町	13区5号住居	鼓A3	2.4	2.2			2.5	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な渦巻文。	中期後半	出典41
177			遺構外	鼓A1	3.0	2.8			2.0	表裏面は平坦。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
178			遺構外	鼓A3	3.6	3.0			4.0	表裏面はやや凸状。表裏面とも同様な刺突文。	中期後半	
179	元総社蒼海遺跡群(116)遺跡	前橋市元総社町	J-1号住居	スA2	2.6	1.5		1.5	2.6	凸状となる下面には渦巻文と周縁に刺突文。側面の括れは明瞭で、上部は厚みをもつ。	中期後半	出典42
180	元総社蒼海遺跡群(123)遺跡	前橋市元総社町	J-11号住居	鼓A1	2.5	2.4			2.4	表裏面は概ね平坦。表裏面とも同様な2方向の2重弧線文。	中期後半	
181	荒砥二之堰遺跡	前橋市飯土井町	27号住居	白B	3.7～2.7	2.7			2.1	表面は凸状で、裏面は概ね平坦。表面の中央には貫通しない狭い凹みをもつ。	後期初頭	出典43
182	堀越並木遺跡	前橋市堀越町	A・C地点遺構外	鼓A1	3.0	1.6			3.7	表裏面は平坦。表面には2方向の2重弧線文。裏面は3方向の弧線文。	中期	出典44
183			D地点遺構外	白A1	2.6	-			-	片面はやや凹状で、2方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半～後期初頭	出典45
184	天神遺跡	前橋市茂木町	遺構外	滑A1	4.2	3.3	1.6		3.0	大型。	中期	出典46
185	上ノ山遺跡	前橋市茂木町	遺構外	鼓A3	3.8	2.8			3.0	表裏面はやや凸状。表面には4方向の2重弧線文と刺突文。裏面は3方向の2重弧線文と刺突文。	中期後半	出典47
186			遺構外	鼓A2	3.6	2.7			-	片面は凸状で、刺突文。	中期後半	
187			遺構外	鼓A2	2.8	2.5			1.8	表面は凸状で、裏面は平坦。表裏面とも同様な3方向の2重弧線文。	中期後半	
188			遺構外	鼓A1	2.7	2.1			2.0	表裏面は平坦。表裏面とも同様な2方向の2重弧線文。	中期後半	
189			遺構外	鼓A2	2.1	1.7			2.5	表面は凸状で、裏面は平坦。表裏面とも同様な2方向の2重弧線文。	中期後半	
190	茂木山神Ⅱ遺跡	前橋市茂木町	J9号住居	滑A3	2.4	2.1	0.7		1.8	表裏面は平坦。	中期中葉	出典48
191	三和工業団地Ⅱ遺跡	伊勢崎市三和町	76号住居	滑A3	3.0	2.0	1.0		2.8	表裏面は平坦であるが、裏面は斜め。	中期中葉	出典49
192			978号土坑	白A1	1.8	1.6			1.4	表裏面とも僅かに凹状。無文。	中期中葉	
193			1650号土坑	滑A2	2.3	1.8	0.6		-	片面はやや凸状。	中期後半	
194			遺構外	鼓A1	3.1	2.6			1.6	表裏面は平坦。表裏面とも同様な3方向の2重弧線文と刺突文。	中期中葉～後期初頭	
195			遺構外	滑A1	2.4	1.8	1.0		1.9	内外面に赤彩。	中期中葉～後期初頭	
196			遺構外	白B	2.2	2.0			-	片面は凸状で、中央に貫通しない深い凹みをもつ。	中期中葉～後期初頭	
197			遺構外	鼓A1	1.7	1.0			2.1	表裏面は平坦。表面は渦巻文。裏面には渦巻文と周縁に刻み。	中期中葉～後期初頭	
198			遺構外	滑A1	2.0	1.6	0.7		1.9	表面の周縁に刻み。	中期中葉～後期初頭	
199			遺構外	滑A1	1.8	1.4	0.6		1.9	内外面に赤彩。	中期中葉～後期初頭	
200			遺構外	滑A1	2.0	1.7	0.4		-	孔は狭い。	中期中葉～後期初頭	
201			遺構外	鼓A2	3.7	2.4			-	片面はやや凸状で、4方向の2重弧線文と刺突文。	中期中葉～後期初頭	
202	下田遺跡	伊勢崎市田部井町	遺構外	白B	3.5	2.0			-	片面は凸状で、中央に貫通しない深い凹みをもつ。	中期後半～後期初頭	出典50
203			Ⅱ区20号住居	鼓A2	2.8	2.1			2.5	表面は平坦で、裏面は凸状。表面は渦巻文。裏面には渦巻文と周縁に2重の刺突文。	後期初頭	
204			Ⅱ区21号住居	鼓A2	2.4	1.6			2.3	表面は凸状で、裏面は平坦。表面に渦巻文。	中期後半～後期初頭	
205			遺構外	鼓A3	2.3	1.9			2.0	表裏面はやや凸状。表面に中央に渦巻文、4方向の弧線文と刺突文。	中期後半～後期初頭	
206			遺構外	鼓A1	2.6	2.5			2.0	表裏面は平坦。表裏面とも同様に、中央に渦巻文、4方向の弧線文と刺突文。	中期後半～後期初頭	
207	天ヶ堤遺跡	伊勢崎市三和町	58ビット	鼓A1	1.7	1.4			1.5	表裏面は平坦で、赤彩。	中期後半～後期前葉	出典52
208			遺構外	鼓A1	3.0	2.5			2.5	表裏面は平坦。表面に4方向の弧線文。裏面に渦巻文。	中期後半	出典53
209			本線Ⅲ区J-54号住居	滑A1	3.6	3.3	0.6		3.3	表裏面は凹状。	中期後半	出典54
210			本線Ⅲ区J-56号住居	滑A3	6.0	5.3	3.8		2.3	大型。表裏面の狭い平坦部に、同様な刺突文と沈線文。	後期初頭	
211			Ⅲ・3区遺構外	滑A1	3.7	3.3	1.6		3.6			
212			Ⅳ・4区128号土坑	白A1	3.7	3.3			3.0	表裏面は凹状。	中期後半	
213			Ⅳ・4区1号不明遺構	滑A3	3.4	2.5	1.0		2.8	表裏面は平坦。	後期初頭	
214			Ⅳ・4区1号不明遺構	滑A3	3.0	2.3	0.6		3.4	表裏面は平坦。	後期初頭	
215			細谷合ノ谷遺跡	太田市細谷町	3区3号住居	滑C	6.6～5.0	4.6	2.0		3.0	大型で、表裏面は平坦。表面は径が大きく、平坦部に沈線と刺突が巡る。

# 群馬県の墓制

## — 弥生時代後期の位置づけ —

友 廣 哲 也

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 1. はじめに        | 5. 各遺跡と地域        |
| 2. 有馬遺跡礫床墓の分類  | 6. 墓制からみた群馬県域の関係 |
| 3. 高崎市井野川流域の遺跡 | 7. 遺物からの検討       |
| 4. 小八木志志貝戸遺跡   | 8. 「市」の果たす役割     |

## — 要 旨 —

筆者は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で群馬県内の遺跡を発掘・報告書作成をしてきた。着任後2年目にして有馬遺跡を調査することができた。

私が初めて整理した報告書は「新保遺跡Ⅲ」で、その後の有馬遺跡の報告書は「有馬遺跡Ⅰ」両報告書とも奈良平安時代編であった。

私は学生時代に古墳時代に興味をもちはじめ、弥生時代から古墳時代へかけた墓制や社会背景を考えてきた。それは有馬遺跡を調査したおかげであったと今にして思える。

筆者は墓制を考える上では、集団と社会の構造を考えることが必要と考えている。それは家族やコミュニティーの意志が一番大きな選定の基準であると考えているからである。墓の形態はその集団の特徴が現れる。なぜなら墓制とは生きている人間が死者に対する儀礼である。墓は生きている人間が死者に対して作るものである。筆者は群馬県の弥生時代後期は、遺跡によって墓の形態もそれぞれ特徴が異なっていることを理解している。つまり死者を葬るのは家族、コミュニティーの行為であるからだ。弥生時代の墓制の流れは、中期前半は再葬墓・壺棺墓・土壙墓、中期後半は周溝墓・壺棺墓後期は周溝。壺棺墓で、古墳時代に入ると方形周溝墓という図式が一般的である。

ここでは有馬遺跡、新保遺跡、小八木志志貝戸遺跡等群馬県内の弥生時代後期の礫床墓、周溝墓、壺棺墓の中から出土した年齢が分かっている人骨を中心に検討をしてみたい。

群馬県内の弥生時代後期の墓の形態は地域によってさまざまな形が確認されている。例えば有馬遺跡では80基を超す礫床墓が検出され、壺棺墓も40基を超えている。高崎市新保遺跡では周溝墓の主体部が壺を利用した土器棺墓が確認され、新保田中村前遺跡では土壙墓から焼骨が出土した例もある。また高崎市内八幡遺跡では土壙墓群の中から礫床墓が確認され、新保田中村前遺跡、日高遺跡でも礫床墓が確認されている。

おなじ弥生時代後期にも遺跡が違えば、異なった埋葬形態を確認することができるのである。このようなことがなぜ起こるのかを検討しながら時代、地域の集団社会と墓制を考えてみたい。

キーワード  
弥生時代後期  
礫床墓  
壺棺墓  
土壙墓  
「市」

## 1. はじめに

筆者は1981年4月に当時の財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現・公益財団法人)の調査研究員として就任し、1983～1984年の2年間、有馬遺跡の発掘調査に従事することができた。調査の間、自分の興味ある時代の遺跡にあたり、筆者は素晴らしい発掘を体験することになった。有馬遺跡は榛名山東南麓にあたる渋川市に所在している。立地的に榛名山と浅間山の火山の噴火災害を幾度となく受け、火山灰や火山軽石をはさんだ調査面は複数面にわたる。このため同じ場所を何面にもわたって調査を行う。有馬遺跡は中近世面から奈良平安時代面、古墳時代面、弥生時代面と4面を確認した。弥生時代後期樽式土器は古墳時代榛名山火山灰に覆われた畠のサクの下面から顔を出していた。畠の下に弥生の遺構があることに期待で胸を膨らませていた。

古墳時代の畠が終了するといよいよ弥生時代の調査面である。最終面は弥生時代後期集落面、この段階で現代の地表下4～5mを測った。弥生時代の竪穴建物<sup>(1)</sup>が多数確認された。集落の継続時期は、弥生時代後期から古墳時代前期にかかっていた。弥生時代の竪穴建物の周囲には小礫が敷き詰められたもの、礫の集中が確認できた。

経験不足の筆者は、最初はその正体がわからなかった。県内外の報告書をあたって同じものはなかった。やがて礫面上から人骨が確認され、墓であることが分かった。ある日、礫床面を精査していると、そこに茶色い棒のようなものが見えてきた。目を凝らしてみるとそれが鉄のように思えた。形状、規模からみると鉄剣ではないかと思った。まさにその棒は鉄剣であった。他の同じ遺構の礫面上から人骨だけでなく、歯や副葬品が出土した。発掘現場を担当する3人の間で礫床墓と命名した。やがて礫床墓が多量に確認され、有馬遺跡は弥生時代後期の集落であり墓域としてとらえることができた。

礫床墓は合計で86基、鉄剣は礫床墓から1本ずつ8基、総計で8本、ほかに翡翠製勾玉、銅釧、鉄釧、管玉、銅鏃、硝子小玉等々多くの副葬品、大量の樽式土器、人形土器も出土した。有馬遺跡ではほかに壺棺墓46基、土壙墓が1基確認されている。

筆者は1984年3月「有馬遺跡弥生礫床墓」と題した小文を当事業団の『研究紀要』創刊号に報文として載せた。

報告書『有馬遺跡Ⅱ』弥生・古墳時代編は1988年から整理が始まり、1990年に刊行された。筆者はこの弥生時代の報告書作成業務には関わることができなかったが、弥生時代から古墳時代へ考古学研究の出発点として有馬遺跡が常に心の中にあった。

それから約40年が過ぎた。今では県内でも礫床墓が多数確認されている。隣県の長野県では礫床木棺墓と呼んでいる。群馬県内では礫床墓の確認量では有馬遺跡を凌ぐ遺跡はない。

ここでは群馬県内の墓の埋葬方法を中心とした問題を再検討し、できれば群馬県内の遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての墓制を検証してみたい。有馬遺跡では礫床墓、壺棺墓から54体を超える人骨が出土した。

本小文では墓の種別だけではなく、被葬者たちの年齢結果を併せて検討し、弥生時代後期の墓の在り方を考えてみたい。

県内出土の礫床墓、壺棺墓、周溝墓例と合わせ葬送の位置づけを併せて概観したいと考えている。そこから見えてくる社会背景と併せ、できれば背後にある家族やコミュニティの構造を考えてみたいと思っている。

礫床墓の形態分類は報告書に従い、筆者の別の視点や記憶の中から多少の訂正、修正等を加えてみたい。

人骨は分析者により、人類学的には年齢は同じでも呼び名が異なっている。例えば壮年・成年等である。

『有馬遺跡Ⅱ』報告書の刊行は1990年、『新保田中村前遺跡Ⅳ』の刊行が1994年である。ここでは最近の研究による分類である米元史織の分類に従い、年齢の呼び名を統一した。<sup>(2)</sup>

## 2. 有馬遺跡礫床墓の分類

『有馬遺跡Ⅱ』報告書では礫床墓の分類をA～Eの5形態に分けている。さらに墓が集中するところに1～25号墓の番号を付している。

報告書中の分類を列記する。

A類；埋葬部に礫を敷き、両端部に集石がある。

B類；A類の両側部に礫床を挟むように集石を持つ。

C類；両端部のみに集石を持つ。

D類；礫床が無く埋葬部の周囲を集石で囲む。

E類；礫床部のみ。

有馬遺跡の墓群には墓番号が付され、礫床墓、壺棺墓、のすべてにsk番号が単独で振られている。番号が二つあり、やや混乱する。筆者は〇〇号墓という集団墓分類から離れ、周溝を持つ遺構は周溝墓であり、周溝が無い墓は礫床墓、壺棺墓、土壙墓のように単独墓であると単純に戻そうと考えている。ここでは人骨の年齢と墓との関連を見るためである。礫床墓は埋葬施設の構造であり、壺棺墓、土壙墓と同じ分類である。従って周溝墓の主体部に礫床墓があると理解する。周溝墓とは周溝があつての呼称であり、周溝が無ければ礫床墓という単独墓と考える。そのため周溝を持たない礫床墓が近接して複数基あつても、単独の墓の集合ととらえる。つまり周溝墓の主体部に礫床墓があるということであり、その主体部が土壙墓であるという事と何ら変わることはない。この手法は『研究紀要』創刊号の筆者の小文にも通じている。そこで筆者は有馬遺跡5号周溝墓の主体部として礫床墓を紹介した。

有馬遺跡の礫床墓・壺棺墓のうち人骨の出土した54

体のうち性別年齢不詳が9体ある。年齢が確認された45体を対象として検討してみたい。

報告書では礫床墓すべてにsk番号が付されている。この番号は現場で着手した作業の順番であり、他に意味はない。さらに〇〇号墓を付して、sk番号と周溝墓域内等の用語が図版中にある。これらの番号・用語があるため、やや煩雑になっている。表の中で一番左の番号、新番としたものを付けてみた。新番は数量を示す意味だけである。sk番号を入れたのは従来のものを新番の右に置かないと礫床墓が特定できないためである。表のsk番号は2桁、3桁が前後するため、sk番号を若番から並べ直した。

第1表は(森本・吉田の分析を表にしたものである。)礫床と壺棺墓から検出された人骨、歯からわかった被葬者の年齢である。

有馬遺跡の被葬者の年齢区分では、老年は皆無、熟年2、成年19、若年2、小児14である。20歳以上が28人に対し未成年が16人である。森本岩太郎・吉田俊爾は熟年期と成年期の比率が7:4であり、有馬遺跡の集団は平均寿命が短い結果であるとした。(森本・吉田1990)さらに壺棺墓の被葬者は4歳以下、それ以上は礫床墓という結果を示した。しかし筆者はその傾向は認めるが、さらに個々にあたってみると、SK119壺棺墓とSK135礫床墓の被葬者はどちらも4歳前後となっている。4歳といえば幼児である。さらに63号土壙は成年男性?が確認されている。つまり、4歳以下が壺棺墓で5歳以上の未成年も含めて礫床墓に葬るとの基準らしきものを森本・吉田の分析結果から読み取れ、基準通りとは言えないものがある。63号土壙では成年男性が土壙墓に埋葬されている。(なお報告書中sk63とあるがsk63は存在しない。人骨を出土した「63号土壙」が存在しているので、誤植と考える。)

これらは例外と言えるのだろうか。また礫床墓8基から1本ずつ鉄剣が出土し、茎の部分に鹿角の痕跡、さらに鹿角製の「はばき」の一部が確認されている。礫床墓、壺棺墓に硝子小玉が副葬され、他に銅釧、鉄釧、翡翠製の勾玉、管玉、他に人形土器等が出土する。

さらにsk396、sk397は人骨の出土が無いので年齢はわからないが礫床墓を造り、sk397は礫床に接してほぼ中央に壺棺を設置し、sk396は礫床のやや南側に壺棺があるが、周囲の集石が崩れてその中に確認できる。断面図を見ると礫床が薄いが礫に接している。礫床墓の中に壺棺を置いてある様に思える。このsk396は筆者の記憶と図面から礫床墓中の壺棺墓と理解している。

有馬遺跡の壺棺墓中、5基の墓から硝子小玉が出土している(第2表)。個数は各々2個~12個出土している。有馬遺跡で壺棺墓は46基が確認され、硝子小玉が出土する率は約13%である。硝子小玉の出土率は礫床墓・壺棺墓含めた墓全体の約4%である。壺棺墓出土人

骨で年齢が分かったものは5基あった(第3表)。壺棺墓では硝子小玉以外の副葬は確認されていない。sk396・sk397は遺跡中央東部で確認され、周溝は確認されず、6基が身を寄せる様に確認された。5号周溝墓と同じように礫床墓が集中している。sk396・sk397は礫床墓と壺棺墓が合体している例である。

ここで有馬遺跡のある渋川市内の遺跡例を加えておきたい。有馬遺跡の北に接する有馬条里遺跡では礫床墓が2基確認された。人骨や副葬品は出土していない。有馬条里遺跡の北に接する中村遺跡では円形周溝墓が検出され、周溝内に7基の礫床墓が確認された。2号礫床墓と3号礫床墓から歯が出土し、分析を行った金子浩昌は2号が若い年齢、3号が成年くらいの年齢とした(金子1986)。

空沢遺跡は有馬遺跡北西約2kmに位置し、1号周溝墓主体部に礫床墓1基が確認されている。また3号壺棺墓が確認され、複棺で斜位の状態で出土した。3号壺棺墓の下には石が置かれ斜位の状態を維持している。3号墓域内から鉄剣が出土している(大塚昌彦1980)。

筆者は要旨で述べたように被葬者が墓を選ぶのではなく、埋葬する人々が墓を選ぶと考えている。有馬遺跡sk119・sk135とsk396・sk397、さらに63土壙は埋葬時に家族かコミュニティの意志が例外を作ったと考えている。その理由は後段で検討する。

設楽博己は2008年『弥生再葬墓と社会』で縄文時代末から弥生時代中期にかけての研究を行い様々な形態での再葬方法を検討した。ここではその研究を参考にし、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての群馬県内での葬送行為の有り様を検討したい。そのうえで被葬者が生前生きていたコミュニティの背景や群馬県域の社会背景を併せて考えてみたい。

### 3. 高崎市井野川流域の遺跡

新保遺跡は高崎市南東部、新保町に位置し、新保田中村前遺跡と隣接する。渋川市にある有馬遺跡とは約14km南である。新保遺跡は高崎市染谷川の端に所在し、約2km南流し川は井野川と合流する。筆者はかつて新保遺跡と新保田中村前遺跡、日高遺跡までの範囲を含め、新保地域として「市」の機能を考えた場所である<sup>(3)</sup>。

特に隣接する新保遺跡・新保田中村前遺跡は遺跡同士をつなぐ大溝が流れ、溝内から木器、土器が大量に出土した。木器は板材、未成品が多数あり、ここで木器を作っていたのである。さらに板材や鹿角も大量に出土している。「はばき」が付く鹿角製の鉄剣の柄も出土しているので新保遺跡、新保田中村前遺跡で作っていたと考えている。日高遺跡では角座骨を持つ鹿角が確認され、新保田中村前遺跡、新保遺跡でも同様で、鹿狩りが行われたことが分かる。彼らは生きた鹿を狩り、食料や鹿角を手

第1表 年齢が分かった墓

No.	SK番号	年齢	墓構造	分類	硝子小玉	管玉	釧	勾玉	鉄剣	土器
1	29	壮年	礫床墓	A	○					
2	31	女性? 壮年	礫床墓	D						
3	54	壮年	礫床墓	C	○	1				壺・甗・高坏・台付甗
4	70	1歳前後	土器棺墓							
5	83	壮年	礫床墓	A	○			1		
6	84	壮年	礫床墓	A	○			1	1	
7	85	壮年	礫床墓	A	○				1	土器片
8	109	8~12歳	礫床墓脇		○			1		
9	115	壮年	礫床墓	C	○				1	
10	116	青年	礫床墓	A	○					
11	119	4歳前後	土器棺墓							
12	127	3~4歳	土器棺墓							
13	128	壮年	礫床墓	A						
14	131	小児	礫床墓	B	○					壺・高坏
15	132	成人	礫床墓	A	○					
16	133	青年	礫床墓	A						
17	134	成人	礫床墓	A					1	
18	135	4歳前後	礫床墓	D	○					
19	142	壮年	礫床墓	A						
20	367	3歳前後	土器棺墓							
21	370	幼児	土器棺墓							
22	387	壮年	礫床墓	D	○		4			銅製釧
23	390	11歳前後	礫床墓	B	○					
24	391	壮年	礫床墓	B						
25	401	壮年	礫床墓	B						
26	402	壮年	礫床墓	B						
27	408	壮年	礫床墓	A	○					
28	410	壮年	礫床墓	B						
29	412	12歳前後	礫床墓	B						
30	423	壮年	礫床墓	B	○					土器片
31	424	壮年	礫床墓	C	○					
32	425	壮年	礫床墓	B	○	1				
33	426	熟年	礫床墓	C	○					高坏
34	428	小児	礫床墓	C						
35	429	壮年	礫床墓	B						
36	432	14歳前後	礫床墓	A						
37	434	壮年	礫床墓	A	○					
38	440	熟年	礫床墓	C	○				1	
39	442	8~9歳	礫床墓	B						
40	445	壮年	礫床墓	B						
41	446	壮年	礫床墓	A						
42	448	壮年	礫床墓	C						
43	452	小児	礫床墓	E	○					
44	396		礫床墓	A						礫床上に壺棺墓
45	397		礫床墓	B						〃
46	63号土塚	男性? 壮年	土塚墓							

第2表 有馬遺跡礫床墓

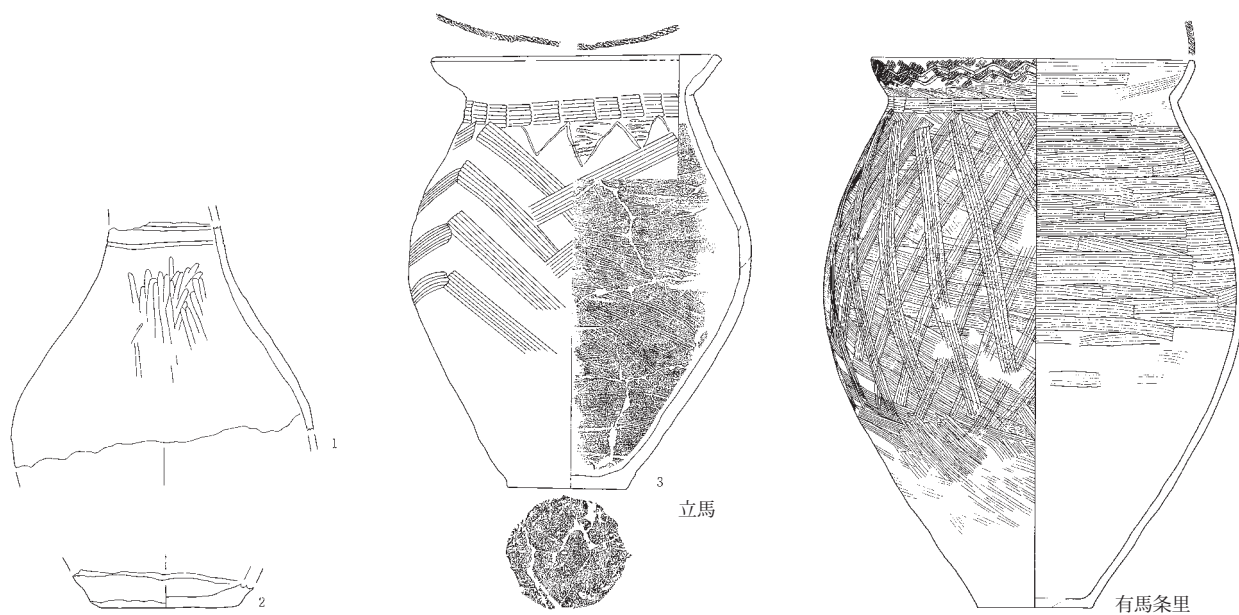
No.	SK番号	年齢	埋葬施設	副葬品
1	109	8～12歳	礫床墓	翡翠製勾玉1・硝子小玉6
2	135	4歳前後	〃	硝子小玉4
3	390	11歳前後	〃	硝子小玉5(7号墓周溝内)
4	412	12歳前後	〃	
5	428	小児	〃	硝子小玉1
6	432	14歳前後	〃	硝子小玉5(7号墓周溝内)
7	442	8～9歳	〃	

第3表 有馬遺跡壺棺墓(年齢が分かったもの)

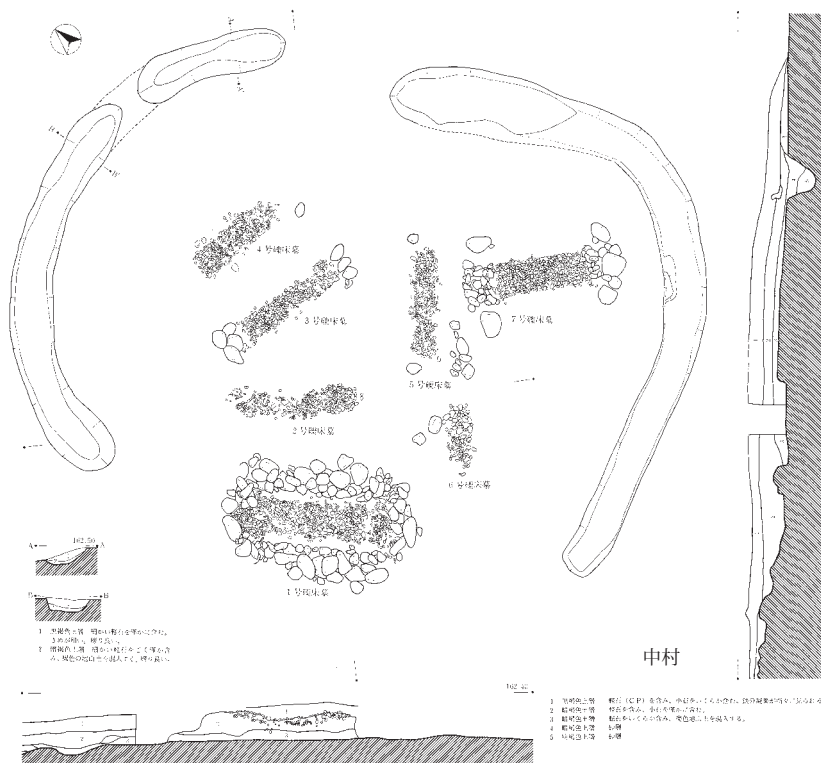
No.	SK番号	年齢	埋葬形態	状態
1	70	1歳前後	斜位	複棺
2	119	4歳前後	斜位	不明
3	127	3～4歳	立位	不明
4	367	3歳前後	立位	複棺
5	370	幼児	斜位	不明

第4表 有馬遺跡硝子玉出土壺棺墓

No.	SK番号	埋葬形態	硝子小玉	状態
1	72	壺棺墓	6	複棺・立位
2	123	〃	3	単棺・横位
3	369	〃	12	複棺・立位
4	371	〃	4	単棺・横位
5	404	〃	2	不明・横位



第1図 弥生中期甕棺墓



第2図 礫床墓を主体部を持つ周溝墓



第5表 表新保遺跡C区

No.	遺構名	年齢	埋葬施設	備考
1	7号周溝墓	胎児	第1主体部壺棺墓	複棺
2		壮年	第2主体部土壙墓	鉄剣
3	9号周溝墓	壮年	第1主体部壺棺	複棺・土製勾玉・硝子小玉
4		壮年	第2主体部土壙墓	
5	11号周溝墓	4～5歳	第1主体部土壙墓	硝子小玉
			第2主体部壺棺墓	
			第3主体部土壙墓	
		壮年	第4主体部土壙墓	
6	15号周溝墓	青～壮年	主体部土壙墓	硝子小玉・白玉(主体部周辺)

第6表 新保遺跡D区

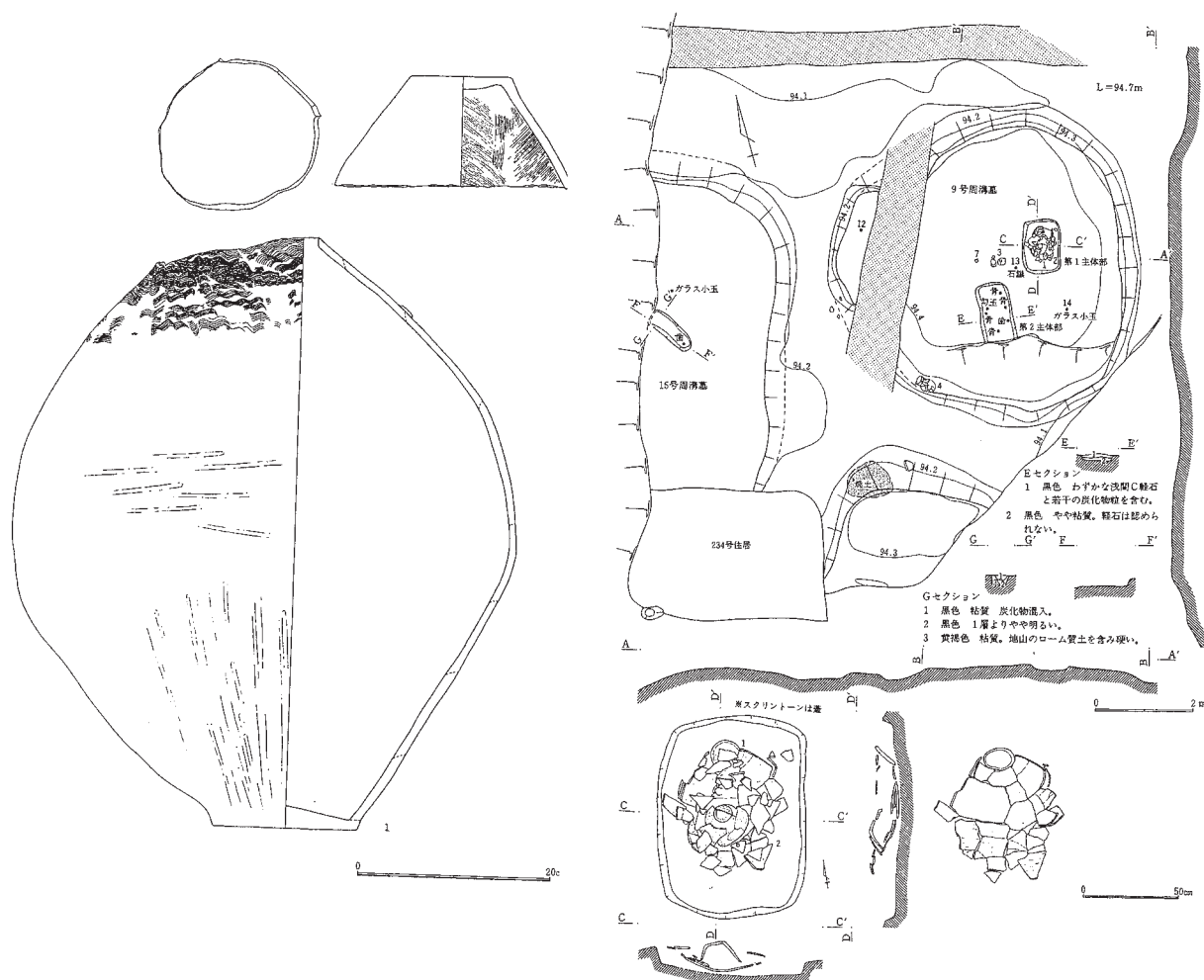
No.	遺構名	状態	埋葬施設	備考
1	D1	単複不明	第1主体部壺棺	
		〃	第2主体部壺棺	
2	D2		主体部壺棺	壺を支える石が棺の下から出土・単複不明
3	D5	単複不明	第1主体部壺棺	
		単複不明	第2主体部壺棺	
		複棺・横位	第3主体部壺棺	

第7表 新保田中村前遺跡

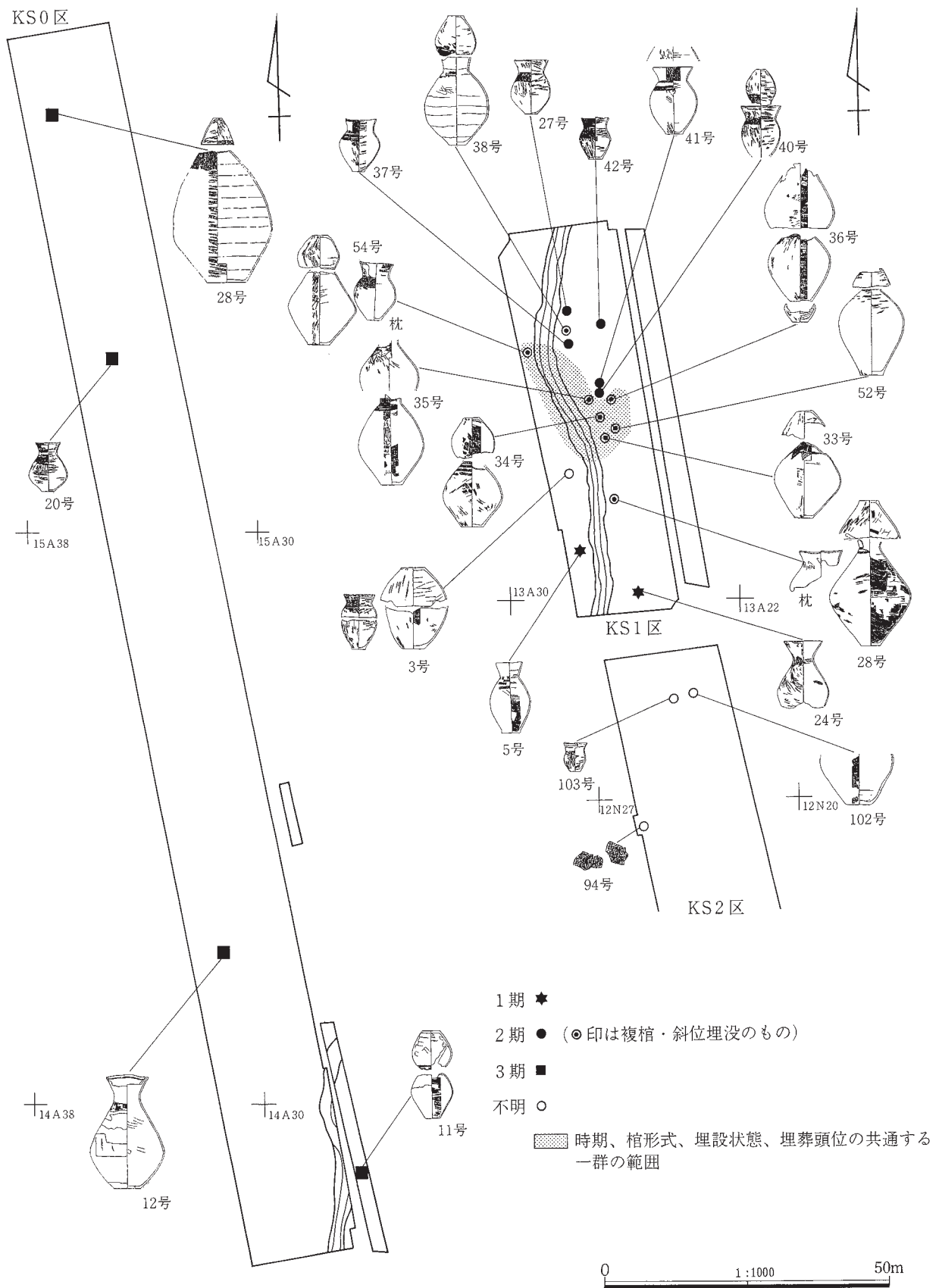
No.	墓名	年齢・性別	埋葬施設	備考
1	6号墓	幼年	土壙墓	3体以上・硝子玉
2		若い壮年		2体の壮年のうち1体は女性
3		若い壮年		
4	7号墓		単独壺棺墓	単棺
5	9号墓		土壙墓	硝子玉
6	1号周溝墓	性別年齢不詳		
7	3号周溝墓	壮年	第1主体部土壙墓	火葬墓壙
8			第2主体部土壙墓	〃
9	5号周溝墓	壮年男性	第1主体部土壙墓	火葬墓壙・2体 近い血縁関係 火葬墓壙・3体
10		年齢性別不詳		
11		壮年男性		
12		〃		
13		壮年女性	第2主体部土壙墓	
	人骨無	第3主体部壺棺墓		
14	礫床墓	人骨無	木棺墓	鉄片
15	166竪穴建物	4歳		7・9号墓と重複
16	159竪穴建物	壮年		歯が出土



写真1 有馬遺跡SK396右端・SK397左から3基目



第3図 新保遺跡9号周溝墓・第1壺棺主体部



第4図 小八木志志貝戸遺跡壺棺墓群分布図

していた。<sup>(4)</sup>

筆者は新保遺跡、新保田中村前遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期にかけて継続した「市」の中心と考えている。「市」の主体は新保遺跡、新保田中村前遺跡である。ここで鹿角製の柄が確認され、成品、未成品の柄、鹿角素材が多数出土しているのは木器同様である。新保遺跡では周溝墓が確認されている。周溝は楕円形や円形を呈している。周溝墓の主体部には壺棺が使われるものがあり、そのうちの4つの周溝墓から人骨が確認された(第5表)。

7号周溝墓は主体部が2基あり、第1主体部壺棺墓から胎児、第2主体部は土壙墓で成人骨が確認されている。副葬品に第2主体部より「剣と思われる鉄片が1点出土」(新保遺跡報告書)の記載がある。

C区9号周溝墓の第1主体部壺棺墓から成年、第2主体部土壙墓に成年骨が出土している。第1主体部から土製勾玉、硝子小玉が出土している。

11号周溝墓の第1主体部土壙墓、被葬者は4～5歳である。第1主体部から硝子小玉が出土している。第2主体部土壙墓、被葬者は成年である。2・3号主体部からは人骨は確認されていないが、第2主体部は壺棺墓である。

15号周溝墓の主体部は土壙墓で若～成年の骨が硝子小玉、白玉と共伴出土している。

新保遺跡の周溝墓主体部の形態は壺棺墓、土壙墓に分けることができる。7号周溝墓では胎児が壺棺墓、成年が土壙墓である。9号周溝墓は第1主体部が壺棺墓で第2主体部が土壙墓である。人骨は2体とも成年である。台1主体部の壺棺墓の頸部を打ち欠いた幅は約20cmである。成人男性を入れる幅は無く、周溝墓の主体部は再葬の伝統をもつ再葬墓の可能性がある。

9号周溝墓第1主体部は成年の壺棺墓である。子供は壺棺墓で大人が土壙墓という決まった形態があるのではなくそこは自由である。ただ共通点は円形・楕円形の周溝が巡ることがあげられる。新保遺跡では7体の人骨が確認され、5体が成年である。成年5体のうち2体は壺棺墓である。

D区では人骨は出土していないが主体部が確認され、D1が2基、D2が1基、D5が3基あり、6基とも主体部はすべて壺棺墓である。

C地区9号、11号、12号、15号周溝墓の墓域一面に猪や鹿の獣骨片が散布してあった。新保遺跡7号周溝墓第2主体部土壙墓は成人骨が出土し、鉄剣と思われる鉄片が出土している。他には9号周溝墓第1主体部壺棺墓は成人骨が出土し、土製の勾玉、硝子小玉が出土している。15号周溝墓の主体部土壙墓から若～成人の骨が出土し、硝子小玉が出土している。他に新保遺跡D区では13基の周溝墓が確認されたが、すべて人骨は検出され

なかった。D1号周溝墓第1・2主体部、D2号周溝墓の主体部、D5号周溝墓の第1～3号主体部が壺棺墓である。D2号周溝墓の主体部壺棺墓の下には棺を支える様に土器片と石が敷いてある。D5号周溝墓の周溝内には3基の壺棺墓が埋設されている。副葬品は確認されていない。

新保遺跡に隣接する新保田中村前遺跡では、4基の墓から人骨が出土し、1号周溝墓人骨は年齢不詳であった(第6表)。人骨分析を行ったのは佐倉朔である(佐倉朔1993『新保田中村前遺跡』)。6号土壙墓は166号竪穴建物と重複し、墓壙が後出する。6号墓出土の人骨は3体以上で若い成年2体と4歳という所見が出ている。さらにここからは猪の歯、硝子小玉35点出土している。

9号墓壙は6号墓壙と同じく166号竪穴建物と重複し、墓壙が新しい。硝子小玉が出土している。

他に単独の壺棺墓が7号墓壙として存在する。礫床墓が1基確認され、鉄剣との確認はできなかったが、鉄片が出土した。周溝墓出土人骨は3号周溝墓第1主体部土壙墓で成年男性の焼人骨が出土した。

5号周溝墓第1・2主体部から焼人骨が検出されている。さらに人骨は確認できなかったが礫床墓が1基確認された。猪や鹿の焼骨が墓付近だけでなく、竪穴建物内、土坑内から出土している。新保田中村前遺跡は新保遺跡同様、弥生時代中期から古墳時代前期まで継続している。

新保田中村前遺跡159号竪穴建物内で人歯が出土している。年齢は成年である。墓との確証は言えないが、人歯出土が確認されている。

日高遺跡では方形周溝墓3基、壺棺墓1基が確認された。人骨の出土は無いが、報告書では壺棺墓は胎児、幼児墓としている。

日高遺跡では木製農具が多数確認されている。新保遺跡で木器を分析した山田昌久は新保遺跡・新保田中村前遺跡・日高遺跡の木器も構成は東海地方、近畿や北陸系と近いと指摘している(山田昌久1982・1986)。

遺跡内同時期の外来系土器が示す共伴関係も同じである。このことから新保遺跡・新保田中村前遺跡・日高遺跡は同じ農法であり、同じ農具を持って、同じ土器構成をもっている。

複数他地域系の農具は、群馬に出土する外来系土器ともおなじ、科野地域との交流の中で得たものと考えられる。新保遺跡や日高遺跡を含む井野川流域では同一の農具を用い、狩りをし、同じ土器を持つ社会を構成していたものと考えられる。3遺跡が存在した時期は弥生時代中期から古墳時代前期にかけて様々な地域の情報や文化を取り入れていたことは明らかである。

高崎市内では高崎競馬場遺跡で弥生時代中期の礫床墓が確認される。後期には八幡遺跡で方形周溝墓1基、土坑墓7基が知られ、7号土壙墓では礫が敷いてあり、墓

から鉄剣が出土している。さらに1・2・3号土坑墓覆土中には小礫が確認されているが礫床面は確認されていない。

安中市長谷津遺跡では2基の方形周溝墓が確認されている。1号方形周溝墓の周溝内より4基の主体部が検出され、1基が土壙墓、3基は礫床墓であることが確認された。壺棺墓は3基出土した。1号周溝墓の溝は方形になり、出土遺物は土師器で、古墳時代前期と考えられる。人骨は出土していない。

#### 4. 小八木志志貝戸遺跡

壺棺墓群が確認された小八木志志貝戸遺跡を見てみよう。第8表は報告書中の表を参考にした。小八木志志貝戸遺跡は高崎市北部榛名山から東南の山麓に広がる相馬ヶ原扇状地の先端部に位置する。新保遺跡・新保田中村前遺跡の北西約3km、日高遺跡から北西2km弱である。周辺には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡群が広がる井野川流域である。地形的にも相馬ヶ原扇状地内で新保地域も含めた関東平野北西部にあたる。多くの遺跡が分布する可耕地が広い地域と考えることができる。

遺跡周辺は扇状地から沖積地への変換点にあっている。遺跡の西を天王川が南流し、遺跡の南で井野川と合流する。小八木志志貝戸遺跡は井野川流域に所在している。相馬ヶ原端部以南に広がる沖積地上には弥生時代中期から後期にかけての遺跡が多数認められる。特に後期になると遺跡は爆発的に拡大している。井野川流域は新保遺跡、新保田中村前遺跡、日高遺跡等々も含めた遺跡群が広い範囲に存在し、弥生時代中期後葉から古墳時代前期に継続している。

小八木志志貝戸遺跡で弥生時代の遺構は竪穴建物13棟、土器棺墓群が24基確認されたが、人骨は出土していない。小八木志志貝戸遺跡の墓域の特徴は居住域と墓域が完全に隔離されていることである。このような分離は新保遺跡のD区周溝墓群の有り様と似ている。新保遺跡9号周溝墓と同じ土製の勾玉が確認されている。鹿や猪の焼かれた骨片が土器棺墓の集中する周辺に確認されている。壺棺墓群が形成された時期は弥生時代後期に集中している。その中で単独の土器を使用する壺棺墓を単棺、複数土器を併せたものを複棺とし、各々単棺7基、複棺12基、不明5基である。遺跡内の土器集中部や墓周辺には猪や鹿の骨が砕かれて採取された。

#### 5. 各遺跡と地域の関係

群馬県内では周溝墓が、弥生時代中期後葉に出現し、古墳時代前期になると方形周溝墓は、当時では一般的な墓と理解できる。

県内の礫床墓は有馬遺跡を中心とした、渋川周辺で多く

確認されている。有馬遺跡では墓域内5号周溝墓主体部の礫床墓の中で壺棺墓が確認されている。また群在する礫床墓の中に壺棺墓が検出される。礫床墓が確認される空沢遺跡、中村遺跡、有馬条里遺跡のうち、中村遺跡では「2号土坑」の項目であるが、樽式土器が埋まった状態で出土している。筆者は壺棺墓と考えてもいいと思う。

これは高さ39cmの壺、また3号土坑からは高さ残存で60cmの、頸部上を欠いた壺が出土し、これも壺棺墓である。頸部下が60cmであれば成年も入れるかもしれない。この大きさと乳幼児の棺には使わないであろう。中村遺跡の礫床墓は円形周溝墓の主体部として確認され、周溝内に7基の礫床墓が出土した。7基の礫床墓のうち2号礫床墓と3号礫床墓から歯が出土している。金子浩昌は歯の分析から2号礫床墓は若い年齢、3号礫床墓は成年としている(前掲金子1986)。空沢遺跡3号壺棺墓は複棺で斜位の状態で甕の下には石を敷いている。小八木志志貝戸遺跡のKS1-28・54号、同じ井野川流域の新保遺跡D2号周溝墓主体部の、壺棺下に敷かれた石は小八木志志貝戸遺跡壺棺墓の下に敷かれた土器片も意図は同じと考えられる。同じ井野川流域と渋川市空沢遺跡の壺の下に石や土器片で壺棺を安定させている。

このように渋川地区では礫床墓・壺棺墓が多数認められ、弥生時代中期後葉の壺棺墓が有馬条里遺跡、後期の壺棺墓が空沢遺跡と有馬遺跡で確認され、空沢遺跡の壺棺墓は高崎市小八木志志貝戸遺跡の棺の下に土器片を敷いており、石を敷く形態との共通性を示している。

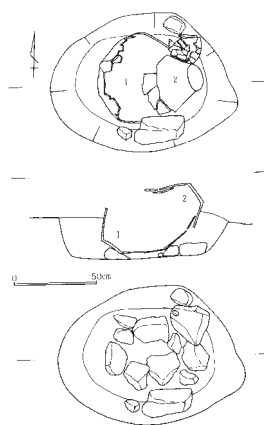
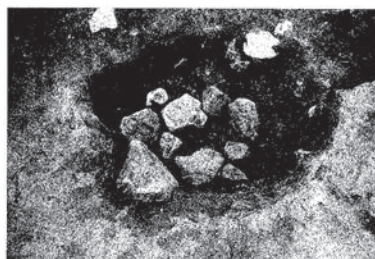
高崎市では弥生時代中期後葉の礫床墓が高崎競馬場遺跡、後期の礫床墓は新保田中村前遺跡、日高遺跡、空沢遺跡、八幡遺跡で1基ずつ、八幡遺跡7号礫床墓、空沢遺跡3号墓からは鉄剣が出土し、八幡遺跡1・2・3号土坑覆土から小礫が出土している。少林山台遺跡では9基の礫床墓が確認され、長谷津遺跡1号方形周溝墓の周溝内に礫床墓が3基、1基の土壙墓が確認されている。新保遺跡・新保田中村前遺跡の壺棺墓は周溝墓では主体部に採用されるが、主体部に土壙墓を採用する周溝墓もあり、土壙墓と壺棺墓が周溝内に共存する周溝墓も確認されている。

小八木志志貝戸遺跡の墓域はすべて壺棺墓だけで24基が検出されている。日高遺跡では礫床墓と周溝墓、壺棺墓が確認されている。このような墓制の在り方から大きな枠ではこの3種類の埋葬方法が確認してきた。

ここで墓の形状、主体部の種類が確認された。弥生時代中期後葉の有馬条里遺跡で甕棺墓が確認された。甕棺墓は吾妻郡長野原町立馬1遺跡でも確認され、甕の時期も中期栗林式土器であり、2つの甕棺は再葬墓の可能性もある。両遺跡の甕棺墓から人骨は出土していない。新田中村前遺跡周溝墓内土壙墓で焼骨が出土したことがわかっており、群馬県域内の弥生時代後期の成人を壺棺墓

第8表 小八木志志貝戸遺跡群1

No.	遺構番号	棺の構造	状態	備考
1	0-11	複棺	立位	
2	0-12	単棺	不明	
3	0-20	単棺	立位	
4	0-28	複棺	不明	
5	1-03(1)	複棺	不明	
6	1-03(2)	単棺	不明	
7	1-05	単棺	不明	
8	1-24	単棺	斜位	
9	1-27	不明	横位	
10	1-28	複棺	斜位	壺棺下に土器を敷いてある
11	1-33	複棺	斜位	
12	1-34	複棺	斜位	
13	1-35	複棺	逆斜位	
14	1-36	複棺	斜位	
15	1-37	単棺	横位	
16	1-38	複棺	横位	
17	1-40	複棺	斜位	
18	1-41	不明	斜位	
19	1-42	単棺	横位	
20	1-52	複棺	横位	
21	1-54	複棺	斜位	壺棺下に土器片を敷いている
22	2-94	不明	不明	
23	2-102	不明	立位	
24	2-103	不明	不明	



第5図 空沢遺跡3号壺棺墓図・写真

墓に葬る例は、弥生時代中期の再葬の伝統を引いている可能性も指摘できる。また新保遺跡周溝墓では成年の墓に壺棺墓を埋地している。主体部にある壺棺には頸部を打ち欠いているが、接合した壺の直径が20cmで成年を入れるには無理がある。これも再葬の儀礼の伝統が残っていると考えられる。高崎競馬場では弥生時代中期の礫床墓が確認され、中期に出現した礫床墓は、後期に継続することが分かる。中村遺跡円形周溝墓からはパレス壺が出土し、長谷津遺跡の土師器が出土した1号方形周溝墓と合わせ古墳時代前期まで継続している。礫床墓については科野の松原遺跡、柳沢遺跡、木棺墓は根塚遺跡、北西の久保遺跡等で確認でき、土器の共通性と合わせ、墓制も極めて密接な交流を指摘することができる。

壺棺墓は中期後葉有馬条里遺跡に確認され、再葬墓の伝統を引くものと考えられる。周溝墓は高崎城三の丸遺跡で、弥生時代中期後葉に四隅切れ方形周溝墓が確認され、同じく中期からの伝統を引く形態と言える。弥生時代の墓制は中期から継続して3つの墓が継続・並行することが理解できる。従って群馬県域内ではこの3種の中から各地域や各集団で選択していることが見て取れるのである。

## 6. 墓制からみた群馬県域の関係

群馬県域に広がる広い範囲に認められる墓制の有り様は、なぜ生まれるのかを考えてみたい。群馬県域の中では弥生時代中期後葉には科野との共通点を指摘すれば、同じ栗林式土器が出土する、更に新保遺跡や新保田中村前遺跡では、埼玉の北島式系の破片も出土し、南東北系の土器片も出土する。

吾妻郡長野原町にある立馬Ⅰ遺跡から弥生時代中期後葉の甕棺墓が出土し、甕の時期は有馬条里遺跡と同じ栗林期の墓である。(第1図) 遺跡は吾妻川の端にあり、川つたいに西に行けば科野、東に行けば渋川市に至る。立馬遺跡の吾妻川を挟んだ対岸にある川原湯勝沼遺跡では氷式土器並行の甕棺墓が出土し、弥生時代前期まで遡ることができる。科野とは縄文晩期からのつながりがあることを想起させる。渋川市内には押手遺跡があり、弥生時代前・中・後期の遺物が出土している。吾妻川ルートで科野との関係も遡ることができる。

高崎市地域と渋川市地域は礫床墓を始め壺棺墓、周溝墓が検出され、同じ土器を持ち、同じ墓制を持つ文化圏と言ってもよい。空沢遺跡壺棺墓下に敷かれた石、小八木志志貝戸遺跡遺跡の壺棺墓下に敷かれた土器片、新保遺跡D2号周溝墓主体部の壺棺墓下に敷かれた石と土器片は皆同じ用途に使われたものである。同じ意図をもって敷かれていると筆者は考える。さらに猪や鹿の骨片を墓周辺に蒔くことが同じ葬送の儀式に行われていたことも分かる。

また弥生時代中期に井野川流域に進出した遺跡は後期になるとさらに増え、平野部は耕地化していくことが理解できる。同じく群馬県域の弥生時代遺跡群は古墳時代前期に継続して発展している。そして古墳時代を迎える段階では外来系土器が出土する事実がある。さらに土師器は樽式土器や無文化する樽式土器と共伴出土する。

有馬遺跡では礫床墓、周溝を持つ礫床墓内の壺棺墓が存在し、成年被葬者の63号土壙墓も確認されている。新保遺跡では周溝墓の主体部に土壙墓・壺棺墓が存在する。

有馬遺跡では周溝を持つ墓内の礫床墓の中に壺棺墓があり、場所を共有することから主体部の選択は遺跡により異なり、強い規制は無く、埋葬者が選択することができたと思う。小八木志志貝戸遺跡では墓域全体は壺棺墓のみであり、小八木志志貝戸遺跡と新保田中村前遺跡では周溝墓域付近に猪、鹿の骨が蒔かれている。一方小八木志志貝戸遺跡では壺棺墓だけである。さらに新保遺跡の7号周溝墓第1主体部に設けられた壺棺墓には子供ではなく成人の男性骨が確認されている。有馬遺跡では壺棺墓は、ほとんどが子供である。有馬条里遺跡の壺棺墓は中期栗林式土器であった。つまり墓を造り埋葬する時には葬り方は様々存在し、その中から自由に選択したと筆者は考えている。

有馬条里遺跡の甕棺墓は中期の再葬の葬方の伝統を持つものかどうかの証明は骨が検出されていないので判断できない。しかし、有馬遺跡では礫床墓の被葬者は5～6歳以上が主体で、壺棺墓の大半の被葬者は胎児～小児という傾向はある。しかし、礫床墓を細かく観察するとsk119年齢が4歳前後、sk135は4歳前後であるが、sk119は土器棺墓、sk135が礫床墓に埋葬されている。またsk428は小児骨で礫床墓に埋葬され、sk396・sk397は人骨の出土は無いが、礫床墓床上に壺棺墓が埋置されている。前段で指摘したが、有馬遺跡63号土壙墓と新保田中村前遺跡159号竪穴建物内から出土した成年の歯は男性である。この2基は特に例外であり、何か集団内での立場を示すものだろうか。新保遺跡7号周溝墓の主体部は2基で、土壙墓と壺棺墓である。第1壺棺墓の人骨は胎児が一体であるが第2主体部土壙墓に人骨は成人人骨である。新保田中村前遺跡では6号土壙墓で3体の骨が出土し、3・5号周溝墓主体部土壙墓中から焼骨が出土している。さらに5号周溝墓第1主体部土壙墓中からは2体、第2主体部土壙墓中からは3体が出土している。

小八木志志貝戸遺跡は骨の出土が無いが、検出された壺棺すべてが子供用という考えは有馬遺跡、新保遺跡、新保田中村前遺跡の傾向からしてそうではないことが分かった<sup>(5)</sup>。新保田中村前遺跡の人骨の分析を行った佐倉朔は、5号周溝墓第2主体部の2体は「・・・下左第1白

歯は2個体存在するので、これらの歯が2個体分以上に属することが分かる。1個はやや大きく、咬耗は2度に達している。恐らく壮年で、男性のものである可能性がある。他の1個は中等の大きさで、咬耗は弱い。これら2個の大白歯はこのように個体的な差を示しているが、また近遠心径に比して頬舌径が比較的大きいことや、咬合面の咬頭と溝の配列においてかなり強い類似性がある。この所見は両個体の近い血縁関係を推測させるものである。」と指摘している。(佐倉朔1993)新保田中村前遺跡の埋葬は複数人があり、新保田中村前遺跡は同じ周溝墓の主体部が複数あるのは新保遺跡と共通するが、主体部内の焼骨、同じ墓に複数人の人骨があるなどの違いを見せる。さらに新保田中村前遺跡では礫床墓が1基確認されたことが特筆されよう。複数体の同一埋葬は佐倉の指摘に従えば5号周溝墓第1主体部の2体は近親者である。この結果は同一周溝内の埋葬は有馬遺跡5号周溝墓では3体が中央にあり、その両脇に小形の礫床墓がある。ここまでの検討で、壺棺墓の被葬者が乳児幼児に限られるという事実はないことが解った。さらに新保遺跡周溝墓主体部の壺内から成人骨が出土したが、復元された壺の割れ口は径20cmしかなく、その口から成人の体は入るのは難しい。このことから弥生時代後期の周溝墓主体部で再葬の伝統を持つコミュニティ集落が存在した可能性が指摘できる。新保田中村前遺跡では一つの周溝内に複数の壺棺・土壙墓を埋葬する例や、一つの土壙墓内に複数人の骨を埋葬するなどがある。

新保田中村前遺跡の周溝墓内と小八木志志貝戸遺跡の猪や鹿の骨を散布例が分かった。茨城県小野天神前遺跡では再葬墓の壺の中に焼獣骨を入れた例がある。

有馬遺跡と新保遺跡・新保田中村前遺跡等の関係だけではなく、様々な葬送儀礼を選びだした多くのコミュニティ同士が様々な形で通婚を含み徐々に新たな大きいコミュニティとして出来上がっていったと考えられる。

有馬遺跡報告書で表した〇〇号墓は墓域が近接し、その中に壺棺墓もあるので、家族墓の一種と考えられる。有馬遺跡では礫床墓と壺棺墓が礫床、同じ周溝内に確認することができる。また有馬遺跡の成年が被葬された63号土壙墓と新保田中村前遺跡竪穴建物覆土出土の成人の人歯の存在は、自由な選択というより異例な出土と考えられる。『魏志倭人伝』には倭国は身分の差があることが記載されている。奴婢の存在が明記されている。有馬遺跡63号土壙出土人骨と新保田中村前遺跡159号竪穴建物の歯は奴婢や生口であろうか。群馬県内全体は非常に交流が長く続いた社会で、戦闘は生じないが生まれたコミュニティから外れた場合の扱いとも想像できる。有馬遺跡内には8基の土壙が確認され、人骨が出土したのは63号土壙1基のみであるが、礫床墓や周溝を持

たない土壙に葬られる人が少数いたことと考えることができるかもしれない。さらに新保遺跡59号竪穴建物出土の人歯は墓ではなく竪穴建物内覆土で出土している。

筆者は弥生時代の群馬県内では、かなり密接に集落同士の交流が存在していると考えている。そのため、土器の土師器化の過程や遠距離地の土で作られた土器の供給の速さから考えて、交流網は極めて完備されていたと考える<sup>(6)</sup>。井野川流域ではまさに周辺の遺跡群の強いコミュニティ間の交流の存在がその背景にあったと考えることができる。有馬遺跡出土の鉄剣や、弥生墓から、硝子小玉の出土から交流があったことが分かる、という程度ではなく鉄剣の流通や通婚圏はかなり広い範囲を覆っていたことと筆者は考えている。

これは同じものが異なったコミュニティの墓にあるという事だけではなく、各々のコミュニティの出自を表していると考えたい。

古墳時代に入ると外来土器が出土し、科野との関係も重要である。複数他地域の土器や土師器平底甕が群馬県域の土で作られ、樽式土器の文様が消えていくのはそういった地域同士の紐帯が深くなってきたからと筆者は考える。その中であって「市」が大きな役割を果たしていたのである。

## 7. 遺物からの検討

有馬遺跡の礫床墓から1本ずつ8本の鉄剣が出土した。5号周溝墓からはsk84・85礫床墓から並んで鉄剣が検出された。両礫床墓から多量の硝子小玉が出土している。鉄剣と硝子小玉は共存して出土することが分かる。筆者は発掘時、鉄剣が男性で硝子小玉が女性の副葬品と単純に考えたが、発掘が進むにつれ、それが違う事が分かった。sk84・85がまさに鉄剣と硝子小玉が大量に出土する墓である。sk84からは翡翠製の勾玉も出土した。両礫床墓の被葬者は成人であった。基本的に鉄剣が出土する礫床墓sk84・85とsk115・134・440で、成年4基、熟年1基の5基である。鉄剣が出土したsk41・111・140は残念ながら人骨は出土しなかった。鉄剣は空沢遺跡3号墓、同じく渋川市内にある田尻遺跡Y-1号竪穴建物内で出土するなど渋川周辺の出土例が知られる。他には渋川市の北に接する沼田市にある石墨遺跡円形周溝墓主体部土壙墓から出土している。

有馬遺跡出土鉄剣を分析した清水欣吾は金属分析の結果から、鉄鉱石ではなく、砂鉄が原料と推定した。「当時、日本ではこのような進んだ精錬があったとは考えられないので、大陸から舶載されたものと推察する。」清水はさらに鉄内容物から島根県内の古墳出土鉄剣・刀剣等の平均組成とおおむね一致するとし、「かなり高い還元度の高い精錬によってつくられた鉄素材を用いて製作されたものと推定され、恐らく、大陸から舶載された鉄素



材を用いたか、鉄剣として製品が舶載されたものであろう。」とした(清水欣吾1990)。近年では村上恭通が日本での弥生時代中期の鍛冶工房を西日本中心としたものとされている。関東地方に鍛冶工房ができるのは古墳時代初頭としている。鉄の依存度は半島南部が高いとしている。有馬遺跡には日本海側のルートを抜け土器と共に移動してきたと考える(村上恭通2020)。

筆者は鉄が来た道は北九州から山口県響灘綾羅木遺跡・鳥取県妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡、石川県八日市地方遺跡、日本海ルートを抜け新潟裏山遺跡で南下し、長野を抜け群馬に来たものとする<sup>(7)</sup>。筆者は近江の伊勢遺跡、下之郷遺跡、特に舟運を想定された下長遺跡等の存在は琵琶湖から唯一流れ出る瀬田川から宇治川、淀川を通じて日本海と奈良、瀬戸内を繋ぐための存在として大きかったと考えている。群馬県域でも筆者は弥生時代中期～後期にかけて、群馬県域と科野との密なる交流があったことと理解している。それは土器の面からみると弥生時代中期後葉は同じ栗林式土器を持ち後期になると群馬では樽式土器、科野では箱清水式土器という共通性の強い土器を持つことである。また土師器化する段階では東海系、北陸系、畿内系、の土器を共有している。さらに藤根久・今村美智子が指摘した、群馬県の土で焼いたS字状口縁台付甕や土師器平底甕の存在である。彼らに従えば新保地域の「市」が極めて潤滑に群馬県域産の土で焼いたS字状口縁台付甕が広い範囲にS字状口縁台付甕・土師器を供給していたことが理解できる。また群馬の土でできたS字状口縁台付甕が古墳時代初頭期に素早く北毛や東毛地域まで広まっていた事実がある<sup>(前掲6)</sup>。

伊勢崎市に波志江中宿遺跡がある。波志江中宿遺跡は古墳時代初頭の粘土採掘坑が確認された。波志江中宿遺跡から約1、2km南西に波志江中野面遺跡がある。藤根・今村は波志江中野面遺跡A区12号住居跡から出土した3個体のS字状口縁台付甕の胎土を分析し、1個体が波志江中宿の材料、他の2個体が藤岡・富岡地域の土としている。A区17号住居跡では5個体のS字状口縁台付甕を分析し、藤岡・富岡地域が3個体、2個体は波志江中宿の胎土としている。さらにA区7号方形周溝墓出土の北陸系千種甕、南関東系単口縁台付甕の胎土を分析し、両個体が在地の胎土であるとした。7号方形周溝墓からは他に在地の土で焼かれたS字状口縁台付甕が出土した。藤根・今村は7号方形周溝墓出土の北陸系千種甕・南関東系単口縁台付甕が群馬在地の胎土とした。さらに同7号方形周溝墓の共伴遺物の中に、無文化した樽式土器壺2個体が出土している。無文の樽式土器2個体は、ともに外面は頸部・体部底部に至るまで磨き、口縁内面は横の磨きが施され、弥生土器の技法を用いている。南関東系単口縁台付甕と北陸系千種甕は、内外面ともに刷毛工具で仕上げられている。波志江中野面遺跡竪穴建

物では藤岡・富岡の土で焼かれたS字状口縁台付甕と波志江中宿の土で焼かれたS字状口縁台付甕が伊勢崎の集落の中で共伴出土している。A区7号方形周溝墓では単口縁台付甕・北陸系千種甕が無文化した樽式土器と共伴し、胎土分析をしていないがS字状口縁台付甕も共伴している。藤岡・富岡の土で焼かれた土器が伊勢崎にあり、樽式土器と共伴することの意味は「市」の供給網の広さと外来土器の取り込みの速さを示していることの証明である。筆者はすべての土器が新保地域経由でもないと考えている。各地域に中継地点の存在もあると考えている。

しかし、鉄製品と鉄剣が作られていた遺跡は新保遺跡・新保田中村前遺跡であり、現在のところ、「市」と考えられる遺跡である。前橋市横手町に横手早稲田遺跡がある。この遺跡から出土したS字状口縁台付甕は胎土に片岩が目視確認され、これは藤岡・富岡の土の特徴である。横手早稲田遺跡は新保地域から南東約4～5kmにある。波志江町と新保町は約15km直接歩いた可能性があるが、筆者は中継地点の存在をも想定している点である。この可能性を筆者は以前より検討してきた<sup>(8)</sup>。弥生時代から古墳時代にかけて、筆者は群馬県域内ではコミュニティ同士つながりは強かったと考えている。そして弥生時代から群馬県域は北九州や山陰地方のような戦争は無く、コミュニティ間の交流も通婚圏の存在を含め、極めて密接な交流を維持していた社会であった、と筆者は考えている。

それを物語るのは「市」の供給の広さと速さである。「市」はその中において需要と供給を迅速にすることに役立っていたと考える。このような社会の構造は群馬県には大きな社会的な対立がなく、地域内で社会が醸成された結果ではないかと理解している。彼らは自分たちの地域で弥生時代前期より(もっと以前から)交流を維持していた社会であったと筆者は考えている。大きな変換は弥生時代中期後葉の農耕社会への踏み出しである。弥生社会は中期後葉に一気に平野部へ移動し、用水路を集団で造り始めた。それは小コミュニティが大きな社会へと集結変換した時である。

群馬県域内の遺跡ではコミュニティ同士のつながりは、武器の供給や木弓の流通と共に、葬送に大きな統制が無い。筆者はコミュニティ間の強いつながりは、お互いのコミュニティを認め合っているように思える。そして葬法の細かい異なりは背景にあるコミュニティ・集団の違いであると考えられる。有馬遺跡で80基を超す礫床墓が高崎市で1遺跡に1基～数基ある。八幡遺跡では土壙墓7基のうち1基が礫床墓、さらに新保田中村前遺跡では、礫床墓が1基、さらに同一墓壙に複数の人が葬られる。佐倉は新保田中村前遺跡5号周溝墓第1主体部の2体が歯の並びや顎の構造から近親者と考えられるという(前掲佐倉1993)。

さらに新保田中村前遺跡では焼骨の習慣を持っている。小八木志志貝戸遺跡と新保田中村前遺跡では鹿と猪の骨を砕き墓域に蒔いている。有馬遺跡ではそういう習慣が見えなかった。このような小さな異なりを統制せずにそれぞれの習慣を維持している。

筆者は各々のコミュニティの出自の違いではないかとみる。そのため特に異なった習慣も問題にしなかったと理解している。

弥生時代後期から古墳時代にかけて群馬県域には土器に地方色はかなりあるが古墳時代初頭期には藤岡、高崎、伊勢崎の土で焼かれたS字状口縁台付甕や土器が相互に移動する流通網があったと理解する。北毛山麓地では各々土地に適した農耕社会を構成している。北毛の沼田市、中之条町等に拠点的な社会が生まれている。中之条町駅南遺跡では鉄剣が出土し、科野との吾妻川を媒介とした交流のルートの一環であった可能性が強い。南東平野部東毛地域にも新たな集落が展開したことが古墳時代前期の集落立地から理解できる。一方井野川流域は弥生時代中期後葉から古墳時代前期には遺跡群が大きくなり、増加していく。相馬扇状地形内は南に向かいさらに耕地が広がる。

そのような背景の中、有馬遺跡の礫床墓・壺棺墓を中心とする墓制、新保田中村前遺跡、日高遺跡、八幡遺跡、少林山台遺跡、長谷津遺跡に出土する礫床墓の点在は県内地域では長い間の交流が続いたコミュニティ同士が一緒になり農地を広げ、労力を併せ大きな集団になったと筆者は考えている。新保遺跡と新保田中村前遺跡は同じ遺跡と考えられる。しかし、壺棺墓は共有するが、新保田中村前遺跡では焼骨、複数埋葬を行っている等の違いが現れる。しかし、戦闘・戦争は起きていない。

お互いの広い農地と交流が維持・継続していたと理解できる。当時の群馬県域の壺棺墓の定着、新保遺跡周溝墓主体部に使われる壺棺墓は県内域を網羅している。弥生時代中期後葉の各々コミュニティの違いを継承したと考える。

この社会を維持するために「市」の機能が大きかったのである。

## 8. 「市」の果たす役割

古墳時代初頭期に県内広い範囲にまで外来系土師器やS字状口縁台付甕が樽式土器と並行して供給されている。これが意味するものは「市」があり供給が群馬県域内広い範囲に流通していたことを示している<sup>(前掲註6)</sup>。

筆者は「市」は新保地域では中期後葉から始まり、古墳時代前期初頭まで群馬県域全体に機能していたと考えている。新しい土器が便利と思えば在地で土をこね、土師器を焼き、供給が始まったと筆者は考える。

ここでは「市」の果たす機能を検討したい。筆者は新保

地域を「市」と考えた。理由は新保遺跡・新保田中村前遺跡の墓には鉄剣は無く鉄片だけである。一方で有馬遺跡では8本出土した。しかし有馬遺跡では成品しか出土していない。新保遺跡・新保田中村前遺跡では鉄剣の柄の完成品、未成品、更に鹿角を大量に備蓄していたことが確認されている。鉄剣の茎に穿たれた目釘孔から鹿角製柄と鉄剣はセットで製造されていたことが分かる。目釘孔は当然鉄剣が無いと併せられないからだ。有馬遺跡の鉄剣は新保地域から来ていると筆者は考えている。有馬遺跡の他に渋川市では空沢遺跡礫床墓、渋川市と北に接する沼田市石墨遺跡でも鉄剣が周溝墓の主体部から各々1本ずつ出土し、渋川市、八崎の寄居・田尻遺跡では竪穴建物内で鉄剣が出土している。

新保地域では農具も大量に出土し、未成品も確認されている。日高遺跡の農具と新保遺跡・新保田中村前遺跡の農具は同じく東海系・近畿系・北陸系のものであり、東国では一般的な傾向である。

筆者は新保遺跡と新保田中村前遺跡は同じ集落と考えている。ここから「モノ」が群馬県域全体に供給されていたと考えられる。

土器を見ると古墳時代初頭期には畿内系・北陸系・東海系の土器が出土する。土器の面からも外来系の土器や樽式土器の無文化が起きる段階には沼田市、北に接する川場村の北毛、中之条町の北西地域、太田市、伊勢崎市の東毛・高崎や安中市の西毛、今の群馬県域全体から樽式土器の無文化と土師器の共伴出土が確認され、古墳時代初頭の段階で土師器の取り込みと、樽式土器の土師器化が開始されたことが確認できる<sup>(前掲註6)</sup>。赤城山麓や榛名山東南麓地域等で、古墳時代初期の土師器が広い範囲で出土する。東海系S字状口縁台付甕は藤根・今村の分析に従えば、群馬県域内、榛名山系、伊勢崎市、藤岡・富岡市近辺の土で焼かれている。(勿論胎土分析した結果であり、県内すべての土器の分析は行われていない。)

このように広い範囲に大きく広がるのは「市」の広く早い供給網の完備があつてのことである。土師器は古墳時代文化と共に、一気に群馬県域に広がっているのである。筆者は当時の群馬県域には、北九州や山陰地方にみられる戦闘や戦争が無かった地域と考えている。理由は戦闘による受傷人骨の出土が、全く無いことである。農耕社会内では他国の領土侵犯をすれば殺されるか、奴隷にされる社会であり、コミュニティから離れることは死を意味する。有馬遺跡63号土壇に葬られた成人骨は有馬遺跡では土壇墓、新保田中村前遺跡159号竪穴建物内の人歯は覆土中に埋まっていた。コミュニティ内の墓制では特殊なものである。勿論159号竪穴建物の覆土出土の人歯は混入の可能性があるが、2体はコミュニティ内での位置を示唆する。各々自分の領域を守り徐々に広がっていたことが看取される。それほどの交流が強く、「市」

が円滑に機能し、「市」は弥生時代後期には今の群馬県域内の大方の範囲を網羅していたはずである。それが威信材としての鉄剣を始め貴重な「モノ」が移動していたことを示している。

筆者はこのような強い交流を維持できたのは通婚圏が群馬県域に広がり、円滑に機能したと理解している。通婚圏は現代の群馬県域を広く覆っていることが理解できる。その表れが墓への埋葬形態が多様に存在することが認められるからである。埋葬形態の多様性こそが自らのあるいは残された人々のコミュニティの多様性につながるのではないかと考えている。それは有馬遺跡と新保遺跡・新保田中村前遺跡の関係だけではなく、群馬県域全体のなかに通ずる見方であったと考えることができる。だから井野川流域の土壌墓群の中に礫床墓が数基あるいは1基だけ出土すること、周溝墓の主体部に壺棺墓、土壌墓等の異なりがあるのは、婚姻者が他のコミュニティから来たことにその要因があったのではないかと考える。勿論鉄剣のような貴重品が広い範囲の中出土すること、と同時に死者の生まれたコミュニティの葬法を残された人間が慮ったと理解する。そこには弥生時代前期から古墳時代まで続く葬法の伝統に裏打ちされている。

本小文を草するにあたり、友人であり、同僚である大木紳一郎君に多大なるご助言、ご指導をいただいた。記して感謝する次第である。

## 註

- (1)以前の報告書では住居跡という呼称であったが、近年の呼称である竪穴建物に統一した。以後同じである。
- (2)有馬遺跡・新保遺跡の人骨分析は当時の聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎、吉田俊爾、新保田中村前遺跡人骨は札幌学院大学の佐倉朔、に依頼し、中村遺跡は早稲田大学の金子浩昌の報告書の所見である。各氏の年齢区分が同じ年齢でも呼称が異なるため、近年の研究区分に改める。ここでは九州大学の米元史織が最近行なった分類を使う。乳児0～1歳、幼児1～6歳、小児6～12歳、若年12～20歳(森本・吉田、青年)、成年20～40歳(森本・吉田・佐倉・金子、壮年)、熟年40～60歳、老年60歳以上である。ただし、各遺跡での用語の使用は原文のままにして記載する。
- (3)友廣哲也「古墳社会の成立」『日本考古学』日本考古学協会 71～91頁  
友廣哲也『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社  
筆者はここで新保遺跡・新保田中村前遺跡・日高遺跡までを含めた範囲での「市」の存在を指摘した。主体は新保遺跡・新保田中村前遺跡での農耕具、鉄剣、鹿角製の柄、木弓に使うイヌがヤ等の豊富な「モノ」が出土したことによる。さらに『魏志倭人伝』に記載されたト骨に使われた灼骨の出土等々その背景にある「モノ」の管理体制を感じた。
- (4)角座骨は落角と違い角の頭の中にある部分である。つまり鹿狩りをして角を取ったと考えられる部位である。
- (5)小八木志志貝戸遺跡報告書「5 総括—小八木志志貝戸周辺の弥生

時代」で坂井隆は「土器棺墓群は周辺で全く他に墓域が発見されていないことを見れば、幼児胎児埋葬に限定すべきではないだろう」と指摘している。

- (6)友廣哲也2020「邪馬台国の時代と東国—在地土器の変遷と人の移動の視点から—」『研究紀要』38号  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団51～66頁
- (7)友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
- (8)友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』筆者はこれの中で井野川流域も含め、群馬県域の集落の中で以上に甕・壺等の数量が多い竪穴建物を確認している。例えば高崎市下佐野遺跡7区45号竪穴建物からはS字状口縁台付甕25個体、土師器平底甕10個体、壺17個体、高坏8個体、器台6個体、小形埴2個体合計すると70個体を確認している。各集落内にはこのような竪穴建物を確認することができる。筆者は各コミュニティ内でのストックと想定している。

## 引用・参考文献

- 相京建史・小島敦子1992・1993『新保田中村前遺跡Ⅱ・Ⅲ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
飯田陽一・岩崎泰一2012『長谷津遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
飯森康広2006『立馬Ⅰ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大江正行・平野進一1982『日高遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
飯森康広2006『立馬Ⅰ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大木紳一郎1997「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』680～723頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大木紳一郎2001「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『元総社西川遺跡』105～110頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大塚昌彦1985『空沢遺跡 第5次』群馬県渋川市教育委員会  
大塚昌彦1980『空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡』概報 群馬県渋川市教育委員会  
金子浩昌1986「1.中村遺跡出土人骨および動物骨」『中村遺跡』521～535頁 渋川市教育委員会  
熊谷 健2001『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
神戸聖語他1989『八幡遺跡』高崎市教育委員会  
小泉範明2004『史跡 日高遺跡』(第7～9次調査)概報 高崎市教育委員会  
坂井 隆1999『小八木志志貝戸遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
坂口 一1989『有馬条里遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
佐倉 朔1993「(4) 新保田中村前遺跡出土人骨」『新保田中村前遺跡Ⅲ』159～162頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
佐藤明人1990『有馬遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
佐藤明人1988『新保遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
設楽博己1993「壺棺墓再葬墓の基礎研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集3～48頁  
設楽博己2008『弥生再葬墓と社会』塙書房  
清水欣吾1990「(4)有馬遺跡出土鉄剣の分析」『有馬遺跡Ⅱ』441～445頁  
下城 正1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
高橋龍三郎2016「縄文後・晩期社会におけるトーテムズの可能性について」古代第138号 75～142頁 早稲田大学考古学会  
角田芳昭2001『波志江中野面遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
徳江秀夫・飯塚 誠1993『少林山台遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
友廣哲也1983『研究紀要』創刊号 20～28頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
友廣哲也2020「邪馬台国の時代と東国」『研究紀要』38 51～66頁  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要39

- 友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
- 長谷川福治1999『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教育委員会
- 藤根 久・今村美智子2001a「土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 村上恭通2020「令和2年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会」資料
- 森本岩太郎・吉田俊爾1988「(4) 新保遺跡出土人骨について」『新保遺跡Ⅱ』463～466頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 森本岩太郎・吉田俊爾1990 7 鑑定分析 「(1)有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨について」『有馬遺跡Ⅱ』425～431頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山田正久1982「第4章 木工技術の変化と特徴的な着柄鋤・鍬について」『日高遺跡』485～492頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山田昌久1986「13 新保遺跡出土木製品・加工品」『新保遺跡Ⅰ』151～188頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 米元史織2017『人類学から明かされる金井遺跡群に生きた人々』
- 平成28年度 公開講座資料 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 横沢克明他1986『中村遺跡』 渋川市教育委員会
- 図録 『北陸の弥生世界わざとところ』2019 大阪府立弥生文化博物館
- 図録 『弥生人の祈り』—東国の再葬墓—2013 栃木県立博物館

# 金井東裏遺跡 3号祭祀遺構の再検討

杉山 秀宏

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 金井東裏遺跡の位置と交通路

2. 3号祭祀遺構の遺跡における位置

3. 3号祭祀遺構の形成過程

4. 3号祭祀遺構の特徴(杯について)

おわりに

## — 要 旨 —

金井東裏遺跡 3号祭祀遺構の再検討を行う。3号祭祀遺構は、祭儀を別の場所で行った後に、その祭儀で使用した祭具を納めた遺構である。既に報告書で報告したものであるが、今回その遺構の重要性から再度、金井東裏遺跡と3号祭祀遺構について以下の3点について検討を加えた。

- ① 金井東裏遺跡が立地する位置について
- ② 3号祭祀遺構のムラの中での位置について
- ③ 3号祭祀遺構の設置から祭具を納める経過について

以上の3点の検討の結果、以下のことが分かった。

- ① 3号祭祀遺構を有する金井東裏遺跡は、関東平野から信濃や越後と吾妻川沿いに往来する道沿いにある。特に吾妻川から関東平野への出入口に位置することで、信濃や越後との往来に際しての交通路の拠点となる。
- ② 3号祭祀遺構は、ムラの中では、用水路や幹道のすぐ北側に設置されている。また、すぐ北側にある屋敷地内の1号掘立柱建物でのベンガラ素材の製作、42号竪穴建物内でのベンガラで塗彩した編み物製作など祭儀に関係する作業を行っていたことが想定され、すぐ南の20号竪穴建物は3号祭祀遺構の形成直前まで使用され、土器などもそのまま置かれている可能性が高く、祭儀に関係した竪穴建物の可能性が考えられる。3号祭祀遺構は、ムラの中では用水路・幹道の近くにあり、祭儀に関係する諸施設の近くに設置され、重要な位置にある。
- ③ 祭具埋納の過程の想定は報告書製作時より多少変更と追加があった。囲いの設置前から設置後の白玉の散布状況が分かった。また、囲いの入口付近の東側に大型土器群を南北に入口に向かい一直線に配列し、西側に1号盛土状遺構を設け、北東側3号祭祀遺構の入口と推定される地点近くに粒状礫を大量に撒いていることが認められた。この後、大型土器を南に向かうコの字形に配置し、囲まれた中央部限られた空間に、膨大な祭具(鏡・玉類・ガラス玉類・石製模造品・鉄製品)を納めていく。飲食に伴って使用した杯・高坏・小型甕などの土器計620個以上を2～20段まで積み上げて片付け、さらに、祭具を埋納した地面上には、杯を中心に祭具を土器の中に納めたままの状態ですぐから6段ほどに積み上げて配置している。この段階で、火山灰が降下した。その後、数点の土器や鉄器などが持ち込まれていたことが、土層観察から明らかとなった。火山灰降下後もあきらめずに、祭儀で使用した祭具を納めていたことが分るのである。また、杯のうち、須恵器模倣杯を他遺跡に比べて多く製作使用していたことが想定された。

### キーワード

対象時代 古墳時代

対象地域 群馬県

研究対象 祭祀遺構・祭具

はじめに

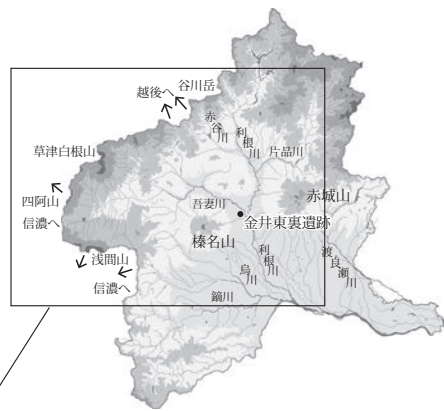
2019年3月に金井東裏遺跡の報告書が刊行され、金井東裏遺跡についての基礎的なデータが呈示された。しかし、その後、①金井東裏遺跡の位置 ②3号祭祀遺構のムラの中での位置について検討する必要があると感じた。さらに、③として祭具の埋納遺構と想定された3号祭祀遺構に関して検討を加える中で、改めて祭具埋納の流れについて再検討する必要があることが分かった。今回、報告書の中で述べきれなかったものを中心にして、上述の3点について再検討するものである<sup>(註1)</sup>。

以下、金井東裏遺跡の位置、3号祭祀遺構のムラでの位置、3号祭祀遺構の設定からその遺構が完結するまでの流れについて再検討した結果を記す。

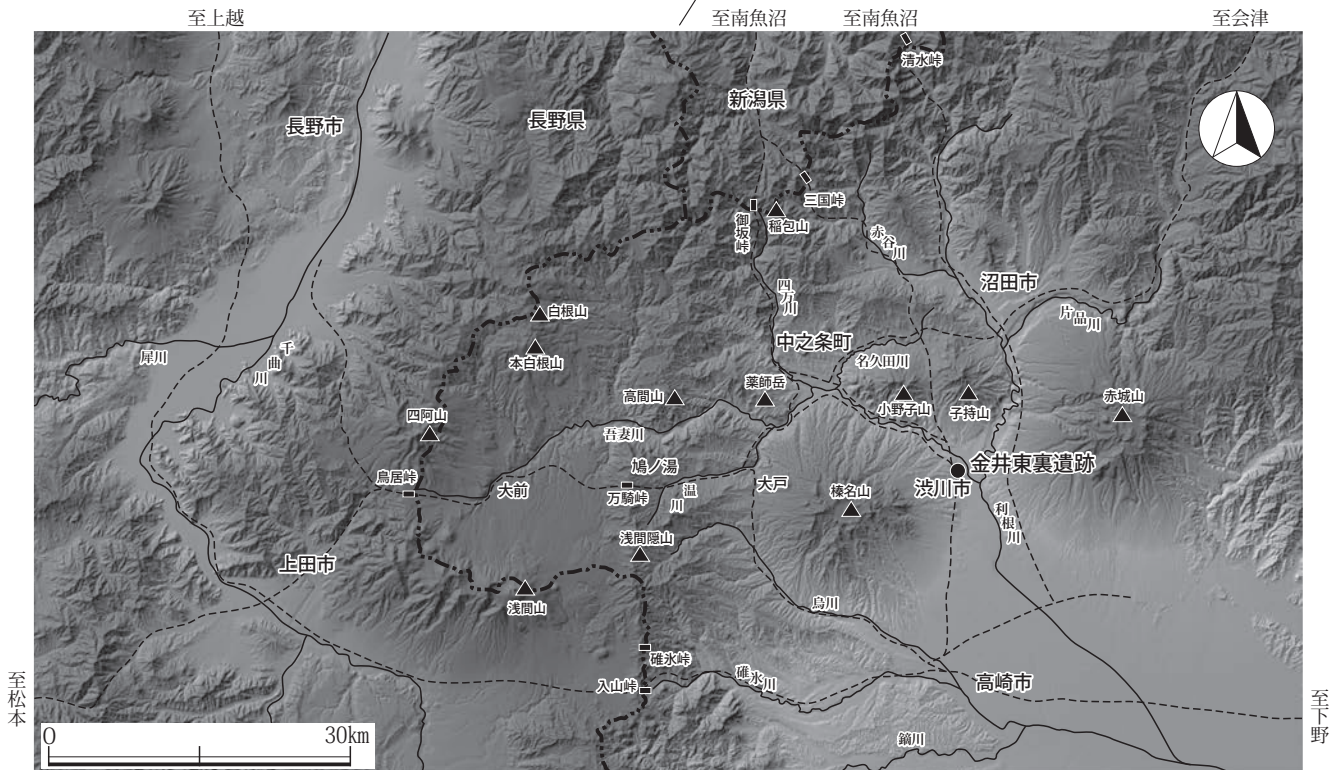
1. 金井東裏遺跡の位置と交通路(第1・2図)

金井東裏遺跡は、群馬県渋川市金井に位置する。関東平野の基点に位置づけられるものである(第1図)。利根川と吾妻川が合流する地点の北西方向にあり、吾妻川右岸(南岸)の河岸段丘上にある。この地は、榛名山東麓沿いを北上してくると、吾妻川にぶつかる地点である。遺跡から、吾妻川沿いに右岸(南岸)を西に向かうルートがある。このルートはさらに榛名山北麓を西進し、金井廃寺などを過ぎて新井遺跡から温川に突き当たる。ここで温川を渡り四戸の古墳群の箇所を下り、大戸から西に折れて温川沿いに西進し、万騎峠を越えて大前に至り、鳥居峠を越えて南下して上田か、北上して長野に至る信

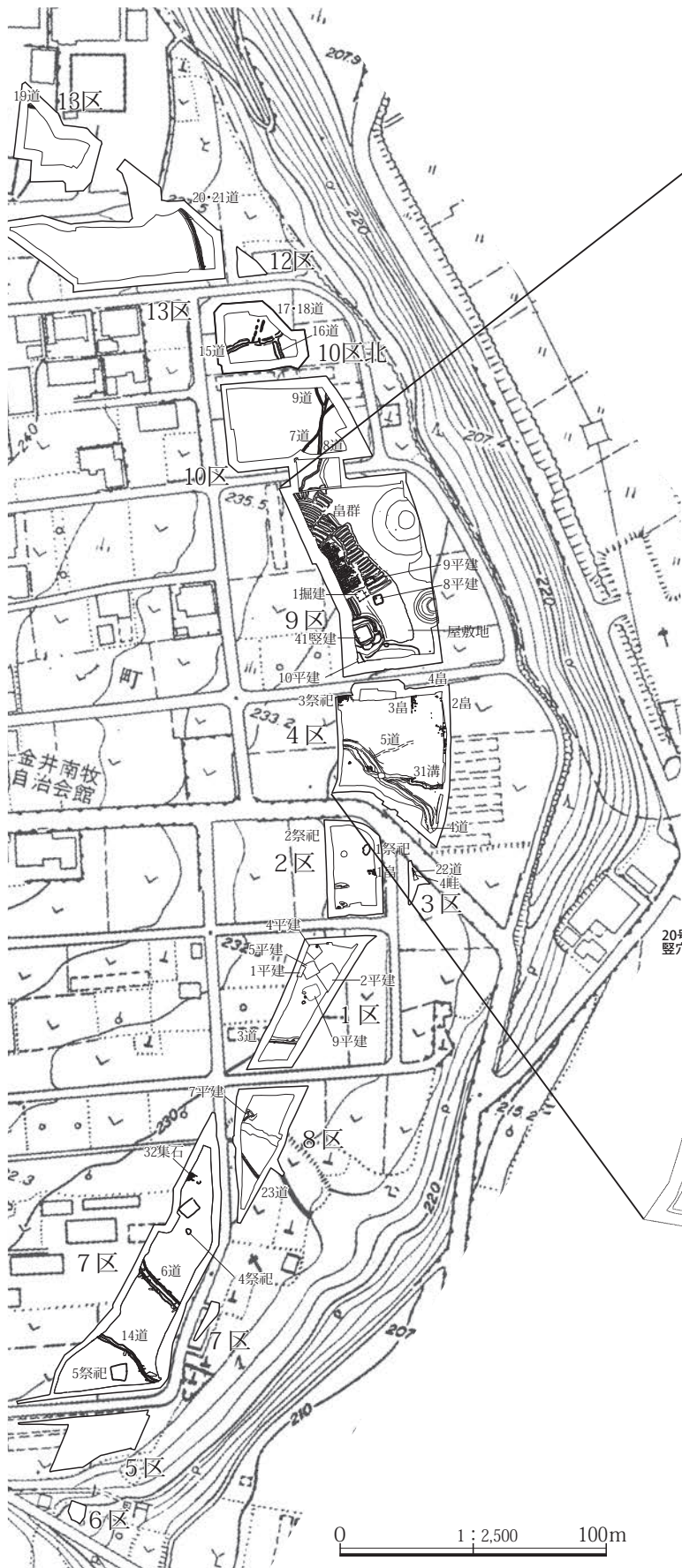
濃へ向かうルートとなる。又、吾妻川に温川が合流する前に吾妻川を渡り、原町から四万川を北上して四万御坂峠を越えて南魚沼に向かう越後へのルートにもなる。つまり、信濃と越後との吾妻川沿いの往來のルートになる。また、金井東裏遺跡から、吾妻川を渡り左岸(北岸)を西に進み、中之条町伊勢町遺跡群を過ぎて、四万川沿いに北上し、四万御坂峠から越後に向かうルートもある。さらに、三国街道と同じように吾妻川を渡り、子持山・小野子山の間を北上し、月夜野から新治へ向かい三国峠を越えるルートもある。以上、越後や信濃との往來のルートにおいて外せない地点であり、当時の交通路の要衝に金井東裏遺跡があったことは確かである。交通路の拠点



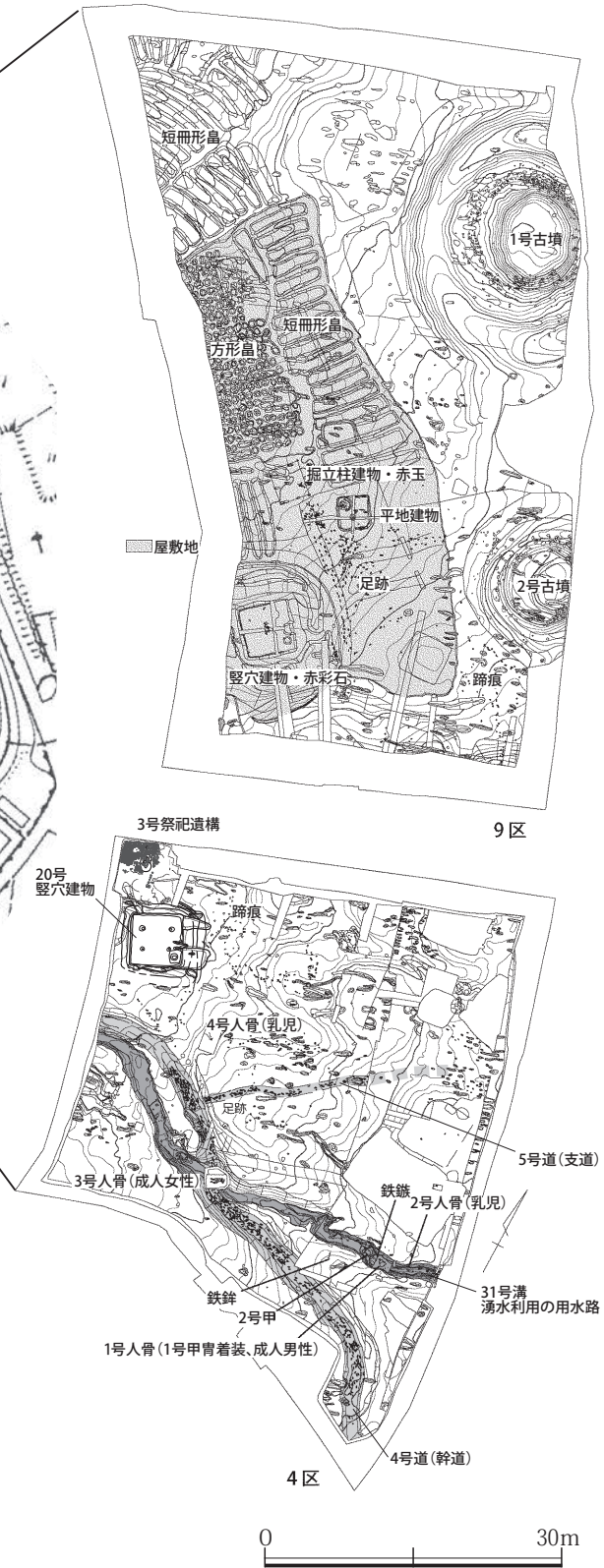
第1図 群馬県地形図



第2図 吾妻地域色別標高図及び古墳時代想定道図



第3図 金井東裏遺跡遺構図



第4図 金井東裏4・9区遺構平面図

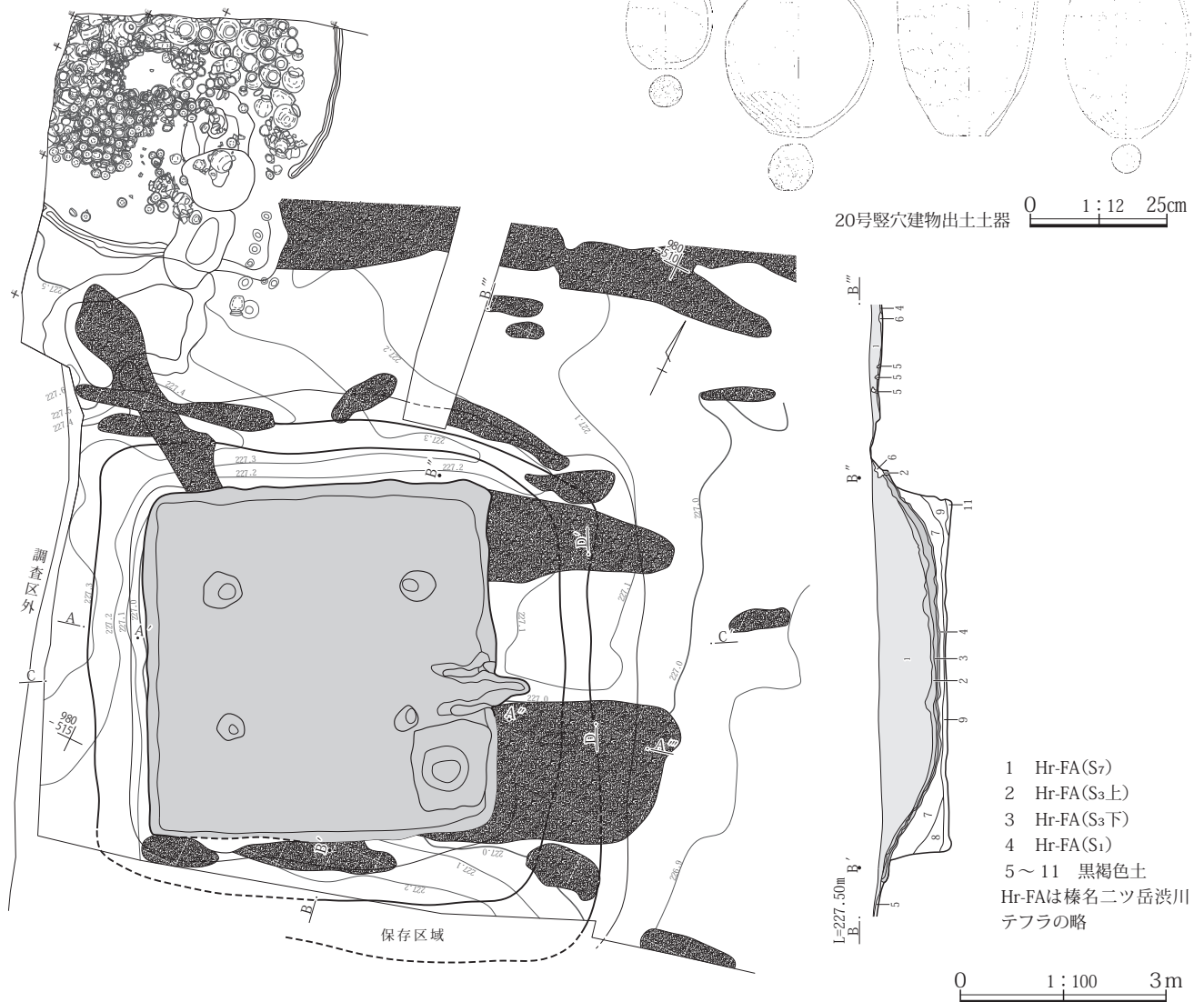
で、馬飼育や鉄器生産などの生産活動を行ったのが金井東裏及びその南に位置する金井下新田の両遺跡となる。

2. 3号祭祀遺構のムラにおける位置(第3～5図)

3号祭祀遺構は、第3図にあるように、遺跡地の中で20mの比高差のある河岸段丘の崖線から西に70mの位置にある。後述するようにムラの主要幹道で崖下の段丘に下ると想定される4号道があり、段丘下との繋がりが想定される地点でもある。また第4図にあるように、遺跡の居住域としては北端と推定される屋敷地のすぐ南15mに位置している。屋敷地は3号祭祀遺構から0.5～1mほどの比高差のある段差上にある。さらに、甲を着た古墳人や首飾りの古墳人が倒れていた湧水利用の用水路としての31号溝が、3号祭祀遺構の南15mにある。さらに、幅広く多数の足跡が残るなど主要幹道として想定される4号道が31号溝に沿う様に南東部から西北部

に向けて北上して、31号溝と交差した後に溝の北側沿いに溝に沿う様にして3号祭祀遺構の近くを通っている。このように、3号祭祀遺構の位置は、屋敷地のすぐ南側にあり、ムラにとって重要な湧水による用水路とそれに沿う様にして造られたムラの主要幹道のすぐ北にあり枢要な位置に設置している。

また、3号祭祀遺構の北側の屋敷地内では、1号掘立柱建物の床面に、120個以上の赤玉がおそらく乾燥させるために3段に積み上げられている。赤玉はベンガラの素材と推定する。また42号竪穴建物の床面には50個以上のベンガラを塗布した赤玉が置かれていた。おそ

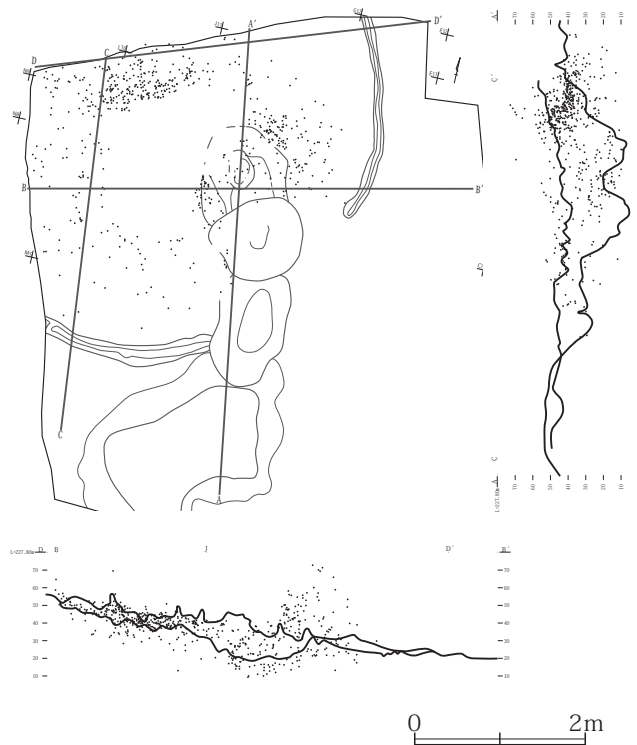


第5図 20号竪穴建物と3号祭祀遺構図、20号竪穴建物出土土器





第6図 囲い外側白玉分布図



第7図 囲い内側白玉分布図

らく、経糸にベンガラを塗布して編み物を製作するさいの編み石と推定できる。つまり、屋敷地にある建物施設からは、祭儀に関係する可能性が高いベンガラに関するものが多数出土しており、火山灰降下前に、大量のベンガラ素材やベンガラ塗布の編み物製作などの祭儀に関する行為を3号祭祀遺構北側の屋敷地で行っていたことが想定されるのである。以上のことから祭具埋納遺構としての3号祭祀遺構がこの場所に設置されたことの意味合いを考えさせるものである。

さらに、3号祭祀遺構のすぐ南側3mの所に20号竪穴建物がある。この20号竪穴建物は土器の様相からすると3号祭祀遺構とほぼ同じもの(第5図土器図)であり、時期差はほぼ無い。20号竪穴建物以外の周囲の竪穴建物はほぼ完全に埋没した状況にあり数年以上の差異がありそうだが、20号竪穴建物は、祭祀遺構と極めて近い時期での建物である。カマド袖脇には鹿骨小片が多数出土し、甕が3個カマドにかけられたままにあり、遺跡内では珍しい甕がカマド周辺から3個、甕が6個以上出土するなど、多量の土器の遺存の在り方は他の埋没建物で見ることができない。焼失建物ではないのに、使用した土器をそのまま置いていった可能性もあるこの建物の性格が、祭儀に関係するものである可能性が考えられる。20号竪穴建物の上屋を外し、廃棄されて周堤の土などが壁際から三角堆積し、床面中央に5cmほど堆積し、カマドにかけたままの甕の口縁が少し見えるまで埋まった時期に、火山灰が降下している(第5図)。火山

灰降下直前に行ったことが分かる3号祭祀遺構の祭祀に使用した土器の集積と祭具の埋納行為は、上屋を外した20号竪穴建物が、土にある程度埋もれている段階で、建物のすぐ北側で行われているのである。そのように見ると、祭儀に関係する可能性のある建物が南北に位置する箇所に、祭具の埋納遺構を設置したことに意味があると思われる。

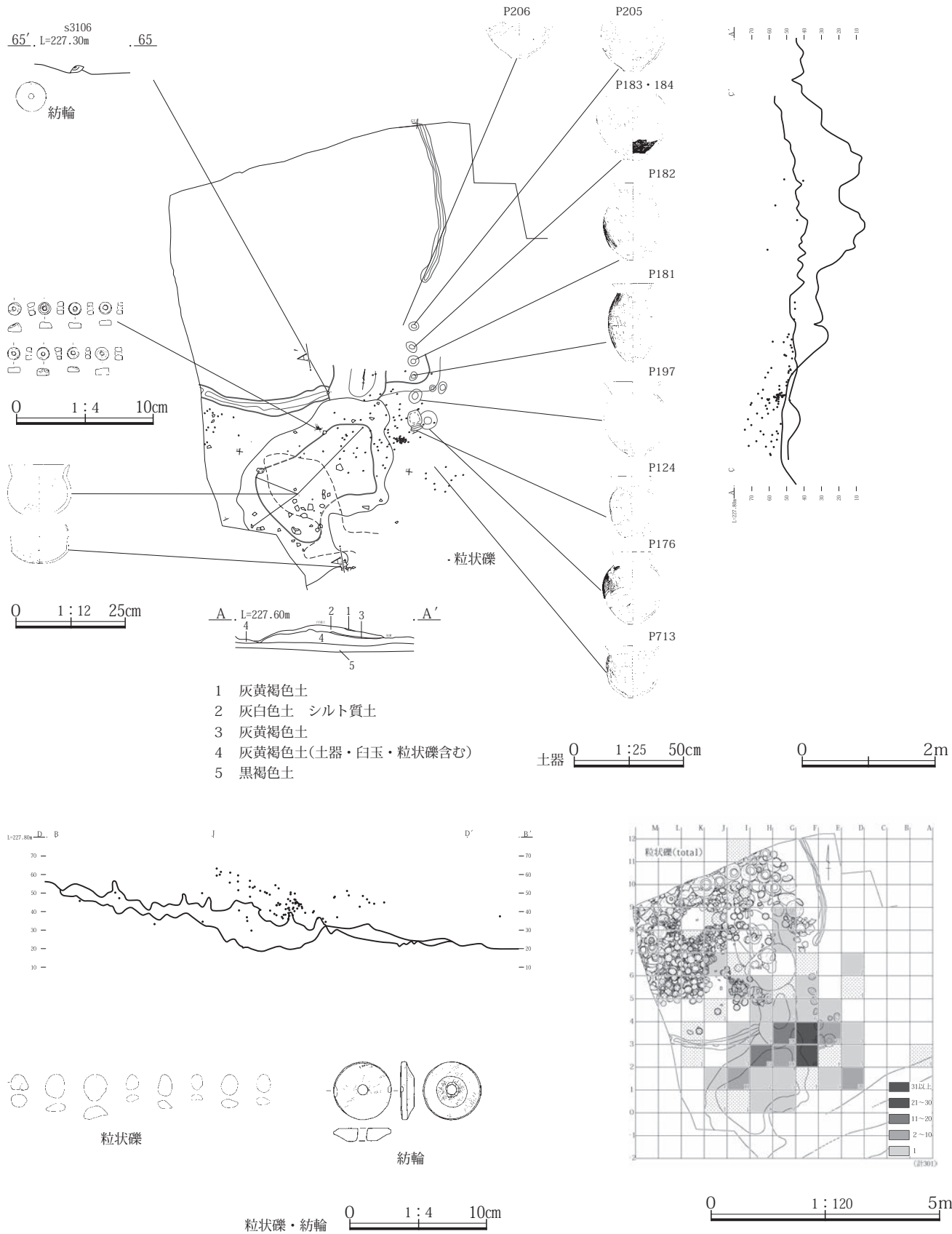
### 3. 3号祭祀遺構の形成過程

3号祭祀遺構の祭具の設置・埋納の形成過程について報告書記載時から再検討したものを中心にして以下再度記述する。

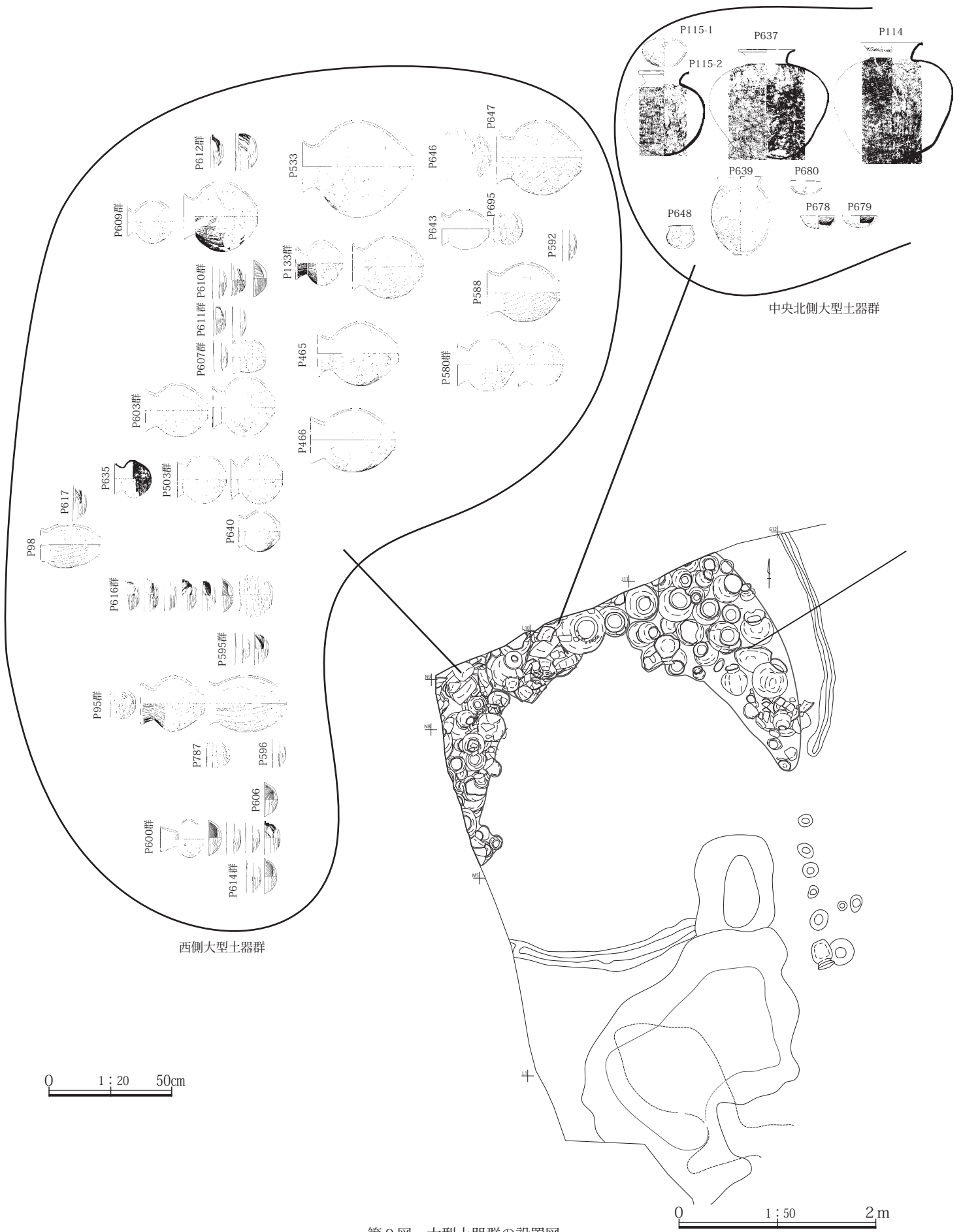
#### ① 設置準備(第6・7図)

囲い設置予定地外部への白玉散布は第6図にあるように、火砕流で上方に位置するものを除き、全体的に地表面から数cm下から出土している。祭具に使用した土器及び祭具の集積・埋納場所を設置するにあたり、その地周辺も含めた全体に土を掘り起こして白玉を散布している(第6・7図)。これから埋納行為を行う場所に対して白玉散布を行うことで清めの行為を行っていると推定する。囲い設置予定地内部にも白玉を散布しているが、大型土器群設置前の白玉散布との区別はつかない。

これらの白玉群の上に囲いの基底を構成する溝が形成されることから、白玉散布の次に囲いが設置されたことが分かる。囲いについては、囲いの底部を押さえた溝に火山灰が積もっていないことから、溝の上に構築物があったことを推定して、囲いがあったことを既に示して



第8図 囲い外部大型土器列図・盛土状遺構図・遺物出土状況図・粒状礫出土度数分布図



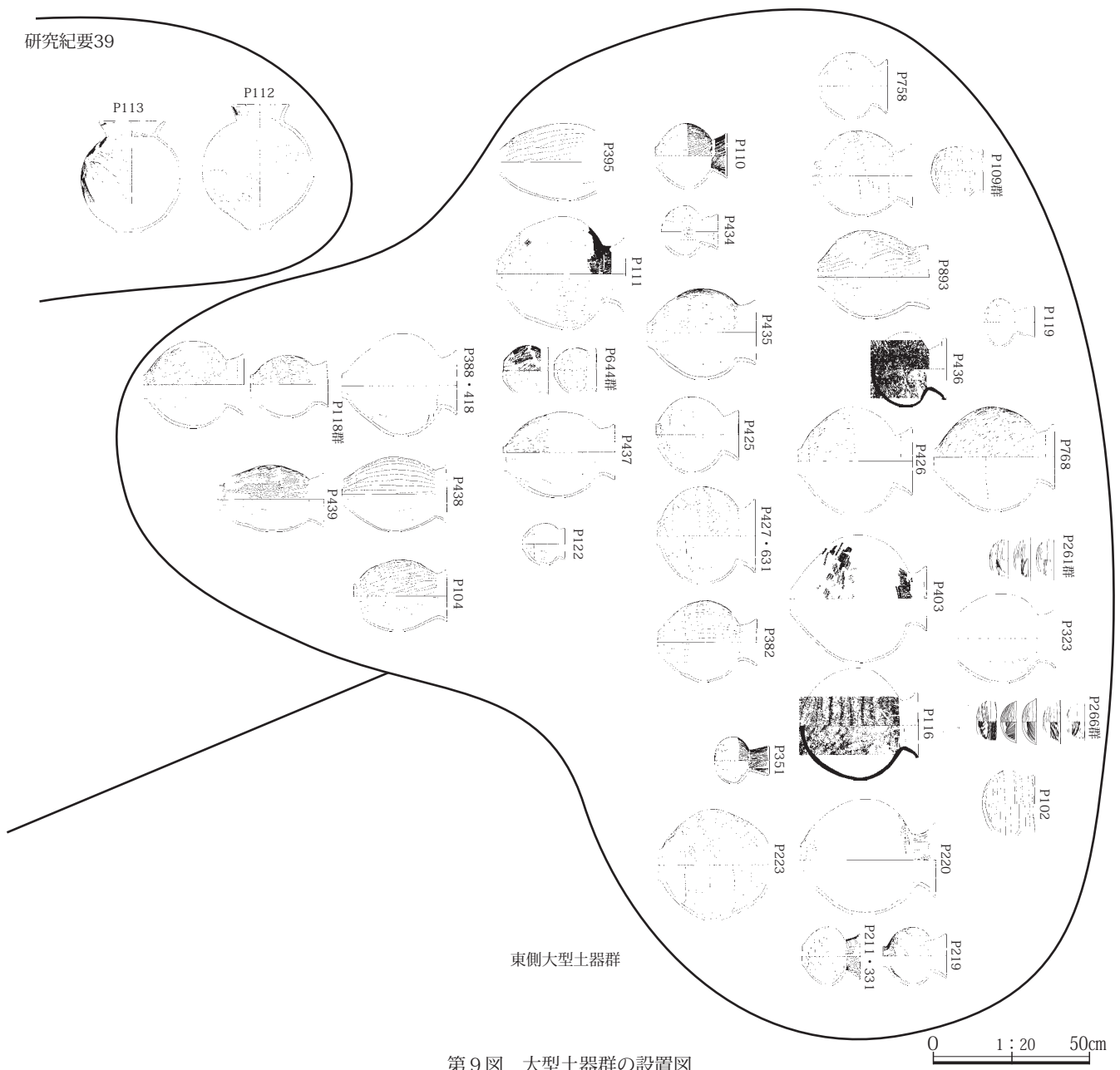
西側大型土器群

中央北側大型土器群

0 1:20 50cm

0 1:50 2m

第9図 大型土器群の設置図



第9図 大型土器群の設置図

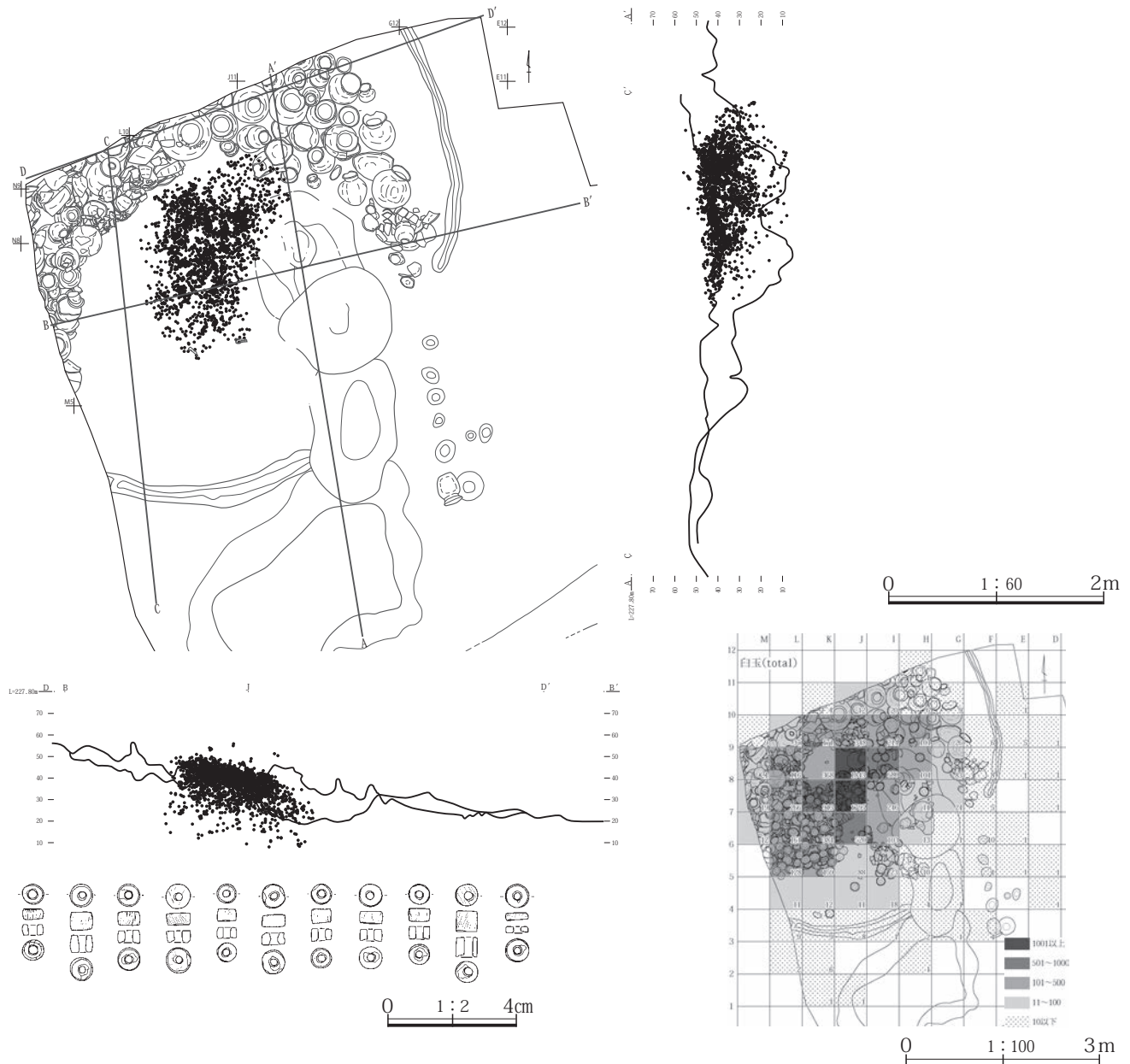
いる。また、囲いの設置後も、第7図を見ると囲い内部で、埋納集中部を除いた箇所の白玉出土は、東部土器群の上層に火砕流により流されて出土した上方からの出土例を除き、大型土器群、小型土器集積群などの下部数cmから40cmほど下までの範囲に白玉が広範囲に出土している。以上、大型土器群や小型土器群などを設置する前に、全体に土を掘り起こしながらその中に白玉を散布する行為を継続して行っていたことが分る。特に土を柔らかくした部分に大型土器群を安定させる意味も込めて、器高の1/3程を埋め込む形で次の段階で土器を置いている。

② 囲い前の大型土器群及び盛土遺構(第8図)

囲いへの導入路として、囲いへの入口部に向けて大型土器を9個南北に直線状に配列する(第8図)。これらの土器の特徴は、囲い内部の土器が調理した痕跡であるス

スコゲなどが無いのに対して、内面にススコゲが付着し、外面に火が焚かれた痕跡のある土器も置いてあることである(第8図-P181)。囲い内部の土器が火を使用しての行為を行った痕跡が無いのに対して、入口へ導入する大型甕には火にかけて使用したものが混じり土器の性格が異なることが分る。

また、大型土器配列が入口東側に南北直線状に配置されているのに対して、西側に長径2.5m、短辺1.5m、高さ10cmの不定楕円形状の盛土遺構がある。この遺構には、破碎された杯や椀以外に砥石や白玉がその上層部に置かれていた他に、特に盛土の東側からさらに東に位置する南北直線状配列の土器群近くまで、多量の径7~27mmの粒状礫が上層から出土している。これらの粒状礫は、自然の作用と考えられる円磨により光沢をもつものが多い。それら粒状礫が、囲いのなかからも少量出土



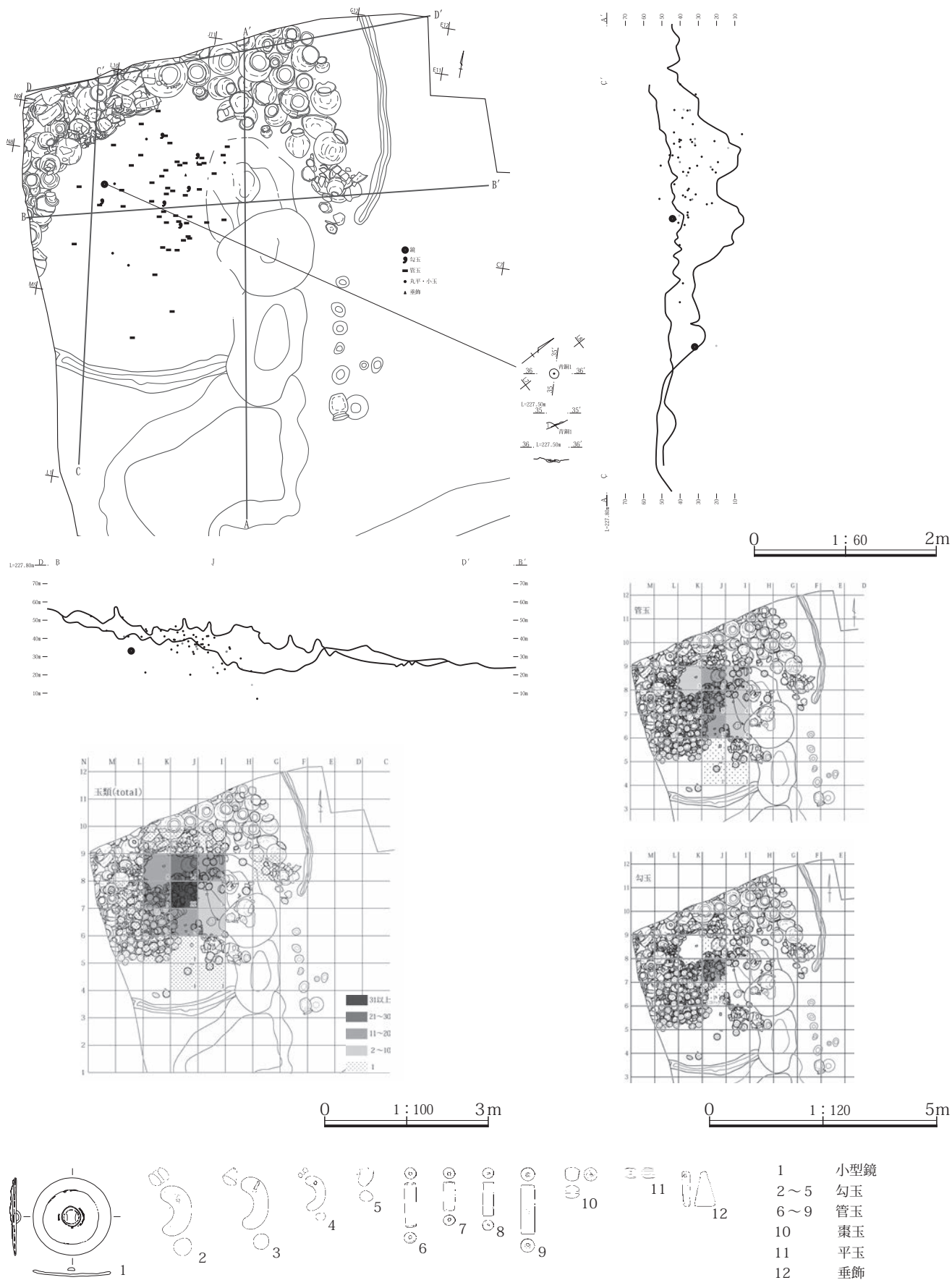
第10図 白玉集中部出土状況図・白玉図(土器内出土品を含む)・白玉全体出土度数分布図

するが、特に多いのは、盛土遺構東側であることは明瞭であり(第8図)、囲いに入る前の入り口部に集中して粒状礫を散布したことが想定される。白玉とは別の意味で、祭儀に使用される意味があったものと想定する。また、入口部付近の特に溝内部の囲いの下20cmの所から紡輪が出土している(第8図)。3号祭祀遺構での膨大な祭具の中で唯一出土した紡輪が入口付近の囲い下から出土していることは興味深い。

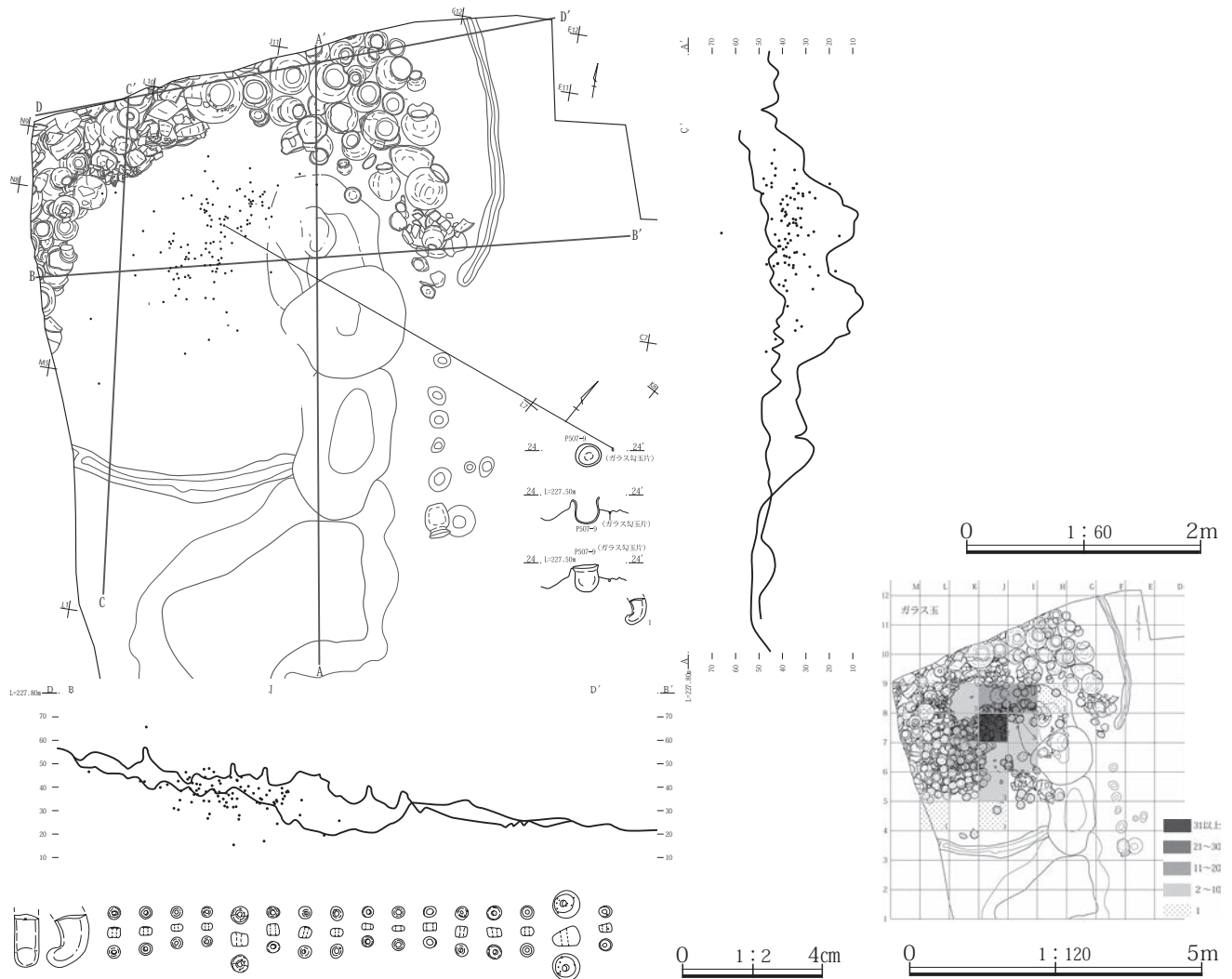
### ③ 大型土器配置(第9図)

大型土器が、祭具埋納部を囲むようにして置かれている(第9図)。祭具埋納部北側の東西方向に一直線に並ぶ中央大型土器群と、ウイング状に東西から南に延びる形態で大型土器を配置した東西の大型土器群である。

この配置で一番重要なことは、囲いの中心に位置する中央大型土器群に大型須恵器甕3点(P114・115-2・637、現地保存を含めると4点)が置かれていることである。当時、群馬においてもあまり個体数の多くない段階での大型須恵器甕の集積は、古墳の副葬品以外としては極めて稀である。3個の並列する須恵器甕の中で、P114大型須恵器甕は、当遺構及びそれ以外の遺構も含めて遺跡で最大の大きさを持つ須恵器甕であり、完形である。中心の須恵器甕(P637)は大きさでは東隣の甕より少し小さいが、意識的に破碎されている。西隣の須恵器甕(P115-1)やその須恵器甕上に載せてある大型甕(P115-1)なども口辺を欠いているものがあり、一部を欠くような行為をしている可能性が高い。土師器壺・甕



第11図 鏡と玉類出土状況図・玉類出土度数分布図・鏡と玉類図(土器内出土品を含む)



第12図 ガラス玉出土状況図・ガラス玉図(土器内出土品を含む)・ガラス玉出土度数分布図

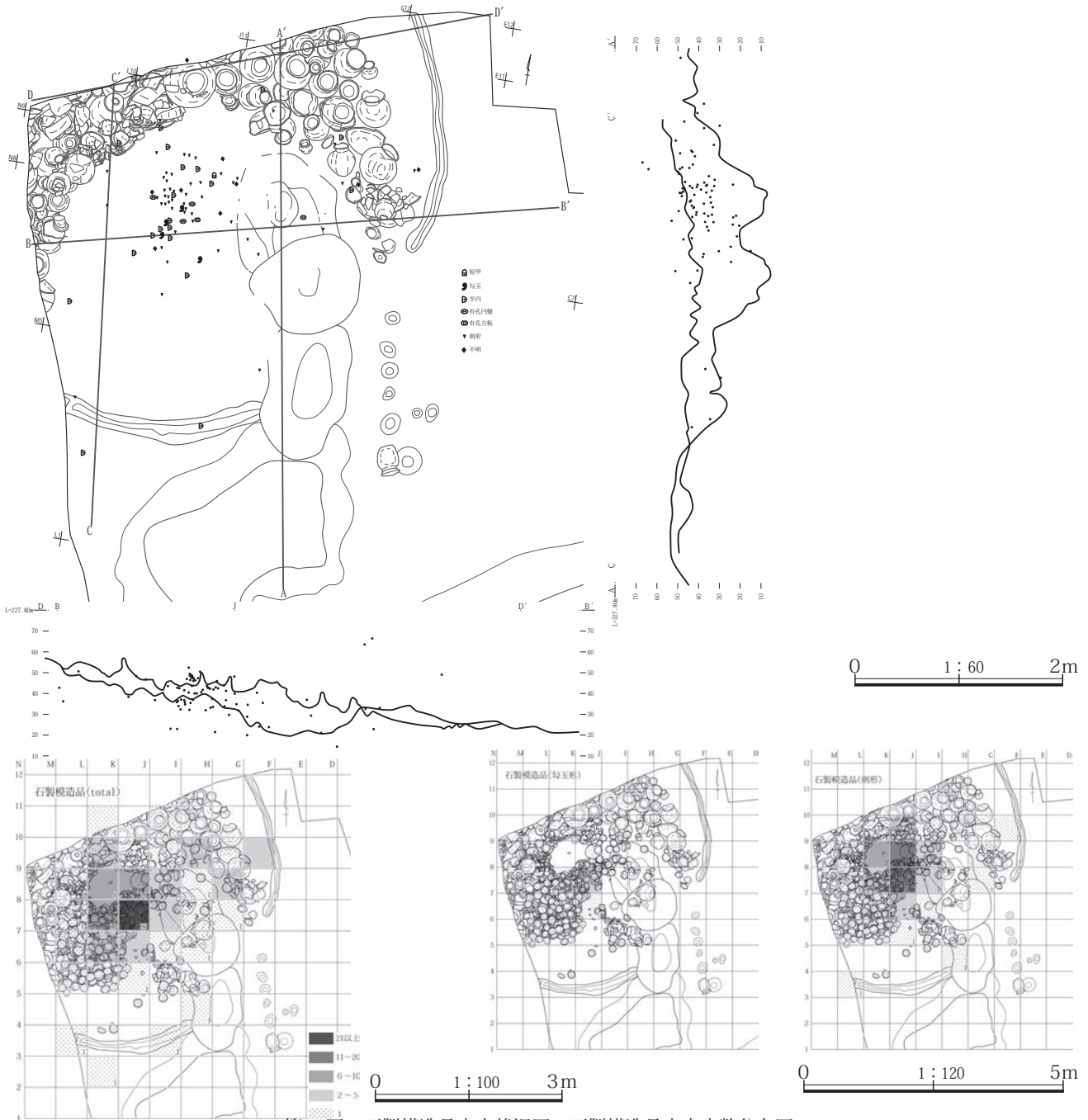
が完存しているものが多いことに比べて特徴的である。残念ながら中央大型土器群及び西側大型土器群は調査範囲の関係から全て調査できていない訳ではないので、それぞれの配置土器の構成の特徴は明らかにできないので、以下、全容が判明した東部大型土器群について説明する。東部大型土器群を見ると、大型土器の配置とその構成が良く分かる。全体で48点の土器組成は、須恵器甕が2、大型壺が18、大型甕が9、小型壺が2、小型甕が3、埴が2、甕が1、高杯が1、杯が10(杯A(内斜口縁杯)4、杯B(内湾口縁杯)2、杯C(須恵器模倣杯)1、杯D(以外の杯)1)の構成で、大型壺が38%、大型甕が19%で、基本的に大型土器壺・甕を中心にした(57%)配置であることが分る。それに少数の小型壺・甕と甕、埴、高杯と一部の重ね積みの杯群の組み合わせとなる。この後に杯を中心とする小型土器群を中央部に集積するが、それら小型土器群による飲食を行う際に、それらの土器に取り分ける前の液体などを納めていた祭具として使用した土器群と考えている。ほとんどが完形であるが、一部の

土器(P758)においては、頸から上の口辺が完全に分離しているものなどがあり、一部は故意に破碎しているものと想定している。東側大型土器群の中には、須恵器甕が2点(P436、P116)入っているが、中央大型土器群の須恵器大甕のような特別な扱いはなされていない。

#### ④ 祭具埋納(第10～15図)

大型の土器群を配置した後に、大型土器配置の南側長径2m、短径1.5mの範囲で、J7・J8Gを中心にやはり祭儀で使用した祭具(鏡1・装身具161(石製玉類51(勾玉5・管玉42・棗玉1・平玉2・垂飾1)・琥珀製勾玉1・土玉1、ガラス玉108(勾玉1・小玉107)・白玉・石製模造品74(短甲1・勾玉6・半円形20・有孔円板2・有孔方板2・剣43)・鉄器135(鎌55・U字形鍬鋤先2・斧1・曲刃鎌4・穂摘具12・刀子17・錐1・針1・鉄器製作片(素材片)35、滓6)が土中から出土している。以下、それぞれの祭具の埋納状況と種類について簡単に述べる。

**白玉(第10図)** 白玉は、他の祭具と混じり膨大な数が第10図にあるように中央部(J7・J8G)を中心に埋納さ



第13図 石製横造品出土状況図・石製横造品出土度数分布図

れている。特に中央部での集中度は特徴的でこれ以外の祭具と併せてこの部分での埋納が中心となることを示す例となる。又、白玉の分布図や後述する他の祭具の分布図から、ここに土坑のように楕円形の掘り下げを行い、そこに白玉も含めた祭具を集中して散布した様子もうかがえる。

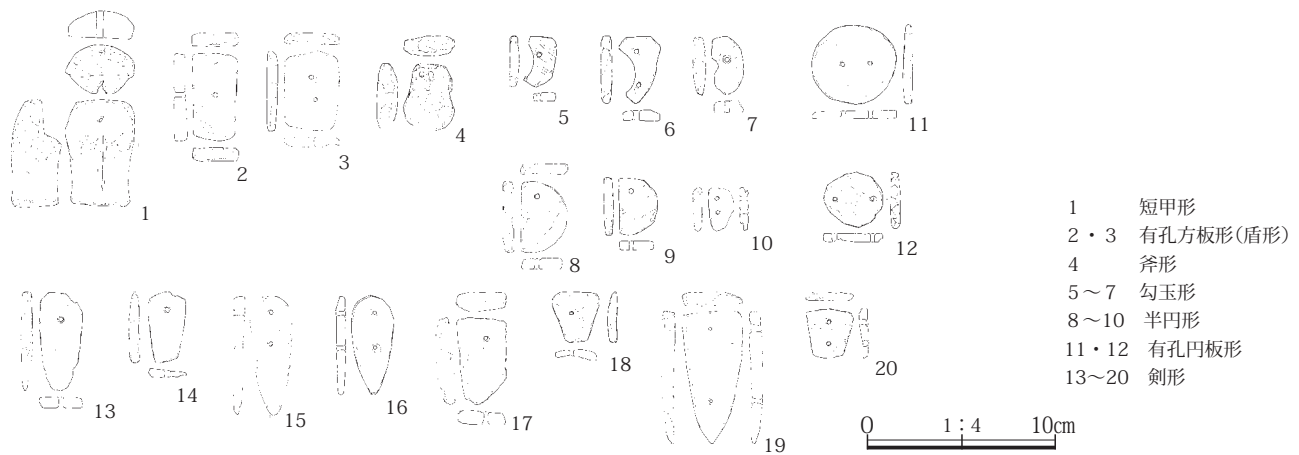
**鏡・玉類(第11図)** 鏡は、集中部の北西端の地下1cmの所から、鏡面を上にして出土している。周りには白玉が散布されている。この上から小型土器群の積み重ねが行われており、小型土器集積群のすぐ下からこの鏡が出土していることから、祭具埋納の最終段階での埋

納であることが分かる。

玉類は55点の勾玉・管玉などが、土中から出土している。これだけの玉類が出土したことは特筆すべきである。J7Gから22点の集中出土がある。勾玉だけで5個が出土しているが、うち4点は中央部集中部から出土している。葉ろう石(軟質緑色岩)や蛇紋岩、変質蛇紋岩が中心で、玉髓や琥珀などの材質も少数あり、様々な材質のものがある。

管玉は計42点が土中から出土しており、J7Gを中心に出土している。蛇紋岩が6割で、葉ろう石(軟質緑色岩)が2割である。また管玉は中央部以外の南部や西部から





第14図 石製模造品図(土器内出土品を含む)

の土中から出土しているのが特徴である。他に棗玉、平玉、小玉及び装身具としての垂飾なども出土している。**ガラス玉(第12図)** ガラス玉は土中からは総数108点出土しており、うちガラス勾玉片が1点あるが他はすべて小玉である。小玉は、鑄型法に比べ引き伸ばし法が全体の81%に達する。J7Gで特に集中して出土している。鑄型法は、色も紺・黄緑・淡青・青緑灰・青・濃青があり、紺が多くコバルト着色のソーダガラスSⅢBが主要な素材となる。引き伸ばし法は、ソーダガラスⅡBが中心で、色味も淡青・黄緑・濃青・紺・赤褐・黄・暗灰色がある。多様な素材と多色を特徴とするのに対して、1号墳第主体部のガラス玉が鑄型法を中心とし、3号人骨の首飾りのガラス玉が青～紺色を中心とした色合いで、出土遺構の性格に応じてガラス玉の製造・素材・色が異なっている。**石製模造品(第13・14図)** 石製模造品は土中からは74点出土している。特に重要なのは短甲形石製模造品で、集中部すぐ北の須恵器P195の下から出土し、長頸鎌片と素材片の可能性の高い鉄器製作時の破片がすぐ近くから出土している。他に土中としては剣形が43点、勾玉形6点、半円形20点、有孔円板形2点、有孔方板形2点の構成である。集中するのはJ7Gからの出土で計23点出土している。深さは、地表面から20cmより上から出土している場合が多い。

**鉄器(第15・16図)** 鉄器は土中より総数135点が出土している。特に出土が多いのが、J8Gで、36点の出土を見る。他の祭具に比べて集中区がやや北にある。鎌が55点と圧倒的に多いのが特徴である。U字形鍬鋤先が2点出土している。利根川対岸の同一時期の祭祀遺構である宮田諏訪原遺跡では7点ものU字形鍬鋤先があり、当時の最新の開墾・農具であった鍬鋤先を祭具として埋納していることに意義がある。他に曲刃鎌4点、穂摘具が12点と数多く出土している。他に、袋柄斧が1点、鹿角装刀子が12点、木装刀子が1点、装具が不明な刀子が4点ある。他に錐1点、針1点がある<sup>(註2)</sup>。

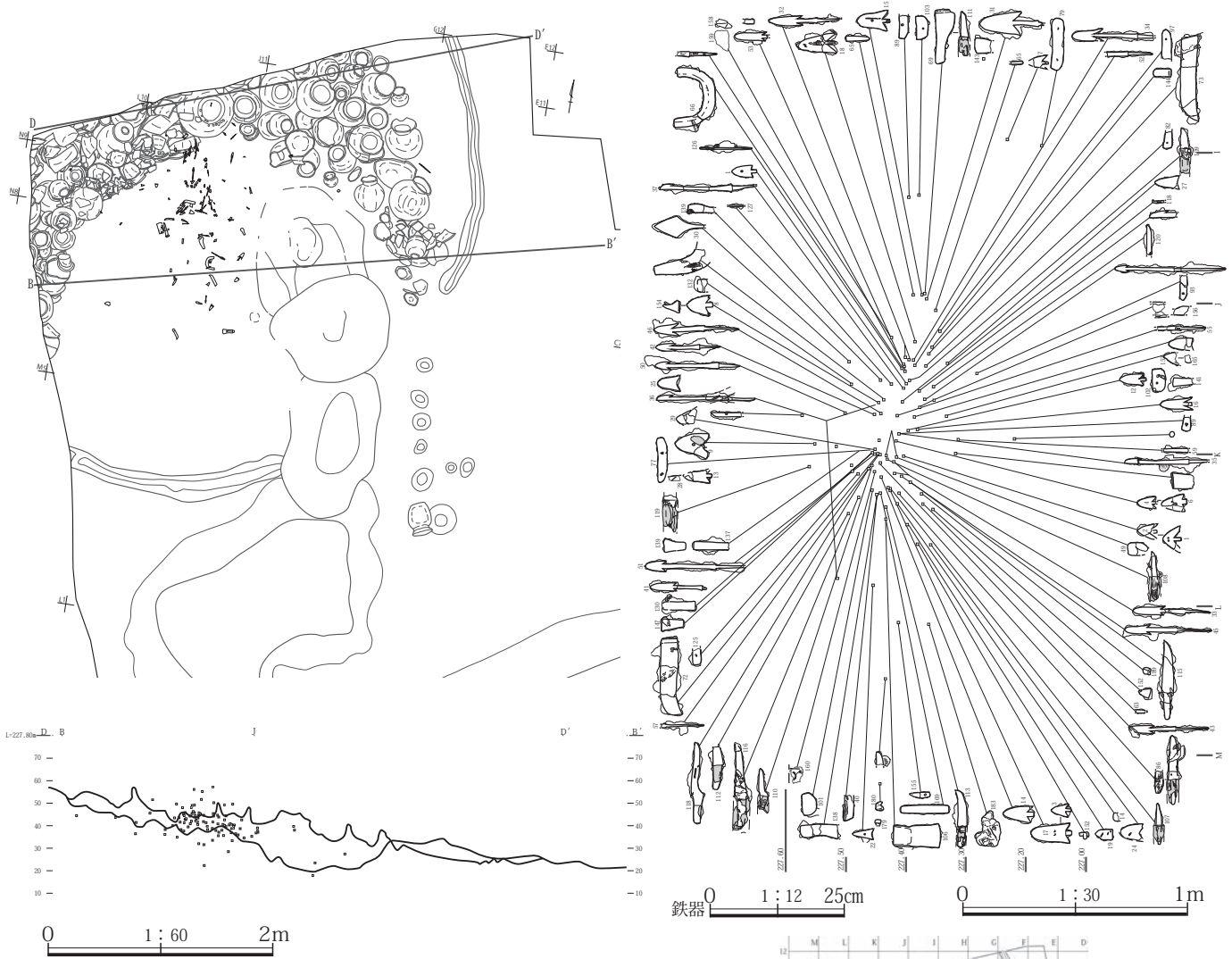
穂摘具の数が多いことも特徴である。群馬県内においては、古墳の副葬品や、竪穴建物などから出土するも極めて限られているが、この3号祭祀遺構では多量の穂摘具が出土しており、注目に値する。同じ穂摘具としては、利根川対岸にある宮田諏訪原遺跡や、富岡市の久保遺跡などで出土しており、祭祀遺構との関連で出土する例が多いことが指摘できる。祭具として祭儀の中で使用されることが多いものとして位置付けられる。

鉄器を製作する際に出る破片が数多く出土しており、素材として再利用するものと考えて素材片として紹介したものが34点ある。また、鉄滓が数点出土しており、当地で、鉄器の生産が行われたことを間接的に示すものである。

以上の鉄器全体に言えることは、まず祭祀遺構からの出土としては極めて数が多いことである。全国の遺跡例から見てもこれだけの数の鉄器を出土している遺跡は少ない。また、鉄器は実用具として使用できるものもあるが、小型化したもののほうが多く、祭儀に使用する祭具として製作・使用した可能性が高いものである。

#### ⑤ 小型土器群集積(第17・18図)

この字形の大型土器群配置後、土器群の南側、西側大型土器群に接するようにして杯・小型壺・高坏などを中心にした小型土器群が2～20段に積み上げられる形で集積されている。これら小型集積の総数は628点で、内訳は、杯528(杯A194、杯B117、杯C210、杯D7)、高杯21、小型甕28、小型壺7、椀4、埴3、須恵器9(高杯3、ハソウ3、小型壺2、台付小壺1)であり、圧倒的に杯が多い。このような土器の組成から見れば、これらの土器が飲食を伴う儀礼で使用された土器である可能性が高い。別の場所で儀礼を行った際に使用した液体の入れものである大型土器群をコ字形に配置した後に、実際に飲食に使用した小型土器を、コ字形配置の大型土器群の内側に積み上げる形で集積を行ったものと想定される。積み上げの順番であるが、大型土器の西側土器群の

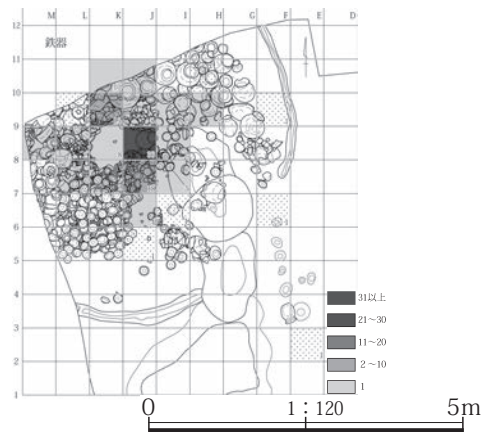


第15図 鉄器出土状況図・垂直分布図・出土度数分布図

西北側から積み上げて西から東へと積み上げ、1列が終わると南側に移りまた西から東へと積み上げていったものと推定している。

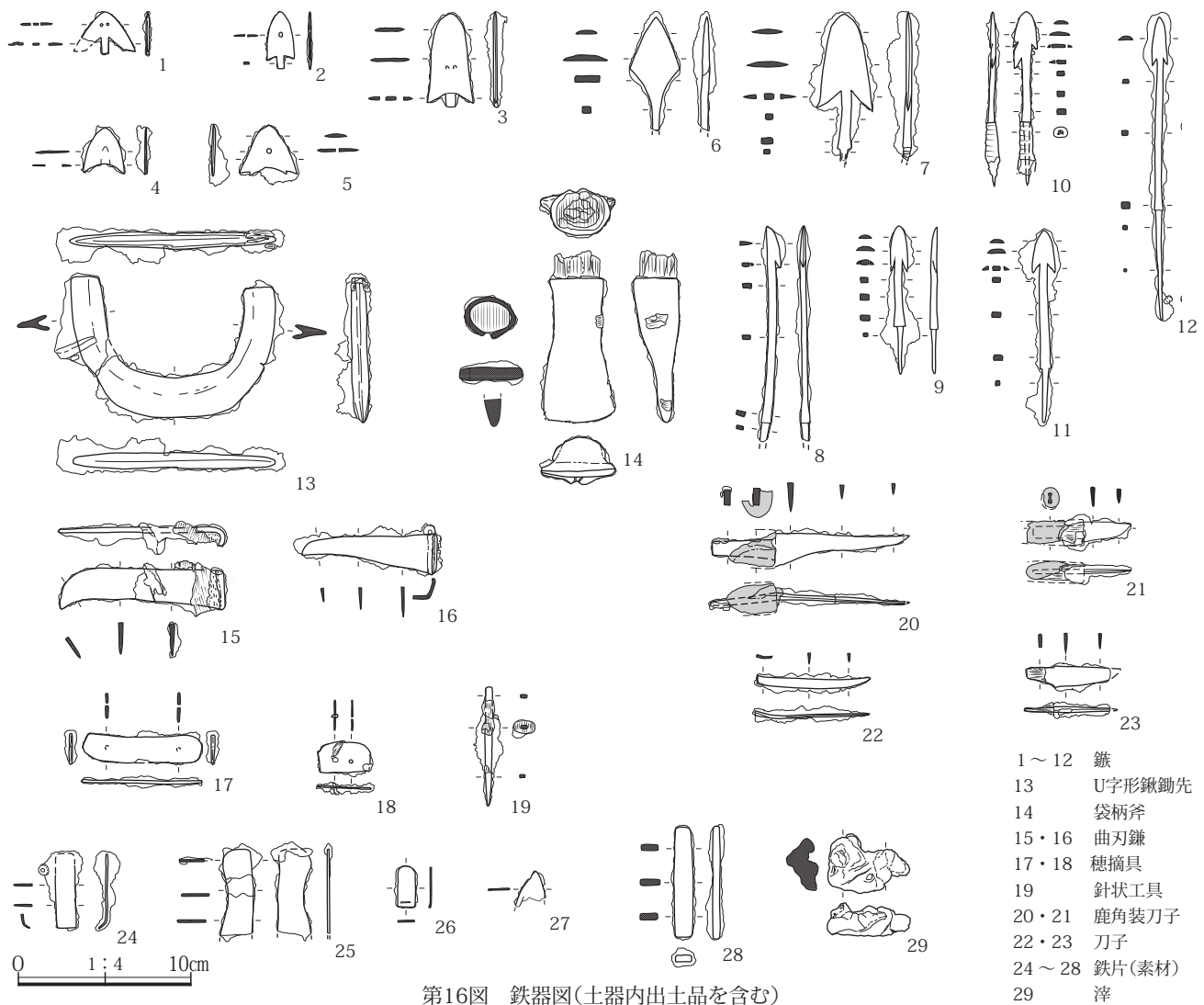
中央大型土器群の須恵器甕群の特に、P115・P637の須恵器大甕の前には空間がある。祭具埋納では数点の埋納はなされているが、その埋納後に表面を土で覆った後には土器を置いていない。周りが土器を密集して置いているのと対照的である。この空間に、有機質の供え物を置いた有機質の台を置いていた可能性がある。ただし、有機質の供え物や台の痕跡は認められないので、あくまで推測である。

集積・積み上げの様子は、第17・18図に示した通りである。これを見ると、土師器杯3形態(杯A(内斜口縁杯)、杯B(内湾口縁杯)、杯C(須恵器模倣杯))が、特定の場所に集中することや、積み上げの際に意識して同一形態の杯をまとめることなどは行っておらず、ランダムに積み上げていっていることが分る。また、積み上げの



際に不安定になるのは分かっているのに、高杯を一番下に埋置することが3例行われている。また須恵器も5例中4例が最下段に置かれており、積み上げの際に、須恵器を一番下に意識して置いていることが分る。また、白玉を中心にした祭具を少数土器の中に入れていたものがあるが、最下段の土器に多いことも指摘できる。

杯のみの積み上げは、高杯・小型壺・小型甕などが混じる積み上げに対して42%で半分以下である。このように飲食をする際に使用した土器群をあまり順序や形態



第16図 鉄器図(土器内出土品を含む)

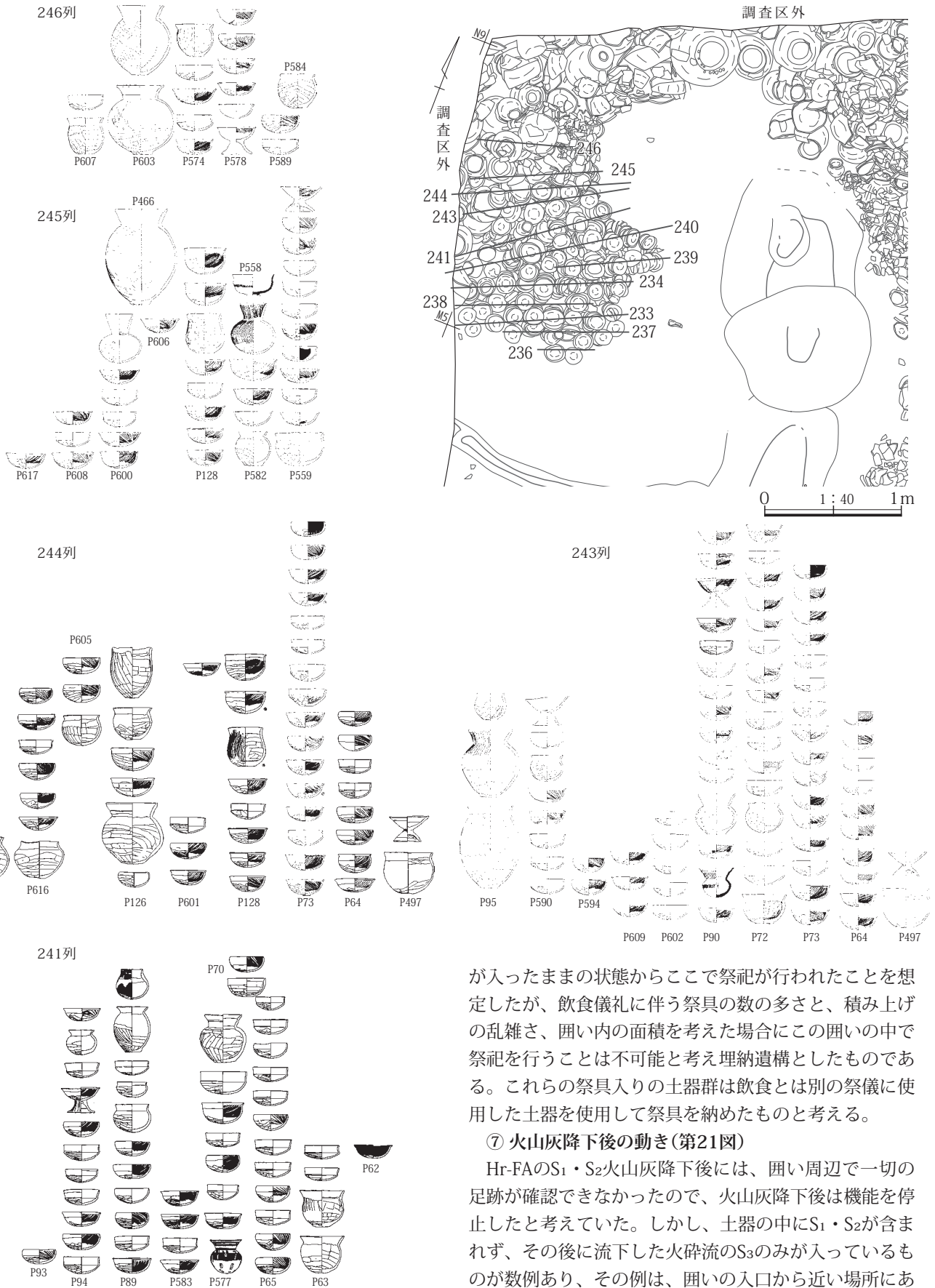
- 1～12 鋤
- 13 U字形鋤鋤先
- 14 袋柄斧
- 15・16 曲刃鎌
- 17・18 穂摘具
- 19 針状工具
- 20・21 鹿角装刀子
- 22・23 刀子
- 24～28 鉄片(素材)
- 29 滓

にこだわらずに次々と積み上げていった様子が、立面図・断面図でのジグザク状に土器を置いていくようなことからもうかがえる。

#### ⑥ 祭具が入る小型土器の配置(第19・20図)

杯を中心とする小型土器の中に祭具が入ったものを1～2個単独あるいは重ね置きする形で配置された。中央の大型土器群のすぐ南側から置かれ、小型土器集積群の東側までの範囲のみに祭具入りの小型土器が置かれている。祭具を納めた例として89例ある。祭具には、白玉を基本として、玉類・ガラス玉・石製模造品・鉄器などを土器の中に納めたままで土器を配置するという行為である。白玉が2,993点、玉類が13点、石製模造品が75点、鉄器39点、ガラス玉30点の5種類の祭具が納められている。4種類の祭具を納めた白玉・石製模造品・鉄器・ガラス玉のセットが4例、白玉・玉類・石製模造品・鉄器のセットと白玉・玉類・鉄器・ガラス玉のセットが2例、白玉・玉類・石製模造品・ガラス玉のセットが1例ある。3種類の祭具を納めた白玉・玉類・石製模造品

のセットが5例、白玉・石製模造品・鉄器のセットと白玉・石製模造品・ガラス玉のセットが3例、白玉・鉄器・ガラス玉のセットと白玉・石製模造品・ガラス玉のセットが1例、2種類の祭具を納めた白玉・石製模造品が8例、白玉・玉類のセットと白玉・鉄器のセットが2例ある。1種類では石製模造品のみが1例、白玉のみが58例ある。これらのセットから見ると、白玉以外の祭具で、土器の中に納めることが多い祭具は、石製模造品と鉄器である。石製模造品の中で土器の中に納める率が多いのが、有孔円板と有孔方板である。有孔円板・有孔方板ともに全体の9割が土器中である。鉄器では、鋤・穂摘具・素材片が多い。特に穂摘具11点、鉄器製作破片(素材片)11点、鋤10点の出土を見ており、鉄器全体の中でそれぞれ25%ずつの比率である。土中に納められたものでもこの3種類の個数が多いが、土器中に納められる祭具においてもこの3種が多く使用されていることを示している。このような多様な祭具が主に杯を中心とした土器に納められている例もあまり無い。調査当初はこの祭具



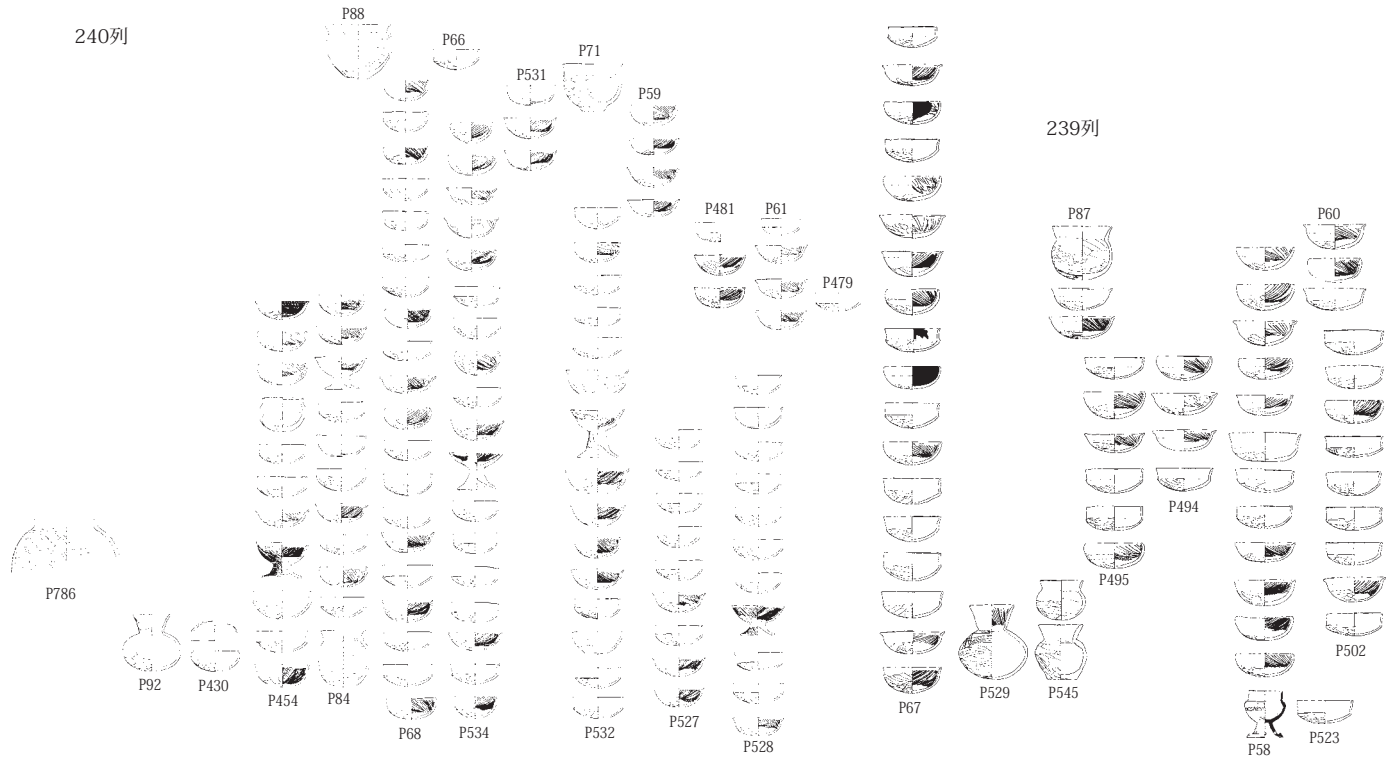
第17図 小型土器積み重ね状況図(1)

が入ったままの状態からここで祭祀が行われたことを想定したが、飲食儀礼に伴う祭具の数の多さと、積み上げの乱雑さ、囲い内の面積を考えた場合にこの囲いの中で祭祀を行うことは不可能と考え埋納遺構としたものである。これらの祭具入りの土器群は飲食とは別の祭儀に使用した土器を使用して祭具を納めたものとする。

⑦ 火山灰降下後の動き(第21図)

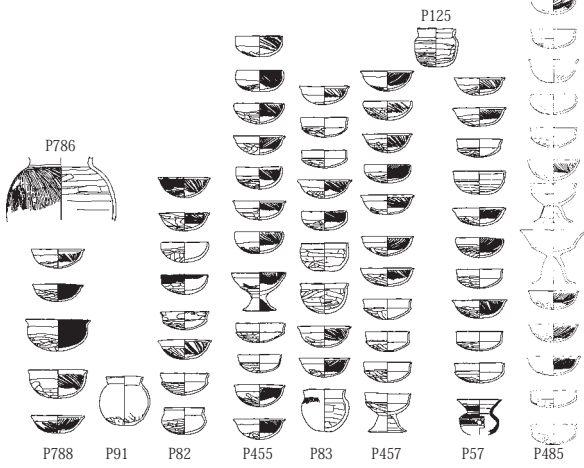
Hr-FAのS<sub>1</sub>・S<sub>2</sub>火山灰降下後には、囲い周辺で一切の足跡が確認できなかったため、火山灰降下後は機能を停止したと考えていた。しかし、土器の中にS<sub>1</sub>・S<sub>2</sub>が含まれず、その後流下した火砕流のS<sub>3</sub>のみが入っているものが数例あり、その例は、囲いの入口から近い場所であり、土器の設置や、鉄器の配置などを行っていることが

240列

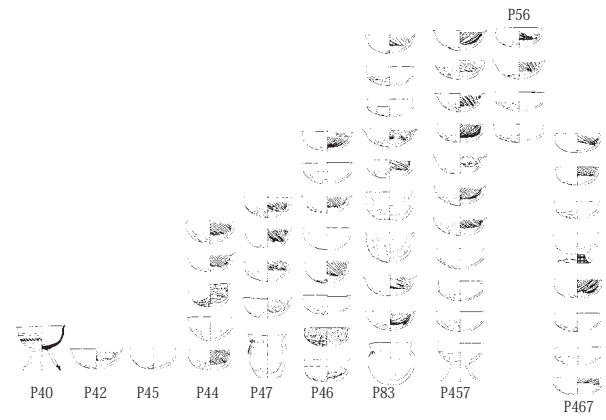


239列

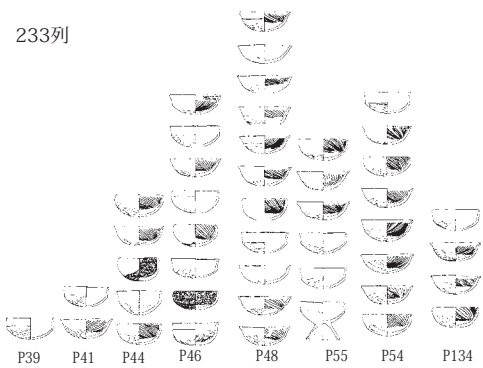
234列



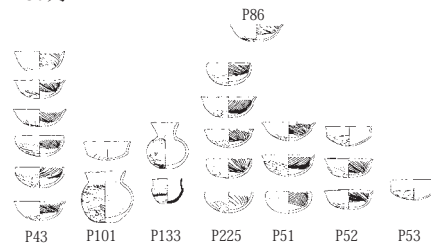
238列



233列



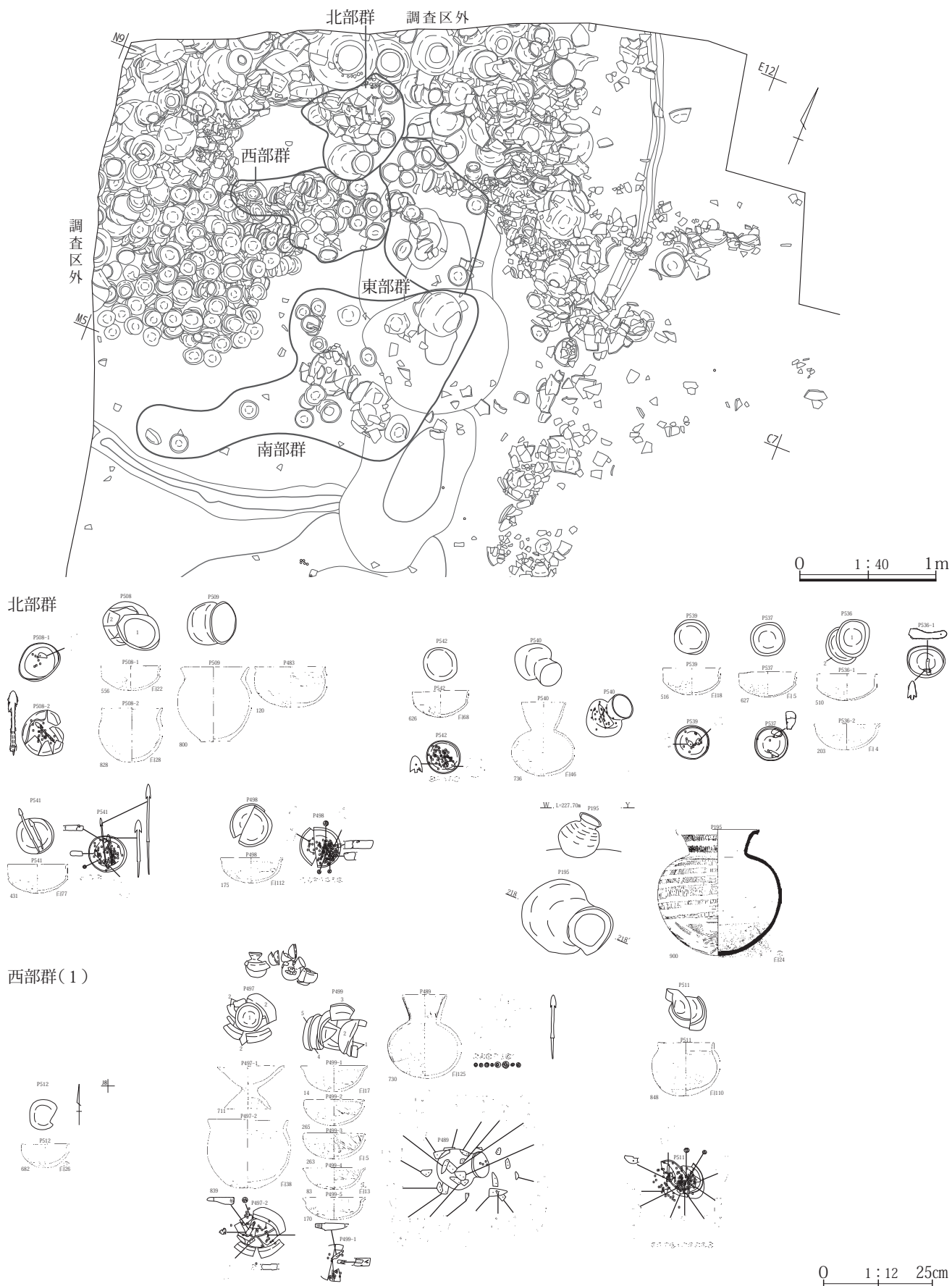
237列



236列

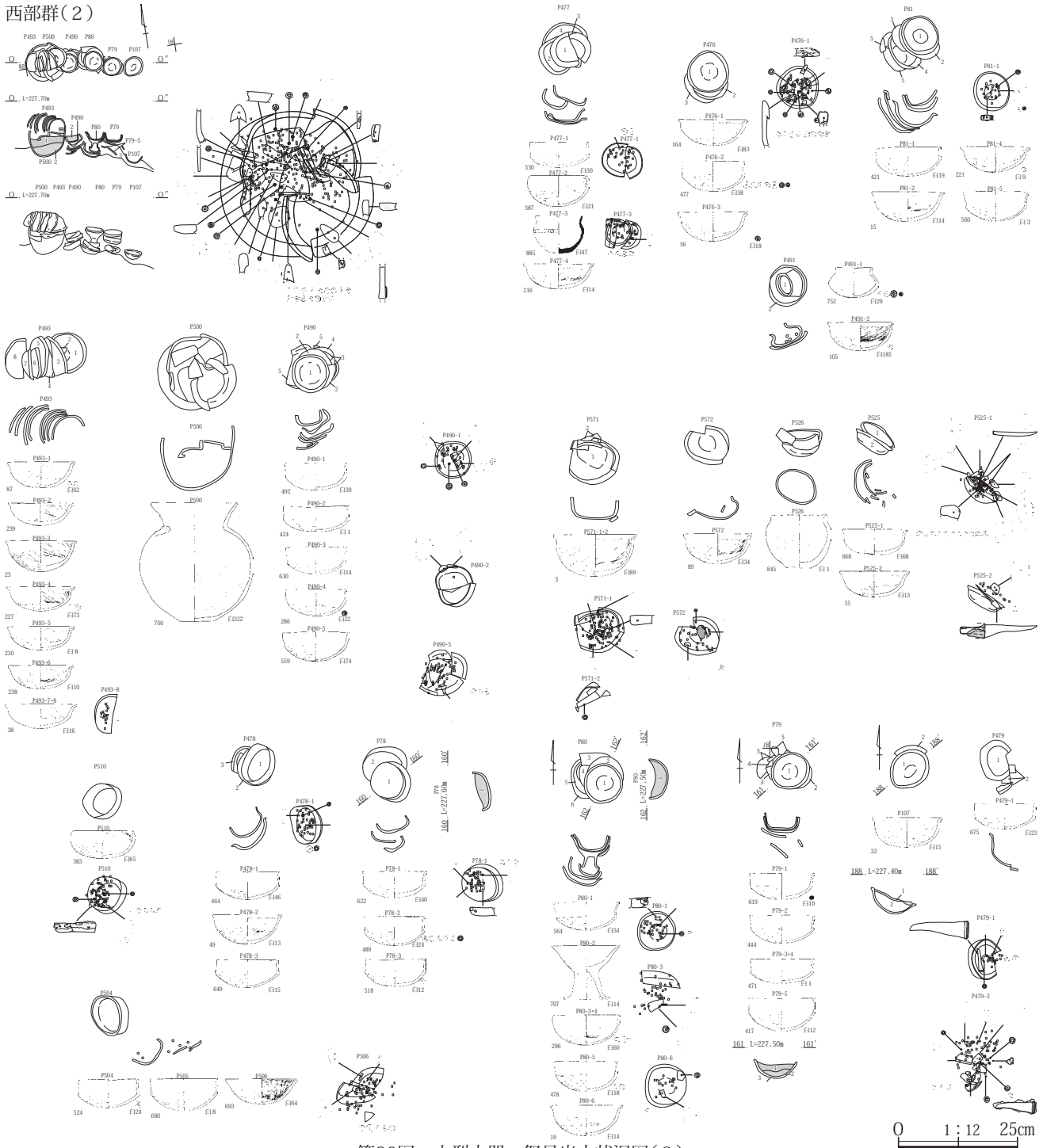


第18図 小型土器積み重ね状況図(2)



第19図 小型土器配置区分図、小型土器・祭具出土状況図(1)

西部群(2)



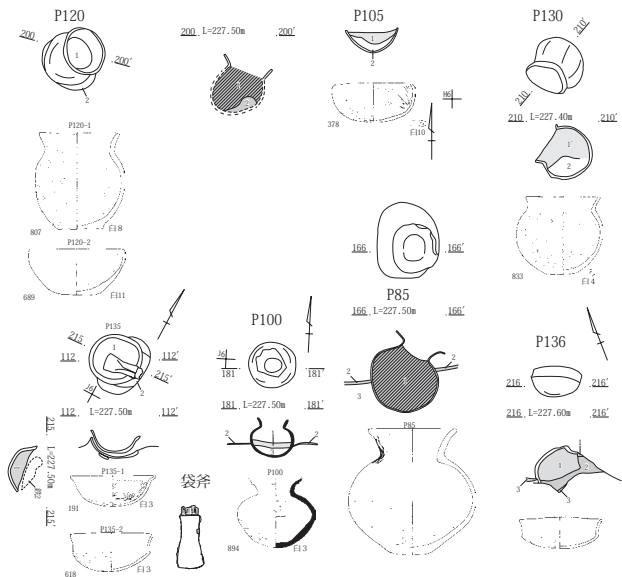
第20図 小型土器・祭具出土状況図(2)

分かった。つまり、祭具埋納後、火山灰が降下した後も、極一部であるが、土器や鉄器を置くことを行っていることが分る。

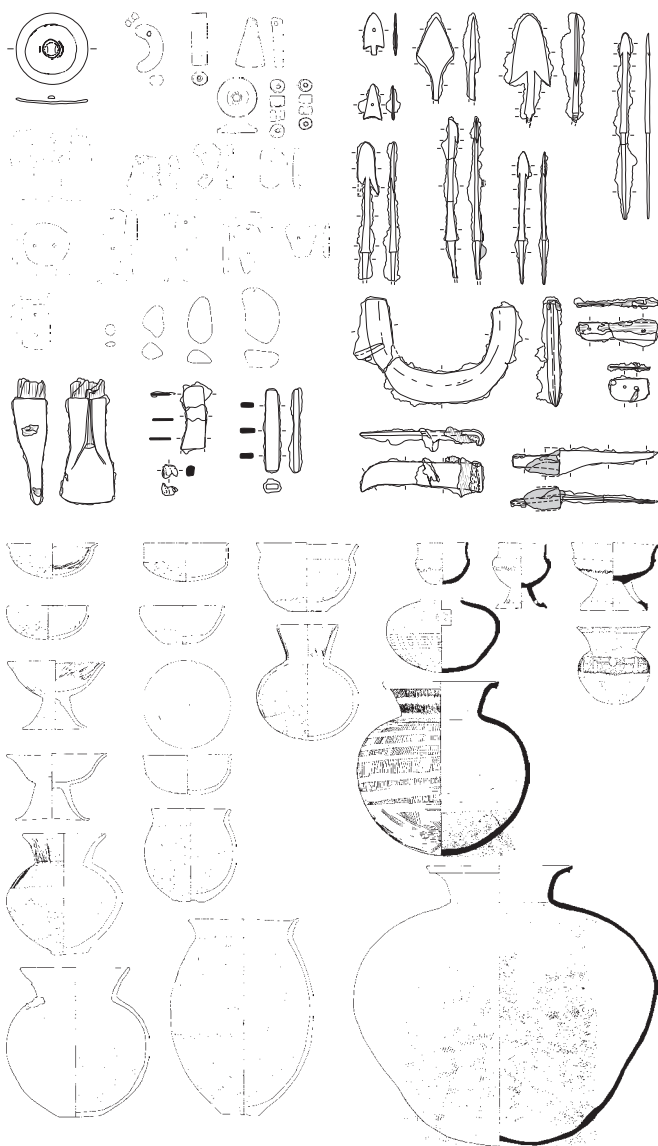
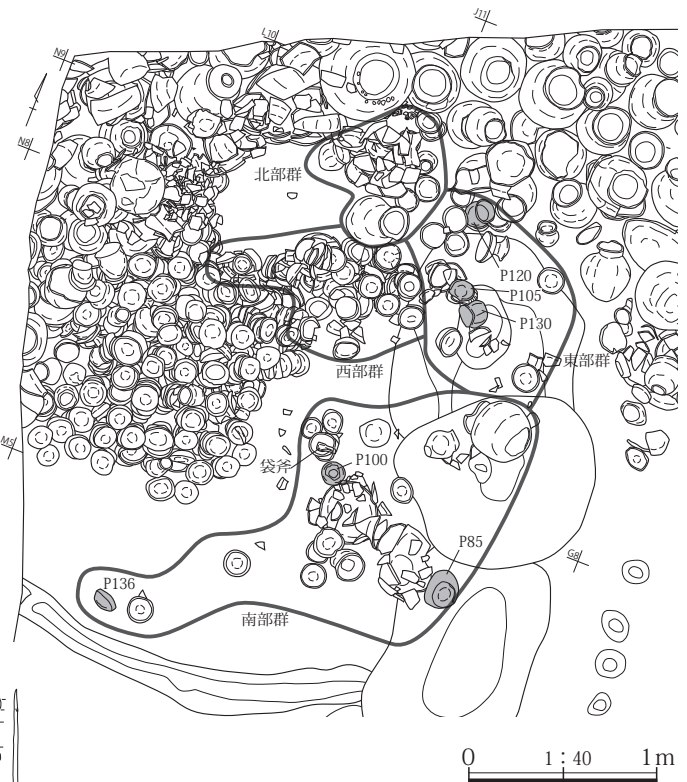
4. 3号祭祀遺構の特徴(杯について)(第22図)

特徴的なのは、金井東裏遺跡3号祭祀遺構において、この時期に杯の中で最新の様相を示す杯C(須恵器模倣杯)が41%で一番多く、次に杯A(内斜口縁杯)が36%、杯B(内湾口縁杯)は21%で一番低い。報告書でも言及

したが、金井東裏遺跡より少し遡る、高崎市下芝天神遺跡第2群器物集積遺構では、杯Aが50%、杯Bが43%、杯Cは7%である。下芝天神遺跡では、杯Aが杯の構成比率の中で一番多く5割を占め、杯Bも4割を占めるのに対して、金井東裏遺跡では、杯Aが36%、杯Bに至っては21%と低い。反対に、杯Cは、金井東裏遺跡で41%と4割を超えるのに対して、下芝天神遺跡は1割未満である。明らかに金井東裏遺跡では、須恵器模倣杯



第21図 S<sub>2</sub>降下後に置かれた土器群・斧と出土位置図



第22図 3号祭祀遺構祭具一式

が主体となっていることが比率から明らかである。下芝天神遺跡と近い組成を示すのが、Hr-FA降下直前という金井東裏遺跡3号祭祀遺構と同時期である宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構で、中心は杯A(42%)と杯B(52%)で、杯C(6%)は少ない。また、同じHr-FA降下直前の中筋遺跡1号竪穴建物からは杯Bのみが出土している。以上上げたことからすると、杯Cの多用は時期的な問題だけではなく、須恵器模倣杯という形態を選択使用していたのが金井東裏遺跡であることが分る。須恵器の技法を模倣して製作した土師器杯11点や土師器高坏2点が当遺跡から出土していることと併せて、新しい土師器の形を須恵器工人との交流の中で採用して製作使用していった姿が想定される。

おわりに 今回の検討により、3号祭祀遺構での祭具・土器の埋納・集積の様子を検討し改めて位置づけを行うことができた。しかし、他遺跡の祭祀遺構との検討がほとんど行えなかった。報告書の段階でも多少の検討を行っているが、今後の課題として、再度他の祭祀遺構との祭礼の目的も含めた比較検討を行う次第である。

註1 また、こちらのミスにより誤字や誤植も多くそれも併せて訂正して記述するものである。

註2 報告書で釘と紹介した鉄製品は、その後の検討の結果、鎌の茎の可能性が高く、釘は3号祭祀遺構から出土していないとの結論になった。

文献

杉山秀宏・大木紳一郎・宮下寛他 2019『金井東裏遺跡<古墳時代編>』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 参考にした遺跡の報告書は省略した。



# 墨書・刻書土器の動向から見た 古代上野国吾妻郡の歴史的展開について

高 島 英 之

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに	6. 記載内容
1. 出土点数	(1)四戸遺跡
2. 器種・器形	(2)石川原遺跡
3. 時期・年代	(3)楡木Ⅱ遺跡
4. 文字記入部位	おわりに
5. 出土状況	

## — 要 旨 —

これまで群馬県吾妻郡内から出土した古代の文字資料は非常に少なく、群馬県教育委員会が1989～98年に刊行した『群馬県出土の墨書・刻書土器集成』(1)～(3)では僅かに6点が掲載されているに過ぎなかった。

近年、八ッ場ダムあるいは上信自動車道の建設事業など、吾妻郡内における大規模開発事業増加に伴って吾妻郡内における発掘調査件数も格段に増えたことによって、吾妻郡内における古代文字資料の出土件数も大幅に増え、集めたところ、2021年3月時点において198点に達している。

現時点において、八ッ場ダム及び上信自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果にかかる発掘調査報告書が全て刊行されているわけではないが、古代の上野国吾妻郡は、3郷しかない小郡であるにもかかわらず、群馬県内では僅か4例しかない白鳳期寺院の遺跡が存在していることなど、山間の地というイメージとは裏腹に、早くから開発された土地であることが知られていた。

古代吾妻郡に関わる既存の文字資料は非常に僅少であるので、小稿では、近年、出土例が急速に増加した墨書・刻書土器の動向から、古代吾妻郡の歴史的な位置づけを試みたいと考える。

### キーワード

対象時代 奈良・平安時代  
対象地域 上野国吾妻郡  
研究対象 墨書

はじめに

良く知られているように、奈良・平安時代の集落遺跡を発掘調査してみつかる文字が記された遺物の圧倒的多数は、土器の器面に墨で文字が記されたものや、篋や釘のような文字が刻みつけられたものである。これらは墨書土器・刻書土器といわれ、貴重な古代の文字資料として注目されてきた。

近年の研究の蓄積によって、これらは、村落内での祭祀や儀礼にあたって用いられたものであることが次第にわかってきた。すなわち、土器に文字を記す行為は、日常什器とは異なるという非日常の標識を施すことであり、祭祀に用いる土器を日常什器と区別し、疫神・祟り神・悪霊・鬼等を含んだ意味における「神仏」に属する器であることを明記したものと言うことになる。

わが国古代における墨書・刻書土器の特質は、以下のようにまとめられる(高島2016)。

- (1)北海道中・東・北部と琉球列島を除いた全国から、現在のところ、約10万点が出土している。
- (2)墨書土器や焼成後刻書土器の文字の記入は基本的に土器の消費地でなされ、焼成前刻書土器の文字の記入は土器の生産地でなされることが一般的であるが、同じ遺跡から出土した両者の文字に密接な関連がある場合もある。
- (3)数量比では刻書土器の出土量は、墨書土器の出土量の1割以下に満たない。
- (4)全国的に見られるが、とりわけ東日本、中でも関東地方出土の例が多く、当該期東国村落の特質の一つである。
- (5)一文字だけ記されたものが圧倒的多数であり、記された文字の意味を如何様にでも解釈可能である。
- (6)早い例では、すでに8世紀前半に出現、村落で本格的に広まっていくのは8世紀後半以降で、9世紀に爆発的に増加し、飛躍的展開を遂げ、10世紀中葉以降は急速に減少していく。
- (7)8世紀代の墨書・刻書土器の文字は概して小振りで書体も端正であるのに対し、9世紀になると次第に文字も太く大きくなり、字形も崩れ、稚拙な書体のものが増えていく。
- (8)それぞれの出土遺跡ごとに、集落の変遷に伴って墨書・刻書土器の分布が推移していく様子や記された文字が変化していく。

なお、墨書・刻書土器を取り扱う場合には、それらが考古学的な調査によって出土した資料であり、それらの出土状況や形状についての検討が、資料の特質や、記された文字内容の意味を正しく解釈し、解明する上で、重要な意味を有することは今更、言うまでもないであろう。これまでも、墨書・刻書土器に記された文字内容だけを

安易に取り出して、史料として利用することは厳しく戒められてきた。しかしながら、それらが文字資料である以上、記された文字内容の解釈は、最重要の課題であることは動かし難い。出土文字資料に記された文字内容を正しく解釈することによって、出土した遺跡やその周辺地域の歴史的特質がはじめて解明できるわけである。出土文字資料を歴史学の史料として有効に利用する上でも、正確な釈読こそが何より重要な行為であることは申すまでもあるまい。

近年、上信自動車道吾妻西バイパスや八ッ場ダム建設等の大規模開発事業に伴って、群馬県吾妻郡内における発掘調査事例が格段に増加したことを受けて、当該地域における古代の墨書・刻書土器の出土事例も格段に増えてきた。そのいくつかの遺跡の発掘調査報告書を纏めるに際して、解説や報文執筆の依頼を受ける機会が多く(高島2008a、2008b、2019、2020)、私自身も身をもって感じるどころが大きかったので、この機会に群馬県吾妻郡出土の墨書・刻書土器を集成し、その動向を検討することによって、古代上野国吾妻郡の特質を理解するための緒に着くことが出来るのではないかと考えた。

管見の限り、2021年3月現在において群馬県吾妻郡内に所在する遺跡から出土した墨書・刻書土器は、18遺跡から198点であった<sup>(1)</sup>。

周知の通り、大宝令制による上野国は、碓氷、片岡、甘楽、緑野、那波、群馬、吾妻、利根、勢多、佐井、新田、山田、邑楽の13郡から構成されていたが、和銅4(711)年に甘楽郡・緑野郡・片岡郡の3郡から6郷300戸を割いて多胡郡が新設され、14郡になった。

律令制下の吾妻郡は、『和名抄』名市博本に「アカツマ」と訓が付けられ、上野国北西端一帯に位置する郡で、郡の範囲としては上野国内では利根郡と並んで最大級ではあるが、利根郡同様約8割は山地に立地し、長田、伊参、大田の3郷からなる小郡である。3郷とも現在の東吾妻町、中之条町、長野原町の吾妻川に沿った平地に位置していたものと考えられる(関口2013a)。『日本書紀』景行天皇40年条に、日本武尊が碓日嶺に登って亡妻弟橘媛を偲んで、東南に向かって「吾孀はや…」と嘆いたことから、碓日嶺の東を「吾孀」と呼ぶようになったとする伝承を載せる。また『政事要略』八二糾弾雑事所載の貞観4(862)年4月10日付太政官符には「吾妻郡擬領上毛野坂本朝臣直道」の名が見える。『続日本紀』天平勝宝元(749)年7月条に上野国分寺建立にかかる献物叙位された上野国碓井郡人上毛野坂本朝臣諸弟の名がみえるので、碓井郡に本貫を有する在地豪族が平安時代前期には郡の擬大領をつとめていたことが判明している(高島2007、関口2013a)。

長元3(1030)年上野国不与解由状案諸郡官舎条吾妻郡項に見える「伊参院」「長田院」という施設は、延暦14

(795)年閏7月及び同9月付太政官符で定められた「郷倉」と考えられ、「伊参院」が置かれた伊参郷は、中之条町伊勢町伊参を遺存地名と見て、同地一帯が故地と考えられている(前澤1978・1996・2011・2009・2015・2017)。

このように、律令制下の吾妻郡については既存の史料が非常に少なく、在地豪族の動向や郡の成立についても不明な点が多い。断片的な史料ではあるが、近年の発掘調査の進展によって、資料数が増加した墨書・刻書土器の動向から古代吾妻郡の様相や特質を読み取ることが出来ればと考えて、この貧弱な小文を草することにした次第である。

小稿で採り上げた資料は、2021年3月末現在で刊行されている発掘調査報告書に掲載されたものに限っている。何分にも個人で集成したものであるため、遺漏が少なくないことを怖れるところであり、今後も、継続的に補遺を図っていきたく考える。

また、表1に示した各遺跡出土墨書・刻書土器の積文の中には、各発掘調査報告書に掲載された積文とは異なっているものも存在している。小稿を草するに際しては、可能な限り原資料に当たって積文を検討したので、私の責任において読み替えた、飽くまでも私見によるものを含んでいることを予めお断りしておく。なお、土器そのものの年代観については、各発掘調査報告書に拠った。また、本文中で、墨書・刻書土器の資料に言及する場合には、表1の番号によって示した。

## 1. 出土点数

前述したように2021年3月末現在、群馬県吾妻郡内から出土した墨書・刻書土器は、管見の限り18遺跡から198点であった(表1)。その中の60点が全く判読不能なものであった。

出土した遺跡を自治体別に見ると、東吾妻町3遺跡、草津町1遺跡、中之条町1遺跡、長野原町13遺跡である(表3)。長野原町内の遺跡に極端に集中している点は、八ッ場ダム建設工事に伴う発掘調査が広範囲に行われ、調査対象面積が格段に大きいことに因るもので、古代における動向を反映したものでは全くないことに注意しておかなければならない。吾妻郡内において最も広く安定した平地であり、現在に至るまで郡内における市街地の中心である中之条盆地を擁する中之条町は、上信自動車道や八ッ場ダムの大規模開発事業の対象からは外れているために発掘調査件数は却って少なく、それに伴って、現時点における墨書・刻書土器の出土件数も必然的に少ないだけのことであり、古代における居住地の僅少さに直接結び付いている訳ではない。

刻書土器は、東吾妻町三島の四戸遺跡出土の9世紀後半の須恵器甕の体部外面に焼成前に倒位で「石」と記され

た11及び8世紀の須恵器杯の底部外面に焼成前に「丈」と記された16、同唐堀C遺跡出土の9世紀前半の須恵器杯の底部外面に焼成前に「物」と記された18、長野原町川原畑の上ノ平I遺跡出土の10世紀前半の須恵器杯の体部内面に焼成前に「×」と記された32、長野原町川原湯の石川原遺跡出土の9世紀後半の須恵器杯の底部内面に焼成後に「十」と刻書された87、長野原町林の中棚II遺跡出土の10世紀前半の須恵器杯の底部内面に焼成前に「山」と記された157の僅かに6点であり、墨書土器が192点、97%と圧倒的多数を占めている。

確かに、全国的に見ても奈良・平安時代における墨書土器と刻書土器の比率は概ね墨書土器9に対して刻書土器1程度の比率ではあるが、1郡規模において墨書・刻書土器を集成した際に、これほど墨書土器に偏っていることは希有であり、そのこと自体が吾妻郡内出土墨書土器の特質と言える。なお、吾妻郡内出土刻書土器6点の内、5点が焼成前刻書、1点が焼成後刻書は長野原町川原湯所在の石川原遺跡出土の87のみである。

出土遺跡別に見ると、最も多くの墨書・刻書土器が出土したのは長野原町川原湯の石川原遺跡で、墨書土器70点、刻書土器1点の計71点が出土している。次いで、長野原町川原畑の上ノ平I遺跡で、墨書土器23点、刻書土器1点の計24点が出土している。さらに東吾妻町三島の四戸遺跡から墨書土器14点、刻書土器2点の計16点、長野原町林の林宮原II遺跡から墨書土器14点、同中棚II遺跡から墨書土器13点、同楡木I遺跡から墨書土器12点、同楡木II遺跡から墨書土器14点が出土している。それらの遺跡以外の11遺跡からの墨書・刻書土器の出土数はそれぞれ10点以下であった(表2)。

長野原町川原湯の石川原遺跡からの出土が突出して多いが、石川原遺跡を含めて、これら吾妻郡内の墨書・刻書土器出土遺跡は、すべて堅穴建物を主体とする典型的な集落遺跡の様相を示すような遺跡ばかりである。吾妻郡内における、現在までの墨書・刻書土器出土遺跡は、古代における文字文化の中心である官衙や寺院そのものの遺跡と考えられるようなものは皆無である。

## 2. 器種・器形

また、器種別では、土師器が、東吾妻町三島の四戸遺跡出土の2・4・5・17と同唐堀C遺跡出土の22・24の6点、黒色土器が唐堀C遺跡出土の19、長野原町川原湯の石川原遺跡出土の56～65・88と同下湯原遺跡出土の126・127と長野原町林の中棚II遺跡出土の164の14点、灰釉陶器が長野原町林の下田遺跡出土の135の1点で、それ以外の177点は須恵器である。須恵器への極端な偏りは特筆すべきであろう。

墨書土器の出土が顕著な関東地方の奈良・平安時代集落遺跡出土の資料の全般的な傾向では、概して土師器の

方が多いという特色がある。ただし、文字が記された土器の器種は、その遺跡における出土土器全体の傾向と同様なのであり、その地における同時期の須恵器・土師器の割合に一致していることが多く、一般的には、文字を記すにあたって須恵器あるいは土師器が意図的に選ばれていたケースは非常に少ない。吾妻郡内の遺跡においては、須恵器の流通・消費量が一般に比べて格段に高かったために、文字が記された土器の圧倒的多数が須恵器で占められたというだけのことであろう。

実際、古代の須恵器窯が多い埼玉県中西部地域、東京都多摩地域、静岡県西部地域、愛知県中部地域、岐阜県南部地域、島根県西部地域、福岡県北部地域等においては、奈良・平安時代集落遺跡出土土器の中における須恵器の占める割合の高さに比例して、墨書・刻書土器にも須恵器が多い傾向が指摘出来る(藤田2002、高島2005)。

吾妻郡域から出土する奈良・平安時代の須恵器の供給源については、現在までのところまだ明確には解明されていないが、高崎市の旧倉渕村地域を経由すれば、上野国南西部における当該期の一大窯業生産地帯である安中市秋間地区方面からの搬入が可能であり、また、当該期の須恵器窯が多く発見されている利根・沼田地域からの流通も想定可能である。しかしながら、吾妻郡内における奈良・平安時代の集落遺跡においては、墨書・刻書土器に限らず、当該期の土器の中における須恵器が占める比率の圧倒的な高さを鑑みるならば、現在のところはまだ1基も発見されていないものの、吾妻郡内に須恵器の生産拠点が存在しており、郡内の奈良・平安時代集落遺跡から出土する須恵器の多くは、郡内にて供給されたと見るのが自然かもしれない。吾妻郡内からは、すでに古代の瓦窯は発見されており、山間の傾斜地が多く、原料となる粘土や燃料となる木材の供給という面からも窯業生産には適した地域である。比較的近い地域に須恵器の供給源が存在していたと見るのが自然であろう。

器形は、須恵器・黒色土器を問わず、東吾妻町三島の四戸遺跡出土の11が9世紀後半の須恵器甕の体部外面に焼成前に刻書されたものであること、同唐堀C遺跡出土の24が土師器小型甕の頸部画面に墨書されたものであること以外は、それ以外の196点すべてが供膳具である杯・椀・皿・盤・蓋等である。この点も全国的な墨書・刻書土器の傾向と完全に合致するところである。

なお、墨書・刻書土器については、杯や椀のような供膳具か、甕のような貯蔵具かというような器形の使い分けは見られる場合があるものの、須恵器か土師器かというような器種の使い分けは全く意識されていないことも判明している(高島2016)。

### 3. 時期・年代

今回、集成した吾妻郡内の遺跡から出土した198点の墨書・刻書土器の年代は、8世紀～10世紀のものである(表4)。文字が記された土器そのものの年代観から見れば、9世紀代と考えられるものが106点、10世紀代と考えられるものが71点、他に、9～10世紀のものであることには間違いはないが、年代観を細かく絞り込めないものが16点存在している。集落遺跡出土の墨書・刻書土器は、概ね9世紀をピークとし、10世紀に入ると急速に減少していくという傾向が指摘されているが、その点から見れば、10世紀代の資料が比較的多いことは、特筆すべき点であると言えよう。全国的な傾向として墨書・刻書土器が急速に減少していく10世紀代のものが比較的多くみられるところに、聊かの特徴が見出せるように感じられなくもない。ただし、土器そのものの年代観を絞り込むことが出来ずに9～10世紀代と大まかに位置付けられた資料も少なくない上に、10世紀後半代に位置付けられた墨書・刻書土器は、長野原町川原湯の上ノ平I遺跡出土の35と、長野原町川原湯の下湯原遺跡出土の126と、同遺跡同遺構出土の127の計3点に止まっている。

また、8世紀代のもは僅か5点に過ぎず、東吾妻町三島の四戸遺跡から出土した3点(2・3・16)と同唐堀C遺跡から出土した2点(22・24)のみである。これらの墨書・刻書土器は、現在までのところ、吾妻郡内における唯一の8世紀代の文字資料と言うことになる。

四戸遺跡及び唐堀C遺跡から、吾妻郡内で数少ない8世紀代に遡る文字資料が出土した背景としては、群馬県内において4箇所しか発見されていない白鳳期創建の本格的寺院の遺跡の一つであり、郡家近接寺院であったと考えられる東吾妻町金井の金井廃寺に比較的近い位置にあることや、四戸遺跡からは全国的にも出土事例が極めて稀な、ほぼ完形に近い大型の奈良三彩短頸壺が竪穴建物から出土していることなど、当該期におけるごく一般的な集落遺跡とは異なる様相を呈している点なども考えられよう。

これらの点から見れば、吾妻郡内から出土した198点の墨書土器の年代幅は、8世紀から10世紀後半の200年間に亘るとは言え、8世紀代の資料5点と10世紀後半代の資料3点は、ほぼ例外的な資料と位置付けることが出来、殆どのものは9世紀～10世紀前半の間に収まっていると言って良く、全国的な墨書・刻書土器の趨勢は固より、群馬内における墨書・刻書土器の傾向ともおおむね合致していると言えるだろう。

### 4. 文字記入部位

吾妻郡内の遺跡から出土した墨書・刻書土器198点の文字記入部位の内訳は、表4に示した通りである。

体部のみに記されているものが104点、底部のみに記されているものが69点、底部と体部の双方に記されているものが8点である。なお、これらの他に、体部内面から底部内面にかけて記されたものが、長野原町林の林宮原Ⅱ遺跡出土の137と、同楡木Ⅰ遺跡出土の175の2点存在している。吾妻郡内遺跡出土の墨書・刻書土器においては、体部と底部に文字が記される比率は、体部記載のものが圧倒的多数とすることになるが、この傾向も関東地方の集落遺跡から出土する9～10世紀の墨書土器の全般的な傾向と概ね合致している。

椀・杯の底部に文字が記されたもの77点の内、内外面2箇所記されたものが20点出土している。東吾妻町三島の唐堀C遺跡出土の20、長野原町川原湯の石川原遺跡出土の54・96～98・101・105・114・115、長野原町林の林宮原Ⅱ遺跡出土の138、同林宮原Ⅳ遺跡出土の151、同中棚Ⅰ遺跡出土の156、同中棚Ⅱ遺跡出土の165・168・169、同楡木Ⅰ遺跡出土の173・174、同楡木Ⅱ遺跡出土の184・195などである。

土器に文字が記入された時期と土器製作の時期との間には、然程大きくはないものの、ある程度の時間差が生じている可能性はあながち否定出来ないが、その点を考慮に入れたとしても、底部に文字が記されたものは、2・5・15・16・18・20・22・23・39・54・55・73・74・76・79・86・87・90～93・95・97～101・104～106・108・114・115・118・119・128・138・141・148・149・151・152・173・174・179・182・183など9世紀代のものが顕著であり、体部に文字が記されているものは29～32・35～37・56～72・83・84・109・110・126・127・131～134・155・159～162・164・166・185・186・188～190・192～194と10世紀代のものが多めであるという大まかな傾向が認められる。

言い換えれば、古代吾妻郡においては、必ずしも例外も少なくないものの、9世紀代には主に底部に、10世紀になってからは概ね体部へと、それぞれ文字を記入する傾向が強かったということが出来る。もちろん、当時の人々の認識には、9世紀とか10世紀という時代区分の認識が存在している訳がないので、時代を経るに従い、次第に、土器に文字を記入する位置が、土器の底部から体部へと変化していく傾向にあったということになる。

時期によって記された文字の種類や字形・書体が変わるといえることは、これまでも少なからず指摘されてきたところではあるが(平川2000b)、これほど明確に、文字記入位置が年代によって変化することが明確に指摘出来たことは、稀有な事例として特筆すべきであろう。

## 5. 出土状況

吾妻郡内の遺跡から出土した墨書・刻書土器198点の内、圧倒的多数の149点が竪穴建物からの出土である。

東吾妻町三島の唐堀C遺跡出土の22・23、長野原町川原湯の石川原遺跡出土の111・112の計4点がそれぞれ土坑から出土しているが、竪穴建物から出土した149点と、前述の土坑出土の4点以外のものは、遺構外からの出土であった。

竪穴建物からの出土が主である点も、東日本各地における奈良・平安時代の集落遺跡出土の墨書・刻書土器の全般的な傾向と全く合致している。各遺跡における墨書・刻書土器出土竪穴建物の分布状況を見ると、墨書・刻書土器が出土した竪穴建物が、調査対象地内の特定のエリアに集中しているという訳ではないようである。また、全般的な傾向としては、特定の文字が同じ竪穴建物から出土するような事例は少なくないが、群馬県吾妻郡内の遺跡については、特定の文字が出土した竪穴建物が、集落内の特定のエリアに集中しているというような傾向も全く見出すことは出来なかった。関東地方における当該期の大規模集落遺跡では、特定の文字が記された資料が出土した竪穴建物が、集落内の特定のエリアにある程度集中し、出土文字別のグルーピングが可能で、特定の文字を「標識」とした単位集団の分布論が展開できるような事例も少なくないのであるが(平川2000b)、吾妻郡内において最も多量の71点の墨書・刻書土器が出土した石川原遺跡においてさえ、そのような傾向は全く見られなかった。

なお、多くの遺跡において、一棟の竪穴建物から複数点の墨書・刻書土器が出土している事例が見られる。

16点の墨書・刻書土器が出土した東吾妻町三島の四戸遺跡においては、2区39号竪穴建物から出土した7～9の3点、2区61号竪穴建物から出土した13・14の2点で、いずれも墨書土器である。2区39号竪穴建物出土の8・9は、同一遺構から同一文字が記された墨書・刻書土器が複数点出土した事例である。

24点の墨書・刻書土器が出土した長野原町川原湯の上ノ平Ⅰ遺跡では、1号竪穴建物から30・31の2点、23号竪穴建物から38～42の5点、48号竪穴建物からは43・44の2点が出土した。5点の墨書土器が出土した23号竪穴建物出土の38・40が同一遺構出土の同一文字の墨書土器の事例である。

71点と、吾妻郡内では最も多くの墨書・刻書土器が出土した長野原町川原湯の石川原遺跡においては、27号竪穴建物から56～59の4点、30号竪穴建物から60～67の8点、31号竪穴建物から68～70の3点、40号竪穴建物から73～75の3点、43号竪穴建物から76～82の7点、48号竪穴建物から83～84の2点、60

号竪穴建物から86～87の2点、81号竪穴建物から91～93の3点、87号竪穴建物から94～106の13点など、1棟の竪穴建物から複数点の墨書・刻書土器が出土している。このように、いくつかの竪穴建物から、それぞれ複数点の墨書土器が出土していることは特筆すべきことである。また、同じ竪穴建物から出土した墨書土器には同じ文字が記される傾向が非常に強いことが、特徴として指摘出来る。

同一文字が記された複数の墨書土器が同一遺構から出土した事例としては、他に、長野原町林の中棚Ⅱ遺跡の16号竪穴建物から須恵器椀・杯底部内面に「赤家」、底部外面に「赤」と墨書されたものが165・169の2点、長野原町林の楡木Ⅰ遺跡2号竪穴建物から須恵器杯底部・底部に「佐」と記されたものが173・174の2点、楡木Ⅱ遺跡46号竪穴建物から須恵器椀・杯底部・体部に「三家」と記されたと考えられるものが186・187の2点、同遺跡72号竪穴建物からは須恵器杯底部外面に「佐」と記されたものが188～190の3点、等がある。

他に、長野原町川原湯の下湯原遺跡A1区2号竪穴建物、長野原町林の下田遺跡4号竪穴建物(130・131)、同林宮原遺跡SI05竪穴建物(137～144)とSI06竪穴建物(145～149)、同林宮原Ⅷ遺跡SI08竪穴建物(152・153)などの遺構から複数の墨書土器が出土しているものの、同一文字ではない。

集落遺跡出土の墨書・刻書土器に記された文字が意味するところとしては、従来、それぞれの単位集団における標識的文字、例えるならば、一面としては後世の「屋号」に類するようなものであった可能性が高いものと見られてきたが(関1994)、吾妻郡内の遺跡における墨書・刻書土器について見れば、竪穴建物ごとに同じ内容の文言が記された事例が多いことから、竪穴建物単位を基礎とする単位集団の存在を想定することが可能であり、記された文字はそれぞれの単位集団の標識的文字であったと解釈することが可能であろう。

## 6. 記載内容

墨書土器の記載内容については、以下、比較的まとまった量の墨書・刻書土器が出土した東吾妻町三島の四戸遺跡、長野原町川原湯の石川原遺跡、長野原町林の楡木Ⅱ遺跡出土の事例を採り上げて検討することにした。

### (1) 四戸遺跡

東吾妻町三島に所在する四戸遺跡は、上信自動車道吾妻西バイパスの建設に先立って発掘調査され、古代の主な遺構としては掘立柱建物8棟と竪穴建物建物54棟が検出され、合計で2～17の16点の墨書・刻書土器が出土した。検出された奈良・平安時代集落の規模から見れば、墨書・刻書土器の出土量は非常に少なく、当該期出

土器総量に占める割合は極めて少ない。

16点中、刻書土器は3区遺物集中出土の16と2区48号竪穴建物出土の11の2点のみで、いずれも土器の焼成前に刻書されたものである。年代別では、8世紀代のものが2・3・16の3点、9世紀後半のものが4～6・10～15・17の10点、10世紀代のものが7～9の3点である。器形は9世紀後半の2区48号竪穴建物出土の11が須恵器甕である以外、その他の15点はいずれも供膳具である。これらの点は、全国的な墨書・刻書土器の傾向と完全に合致している。

土器そのものの年代観が8世紀のものは、1区28号竪穴建物出土の2、1区遺構外出土の3、3区遺物集中出土の16の僅か3点に過ぎないため、出土状況について、然したる特徴を見出すことは出来ないが、9～10世紀のもの12点の内、10点が2区の竪穴建物からの出土である。一見、平安時代の墨書・刻書土器は2区に集中しているように見えるが、これは9～10世紀の竪穴建物が2区に集中しているからであって、墨書・刻書土器出土の遺構が特定箇所に集中している訳ではない。竪穴建物からの出土が主である点も、9世紀以降のものが多という点も、東日本各地における奈良・平安時代の集落遺跡から出土する墨書・刻書土器の傾向と全く合致している。

#### ①「寺」

8世紀の墨書土器である1区28号竪穴建物出土の2と1区遺構外出土の3の2点は、器種・器形・文字記入部位・方向のいずれも異なっていないものの、いずれにも「寺」の1文字が記されている。また、2区43号竪穴建物出土の10(9世紀後半)は、残画から見て「寺」の文字の下半分の「寸」の部分、もしくは「寺」の文字の省画としての「寸」の可能性もある。ただし、「寸」は「村」の省画である可能性もあるので、現状では「寺」の文字が記されたものと直ちに断定することは出来ないが、出土地点は異なるとは言え、明瞭に「寺」と記された墨書土器が2点出土し、さらにもう1点、「寺」の可能性を有する文字が記された土器が出土していることになる。

四戸遺跡の北東約5kmには吾妻郡内唯一の本格的な古代寺院の遺跡であり、群馬県内では現在までのところ4箇所しか確認されていない7世紀後半頃の創建と考えられる金井廃寺(東吾妻町金井)が位置している。発掘調査によって全容が解明されたわけではないが、上野国内において最も重要な寺院の一つであったことは間違いなく、しかも、上野国中央平野部から離れた山間の吾妻郡の地に、早くも7世紀後半には本格的な寺院が建立されていたことは、注目に値する。

金井廃寺、前橋市総社町の山王廃寺、伊勢崎市上植木町の上植木廃寺、太田市寺井町の寺井廃寺等、上野国内4箇所の7世紀創建寺院の遺跡のうち、前橋市総社町に

所在する山王廃寺からは「放光寺」・「方光」と記された文字瓦が出土し、高崎市山名町所在の山ノ上碑や「長元三年上野国不与解由状案」（所謂「上野国交替実録帳」、東京国立博物館蔵九条家本『延喜式』裏書）定額寺項に見える放光寺の遺跡であることはほぼ確実となったものの、「長元三年上野国不与解由状案」定額寺項に見える法林寺、弘林寺、慈廣寺の3箇寺については、現在までのところ、その遺跡がどこであるのか全く不明である。これら3箇寺が、国家によって国分寺に並ぶ官寺としての扱いを受けた定額寺であることから、大規模な寺院であったことに相違ないので、山王廃寺＝放光寺跡を除いた上野国内の3箇所の7世紀建立寺院の遺跡は、これら定額寺3箇寺の遺跡と見ることもし一案としては可能であろう。

本遺跡と金井廃寺とでは若干の距離があるものの、金井廃寺が上野国内に建立された代表的寺院の一つであったことから見れば、何がしかの影響を受けていたことは想像に難くない。四戸遺跡から出土したこれらの「寺」と記された墨書土器が、金井廃寺と何等かの関連を有するか否か、現段階では明確ではないものの、その背景を考える上で、金井廃寺の存在も考慮に入れておく必要があらう<sup>(2)</sup>。

## ②「吾」

9世紀後半～10世紀代の墨書・刻書土器の中では、まず、2区26号竪穴建物出土の6と、2区61号竪穴建物出土の13に記された「吾」の文字が目目されるであろう。器種は共に須恵器碗であるが、2区26号竪穴建物出土の6は倒位、2区61号竪穴建物出土の13は正位でそれぞれ記されている。各々、文字が記された方向は異なるが、共に本遺跡が所在する吾妻郡の郡名の一部もしくは郡名を負う氏族名が記された可能性が高い。なお、『倭名類聚抄』によれば、上野国吾妻郡には郡名と同名の「吾妻」郷はないため、「吾」の文字が地名を指しているとするならば、郡名以外には有り得ない。中棚Ⅱ遺跡出土165・169の「赤」もその可能性がある。

吾妻郡家の遺跡は現在までのところ検出されておらず、郡家推定地についても未だ定見はない。しかしながら、金井廃寺が7世紀に創建された本格的寺院であったことから考えれば、吾妻評の評督で、後に吾妻郡の郡領に補されるような地域きっての有力豪族によって建立された評・郡随一の寺院であったと考えられる。全国的に見ても評・郡家遺跡の近隣に7世紀に創建された本格的寺院の遺跡が存在する例は枚挙に暇がなく、これらの寺院のことを「評・郡家付属寺院」とか「評・郡寺」と評・郡家との密接な関連を想定する研究者は少なくない。このような評・郡家に近接する7世紀創建寺院と評・郡家との直接的・具体的な関係については、まだ検討の余地

や異見も多いところであるが、いずれにしても、それら評・郡家に近接する寺院は、立評と同時に評督に補されたような地域きっての有力豪族によって建立されたであろうことは、まず間違いないところであり、法号とは別の通称としての寺名には評・郡名を負っていたことが各種の史料や出土文字資料によって明らかになっている。このように見れば、吾妻評・郡家は金井廃寺の近隣に存在したとみることが自然であり、金井廃寺の通称は「吾妻寺」であったと考えられる。

先述した様に金井廃寺は本遺跡の北東約5kmに位置しているの、吾妻評・郡家も本遺跡から約5km圏周辺に存在したと見るのが自然である。このことから見れば、本遺跡から出土した「吾」と記された2点の墨書土器は、郡家あるいは郡家近接寺院との関連、もしくは郡名を負う郡領氏族との関連を示唆する。

全国的に見ても、評・郡名ないし評・郡名の一部が記された墨書・刻書土器は評・郡家周辺あるいは評・郡関連施設が存在が考えられる場所、さらには国府の周辺など、評・郡の活動と密接に関連するよう場所及びその周辺から出土している(高島2016a)。その点から見れば、四戸遺跡もまた、郡家周辺地域の一角と言って良い場所であったということになり、これらの墨書土器は、本遺跡の地における歴史的な背景を明らかにする上で、重要な資料と位置付けることが出来る。

なお、群馬県内では、現在までのところ評・郡名ないしその一部が記された墨書・刻書土器が本遺跡出土の事例を除いて42点出土している(高島2016a)。車評・群馬郡を意味する「車」、勢多評・郡を意味する「勢多」、佐位郡を意味する「佐」、片岡郡を意味する「片岡」(刻書)、甘楽郡を意味する「甘」、多胡郡を意味する「多胡」「多」、新田評・郡を意味する「新田」「入田」「新」「入」、山田評・郡を意味する「山田」、邑楽評・郡家の厨を意味する「邑厨」「上邑厨」などの事例があるものの、吾妻評・郡を表す文字が記されたものは、これらの資料が初出となる。

## ③「牧」カ

10世紀代と考えられる2区39号竪穴建物からは、8・9の2点の「牧」と判読できそうな墨書土器が出土している。ただ、不明瞭な点も多く、この2点については、あくまでも釈読案の一つという程度に留めておく。

「牧」と釈読して良いとすれば、群馬県内から初出の例となる。なお、律令制下の官牧が設置されていた長野県や山梨県などからは、「牧」と記された墨書土器が出土している。

周知の通り、律令制下、上野国には隣国である武蔵・信濃両国や甲斐国と同様に官牧が設置されており、律令国家きっての貢馬国であった。『延喜式』左右馬寮御牧条の上野国内には御牧として9箇所の名が上がっている。

御牧(中略)上野国 利刈牧、有馬島牧、沼尾牧、

拝志牧、久野牧、市代牧、大藍牧、鹽山牧、新屋牧（後略）

また、『政事要略』巻23、年中行事8月下にみえる「二十八日上野勅旨御馬事」の割註には、延喜7・8（907・908）年の例として前掲9牧に加え、「小栗田」・「平澤」の2牧が挙げられている。

弘仁11年（820）に選定された『弘仁式』主税寮には、すでに甲斐・武蔵・信濃・上野の4箇国から牧馬を京進する際の規定がみられるので、少なくとも9世紀前半には、上野国内に御牧が設置されていたことになる。

なお、奈良市の平城京左京2条3坊長屋王邸宅跡から出土した木簡の中に、「御馬司信濃一口甲斐一口上野二口右」「馬司甲斐二人 上野二口 甲斐四口」「馬司甲斐二人 上野二人 六人」と記載されたものがある。これらの木簡に見える国名は、9世紀段階に御牧が設置された4箇国中の3箇国に該当する。このことは単なる偶然の一致ではなく、すでに奈良時代初頭から、これら3箇国において馬匹生産が盛んに行われていたことを伺わせるものであり、9世紀段階に御牧が設置されたのも必然的帰着であったと見られよう。

これら9御牧の内、利刈牧と有馬島牧は、『和名類聚抄』にみえる群馬郡利刈郷・有馬郷と、また、新屋牧は甘楽郡新屋郷と、それぞれ名称が一致しており、これらの牧はそれらの郷を中心とした場所に設置されたとみて差し支えないだろう。また、拝志牧も、前橋市日輪寺町周辺一帯に「林」の地名が遺っていることから見れば（高島2018）、その一帯に比定することができる。それら以外の上野国の6箇所御牧は、現在に至るまで比定地が明確ではないものが多いが、沼尾牧、大藍牧、市代牧を吾妻郡内に比定する説もあるので（表6）、これらの墨書土器との関連が想定できるかもしれない。

#### ④小結

以上の他では、3区遺物集中箇所出土の16の8世紀の須恵器杯の底部外面に焼成前に刻書された「丈」の文字は、古代氏族丈部氏のウジ名である可能性が考えられる。丈部氏は阿倍氏の同族で、古代東国とくに常総地方や陸奥国の太平洋岸にかけて広く分布する有力氏族であった。墨書・刻書土器に記された氏族名として千葉県・埼玉県・茨城県・福島県等を中心に多くの類例がある。

また、9世紀後半の2区48号竪穴建物出土の11の須恵器甕体部外面に焼成前に刻書された「石」の文字については、あくまでも可能性の一つに過ぎないが、石上氏・石上部氏など物部氏同族の氏族名と考えることが出来る。上野国碓氷郡には磯部郷があり、甘楽郡・多胡郡周辺からは物部氏・石上部氏に関わる文字資料がいくつも出土している。高崎市山名町所在の神亀3（726）年銘を有する金井沢碑にも「鍛師磯マ君身麻呂」の名がみえる（勝浦1999、関口2016、小池2020、前澤2020）。いず

れにしても上野国に所在した氏族名として、知られている。

9世紀後半の4区28号竪穴建物出土の17は、小破片であるため不明確な部分が多く、確定的なことは言えないが、一案としては、人面墨書土器の髭の部分の表記である可能性が考えられなくもない。

四戸遺跡から出土した墨書・刻書土器は16点と集落の規模から見ればあまり多くはないものの、これまで吾妻郡域において古代の文字資料が纏まって出土した事例は殆どないので、その点においても重要である。

また、内容的には評・郡名と通じる「吾」の文字が記されたものが2点、また「寺」の文字が2点出土していることは注目できる。本遺跡の北東約5kmに位置する金井廃寺、さらには金井廃寺の近隣に所在したであろう吾妻評・郡家と本遺跡の地との密接な関連を示唆する文字資料として、本遺跡の歴史的な意義を考える上で重要な資料となり得るものである。

#### (2)石川原遺跡

八ッ場ダム建設に伴って発掘調査された吾妻郡長野原町の石川原遺跡は、9世紀第2四半期から11世紀にかけて営まれた集落遺跡で、62棟の竪穴建物や多数の土坑、ピットが検出されている。ここからは54～124の71点の墨書・刻書土器が出土した。墨書土器は54～86・88～124の70点、焼成後刻書土器が87の1点であり、刻書土器は71点にも及ぶ墨書・刻書土器が出土しながら、墨書土器と刻書土器との比率がこれほどまでに極端な例も珍しい。検出された古代集落の規模が大きいことにも因るが、これまで知られている限り、吾妻地域において1遺跡当たりの墨書・刻書土器の総数としては最多であり、検出された古代集落の規模にほぼ見合った分量の墨書・刻書土器が出土している言えるだろう。

石川原遺跡出土の墨書・刻書土器71点の内、全く判読不能なものが、58・59・64・72・78・80・83・84・93・109・110・116・120・123の14点ある。また、体部内外面2箇所に墨書された71号竪穴建物出土の89、104号竪穴建物出土の107、遺構外出土の117は、いずれも体部内面に記された方が判読不能ないしは文字であることの是非すら不明なものである。よって、ある程度判読が可能で、記された文字数についてもほぼ確定出来るものは56点ということになる。なお、その内29点に2文字記されている。

一般的に集落遺跡出土の墨書土器は、1文字か2文字程度しか文字が記されないものが殆どで、特に1文字しか記されないものが圧倒的に多いという特徴が指摘されているが、本遺跡では、判読可能なものの内、2文字が記されたものの方が多という点も、特徴的と言えよう。



### ①「小井」、「井小」、「井万」、「井」、「泉」

87号竪穴建物から94～136の13点の墨書土器が出土し、その内「小井」と記されたものが94～98・100～102・104・105の10点出土した。また、須恵器杯の底部外面に「井」と墨書されたものが1点出土しているが(99)、これも、元来は「小井」と記されていたものであった可能性が高い。そうすると、87号竪穴建物から出土した13点の墨書土器の内の判読可能な12点の内の11点が「小井」と記されたもので占められているということになり、この竪穴建物に関連する人々の間において、「小井」という文字が有した意味の重要性が伺える。いずれにせよ、石川原遺跡から出土した墨書・刻書土器71点の中で、「小井」と墨書されたものが合計で15点あり、この文言が記されたものが、記載内容別に見れば最多となる。

また、これら「小井」と記された墨書土器は、87号竪穴建物出土の94・96の2点(10世紀)以外いずれも9世紀のものであり、10世紀のもの2点を含めたそれらいずれもが底部に記され、しかもその半数に当たる7点が底部内外面2箇所記されたものであることも特徴的である。ただし、87号竪穴建物出土の102のみは、須恵器碗の底部内外面に「小井」と墨書された他に、さらに体部外面にも正位で「小井」の文言が墨書され、石川原遺跡出土墨書・刻書土器の中で、唯一、土器の器面3箇所に文字が記された事例である。

48号竪穴建物出土の84は、10世紀前半の須恵器碗の体部外面に正位で「井小」と記されている。同じ竪穴建物からは、もう1点、同じく10世紀前半の須恵器碗の体部外面に正位で「小」と判読できる文字が墨書された83が出土している。83で釈読出来たのは「小」の1文字のみであったものの、元来は「小井」と記されたものであった可能性も否定出来ない。また、遺構外からも底部内面に「井小」と墨書された9世紀後半の須恵器碗118が出土している。これら「井小」と記されたものは、「小井」の字順を入れ替えたものと見るならば、古代においては、漢字の字順を前後で入れ替えて表記するような場合が往々にしてあるので、「小井」と記されたものと同じ意味を有すると想定しても、強ち間違いとは言えないのである。なお、字順や語順の前後を入れ替えて表記することには、何某か呪術的な意味があるのではないかと考えられている。31号竪穴建物からは、須恵器碗の体部外面に横位で「井マ」と墨書された68・69と、須恵器碗の体部内面に正位で「□〔井カ〕マ」と墨書された70が出土しており、出土した3点の墨書土器すべてが「井マ」と記されている。いずれも10世紀前半の土器である。

さらに115号竪穴建物からも須恵器碗の底部内面に「井」と墨書された108が、遺構外からは、須恵器杯の底部内面に「小井」、外面に「井万」と墨書された115

や、須恵器杯の底部内外面2か所に「小井」と墨書された114などが出土している。また、「泉」と墨書されたものが、104号竪穴建物出土の107、遺構外出土の112・117等で3点あり、いずれも須恵器碗・杯の体部に正位で記されている。

このように、石川原遺跡からは「小井」14点、「井」2点、「井マ」3点、「井万」1点と、「井」の文字が共通する墨書土器が20点出土している。それらに加えて、「泉」が3点存在することは示唆的である。

石川原遺跡の調査範囲からは、井戸や湧水点が検出された訳ではないので、これらの文字群が井戸や湧水点等の祭祀に関わる文字であるとも、また、それらの墨書土器が、調査対象範囲内における特定のエリアから纏まって出土した訳でもないので、地理的な纏まりを表現したのものとも考え難いところであり、また、各文字それぞれの意味するところ自体も不明と言わざるを得ないものの、「井」の文字あるいは「井」に関連する文字を「標識」とした各单位集団と、さらに個々の単位集団の枠を越えたとさらに上の段階の、ある程度広範囲な集団的結合を示していた可能性が想定出来る。

また、「井」の文字を、仮に氏族名の一部と推測するならば、これも飽くまでも可能性の一つに過ぎないところであるが、渡来系氏族である白井史氏、井上忌寸氏や神祇祭祀に関わる氏族である井辺首(斎部、伊部、員弁、忌部)氏等が候補に挙げられる。既存の史料では、上野国内における白井史氏や井上忌寸氏、井辺等の存在を裏付けるものはないが、上野国に関する古代の史料そのものが僅少なので、既存の史料に見えないことは推測の妨げとはなり得ない。仮に白井史氏との関連を想定するならば、遺構外出土の124、9世紀後半の須恵器碗の体部外面に正位で「白□」と墨書されたものも参考となろう。

### ②「石本」、「石」

石川原遺跡から出土した墨書・刻書土器で、14点の「小井」に次いで多い文字が、56・60～63・65～67等「石本」である。27号竪穴建物から56が出土している他は、いずれも30号竪穴建物からの出土で、出土した墨書土器で判読可能な60～63・65～67の7点すべてが「石本」と記されたものである。

これら「石本」と記された8点の墨書土器は、いずれも10世紀前半代のもので、体部外面に文字が記されている。文字記入の方向は、30号竪穴建物出土の黒色土器碗65が倒位で記されている以外、体部外面に正位で文字が記されている。器種・器形は黒色土器環が殆どで、27号竪穴建物から56、30号竪穴建物から60～63・65の5点が出土している。それ以外の2点はいずれも30号竪穴建物から出土した須恵器碗である(66・67)。

石川原遺跡から出土した墨書・刻書土器71点の内、黒色土器のものは56～65・88の11点に過ぎないが、

70号竪穴建物出土の底部外面に「休」と墨書された88が9世紀第3四半期である以外は、10点すべて10世紀前半代のもので、56～59の4点が27号竪穴建物から、60～65の6点が30号竪穴建物からと、遺構毎にまとまって出土している点が特徴的である。

本遺跡出土の黒色土器が使用された墨書土器11点の内、記された文字が判読可能なものは56・57・60～63・65の8点で、その内、70号竪穴建物出土の88以外は、いずれも「石本」という文言が記されたもので、しかも10世紀前半代のものである。「小井」と記された墨書土器の殆どが9世紀代のものであったが、9世紀第2四半期から第4四半期に亘っており、少量とは言え10世紀代のものも含まれていたのに対して、「石本」と記された墨書土器は、器種の点からも、また、時期的にも極端に纏まっている。なお、遺構外から出土した9世紀後半代の須恵器碗の体部外面に正位で「石」の1文字が墨書されたものが1点出土しているが(122)、「石本」と墨書されたこれら一連の墨書土器8点と、記載内容において何らかの関連を有する可能性を考慮しておく必要があるかもしれない。

「石本」という文字が意味するところについては、僅か2文字であるので、率直に言って如何様にも解釈可能などころではあるが、敢えて具体的に一案を示すならば、飽くまでも可能性の一つに過ぎないものの、仮に人名の一部としてみた場合、「石」の文字は石上氏・石上部氏などの氏族名の一部を示したものと見ることが出来よう。上野国碓氷郡磯部郷や石馬郷は、石上氏・石上部氏との関連が想定されており、碓氷郡内からは、安中市郷原の堀端遺跡等「石」と記された墨書土器が纏まって出土した遺跡がいくつか存在している(安中市学習の森安中市ふるさと学習館2010)。また、神亀3(726)年銘の高崎市山名町金井沢碑に「鍛師磯マ君身麻呂」の名が見えるほか(勝浦1999、前澤2020ほか)、高崎市矢中町矢中村東遺跡出土「物部私印」銅印、高崎市吉井町矢田遺跡出土「物部郷長」刻書紡輪、高崎市箕郷町下芝五反田遺跡出土の「物」と墨書された須恵器碗・杯、富岡市高瀬下高瀬上之原遺跡出土の「上野国甘楽郡瀬上郷戸主物部名万呂進」と刻書された土師器甕、同一ノ宮宮崎浦町遺跡出土の「物」と記された須恵器碗等、古代の碓氷郡や隣郡の甘楽郡周辺では、石上氏、石上部氏、及びその同族である物部氏等に関連する古代の文字資料がいくつも存在し、上野国南西部に広く分布していた様子が判明している(関口2007・2013ab・2014、多胡碑記念館2020)。

「本」の文字は「奉」の異体字としても解釈出来るので、「石本」という文言を、「石上」氏ないし「石上部」氏の某が何物かを神仏に「奉」ったと解釈することも一案としては可能である。仮に、これら「石本」の「本」の文字を「奉」の異体字と解釈するならば、本遺跡の遺構外

から出土した須恵器碗の体部外面に正位で「奉」と墨書された113・121の2点との関連性も想定出来る。

石川原遺跡出土墨書土器に見える「石本」・「石」の文字が、古代の氏族名である石上氏、石上部氏と関連するものだとすれば、これまで殆ど判明していない古代吾妻郡内における氏族の動向を知る上での重要な手掛かりとなるところである。また、87号竪穴建物から出土した9世紀第3四半期～第4四半期頃の須恵器碗の体部外面に「物」と記された103との関連も考えなければならぬ。この墨書土器も、僅か1文字のみ記載されたものなので、文字内容については如何様にも解釈することが可能であり、飽くまでも仮定に過ぎないが、石上氏、石上部氏同族である物部氏との関連が想定出来る。

なお、吾妻郡内における物部氏関連の可能性のある文字資料としては、唐堀C遺跡出土の9世紀前半の須恵器杯底部外面に「物」と刻書された18、9世紀第3四半期の須恵器碗及び8世紀の土師器杯の体部に「物」と墨書された21・22の計3点がある。さらに、本遺跡に比して古代吾妻郡の中核部により近く、郡内における中心的な集落の一つであったと考えられる前述の四戸遺跡からは、9世紀後半の須恵器甕体部外面に焼成前に「石」の文字が刻書された11が出土している。

飽くまでも、想定可能な仮説の一つに過ぎないところではあるが、群馬郡から多胡郡、甘楽郡、碓氷郡にかけての地域に広く分布していた石上氏、石上部氏及びその同族である物部氏の集団の一部が、吾妻郡の開発に関わって入植していた可能性や、吾妻郡の在地首長たちが、上野国南西部に勢力を有した石上氏、石上部氏、物部氏たちと擬制的同族関係を結んでいたこと等を示唆する史料の一つとして位置づけることも出来なくはない。

なお、79・87が「辛」と釈読することが出来ることから見れば、多胡郡韓級郷と関連も想起される所であり、また、石川原遺跡からは吉井型羽釜が出土していることも、この地が多胡・甘楽・碓氷の各郡方面との密接な関連を補強する材料になり得るかもしれない。

先述した『政事要略』巻82糾弾雑事所載の貞観4(862)年4月10日付太政官符に見える「上野国吾妻郡擬大領外正六位(ママ)上毛野坂本朝臣直道」の上毛野坂本朝臣氏は石上部君氏からの改姓氏族であるので、直道が吾妻郡大領に擬任されていたことから、吾妻郡内における石上氏、石上部氏、物部氏らの存在は裏付けられるのではないだろうか。

### ③「寺」

その他、記載内容の点から見れば、僅か1点に過ぎないものの、9世紀第3四半期～第4四半期の須恵器杯底部外面に「寺」の文字が墨書された89が71号竪穴建物から出土している。石川原遺跡において、瓦塔片や仏鉢型土器のような仏教信仰を直接的に示すような遺

物の出土はなく、また、近隣にも古代の寺院や仏堂の遺構が検出された遺跡は存在していないものの、寺院や仏堂等と直接的な関連が見られないような古代の集落遺跡から「寺」や「仏」等の文字が記された墨書・刻書土器が出土した事例は、全国でも枚挙に暇がないので、本遺跡出土の「寺」と記された墨書土器についても、寺院や仏堂との直接的な関連を想定する必要はない。古代の民衆にとっては、必ずしも堂宇を備え、また、恒久・常備的なものでなくとも、仏教的な信仰や儀礼をおこなう場や空間が、その時点において「寺」と認識されることも存在したということが、これらの墨書土器が示す年代とほぼ同時期に成立した『日本霊異記』等の記述から伺えるところである。

なお、54号竪穴建物から出土した須恵器杯の体部外面に正位で「寸」と記された85も、四戸遺跡出土の10と同様、「寺」の文字の下半分の「寸」の部分に当たることから「寺」の文字を省画した異体字として解釈することが可能であるが、勿論、「寸」という文字として記された可能性も、また「村」の文字の省画・異体字として記された可能性も存在するので、断定は出来ない。仮に、この「寸」の文字が「村」の字を省画した異体字と見るならば、33号竪穴建物出土の10世紀第1四半期の須恵器椀体部内面に正位で「邑」と記された71との関連が想定出来る。

このように、1文字しか記されていない墨書・刻書土器については、如何様にも解釈することが可能であるので、記された文字の内容を特定することは、実際には不可能であり、飽くまでもいくつかの可能性が提示できるに過ぎないところが、墨書・刻書土器を扱う上で、最も困難な点である。

#### ④「子」

40号竪穴建物からは出土した73～75の3点すべてが、また、43号竪穴建物出土の81・82の2点が、「子」と記されている。時期はいずれも9世紀後半であるが、40号竪穴建物出土の73・74は須恵器皿及び杯の底部外面、75は須恵器椀体部外面正位と、器形と文字記入部位・方向がまちまちではあるものの、「子」の文字が記されている点では共通しており、むしろ、この竪穴建物における「子」の文字への拘りないしは執着と言うか、意味するところの大きさが伺える。

「子」の文字は、他に43号竪穴建物から81・82の2点が出土している。43号竪穴建物からは、先述した通り7点の墨書土器が出土し、内、78・80の2点は判読不能なので、判読が可能なものは76・77・79・81・82の5点であった。その内の2点が「子」と記されたものであり、43号竪穴建物においても「子」の文字の有した意味の大きさが伺える。内1点、81は「風構え」の中に「子」の文字が記されている。

「子」の文字が記された計5点の墨書土器も、いずれも1文字のみの記載であるので、如何様にも解釈することが可能であるが、敢えて解釈の1案を示すと、現在の高崎市吉井町周辺で造られた上野国分寺跡及びその周辺から出土した焼成前刻書された文字瓦に見える氏族名ないしその一部としての「子」の文字との関連で、氏族名ないしその一部と見做す解釈である。そうすると、『続日本紀』天平神護2(766)年5月壬戌(8日)条に見える「在二上野国一新羅人子午足等一百九十三人、賜二吉井連一。」の記事とも関わる可能性も想定出来る。

もし仮に、石川原遺跡から6点出土している「子」の文字を、『続日本紀』天平神護2(766)年5月壬戌(8日)条や上野国分寺跡出土文字瓦に見える氏族名ないしその一部として解釈することが可能と考え、敢えて推測に推測を重ねるならば、石川原遺跡が所在する吾妻郡西部一帯と多胡郡との強い関連が想定出来ることになる。そうすると、先述した本遺跡出土の「石本」、「石」と土器に墨書された文字を石上氏、石上部氏の氏族名と関連付ける仮説において、石上氏、石上部氏、物部氏等が盤踞した群馬郡から多胡郡、甘楽郡、碓氷郡に至る地域との関連性をさらに補強することにもなる。

#### ⑤小結

これらの他、遺構外から出土した111は、9世紀後半の須恵器椀体部外面に人面墨書土器に見られる髭の表現を描いたと考えられる。吾妻郡内では四戸遺跡からは、小破片であるため不明確な部分が多く確定することは出来ないものの、一案として、人面墨書土器の髭の部分の描写である可能性が考えられものが出土している(17)。

群馬県内から出土した人面墨書土器は、現在までのところ、太田市新田の西今井2遺跡からの出土事例2点など、ごく少数の事例しかないが、吾妻郡内の2箇所の遺跡から人面墨書土器の髭の部分が描写されたと見られる土器が出土していることは注目出来よう。人面そのものではなく、人面墨書土器において極めて特徴的な描写の一つである髭の部分のみが描かれた事例も、神奈川県平塚市の相模国府関連遺跡群等において出土している。

また、43号竪穴建物出土の9世紀第3四半期の須恵器杯の体部外面に横位で「養丸」と墨書された77は、ファーストネームの人名を記したものである可能性と、丸薬の名称を記したものである可能性が考えられる。集落遺跡からの出土であることから見れば、丸薬名であるとは聊か考え難いので、ファーストネームの人名と見た方が良いでしょう。なお、人名としてみた場合、人名の「麻呂」の表記が「丸」へと変化していくのは概ね9世紀の頃であるので、その点においても、この土器の年代観は一致しており、人名としての推測を補強出来る。ファーストネームのみの記述と見た場合、周知である氏の名を省略した可能性や、氏の名を持たない階層の人物である

可能性、さらには仮名(けみょう)である可能性などが考えられよう。

現在までのところ、吾妻郡内において、この石川原遺跡ほど、多量の墨書・刻書土器が纏まって出土した遺跡はなく、本遺跡では、検出された古代集落の規模にほぼ見合った分量の墨書・刻書土器が出土しているということが出来る。

### (3) 楡木Ⅱ遺跡

楡木Ⅱ遺跡は、群馬県長野原楡木町林の吾妻川左岸、王城山南麓の谷間に立地する縄文時代と平安時代を中心とした集落遺跡で、平安時代には31棟の竪穴建物が山麓の傾斜地に展開している。

この楡木遺跡からは182～195の14点の墨書土器が出土している。46号竪穴建物から185～187の3点、72号竪穴建物から188～190の3点の墨書土器が出土しているが、同じ遺構から出土した土器に記された文字は、それぞれ異なっており、また、全点で僅かに14点に過ぎないので、特定の遺構から墨書土器が集中して出土しているという状況とまでは言い切れない。

また、調査範囲が限られているとはいえ、墨書土器が出土した遺構についても、遺跡内の特定のエリアに集中しているというわけではなく、また、各々の資料の、それぞれ出土した各遺構内における出土状況についても、特に共通するとか、或いは際立った特色が指摘出来るとは言い難い。なお、文字が記された土器の年代観は、5号竪穴建物出土の182・183の2点が9世紀代のもので、それ以外の184～195はすべて10世紀前半代のものであった。

底部内面と体部外面の2箇所にも墨書されているものが、182・187・190・192の4点、体部内面1箇所と体部外面2箇所の計3箇所にも墨書されているものが185の1点有り、出土総点数が少ない割には、複数個所に文字が記入される事例が多いところに特色がある。

文字記入部位に関しては、底部に記入されたものが多く、14点20例の内の10例と、全体の5割を占めている。さらにその中の9例が内面に記されたものである。

確実に1文字が記載されたものは、5号竪穴建物出土の9世紀代の須恵器杯底部内面と体部外面に「ト」という1文字の周囲を四角で囲った182と<sup>(3)</sup>、46号竪穴建物出土の10世紀前半の須恵器杯体部内面に「長」と記された185の2例であった。他にも現状では1文字しか確認出来ない資料も存在しているが、破損して文字数が特定出来ない。

#### ○「三家」

楡木Ⅱ遺跡出土の墨書土器で、記載内容から見て注目されるのは、187の46号竪穴建物出土の10世紀前半の須恵器碗底部内面に記された「三家」の文字である。「三

家」と明確に記されているのはこれのみであるが、同じ土器の体部外面に倒位で記された「三」、6号焼土出土192の10世紀前半の須恵器碗片の体部外面に記された文字も「三家」であると見られ、また、46号竪穴建物出土の186は、破片ながらも底部内面に記された「家」の文字は明瞭である。「家」の文字の上に墨痕が確認出来るが、如何に考えても「家」の文字の上に記された文字の字画は「三」とは読み難い。字画から見れば「御」という文字の偏付近の残画と判断出来なくもないように思われる。もし、その推測が正しいとすれば、この資料に記された文字は、「御家」である可能性が考えられ、「三家」とは通音となり、同じ意味であった可能性が想定出来ることになる。

「三家」は「ミヤケ」を意味して記された可能性が高いものと考えられる。46号竪穴建物出土の186が「御家」と釈読出来ると見て良いならば、なおのこと、その可能性は高いということが出来るだろう。古代においては、音が通用すれば如何なる文字をも当てるということが可能というような、現代の感覚から見れば聊かルーズともいえるような用字法が通常行われており、ミヤケについても「三宅」、「御宅」、「三家」、「御家」、「屯倉」、「官家」、「官家」など、様々な文字が当てられ、表記されている。

「ミヤケ」と言うと、大化前代におけるヤマト王権の直轄地である屯倉が想定される場所であるが(館野1999)、『日本書紀』には、吾妻郡の地にヤマト王権の屯倉が設けられていたとの記述は一切ない。勿論、史料に遺っていないヤマト王権の直轄地が存在していた可能性は完全には否定出来ない。

高崎市山名町に所在する「辛巳歳」=681年の年紀を有する山ノ上碑文中に見える「佐野三家」を、ヤマト王権の直轄地である屯倉の一つ見る考え方は、尾崎喜左雄氏が提唱されて以来(尾崎1980)、学界においても強く支持されているところであるが、仮に山ノ上碑文中に見える「佐野三家」が、尾崎氏が言われるように『日本書紀』推古15(607)年条に見える全国的な屯倉設置時にヤマト王権によって設定されたものだとしても、それ自体の名称は「山ノ上碑」碑文のみに現れるもので、『日本書紀』をはじめとする史料には全く見えないものである。そうであるから、律令制下に吾妻郡として編成されたこの地域に、仮に、大化前代においてヤマト王権によってミヤケが設定されていたと想定しても、全く破天荒な仮説とは言い難いのである。律令制下の吾妻郡には「大田郷」が存在しているが、この、「大田」という地名は、ミヤケの耕作地である「ミタ」に対応する言葉である。古代においては、美称としての「ミ=御・美」と「オオ=大・凡」とは、しばしば通用するところであるので、吾妻郡に「大田」の名を有する郷が存在していたことは、この地にヤマト王権のミヤケが設置されていた可能性をより強く示唆するとさ

え言えよう。これらの墨書土器は、いずれも10世紀前半のもので、ヤマト王権の屯倉の時代からは遙かに新しい時期のものである。しかしながら、かつて、大化前代に設置された屯倉の遺称が、地名として9～10世紀まで受け継がれた可能性は決して少なくはないであろう。

ただし、「ミヤケ」という語は、元来、首長の居館や大規模施設を意味する「ヤケ」という語に、美称・尊称である「ミ＝御・美」の語が付されたものであり、「ミヤケ」の語自体が元々は普通名詞であった。ヤマト王権の直轄地としての屯倉とは全く別に、地方官人や在地首長の居宅が「ミヤケ」と称された可能性も否定できない。また、「那津官家」の事例にもあるように、官衙などの公的施設を「ミヤケ」と尊称した可能性も勿論考えられる。また、8世紀の貴族・多治比真人三宅麻呂のように、人名の一部として「三家」の文字が使用されている例もある。ゆえに、楡木Ⅱ遺跡から出土した「三家」と記された墨書土器についても、現段階においては、大化前代に設置されたヤマト王権の直轄地である屯倉の遺存地名である可能性を含めて、幅広く想定しておくべきところと言えよう。

それにしても、律令制下の吾妻郡に大田郷が存在していたことに加え、楡木Ⅱ遺跡において「三家」と記された墨書土器が、そのように想定可能な事例を含めて複数点出土していることは、この地域における古代史像を解明していく上で非常に示唆的な資料であると言えよう。

おわりに

これまでの発掘調査によって明らかにされてきたところでは、吾妻郡内においては、8世紀代の集落は少なく、とくに西部の長野原町域では、広範囲に本格的な集落が形成されるのは9世紀に入ってからのことであったことが判明している。楡木Ⅱ遺跡や向原遺跡では9世紀前半から竪穴建物が形成されていたことが認められ、石川原遺跡でも古代の竪穴建物の出現は9世紀中葉から始まり、9世紀後半になって、格段に建物数は増えており、吾妻川沿いの段丘上から、やや上位にある小さな平地にまで竪穴建物が営まれるようになり、集落がさらに上流域にまで拡大して展開していた様子が窺える。

石川原遺跡をはじめその周辺でも、上ノ平Ⅰ遺跡、下田遺跡、林宮原Ⅱ遺跡、中棚Ⅰ・Ⅱ遺跡、楡木Ⅰ・Ⅱ遺跡等において、纏まった量の墨書・刻書土器が出土している。それらは、時期的にはすべて9世紀第2四半期～10世紀前半の間に収まっており、須恵器・黒色土器を問わず、すべてが供膳具である杯・椀型土器であることは、集落遺跡出土の墨書・刻書土器の全国的な傾向と完全に合致している。

石川原遺跡出土の71点の墨書・刻書土器については、土器における文字記入の位置が年代によって変化してい

ることが判明した。全国的な古代の墨書・刻書土器の傾向では、年代によって文字の記入部位が明確に変化すると言うことは無く、寧ろ、官衙・寺院等、文字が、行政や信仰における情報伝達的手段として日常的に使用された場所の遺跡では、底部に文字が記されたものが多く、集落遺跡から出土する事例では体部に記されるものが比較的多いというような漠然とした傾向は指摘されてきたものの、石川原遺跡のように、土器の文字記入部位の変化が、年代によって変化する傾向が強いという現象が明確に指摘出来た事例は、石川原遺跡に限った傾向であるとしても、稀有な事例の一つとして特筆すべきであろう。

また、吾妻郡内出土の墨書・刻書土器全般については、同じ竪穴建物から出土した墨書土器には同じ文字が記される傾向が非常に強いことが、特徴として指摘できるようなのである。

集落遺跡出土の墨書・刻書土器に記された文字が意味するところとしては、従来、それぞれの単位集団における標識的の文字、例えるならば、一面としては後世の「屋号」に類するようなものであった可能性が高いものと見られてきたが、本遺跡における墨書・刻書土器について見れば、竪穴建物ごとに同じ内容の文言が記された事例が多いことから、竪穴建物単位を基礎とする単位集団の存在を想定することが可能であり、記された文字はそれぞれの単位集団の標識的の文字であったと解釈することが可能であろう。

一般的に集落遺跡出土の墨書土器は、1文字か2文字程度しか文字が記されないものが殆どで、特に1文字しか記されないものが圧倒的に多いという特徴が指摘されているが、本遺跡では、判読可能なものの内、2文字が記されたものの方が多という点も、墨書・刻書土器の出土事例の中では特徴的であると言えよう。

さらに内容的には、石上氏、石上部氏、物部氏、子氏などの氏族名との関連を推測することが可能なものが存在していることも、吾妻郡内出土墨書・刻書土器の特徴として挙げて良いだろう。現段階においては、推測に推測を重ねた、まだ根拠の薄弱な一つの仮説に過ぎないところではあるが、もし、吾妻郡内の遺跡から出土した墨書・刻書土器に記された文字が、それらの氏族との関連する文字であるならば、吾妻郡と碓氷郡・甘楽郡・群馬郡等上野国南西部に勢力を有した氏族たちとの密接な関連が想定出来ることになり、古代吾妻郡の開発動向や支配の在り方を知る上での手掛かりにもなり得る可能性を有している。

いずれにせよ、吾妻郡に関しては既存の古代の史料が非常に僅少であり、また従来、古代の文字資料の出土も非常に少なかったので、同郡における古代の様相は殆ど不明であったと言っても過言ではない。しかしながら、一方で、古代の吾妻郡は、上野国内でも僅少な白鳳期

創建の本格的古代寺院である金井廃寺の存在や、「長元3(1030)年上野国不與解由状案」(所謂「上野国交替実録帳」)諸郡官舎項の「吾妻郡」には「長田院」、「伊參院」という郷倉ないし郡家別院と考えられる施設についての記述があるなど、山間部であり、国府や東山道駅路沿線の地からは僻遠の場所で、3郷しか所在しない小郡であるにも拘わらず、東山道駅路設定以前における主要な東西交通路の一系統の存在が想定され、上野国内における東西・南北方向の通交の結節点の一つであることなど、上野国内においても独特の存在感を示す特異な地であった(関口2013a)。吾妻郡内遺跡から出土した198点の墨書・刻書土器は、そうした山間部の僻遠の地に在りながらも、独特の存在感を示した古代吾妻郡実態の解明に向けての一つの手掛かりを与える重要な資料群と位置付けることが出来るのではないだろうか。

なお、小稿は平成31年度公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究活動指定研究による成果の一部である。

## 註

- (1) 墨書・刻書土器の以外の吾妻郡内から出土した古代の文字資料としては、中之条町出土の銅印2点、東吾妻町出土の銅印1点、東吾妻町唐堀C遺跡出土の刻書紡輪1点、長野原町石川原遺跡出土の刻書紡輪1点等の事例がある。
- (2) 四戸遺跡出土の奈良三彩短頸壺は元来仏器であった可能性が高く、この点からも金井廃寺との関連が想定出来る。
- (3) 文字の周囲を囲った四角形の底辺を字画の一部と共有する「組み合わせ文字」と見るならば、「上」という文字を四角く囲ったものである可能性も考えられる。

なお、本例のように、文字の周囲を四角形・三角形・円形等で囲んで記された墨書・刻書土器の例は、全国各地から多数出土しており、必ずしも特異ないし僅少なものではない。

このように文字の周囲を囲んで表記された墨書・刻書土器は、印や焼印の印影を模倣した表現とも、また、同じ文字でも単独で記すものと、文字の周囲を囲うものとの差別化を意図的に図ることが目的であったとも解釈することが出来る。

## 引用・参考文献

- 荒井秀規 2005「神に捧げられた土器」(平川南・栄原永遠男・沖森卓也・山中章編『文字と古代日本4 神仏と文字』吉川弘文館pp.10～37)
- 安中市学習の森安中市ふるさと学習館編 2010『平成22年度春季企画展 発掘された安中の遺跡2010』
- 尾崎喜左雄 1980『上野三碑の研究』、尾崎先生著作刊行会
- 勝浦令子 1999「金井沢碑をよむ」(平野邦雄監修・あたらしい古代史の会編『東国石文の古代史』吉川弘文館、pp.106～137)
- 川原秀夫 2009「上野における郡家地域の景観と郡司」(『国史学』198、pp.85～107)
- 群馬県教育委員会編 1989『群馬県出土の墨書・刻書土器集成』(1)
- 小池浩平 2017『古代東国のフロンティア・上毛野-上毛氏と東山道十五国都督-』みやま文庫
- 小池浩平 2020「金井沢碑に見る古代社会」(多胡碑記念館編『金井沢碑の遺産-古代豪族と仏教-』、pp.33～38)
- 関和彦 1994「古代村落の再検討と村落首長」(同『日本古代社会生活史の研究』校倉書房、pp.182～198、初出1991)
- 関口功一 2007「上毛野坂本朝臣鳥嶋とその一族」(同『東国の古代氏族』岩田書院、pp.331～342、初出1992)
- 関口功一 2013a「古代吾妻郡の組成と性格」(同『古代上毛野の地勢と信

仰』岩田書院、pp.75～89)

関口功一 2013b「『山上碑』『金井沢碑』と地域の仏教」(同『古代上毛野の地勢と信仰』岩田書院、pp.115～138、初出2002)

関口功一 2013c「古代『上毛野』の住人たち」(同『古代上毛野をめぐる人びと』岩田書院、pp.11～67)

関口功一 2014「『物部』の地域的展開について」(『群馬歴史民俗』35、pp.29～43)

関口功一 2016「『渡来人』の来住」(同『東国の古代地域史』岩田書院、pp.69～88、初出2015)

関口功一 2019『上毛野の古代仏教』みやま文庫

高島英之 2006「墨書・刻書土器から見た古代の出雲地域」(同『古代東国地域史と出土文字資料』東京堂出版、pp.277～297、初出2005)

高島英之 2007「吾妻郡」(加藤謙吉・関和彦・遠山美都男・仁藤敦史・前之園亮一編『日本古代地名事典』雄山閣、pp.361～362)

高島英之 2008a「楡木Ⅱ遺跡出土の墨書土器」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『楡木Ⅱ遺跡(1) 平安時代・中近世編 ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』、pp.194～197)

高島英之 2008b「上ノ平Ⅰ遺跡出土の墨書土器について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上ノ平Ⅰ遺跡(1) ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集』、pp.146～147)

高島英之 2013「山国の出土文字資料-上野国吾妻郡出土墨書土器から-」(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店、pp.106～134)

高島英之 2016a「郡名記載墨書・刻書土器小考」(同『出土文字資料と古代の東国』同成社、pp.89～182、初出2010・2011)

高島英之 2016b「日本古代村落出土墨書・刻書土器の基本的性格をめぐって」(須田勉編『日本古代考古学論集』同成社、pp.219～242)

高島英之 2018「群馬県前橋市日輪寺観音前遺跡墓壇出土墨書土器とその背景」(『研究紀要』36、群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.87～106)

高島英之 2020a「四戸遺跡出土の墨書・刻書土器」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『四戸遺跡 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、pp.302～306)

高島英之 2020b「石川原遺跡出土の墨書・刻書土器について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『石川原遺跡 古墳時代以降編 ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第72集』)

竹本晃 2015「金井沢碑からみた物部系氏族の展開」(『研究紀要』19、由良大和古代文化研究会、pp.37～63)

多胡碑記念館編 2020『金井沢碑の遺産-古代豪族と仏教-』

館野和己 1999「ミヤケと国造」(吉村武彦編『古代を考える-継体・欽明朝と仏教伝来-』吉川弘文館、pp.69～99)

平川南 2000a「東国の村落景観-墨書土器の背景-」(同『墨書土器の研究』吉川弘文館、pp.202～213、初出1990)

平川南 2000b「墨書土器と古代村落」(同『墨書土器の研究』吉川弘文館、pp.214～258、初出1989)

藤田憲宏 2002「墨書・刻書土器の出土傾向とその背景」(吉村武彦編『古代出土文字資料のデータベースの構築と地域社会の研究-平成11～13年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書』、pp.145～158)

前澤和之 1978「『上野国交替実録帳』郡衙項についての覚書」(『群馬県史研究』7、pp.12～51)

前澤和之 1982「『上野国交替実録帳』の性格について-定額寺資財帳と不與解由状-」永島福太郎先生退職記念会編『日本歴史の構造と展開』山川出版社、pp.

前澤和之 1983「『上野国交替実録帳』にみえる寺院-上野国分寺と定額寺-」『歴史手帖』

前澤和之 1996「『上野国交替実録帳』にみる国と郡-郡官舎の修理を通して-」(『ぐんま史料研究』7、pp.1～12)

前澤和之 2001「『上野国交替実録帳』研究小論-関口功一氏『上野国交替実録帳』諸郡官舎項の再検討に就いて-」(『群馬文化』268、pp.33～51)

前澤和之 2009「『上野国交替実録帳』諸郡官舎項再考-郡家の景観を中心に-」(『国史学』198、pp.61～84)

前澤和之 2015「『上野国交替実録帳』から見る地方官衙のその後」(大田

原市なす風土記の丘湯津上資料館・栃木県那珂川町なす風土記の丘資料館編『第23回特別展 那須官衙の時代-律令期地域社会の移り変わり-』、pp.23～28)

前澤和之 2017「上野国交替実録帳からみる郡家の景観」(鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編『日本古代の道路と景観-駅家・官衙・寺』、pp.245～266)

前澤和之 2020「金井沢碑にみる『石文』と『知識』」(多胡碑記念館編『金井沢碑の遺産-古代豪族と仏教』、pp.39～45)

松田猛 1990「地方定額寺についての一考察『上野国交替実録帳』と古代寺院跡-」(『群馬県史研究』32、pp.1～27)

松田猛 1993「出土文字資料からみた上野国の古代氏族」(『地方史研究』243、pp.68～89)

松田猛 1999「佐野三家と山部郷-考古資料からみた上野三碑-」(『高崎市史研究』11、pp.1～23)

松田猛 2020『前橋学ブックレット22 山王廃寺は放光寺』上毛新聞社

若狭徹 2019「立評をめぐる地方氏族の政治行動-群馬県における後期古墳の動態と上野三碑の建碑から-」(『駿台史学』165、pp.75～99)

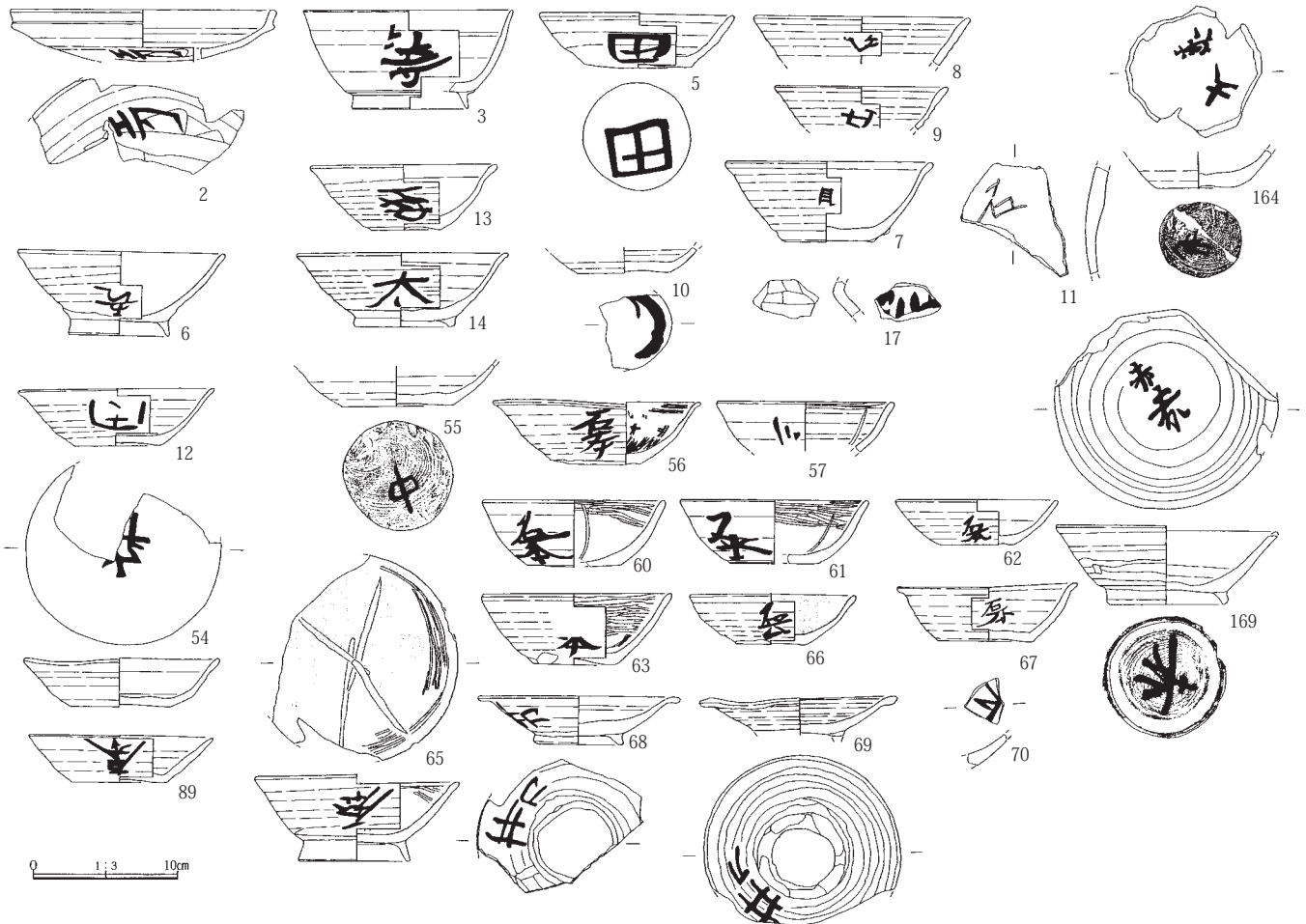


図1 吾妻郡内出土の主な墨書・刻書土器(1)

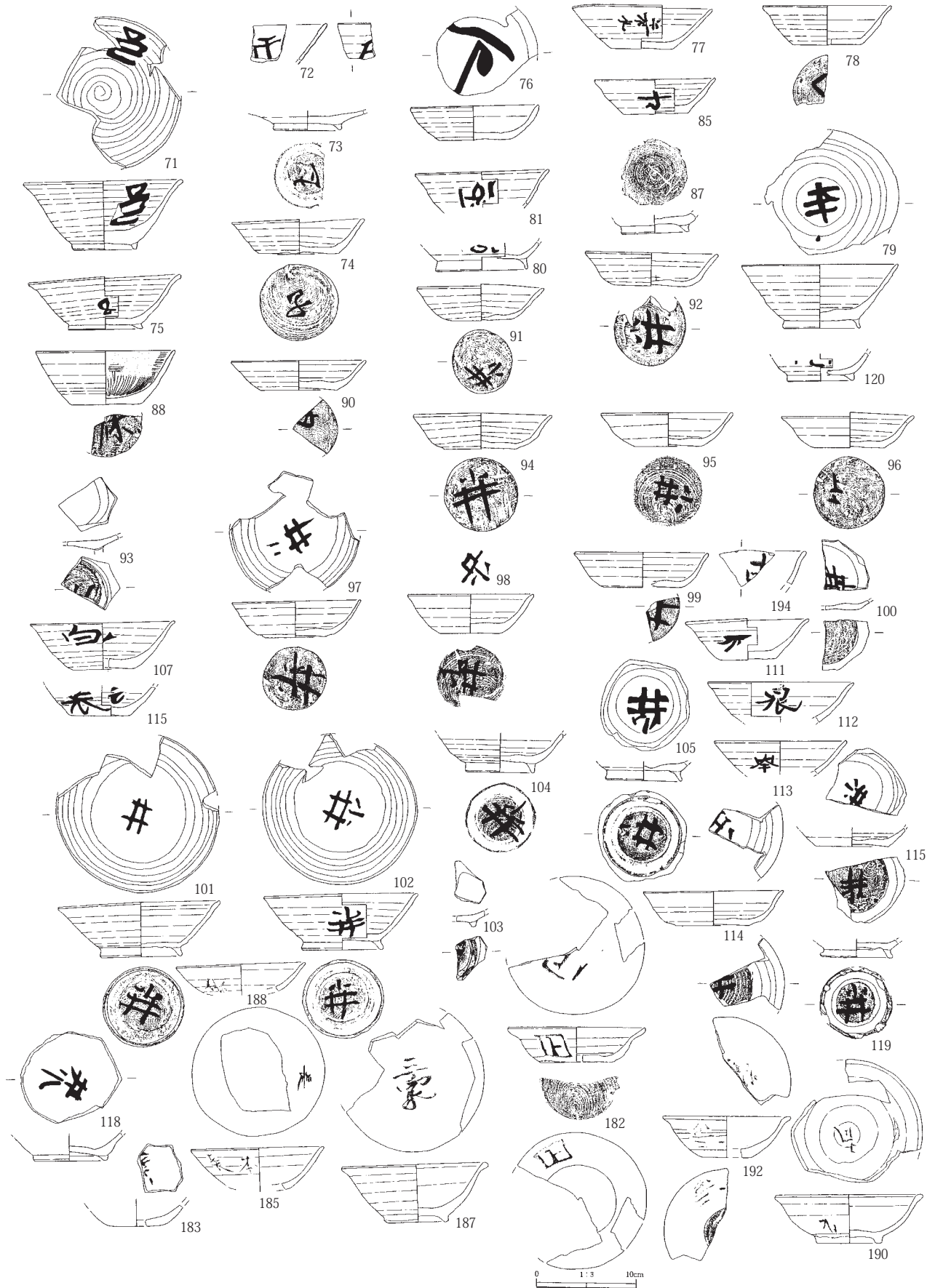


図2 吾妻郡内出土の主な墨書・刻書土器(2)



表1 群馬県吾妻郡内出土墨書・刻書土器集成

番号	遺跡名	遺跡所在地	出土遺構	器種・器形	文字記入部位	種類	文字内容	時期	文献
1	東吾妻町本宿	東吾妻町本宿	遺構外	須恵器皿	底部内面	墨書	「車」	9～10C	1
2	四戸	東吾妻町三島	1区28号竪穴建物	土師器盤	底部外面	墨書	「寺」	8C	2
3	〃	〃	1区遺構外	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「寺」	8C	〃
4	〃	〃	1区遺構外	土師器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	9C後	〃
5	〃	〃	1区遺構外	土師器杯	底部外面・体部外面正位、2箇所	墨書	「田」	9C後	〃
6	〃	〃	2区26号竪穴建物	須恵器椀	体部外面倒位	墨書	「吾」	9C後	〃
7	〃	〃	2区39号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「目」	10C	〃
8	〃	〃	2区39号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「牧」カ	10C	〃
9	〃	〃	2区39号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「牧」カ	10C	〃
10	〃	〃	2区43号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「寸」カ「寺」カ	9C後	〃
11	〃	〃	2区48号竪穴建物	須恵器甕	体部外面倒位	焼成前刻書	「石」	9C後	〃
12	〃	〃	2区51号竪穴建物	須恵器杯	体部外面倒位	墨書	「田」	9C後	〃
13	〃	〃	2区61号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「吾」	9C後	〃
14	〃	〃	2区61号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「太」	9C後	〃
15	〃	〃	2区78号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	判読不能	9C後	〃
16	〃	〃	3区遺物集中	須恵器杯	底部外面	焼成前刻書	「丈」	8C	〃
17	〃	〃	4区28号竪穴建物	土師器杯	底部外面	墨書	人面の髭の部分の表現か？	9C後	〃
18	唐堀C	東吾妻郡三島	2区20号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	焼成前刻書	「物」	9C前	3
19	〃	〃	3区1号竪穴建物	黒色土器椀	体部外面	墨書	判読不能	9C第3四半期	〃
20	〃	〃	4区37号竪穴建物	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	内面「右」、外面「馬」	9C第3四半期	〃
21	〃	〃	4区38号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「物」	9C第4四半期	〃
22	〃	〃	3区42号土坑	土師器杯	底部外面	墨書	「物」	8C	〃
23	〃	〃	4区280号土坑	須恵器椀	底部外面	墨書	判読不能	9C後	〃
24	〃	〃	遺構外	土師器小型甕	頸部外面	墨書	判読不能	8C	〃
25	井堀	草津町前田	遺構外	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「置」	9C後	1
26	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内面	墨書	「壽」	10C前	〃
27	五十嵐	中之条町五十嵐	遺物集中区	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「物」カ	9C後	4
28	〃	〃	〃	須恵器杯	体部内面正位	墨書	「佐」カ	9C後	〃
29	〃	〃	6号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「高」	10C前	5
30	上ノ平I	長野原町川原畑	1号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「凡」	10C初	6
31	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「凡」	10C初	〃
32	〃	〃	2号竪穴建物	須恵器杯	体部内面横位	焼成前刻書	「×」	10C前	〃
33	〃	〃	8号竪穴建物	須恵器椀	体部外面横位	墨書	「長」	9C末	〃
34	〃	〃	9号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「東」	9C末	〃
35	〃	〃	15号竪穴建物	須恵器杯	体部内外面正位、2箇所	墨書	判読不能	10C後	〃
36	〃	〃	16号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「凡」	10C初	〃
37	〃	〃	22号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	○の中に「小」	10C初	〃
38	〃	〃	23号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「山」	9C後	7
39	〃	〃	〃	須恵器杯	底部外面	墨書	判読不能	9C末	〃
40	〃	〃	〃	須恵器杯	体部内外面正位、2箇所	墨書	「山」	9C後	〃
41	〃	〃	〃	須恵器杯	体部内面正位	墨書	「十」	9C後	〃
42	〃	〃	〃	須恵器椀	体部内面正位	墨書	判読不能2文字	9C末	〃
43	〃	〃	48号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	9C後	〃
44	〃	〃	〃	須恵器杯	体部内外面正位、2箇所	墨書	内面「加」カ、外面「人」	9C末	〃
45	〃	〃	遺構外	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
46	〃	〃	〃	須恵器杯	底部外面	墨書	「日」カ	9～10C	〃
47	〃	〃	〃	須恵器椀	体部外面正位	墨書	判読不能	10C	〃
48	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
49	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
50	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
51	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
52	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
53	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	〃
54	石川原	長野原町川原湯	19号竪穴建物	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	「亥」	9C第3四半期	8
55	〃	〃	26号竪穴建物	須恵器杯	底部内面	墨書	「中」	9C第3四半期	〃
56	〃	〃	27号竪穴建物	黒色土器環	体部外面正位	墨書	「石本」(石奉か)	10C前	〃
57	〃	〃	〃	黒色土器椀	体部外面横位	墨書	「□三」	10C前	〃
58	〃	〃	〃	黒色土器椀	体部外面	墨書	判読不能	10C前	〃
59	〃	〃	〃	黒色土器環	体部外面	墨書	判読不能	10C前	〃
60	〃	〃	30号竪穴建物	黒色土器環	体部外面正位	墨書	「石本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
61	〃	〃	〃	黒色土器環	体部外面正位	墨書	「石本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
62	〃	〃	〃	黒色土器環	体部外面正位	墨書	「石本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
63	〃	〃	〃	黒色土器環	体部外面正位	墨書	「石カ本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
64	〃	〃	〃	黒色土器椀	体部外面	墨書	判読不能	10C第1四半期	〃
65	〃	〃	〃	黒色土器椀	体部外面倒位	墨書	「石本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
66	〃	〃	〃	須恵器環	体部外面正位	墨書	「石本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
67	〃	〃	〃	須恵器環	体部内面正位	墨書	「石本」(石奉か)	10C第1四半期	〃
68	〃	〃	31号竪穴建物	須恵器皿	体部外面横位	墨書	「井マ」(井部か)	10C前	〃
69	〃	〃	〃	須恵器皿	体部外面横位	墨書	「井マ」(井部か)	10C前	〃
70	〃	〃	〃	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「井カマ」	10C前	〃
71	〃	〃	33号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「邑」	10C第1四半期	〃
72	〃	〃	39号竪穴建物	須恵器椀	体部内外面、2箇所	墨書	判読不能	10C前	〃
73	〃	〃	40号竪穴建物	須恵器皿	底部外面	墨書	「子」	9C第3四半期	〃
74	〃	〃	〃	須恵器杯	底部外面	墨書	「子」	9C第3四半期	〃
75	〃	〃	〃	須恵器椀	体部外面倒位	墨書	「子」	9C第3四半期	〃
76	〃	〃	43号竪穴建物	須恵器杯	底部内面	墨書	「下」	9C後	〃

番号	遺跡名	遺跡所在地	出土遺構	器種・器形	文字記入部位	種類	文字内容	時期	文献
77	"	"	"	須恵器杯	体部外面横位	墨書	「養丸」	9C第3四半期	"
78	"	"	"	須恵器椀	底部外面	墨書	判読不能	9C後	"
79	"	"	"	須恵器杯	底部内面	墨書	「辛」	9C後	"
80	"	"	"	須恵器椀	体部外面	墨書	判読不能	9C後	"
81	"	"	"	須恵器椀	体部外面倒位	墨書	「几」の中に「子」	9C後	"
82	"	"	"	須恵器杯	底部外面	墨書	「子」	9C後	"
83	"	"	48号竪穴建物	須恵器椀	体部外面	墨書	「小」	10C前	"
84	"	"	"	須恵器椀	体部外面	墨書	「井小」	10C前	"
85	"	"	54号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「寸」(=寺カ)	9C第3四半期	"
86	"	"	60号竪穴建物	須恵器杯	底部内面	墨書	「小井」	9C後	"
87	"	"	"	須恵器碗	底部内面	焼成後刻書	「辛」	9C後	"
88	"	"	70号竪穴建物	黒色土器杯	底部外面	墨書	「休」	9C第3四半期	"
89	"	"	71号竪穴建物	須恵器杯	体部外面倒位・内面、3箇所	墨書	外面「寺」、内面2箇所判読不能	9C後	"
90	"	"	73号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	「□[目カ]」	9C第4四半期	"
91	"	"	81号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	「小井」	9C第2～第3四半期	"
92	"	"	"	須恵器杯	底部外面	墨書	「小井」	9C第2～第3四半期	"
93	"	"	"	須恵器椀	底部外面	墨書	判読不能	9C第2～第3四半期	"
94	"	"	87号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	「小井」	10C前	"
95	"	"	"	須恵器杯	底部外面	墨書	「小井」	9C後	"
96	"	"	"	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	「小井」	10C前	"
97	"	"	"	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	「小井」	9C後	"
98	"	"	"	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	「小井」	9C後	"
99	"	"	"	須恵器杯	底部外面	墨書	「井」	9C後	"
100	"	"	"	須恵器杯	底部内面	墨書	「小井」	9C後	"
101	"	"	"	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	内面「井」、外面「小井」	9C後	"
102	"	"	"	須恵器椀	底部内外面・体部外面正位、3箇所	墨書	「小井」	9C後	"
103	"	"	"	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「物」	9C後	"
104	"	"	"	須恵器椀	底部外面	墨書	「小井」	9C後	"
105	"	"	"	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	「小井」	9C後	"
106	"	"	"	須恵器椀	底部外面	墨書	判読不能	9C後	"
107	"	"	104号竪穴建物	須恵器椀	体部内外面正位、2箇所	墨書	体部外面「泉」、内面判読不能	9C後	"
108	"	"	115号竪穴建物	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	外面判読不能、内面「井」	9C後	"
109	"	"	2115号土坑	須恵器椀	体部外面	墨書	判読不能	10C	"
110	"	"	"	須恵器椀	体部外面	墨書	判読不能	10C	"
111	"	"	遺構外	須恵器椀	体部外面正位	墨書	人面髭の表現か?	9C後	"
112	"	"	"	須恵器椀	体部内面正位	墨書	「泉」	9C後	"
113	"	"	"	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「奉」	9C後	"
114	"	"	"	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	「小井」	9C後	"
115	"	"	"	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	内面「小井」、外面「井万」	9C後	"
116	"	"	"	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9C後	"
117	"	"	"	須恵器杯	体部内外面正位、2箇所	墨書	外面「泉」、内面判読不能	9C後	"
118	"	"	"	須恵器椀	底部内面	墨書	「井小」	9C後	"
119	"	"	"	須恵器椀	底部外面	墨書	「小井」	9C後	"
120	"	"	"	須恵器椀	体部外面	墨書	判読不能	9C後	"
121	"	"	"	須恵器皿	体部内面横位	墨書	「奉」	9C後	"
122	"	"	"	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「石」	9C後	"
123	"	"	"	須恵器椀	体部内面	墨書	判読不能	9C後	"
124	"	"	"	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「白□」	9C後	"
125	下湯原	長野原町川原湯	A1区1号竪穴建物	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9C後	9
126	"	"	A1区2号竪穴建物	黒色土器杯	体部外面横位	墨書	「一」	10C後	"
127	"	"	"	黒色土器杯	体部外面正位	墨書	「北」カ	10C後	"
128	花畑	長野原町林	91-1号竪穴建物	須恵器椀	底部内面・体部外面倒位、2箇所	墨書	内面：□の中に「衛」 外面：□の中に「石」	9C第4四半期	10
129	"	"	100-1号竪穴建物	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「凡」	9C第4四半期	"
130	下田	長野原町林	4号竪穴建物	須恵器椀	底部外面	墨書	「堰」	10C前	11
131	"	"	"	須恵器椀	体部外面正位	墨書	「佐」	10C前	"
132	"	"	遺構外	須恵器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	10C前	"
133	"	"	"	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	10C前	"
134	"	"	"	須恵器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	10C前	"
135	"	"	"	灰釉陶器椀	底部外面	墨書	「家」カ	10C前	"
136	林宮原Ⅱ	長野原町林	SI01竪穴建物	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	12
137	"	"	SI05竪穴建物	須恵器椀	体～底部内面	墨書	判読不能	9C	"
138	"	"	"	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	「砦」	9C	"
139	"	"	"	須恵器杯	体部外面横位	墨書	「一」	9C	"
140	"	"	"	須恵器杯	体部内面	墨書	判読不能	9C	"
141	"	"	"	須恵器杯	底部外面	墨書	「原カ」	9C	"
142	"	"	"	須恵器杯	口縁部内面	墨書	判読不能	9～10C	"
143	"	"	"	須恵器杯	口縁部内外面、2箇所	墨書	判読不能	9～10C	"
144	"	"	"	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9～10C	"
145	"	"	SI06竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「王」	9C	"
146	"	"	"	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「十」	9C	"
147	"	"	"	須恵器杯	体部外面正位・内面倒位・底部内面、3箇所	墨書	「東」	9C	"
148	"	"	"	須恵器椀	底部外面	墨書	「砦」カ	9C	"
149	"	"	"	須恵器椀	底部内面	墨書	判読不能	9C	"
150	林宮原Ⅷ	長野原町林	SI01竪穴建物	須恵器杯	体部外面	墨書	判読不能	9C第3四半期	13
151	"	"	SI05竪穴建物	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	判読不能	9C第3四半期	"
152	"	"	SI08竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	「永隆」	9C第3四半期	"
153	"	"	"	須恵器椀	体部内面正位	墨書	「由人」	9C第3四半期	"

番号	遺跡名	遺跡所在地	出土遺構	器種・器形	文字記入部位	種類	文字内容	時期	文献
154	中棚Ⅰ	長野原町林	3号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	「佐」	10C前	14
155	〃	〃	4号竪穴建物	須恵器杯	体部内外面、2箇所	墨書	内面「表」、外面判読不能	10C前	〃
156	〃	〃	遺構外	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	「入」	10C前	〃
157	中棚Ⅱ	長野原町林	9号竪穴建物	須恵器杯	底部内面	焼成前刻書	「山」	10C前	15
158	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内面	墨書	「七」	10C前	〃
159	〃	〃	10号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「色」	10C前	〃
160	〃	〃	〃	須恵器椀	体部内外面正位、2箇所	墨書	内面「虫」、外面判読不能	10C前	〃
161	〃	〃	11号竪穴建物	須恵器椀	体部外面	墨書	判読不能	10C前	〃
162	〃	〃	12号竪穴建物	須恵器杯	体部内面正位	墨書	「木」カ	10C前	〃
163	〃	〃	15号竪穴建物	須恵器杯	底部内面	墨書	判読不能	10C前	〃
164	〃	〃	16号竪穴建物	黒色土器杯	体部内面	墨書	判読不能	10C前	〃
165	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	内面「赤家」、外面「赤」	10C前	〃
166	〃	〃	〃	須恵器椀	体部外面	墨書	判読不能	10C前	〃
167	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内面	墨書	判読不能	10C前	〃
168	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	「赤」カ	10C前	〃
169	〃	〃	遺構外	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	内面「赤家」、外面「赤」	10C前	〃
170	榎木Ⅰ	長野原町林	1号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	9C第3四半期	16
171	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	9C第3四半期	〃
172	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面正位	墨書	判読不能	9C第3四半期	〃
173	〃	〃	2号竪穴建物	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	内面「多」、外面「佐」	9C第3四半期	〃
174	〃	〃	〃	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	「佐」	9C第3四半期	〃
175	〃	〃	〃	須恵器杯	体～底部内面	墨書	「酒杯」カ	9C第3四半期	〃
176	〃	〃	3号竪穴建物	須恵器杯	底部外面・体部外面正位、2箇所	墨書	体部外面「十」、底部外面「入」	9C第3四半期	〃
177	〃	〃	〃	須恵器杯	底部外面・体部外面倒位、2箇所	墨書	判読不能	9C第3四半期	〃
178	〃	〃	4号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「山」	9C第3四半期	〃
179	〃	〃	〃	須恵器杯	底部内面	墨書	判読不能	9C第3四半期	〃
180	〃	〃	遺構外	須恵器杯	体部内外面横位、2箇所	墨書	判読不能	9C第3四半期	〃
181	〃	〃	〃	須恵器杯	底部内面	墨書	「三保(異体字)」	9C第3四半期	〃
182	榎木Ⅱ	長野原町林	5号竪穴建物	須恵器杯	底部内面・体部外面正位、2箇所	墨書	□の中に「ト」	9C	17
183	〃	〃	〃	須恵器杯	底部内面	墨書	判読不能	9C	〃
184	〃	〃	30号竪穴建物	須恵器杯	底部内外面、2箇所	墨書	判読不能	10C前	〃
185	〃	〃	46号竪穴建物	須恵器杯	体部内外面正位、3箇所	墨書	内面「長」、外面「長」「奉」	10C前	〃
186	〃	〃	〃	須恵器杯	体部内面	墨書	「□家」	10C前	〃
187	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内面・体部外面倒位、2箇所	墨書	内面「三家」、外面「三」	10C前	〃
188	〃	〃	72号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「佐」	10C前	〃
189	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「佐」カ	10C前	〃
190	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内面・体部外面正位、2箇所	墨書	外面「佐」、内面「南」	10C前	〃
191	〃	〃	76号竪穴建物	須恵器杯	底部内面	墨書	「県」	10C前	〃
192	〃	〃	6号焼土	須恵器椀	底部内面・体部外面倒位、2箇所	墨書	「三家」	10C前	〃
193	〃	〃	遺構外	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「三」	10C前	〃
194	〃	〃	〃	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「古」カ	10C前	〃
195	〃	〃	〃	須恵器椀	底部内外面、2箇所	墨書	判読不能	10C前	〃
196	上野Ⅰ	長野原町横壁	1号竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	「中」	9～10C	18
197	〃	〃	2号竪穴建物	須恵器杯	体部外面正位	墨書	「地」	9～10C	〃
198	横壁中村	長野原町横壁	竪穴建物	須恵器杯	底部外面	墨書	判読不能	9～10C	19

- 1 草津町教育委員会編『井堀遺跡発掘調査報告』1974
- 2 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『四戸遺跡 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2020
- 3 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『唐堀C遺跡 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2020
- 4 中之条町教育委員会編『大塚遺跡群五十嵐遺跡昭和59年度発掘調査概報』1980
- 5 中之条町教育委員会編『大塚遺跡群五十嵐遺跡第2次』1986
- 6 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上ノ平Ⅰ遺跡(1) ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集』2008
- 7 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上ノ平Ⅰ遺跡(2) ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第49集』2017
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『石川原遺跡 古墳時代以降編 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第72集』2020
- 9 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『下湯原遺跡(1) ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第59集』2018
- 10 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『ハツ場ダム発掘調査集成(1) ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』2002
- 11 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『下田遺跡(2) ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52集』2017
- 12 長野原町教育委員会編『林宮原遺跡Ⅱ 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書』2004
- 13 長野原町教育委員会編『林宮原遺跡Ⅲ 仮設ゲートボール場造成に伴う発掘調査報告書』2011
- 14 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『中棚Ⅰ遺跡 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第62集』2019
- 15 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『林宮原遺跡(2) 林中原Ⅰ遺跡(2) 中棚Ⅱ遺跡(2)ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第70集』2020
- 16 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『榎木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡(2)・西久保Ⅳ遺跡 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』2012
- 17 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『榎木Ⅱ遺跡(1) 平安時代・中近世編 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』2008
- 18 長野原町教育委員会編『長野原町の遺跡 町内遺跡詳細分布調査報告書』1990
- 19 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『横壁中村遺跡(4) ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集』2006

表2 群馬県吾妻郡内出土墨書・刻書土器遺跡別出土点数

番号	遺跡名	遺跡所在地	出土点数
1	東吾妻町本宿	東吾妻町本宿	1
2	四戸	東吾妻町三島	16
3	唐堀C	東吾妻町三島	7
4	井堀	草津町前田	2
5	五十嵐	中之条町五十嵐	3
6	上ノ平 I	長野原町川原畑	24
7	石川原	長野原町川原湯	71
8	下湯原	長野原町川原湯	3
9	花畑	長野原町林	2
10	下田	長野原町林	6
11	林宮原Ⅱ	長野原町林	14
12	林宮原Ⅷ	長野原町林	4
13	中棚Ⅰ	長野原町林	3
14	中棚Ⅱ	長野原町林	13
15	楡木Ⅰ	長野原町林	12
16	楡木Ⅱ	長野原町林	14
17	上野Ⅰ	長野原町横壁	2
18	横壁中村	長野原町横壁	1
計			198

表3 群馬県吾妻郡内自治体別墨書土器出土遺跡数・点数

自治体名	出土遺跡数	点数
東吾妻町	3	24
草津町	1	2
中之条町	1	3
長野原町	13	169
計	18	196

表4 群馬県吾妻郡内出土墨書・刻書土器文字記入部位集計表

文字記入部位	点数
底部内面	18
底部外面	31
体部内面	10
体部外面	93
口縁部内面	1
頸部外面	1
体～底部内面	2
底部内外面2箇所	20
底部内面・体部外面2箇所	5
底部外面・体部外面2箇所	3
口縁部内外面2箇所	1
体部内外面2箇所	9
3箇所	4
計	198

表5 群馬県吾妻郡内出土墨書・刻書土器の年代別数量

年代	時期	内訳点数		
8世紀代	5			
9世紀代	106	時期不明	12	
		前半	1	
			第2～第3四半期	3
		後半	55	
			第3四半期	26
			第4四半期	4
	未葉	5		
10世紀代	71	時期不明	6	
		初頭	4	
		前半	49	
			第1四半期	9
	後半	3		
9～10世紀	16			
計	193			

表6 上野国内御牧9箇所の比定地(『群馬県史通史編2 原始古代2』1991 596頁の表を基に加筆)

番号	牧名	比定地	備考
1	利刈牧	群馬郡 子持村白井・北牧～ 渋川市南牧一帯	『和名類聚抄』群馬郡の項に「利刈郷」がみえ、古くから北群馬郡牧村(子持村～渋川市)に比定される。隣接する渋川市の旧子持村白井字利刈野との関連も想定できる。旧子持村白井一帯で最近発掘調査された古墳時代の馬の放牧地跡との関連も想定できる。
2	有馬島牧	群馬郡 渋川市有馬～前橋市 荒牧町一帯	『和名類聚抄』群馬郡の項に「有馬郷」がみえ、渋川市に有馬の地名がある。渋川市半田中原南原遺跡を有馬島牧の一部を構成する牧跡とみる考え方がある。前橋市荒牧町の「荒牧」を古い牧(古巻、現渋川市)に対する新しい牧とみる考え方もある。
3	沼尾牧	勢多郡・吾妻郡? 渋川・東吾妻?	渋川市の旧赤城村に「沼尾川」、吾妻郡東吾妻町にも「沼尾川」あり。
4	拝志牧	勢多郡 前橋市日輪寺町一帯	中世「拝志荘」の前身とみて、前橋市日輪寺町一帯に比定出来る。
5	久野牧	利根郡? 沼田・みなかみ?	「久野」は「長野」の誤記で、『日本後紀』弘仁2年(811)10月5日条にみえる桓武天皇皇子三品葛原親王に賜られた「長野牧」に比定する考え方がある。具体的に、沼田市上久屋町・下久屋町、みなかみ町上牧・下牧などが想定されている。
6	大藍牧	利根郡・吾妻郡? みなかみ・嬭恋?	みなかみ町上牧・下牧にあてる考え方がある。また嬭恋村三原・大笹とみる考え方もある。
7	市代牧	吾妻郡? 中之条	中之条町市城、東村新巻・奥巻などを比定する考え方が有力である。
8	鹽山牧	甘楽郡 下仁田～南牧	下仁田町・南牧村には、東野牧、西野牧、南野牧、馬山などの地名が点在する。また南牧村には大塩沢、塩沢、小塩沢など「鹽山」に類似する地名がある。
9	新屋牧	甘楽郡 甘楽	『和名類聚抄』甘楽郡の項に新屋郷がみえる。

# 一点だけでも「こも編み石」に認定できるか？

石 守 晃

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 1. はじめに       | 4. 多比良追部野遺跡のこも編み石 |
| 2. 研究小史       | 5. 利根川の川原石        |
| 3. こも編み石の部位呼称 | 6. おわりに           |

## — 要 旨 —

「編み物石」「編み物用石錘」「薦編石」の呼称を持つ「こも編み石」は、ムシロ等の編み物の錘として使用されたと認識されている礫である。こも編み石は竪穴住居(竪穴建物)から複数個まとまって出土することで知られるが、本稿は1点でも当該礫がこも編み石と認識できることを示すことを目的として起こした。

先づ、こも編み石の様相を把握するため、高崎市吉井町の多比良追部野遺跡出土した1,072点のこも編み石のうち、当該竪穴住居に伴うものとして判断したこも編み石が、1軒当たり8個以上出土した34軒の竪穴住居出土の478点のこも編み石を検討した。その結果、横位を一周する摩耗痕(本稿では「摩耗周」と仮称する)と、摩耗や敲打により人工的に作られた測縁の抉れがこも編み石認定の要素であることを認識した。

一方、自然礫に摩耗周や人為的に作られたもののような抉れが確認できるか否かを確認するため、利根川の川原石86点を観察した。その結果、一見摩耗周に見えなくもない横位に発達した層理を有するものも多く見られたが、自然の川原石には摩耗周や人為的な抉れ様のものは確認されなかった。

以上の所見から、摩耗周や人為的抉れの有無の確認により、1点の礫でもこも編み石として識別できることを確認した。

### キーワード

対象時代 古墳時代  
対象地域 —  
研究対象 こも編み石

## 1 はじめに

竪穴住居(現在「竪穴建物」と称することになっているが、引用文献等との整合性を求めて、本稿では「竪穴住居」を用いる)から、時々まとまって出土する、主に楕円形或いは隅丸長方形の平面形を呈する川原石がある。今日、編み物に用いる錘として認識されるこの礫は「編み物石」「編み物用石錘」「薦編石」「こも編み石」等多くの呼称を有するが、本稿では勤務する(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で主に使われている「こも編み石」を以てその名称とし、以下記載することとする。

筆者がこも編み石に真剣に相対したのは、上信越道(関越自動車道新潟線)の建設に伴い発掘調査を実施した、群馬県多野郡吉井町の多比良追部野遺跡(たいらおっぺのいせき)の整理作業に携わった平成6年2月から平成8年3月に掛けてであった。その整理作業に於いて、こも編み石を観察していたところ、職場の先輩である大木紳一郎氏から、紐掛けの使用痕であるこも編み石を横位に廻る帯状の摩耗痕のあることを教えられ、その視点を加えて観察を進めていった。観察したこも編み石は、竪穴住居出土のものが1,023点、その他の遺構や遺構外出土ものが49点の、併せて1,072点であった。

さて後述の吉井雅勇氏は、群馬県では「規格性のある楕円礫＝編物用石錘と認識」し、個々の実測図まで掲載するなど「編物用石錘に対する認識の高さがうかがえる」とまで評価下さった(吉井 2007)が、私の勤務先も整理システムの変更以降、竪穴住居からまとまって出土するもののみを対象とするようになり、少数個体のもは取り上げられにくくなっている。また発掘現場では、こも編み石と自然礫との峻別が付け辛いという現実もある。

一方で、自然の川原石の中には、その中位を横断する層理があって、礫を一周する帯状の摩耗痕と同じように見える事例を認知していたため、筆者の観察した摩耗痕等が自然石にも見られるのではないかという不安を抱いていた。そこでこも編み石に長軸方向に層理の発達が見られ、帯状摩耗痕と層理との峻別の付き安い片岩を多く使用している多比良追部野遺跡出土のこも編み石と、利根川原に見られたこも編み石様の川原石の観察を通して、自然石とこも編み石の判別できることを確認し、例え1点でも当該礫がこも編み石と認識できることを示すことを目的として本稿起すものである。

## 2 研究小史

こもあみ石の出土例について初めて報告したのは大場利夫、石川徹による手稲遺跡の発掘調査報告書である(大場・石川 1956)<sup>(1)</sup>。児玉作左衛門と大場利夫は、天塩郡豊富町豊富遺跡の報文、4号竪穴の東壁沿いの窯の西側に43個出土する長さ5cm、厚さ3cmほどの扁平な河原石について、出土箇所には他の遺物も多く、「近代ア

イヌ人が織物の錘に小石を使用していることゝ併せて」、ここが「敷物などの植物繊維を織る織物機を置いたところであり、小石は錘石であるかも知れない」とその用途に言及している(児玉・大場1959)。

しかしその後、大川清は長野県伊那市の福島遺跡の報告書(資料編)に於いて、C9号住居跡のP2柱穴の近くにまとまって出土した「こもあみ石」について「Toilet stone」として報告しており(大川 1968-p.50,p.56)、Toilet stoneは「大型のものと小型のものがそれぞれかためられているごとき」出土したもので、その名の通り用便の具としていたと解釈した(大川 1968)。しかし以降の研究者は大川説このToilet stone説を取り上げるものの、肯定する所見は確認できない。

さて、比留間博は船田遺跡の発掘調査報告書に於いて、E42住居址に散らばって出土した10個のこも編み石を、すべて自然面を持つ河原石で、長さ・周囲10～15cmを収めるものとして「編物石」として報告している。その呼称について比留間は「筵編みの錘りに類似するからだが、用途の確証はない」と述べている。今日定説化している「編み物の錘」説を断定してはいないが、今日に続く当該説の直接の元となる指摘である。尚、E42住居址の「編物石」は重量100g前後2個、200g前後4個、300g前後2個であることから、「ほぼ等しい大きさの石、2個一組で使用していたことがうかがわれる」としている(比留間 1969)。

一方、尾崎喜左雄は、群馬県高崎市(旧多野郡吉井町)入野遺跡の11・14・17号住居の南壁の東或いは西隅に長さ15cm程の川原石(こも編み石)が石段状に積まれ、周囲から大盤、小型手捏造土器が出土することから、こも編み石を祭祀的な遺構の一部として捉えている(尾崎 1970)。しかし後述の黒沢はるみ(黒沢 1988)らはこの祭祀説を否定している。

柿沼幹夫は下田遺跡43号住居跡からまとまって出土した9個を含む14個の川原石に着目し、資料収集によって南関東では弥生時代の出土例は知らないが、古墳時代から平安時代の出土例のあることを記し、四角柱に近い形状で10～20cm前後のものが多く、竪穴住居の隅や壁際の床面直情に出土し、偶数個の出土が多く、時期による相違は見られないとし、「編物石」として認識するのが最も妥当であろうと結論付けている(柿沼 1979)。確証はないとしていた比留間博の説(1969)が、10年を経てより明確に指摘されるようになったことを示している。

渡辺誠は“もじり編み”用の錘具に関する検討を、民俗事例と考古資料から行い、以後の研究の画期となる論考を上梓した(渡辺 1981)。渡辺は、北海道と京都府、東京都、及び福島・埼玉・長野・静岡・岐阜・滋賀・三重・福井県の1都、1府、1道、8県の24地区27事例の民

俗例と、東京都、北海道、栃木・群馬・埼玉・神奈川・岐阜・高知県の1都、1道、6県の20遺跡55軒の竪穴住居と氷室1カ所の事例を分析した。民俗例では西関東から中部地方にかけての事例集中の傾向があること、製作される製品は縦糸幅1cm程の編み布等の第1群、2～数cm幅のカゴ等の第2群、10～20cm幅のムシロ等の第3群、15～30cm幅の雪囲い等の第4群の4群に分けられること。横に渡す繊維は第4群に向かうほど太くて硬い材質を使用し、縦糸を束ねる錘には木錘と石錘があり、石錘の重量は第1群は20～80g、第2群は80～180g、第3群は160～300g、第4群は360～880gであった。また木錘と石錘との使い分けは素材を見極めて行っていることを指摘している。また石錘については、未加工の川原石を用いたA類、紐掛けを施したB類、紐(ちのわ)を掛ける部分に溝を一周させたC群、石器を転用したD類にわけられ、A類は扁平または丸い川原石のAa類、長めの川原石のAb類、B類は紐かけ部分に粗い打ち欠きのあるBa類、きれいな切れ目のあるBb類に細分している。渡辺の取り上げた考古資料(石錘(こも編み石))は全て民俗資料のAa類とAb類であった。その重量は765gのものもあったが、多くは100～450gの範疇に収まっているという。また対を成す礫が列を成して主度している例が10例あり、カマドの反対側から出土する例が64%と多いことが指摘され、この領域での作業を想定されている。また渡辺は、8個出土の例は米俵、炭俵作製の可能性を指摘し、礫石錘も従来想定されているような漁錘ではなくもじり編用錘具と見做している。

このようにこも編み石は編物に使用される遺物だという認識がなされるようになっていたが、群馬県沼田市石墨遺跡の発掘調査と整理作業を担った水田稔は、住居址出土の弥生時代から平安時代、特に古墳時代後期の竪穴住居から出土する楕状の川原石の観察から、当時これが編物に使用された礫と認識されつつあることを知りつつも、石墨遺跡出土のものは「多くが敲石の範疇に入ると判断し(水田 1985)、単純にこも編み石として扱うことの問題点を示唆した。

その後、上野国分僧寺・尼寺中間地域の38軒の竪穴住居(竪穴建物)から出土した96個の「川原石」である「礫」(こも編み石)を分析した黒沢はるみは、長さ11～16cm、幅4～8cm、重さ400～500gが多く、石材は粗粒安山岩を用いたものが多いと報告している。また氏は自然礫と思われたもののうち1/4以上が磨石や敲石等の石器であり、重量も600g以上が43.2%を占めていることからこも編み石に複数の用途のあることを示して、水田の指摘(1985)<sup>(2)</sup>に答えている。また柿沼(1979)が指摘した等しい重量、或は偶数個の組み合わせに必ずしも適合しないことを指摘している。そして共伴遺物等に入野遺跡の出土例に近いものはあるものの、尾崎喜左

雄の指摘したような祭祀遺物とすること(尾崎1970)は困難との所見を示している(黒沢 1988)。

新潟県荒井町道端遺跡の古墳時代中後期の1号土坑から出土した12個の楕円礫を分析した吉井雅勇は、上述の渡辺誠の研究成果(渡辺 1981)と周辺地域、特にこも編み石本体のデータの揃っている群馬県の事例との比較において検証している。この論考の中で氏は道端遺跡出土のこも編み石から長さ14.4から18.7cm、平均16.3cm、重さ525～1,230g、平均888.8gであることを示し、比較的資料の提示数の多い群馬県との比較や、上述の渡辺誠(渡辺 1981)の成果を勘案し、道端遺跡の楕円礫は「編物用石錘」と考えられ、最も重い部類であるため、「タテ糸の間隔は10～30cmと粗く、雪囲い、箕、エリ箕、スダレなどの大型品」が想定される」としている。また群馬県の例が多く竪穴住居から出土していることから、「編み物作業の多くは屋内であったであろう」という見解を示している(吉井 2007)。

以上の先学の研究により、「こも編み石」が編物用の石錘であるという認識は定説化し、一部のこも編み石には敲石等の機能も併せ持っている、即ち石器、石製品からの転用品があることも認識されるようになってきている。

### 3 部位呼称

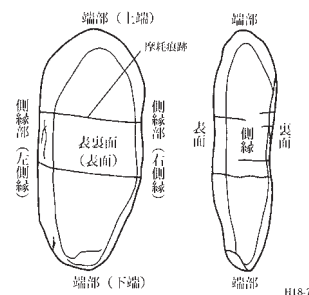
こも編み石の多くは、一見自然の川原石に見える資料である。従って部位の呼称等はそもそも明確ではないのであるが、こも編み石を説明するに当たり、本稿では、仮称で

はあるが部位等の呼称を設定することとする。

こも編み石の多くは楕円形等の円礫であり、X・Y・Zの軸方向で長さが異なる。平坦面に据えた場合、最も長い軸方向と他の2軸のうち長い方の軸方向が上下左右の垂直方向(X・Y軸方向)となり、最も短い軸線方向が前後方向(垂直)方向(Z軸方向)にある。最も長い軸線方向を「縦位」、次に長い軸線方向を「横位」、最も短い軸線方向を「奥行」と仮称したい。

次に一呼称として、従位方向の端点を「頂部」とし、任意に据えた上位の端部を「上端」、下位の端部を「下端」とする。横位方向の端部を「側縁」とし、やはり任意に据えた左側を「左側縁」、右側を「右側縁」とする。そして、こも編み石を平坦面に据えたとき手前または背面に見える面は「表裏面」とし、任意に据えた手前側の面を「表面」、裏側の面を「裏面」と呼称することとする。

測定に於いては上端と下端間の最長距離を「長さ」、



第1図 こも編み石の部位呼称

左右両側縁間の最長距離を「幅」、表裏面間の最長距離を「厚み」とする。また任意に据えたこも編み石の従位方向の上方を「上位」、中程を「中位」、下方を「下位」と呼称することとする。

#### 4 多比良追部野遺跡のこも編み石

##### ① 多比良追部野遺跡

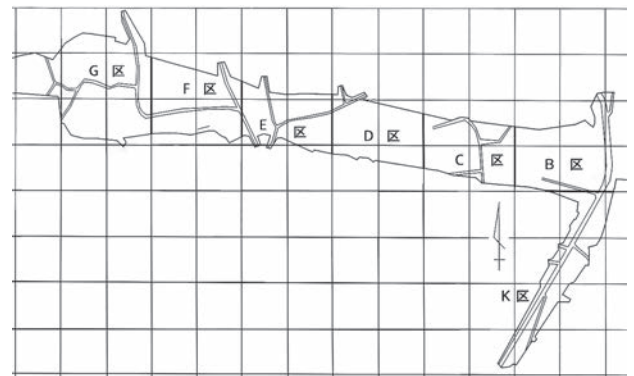
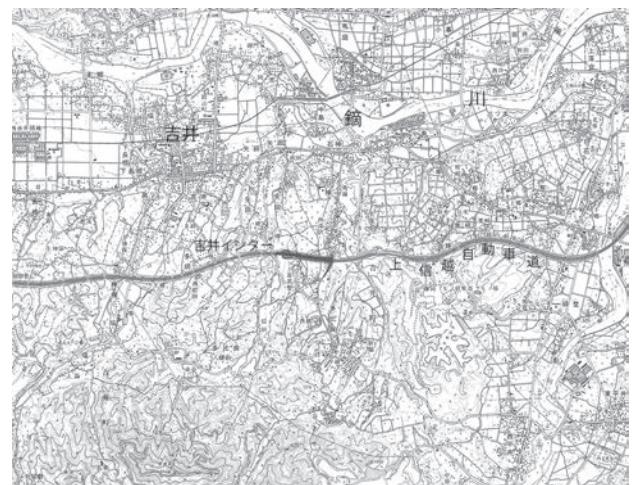
本稿で取り上げるこも編み石は、多比良追部野遺跡(たいらおっぺのいせき)出土の資料である。これは整理作業に当たって一点一点観察していたこと、及び同遺跡出土のこも編み石が多く絹雲母石墨片が等の片岩によるもので、層理が長軸に沿って形成されていることから、こも編み石を特徴づける要素として考えている横位を一周する摩耗痕が確認しやすいためである。

多比良追部野遺跡は上信越自動車道の建設に伴って平成元～2年度に発掘調査された遺跡で、群馬県西南部の高崎市吉井町多比良、利根川の支流である鎗川の右岸の段丘上、東の土合川、西の矢田川という共に北流する中中小河川に開析された谷に挟まれた尾根状地形の上に立地している。多比良追部野遺跡は旧石器時代から近世に至る複合遺跡であるが、古墳時代以降の竪穴住居 191軒についてみると、古墳時代前・中期が2軒、古墳時代後期以降の189軒のうち古墳時代後期が129軒、奈良時代20軒、平安時代24軒と、特に古墳時代後期の遺構量が多く、古墳時代後期の竪穴住居のうち89.1%が6世紀後半から7世紀前半にかけての所産である。

##### ② 多比良追部野遺跡の竪穴住居とこも編み石

多比良追部野遺跡の発掘調査で出土したこも編み石は1,072点あり、このうち竪穴住居から出土したこも編み石は1,023点であった。竪穴住居193軒のうち、こも編み石が出土した住居は138軒である。こも編み石は古墳時代中期以前の住居からの出土はなく、古墳時代後期の住居では130軒中83軒(63.8%)からの出土があった。一方、奈良時代の住居20軒のうち17軒からの出土があり、住居に伴うこも編み石が出土したのは12軒で、平安時代の住居24軒のうち6軒から出土し、住居に伴うと判断したこも編み石が出土したのは1軒であった。

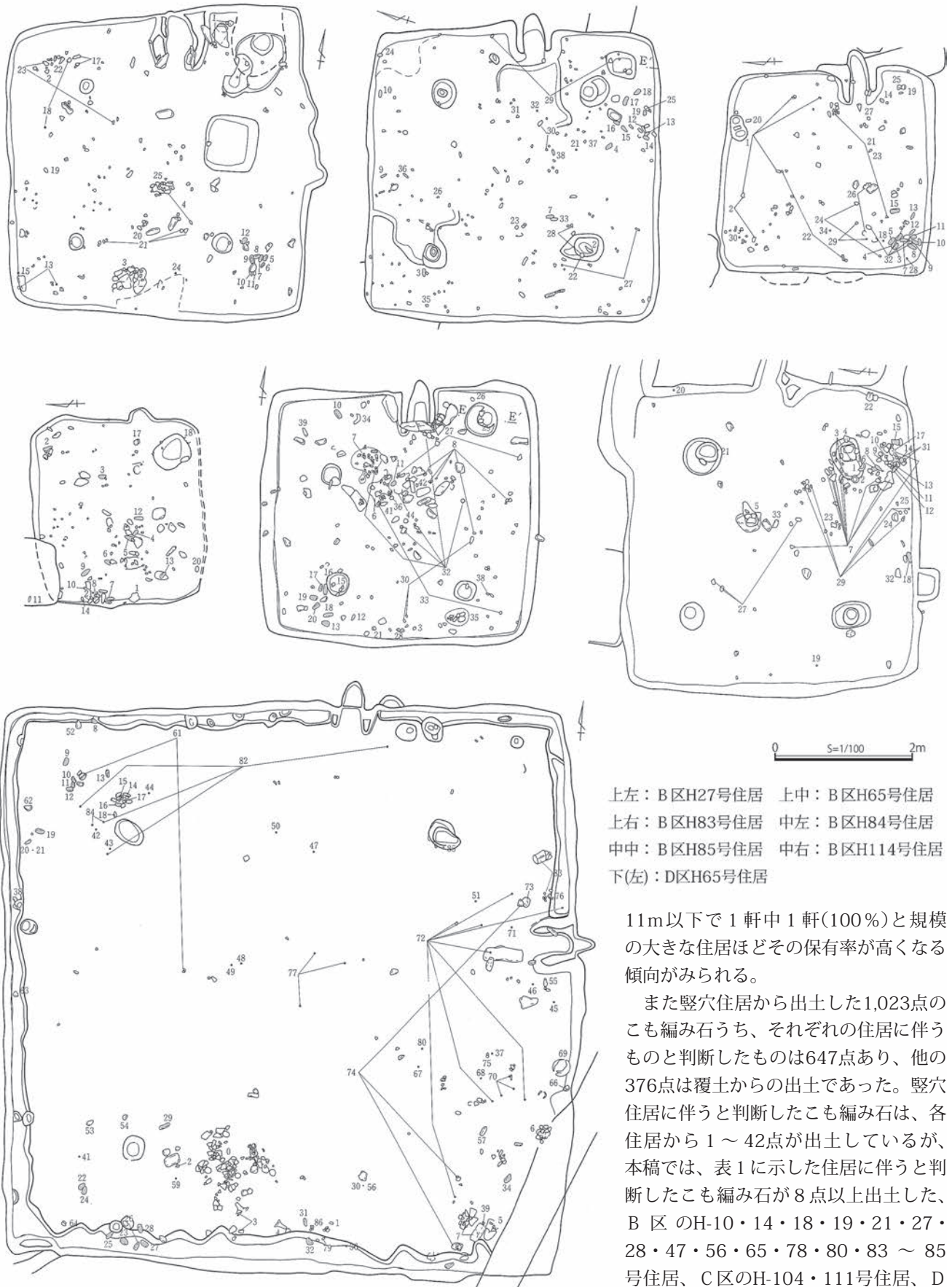
多比良追部野遺跡の竪穴住居は古墳時代後半期のものを中心としているが、同時期の竪穴住居のプランは概ね方形を呈している。このうち規模が測定できた118軒についてみると、一辺の長さが3m以下では9軒中9軒(100%)、4m以下で21軒中9軒(42.86%)、5m以下で35軒中21軒(60%)、6m以下で33軒中27軒(81.82%)、7m以下が13軒中11軒(84.62%)、8m以下で2軒中1軒(50%)、9m以下と10m以下では共に2軒中2軒(100%)、11m以下で1軒中1軒(100%)の竪穴住居からこも編み石が出土しているが、住居の規模



第2図 多比良追部野遺跡位置図と調査区配置図  
(中：国土地理院「富岡」「高崎」「上野吉井」「藤岡」使用  
1/10万 下：1/6000)

とも編み石出土との関係性は認められない。また8個以上のこも編み石が出土した住居では、一辺の長さが3m以下では9軒中2軒(22.2%)、4m以下で21軒中5軒(23.81%)、5m以下で35軒中5軒(14.29%)、6m以下で33軒中9軒(27.27%)、7m以下が13軒中5軒(38.46%)、8・9・10m以下は共に2軒中1軒(50%)、



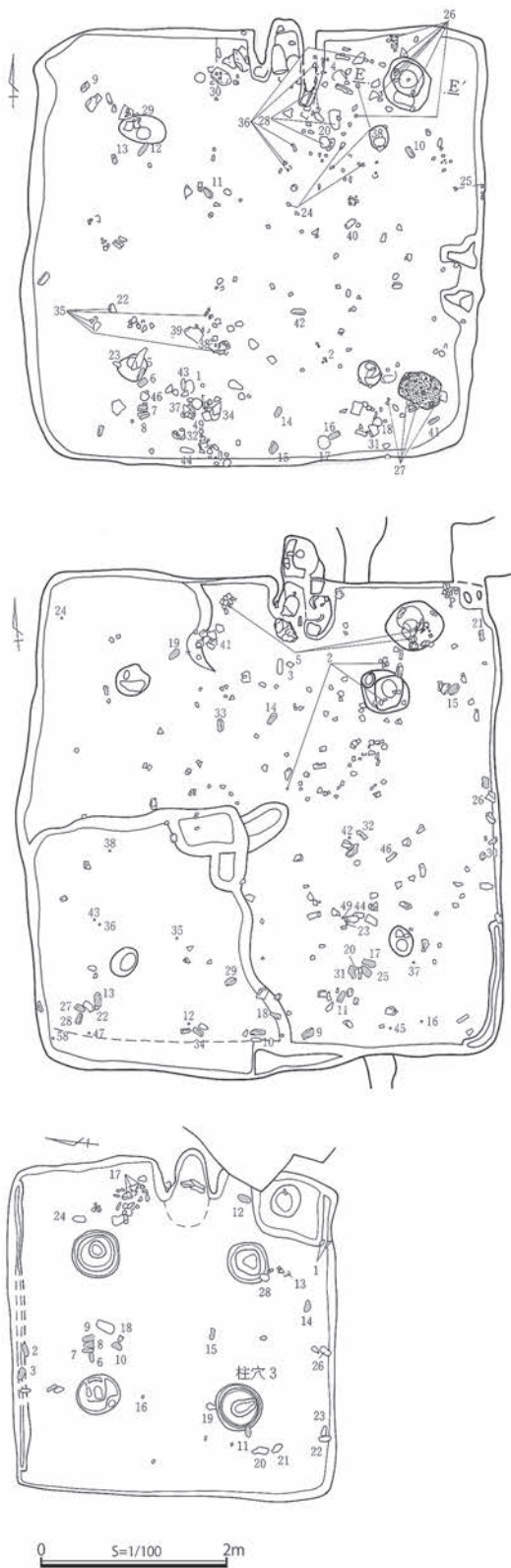


第3図 竪穴住居と出土遺物(住居に伴うこも編み石は灰色塗)

上左：B区H27号住居 上中：B区H65号住居  
 上右：B区H83号住居 中左：B区H84号住居  
 中中：B区H85号住居 中右：B区H114号住居  
 下(左)：D区H65号住居

11m以下で1軒中1軒(100%)と規模の大きな住居ほどその保有率が高くなる傾向がみられる。

また竪穴住居から出土した1,023点のこも編み石うち、それぞれの住居に伴うものと判断したものは647点あり、他の376点は覆土からの出土であった。竪穴住居に伴うと判断したこも編み石は、各住居から1～42点が出土しているが、本稿では、表1に示した住居に伴うと判断したこも編み石が8点以上出土した、B区のH-10・14・18・19・21・27・28・47・56・65・78・80・83～85号住居、C区のH-104・111号住居、D区のH-113・119～122・139・140・



左上：E区123号住居 右上：F区190号住居  
 左下：K区49号住居

第4図 竪穴住居と出土遺物(住居に伴うこも編み石は灰色塗)

152・145号住居、E区のH-123・125・128・190号住居、K区のH-49・68・69号住居の34軒の竪穴住居出土で、当該の竪穴住居に伴うと判断した438点のこも編み石を対象に検討を行こととする。

34軒の竪穴住居出土のこも編み石の数量は8～42点で、その平均は13.8点であった。尚、その出土点数が偶数の竪穴住居は16軒、奇数の竪穴住居は18軒であり、黒沢はるみ(黒澤 1988)が指摘したように、必ずしも偶数個が適合されないものである。

またその出土状態の分布状況をみると、34軒中33軒の竪穴住居で集中的出土状態が見られた。しかし、これらは上述の入野遺跡例のような整然としたものではなく、縦糸に当たる縄や紐が付けられたまま置かれたことを示唆するものであった。また集中的に出土する位置は、住居の南東部が4軒、南中央部が2軒、南西部が6軒、西中央部が1軒、北西部が7軒、北東部が2軒、中央部が1軒あった。このうち2軒は2か所の集中域を有し、D区H140号住居が南西部と北西部、K区69号住居は南東部と南西部に集中域を有している。また南中央部の2軒は共に南壁際、南西部6軒のうち2軒が南壁際、1軒が西壁際に在り、西中央部の1軒は西壁際、北西部7軒のうち3軒が西壁、2軒が北壁際、北東部の2軒中1軒が北壁際に集中的な出土が確認された。こも編み石が8個以上出土する竪穴住居では、約2/3で集中的なこも編み石の出土状態が見られたが、竈の設けられた側は6軒で、他の16軒は竈から離れた位置から出土しており、一方、壁際から出土は集中的な出土を見せる竪穴住居の約半数を数えた。

② こも編み石の規格

34軒の竪穴住居から出土し、住居に伴うと判断された478点のこも編み石の概要は表3<sup>(3)</sup>に示し、その一部の実測図を第5～7図に示した。

これらのこも編み石の長さは測定できた439点についてみると、8.3cmから25.4cmと分散が大きいものであったが、平均14.9cmを測り、表塾偏差は2.0であった。また重量を測定できた424点についても、100gから1,320gと分散が大きいものであったが、平均620.7gを測り、標準偏差は288.2であった。しかしこの長さ重量の分散傾向から思料するに、こも編み石は重量の均質性より大きさ(長さ)の均質性を求めて採集されていたのではないかと窺われるのである。

また、竪穴住居ごとのこも編み石の長さの平均は、B区H21号住居の11.6cmからE区H125号住居の17.4cmまであって多様である。しかしD区H140号住居(平均13.4cm)からE区H125号住居(平均17.4cm)までの32軒の平均値は、概ね直線的な分布状態を示す。尚、この長さの平均値の34軒全体での平均は14.8cmで、その標

表1 8個以上のこも編み石が出土した竪穴住居一覧

No.	区	住居	住居伴う	住居に伴わない	小計	規模		竈向き	集中分布域	時期	No.	区	住居	住居伴う	住居に伴わない	小計	規模		竈向き	集中部(竈基準)	時期
						長軸	短軸										長軸	短軸			
1	B	H-10号住居	12	0	12	[306]	[274]	東	北西部北壁際	7c.後半	18	C	H-111号住居	9	2	11	356	347	東	—	6c.後半
2	B	H-14号住居	8	4	12	553	529	東	—	7c.前半	19	D	H-113号住居	9	2	11	444	(360)	東	—	古墳-平安
3	B	H-18号住居	8	2	10	624	(406)	東	北西	7c.中葉	20	D	H-119号住居	8	3	11	394	(256)	東	北西部北壁際	7c.末-7c.頭
4	B	H-19号住居	17	4	21	(442)	401	(東)	南東部南壁際	8c.後半	21	D	H-120号住居	8	5	13	516	442	東	中南部南壁寄り	6c.末-7c.頭
5	B	H-21号住居	10	2	12	518	518	東	北西部西壁際	6c.後半	22	D	H-121号住居	42	7	49	784	743	東	北東部北壁寄り	6c.末-7c.頭
6	B	H-27号住居	8	1	9	573	540	東	南東	6c.後葉	23	D	H-122号住居	18	4	22	824	816	東	北東隅部	6c.末-7c.頭
7	B	H-28号住居	25	0	25	690	(648)	東	北西・南東南壁際	6c.末-7c.頭	24	D	H-139号住居	17	0	17	468	459	東	—	8c.前半
8	B	H-47号住居	12	2	14	518	508	東	—	6c.末-7c.頭	25	D	H-140号住居	27	17	44	1064	1047	北・東	南西部南壁際・北西	6c.末-7c.頭
9	B	H-56号住居	12	14	26	573	551	(北東)	南部中央南壁際他	6c.末-7c.頭	26	D	H-142号住居	9	5	14	913	913	東	北東・北西部	6c.末-7c.頭
10	B	H-65号住居	17	4	21	544	533	東	南東	6c.末-7c.頭	27	D	H-145号住居	9	1	10	(283)	279	東	—	6c.末-7c.頭
11	B	H-78号住居	12	1	13	600	538	東	南東隅部西壁際	7c.前半	28	E	H-123号住居	12	8	20	619	585	東	西部散漫	6c.後半
12	B	H-80号住居	8	0	8	534	464	東	—	7c.前半	29	E	H-125号住居	13	2	15	620	574	東	西部中央西壁際	7c.前半
13	B	H-83号住居	13	1	14	390	383	東	南西部隅部	6c.後半	30	E	H-128号住居	16	5	21	632	628	北	—	6c.末-7c.頭
14	B	H-84号住居	13	2	15	345	314	東	中西・北西部西壁際	6c.中・後葉	31	F	H-190号住居	26	5	31	667	646	北	西部散漫	6c.末-7c.頭
15	B	H-85号住居	11	5	16	508	480	東	中央	6c.末-7c.頭	32	K	H-49号住居	15	10	25	456	442	東	—	7c.前半
16	B	H-114号住居	11	6	17	560	534	東	南東部南壁際	6c.末-7c.頭	33	K	H-68号住居	9	4	13	380	328	東	南西部	7c.後半頃
17	C	H-104号住居	15	13	28	575	568	東	西壁際・北壁際	6c.末-7c.頭	34	K	H-69号住居	11	3	14	412	392	東	北東部・南西部隅部	6c.後半

表2 住居別長さ・重量集計一覧

区	遺構	長さ (cm)					重量 (g)					区	遺構	長さ (cm)					重量 (g)				
		最小	最大	最大差	平均	偏差	最小	最大	最大差	平均	偏差			最小	最大	最大差	平均	偏差	最小	最大	最大差	平均	偏差
B	10号住居	12.3	16.0	3.7	13.6	1.4	260	460	200	333.2	58.5	C	111号住居	3.4	16.7	13.3	15.1	1.1	283	573	290	473.3	101.9
B	14号住居	12.9	16.2	3.3	14.5	1.2	355	560	205	410.0	71.7	D	113号住居	12.7	15.1	2.4	13.6	0.8	285	465	180	367.9	77.8
B	18号住居	12.5	15.6	3.1	13.9	1.0	440	630	190	507.9	74.4	D	119号住居	13.2	16.5	3.3	14.4	1.2	315	520	205	418.1	73.1
B	19号住居	13.5	15.9	2.4	14.3	0.6	150	650	500	448.8	142.9	D	120号住居	13.5	18.3	4.8	16.4	1.8	440	1080	640	807.1	221.6
B	21号住居	8.3	15.3	7.0	11.6	2.4	135	490	355	261.7	117.1	D	121号住居	12.3	20.2	7.9	16.1	1.9	382	1091	709	669.2	170.3
B	27号住居	11.8	17.6	5.8	14.2	2.1	470	1,120	650	758.8	195.0	D	122号住居	12.2	18.0	5.8	15.1	1.6	100	1,120	1029	789.9	288.0
B	28号住居	11.0	16.8	5.8	14.1	1.4	600	1,050	450	783.8	123.5	D	139号住居	13.1	19.4	6.3	15.9	1.7	205	590	385	380.1	117.1
B	47号住居	12.5	16.7	4.2	15.3	1.2	435	1,170	735	910.8	201.4	D	140号住居	9.9	18.5	8.6	13.4	2.7	139	1,165	1026	503.6	309.3
B	56号住居	12.4	16.2	3.8	14.4	1.3	350	760	410	546.7	133.4	D	142号住居	12.1	16.5	4.4	14.0	1.4	534	1,038	504	700.5	172.0
B	65号住居	12.2	17.2	5.0	14.4	1.4	450	900	450	601.9	123.7	D	145号住居	14.5	21.1	6.6	17.2	2.3	404	718	314	576.1	100.5
B	78号住居	11.5	14.6	3.1	13.0	1.0	285	600	315	394.6	93.1	E	123号住居	12.8	17.1	4.3	15.2	1.6	634	1,164	530	872.7	199.7
B	80号住居	11.1	15.4	4.3	14.2	1.4	140	900	760	568.8	250.7	E	125号住居	13.9	20.6	6.7	17.4	1.2	596	948	352	793.5	107.0
B	83号住居	9.9	16.9	7.0	14.8	1.8	250	850	600	561.7	170.7	E	128号住居	12.3	18.1	5.8	14.7	1.6	413	800	387	662.2	129.1
B	84号住居	13.4	25.4	12.0	16.7	3.3	325	900	575	590.0	167.8	F	190号住居	13.3	17.2	3.9	15.3	1.2	440	1,075	635	718.5	166.5
B	85号住居	14.0	19.6	5.6	15.7	1.9	465	1,320	855	807.5	251.4	K	49号住居	11.8	16.2	4.4	14.0	1.2	458	872	414	621.4	142.7
B	114号住居	13.5	18.0	4.5	16.1	1.4	530	860	330	703.9	113.4	K	68号住居	12.7	17.1	4.4	14.8	1.5	440	1,032	592	685.6	250.3
C	104号住居	13.3	16.0	2.7	14.6	0.9	421	775	354	573.1	102.2	K	69号住居	13.2	20.8	16.9	16.9	2.2	611	1,310	699	808.7	262.2

準偏差は1.2が算出された。

一方、竪穴住居ごとのこも編み石の重量<sup>(4)</sup>の平均は、B区H21号住居の261.7gからB区H47号住居の910.8gとやはり多様であるが、平均の重量が最も軽いB区H21とB区H10号住居(平均333.2g)及び最も重いE区H123号住居(平均872.7g)とB区H47号住居を除く、D区H113号住居(平均367.9g)からK区69号住居(平均808.7g)までの30軒の平均値は概ね直線的な分布を示す。尚、この重さの平均値の34軒全体での重量の平均は606.2gで、その標準偏差は169.3と算出された。

### ③ こも編み石に見られる加工痕

こも編み石には人為的使用・加工痕跡が残されるケースが多い。今回対象とした469点のこも編み石の中で、摩耗痕、研磨痕、敲打痕が確認された資料は462点であるが、これは全体の90.8%に及んでいる。

こうした加工・使用痕跡のうち、後述する横位を一周する摩耗痕を除けば、表裏面に加工痕跡が認められたこ

も編み石は161点あり、その加工痕跡は摩耗痕が60点、研磨痕が102点、敲打痕が8点に見られた。また側縁部に加工痕跡の認められた資料は300点を数え、その痕跡は摩耗痕が82点、研磨痕が62点、敲打痕が61点、削痕は6点、剥離痕は61点であった。一方、端部に加工痕の見られた資料は21点と少なく、その痕跡は摩耗痕が3点、研磨痕が5点、敲打痕が14点であった。これらの加工痕跡は全てが研磨や敲打等を主目的として使用したものではなく、特に後述する側縁部の抉れを形成するために施された痕跡も含まれていることを記しておくたい。

さて取り上げた469点では、5点のうち1点に当たる97点が石器、石製品からの転用品であった。これらは、磨石83点、敲石9点、凹石2点、石皿1点を数えた。上述のように、先学もこも編み石にこうした石器、石製品が転用される事例のあることを紹介しているが、本遺跡例も同様の見解を示すものである。水田実がこれらを敲石として紹介することになったように(水田 1985)、敲













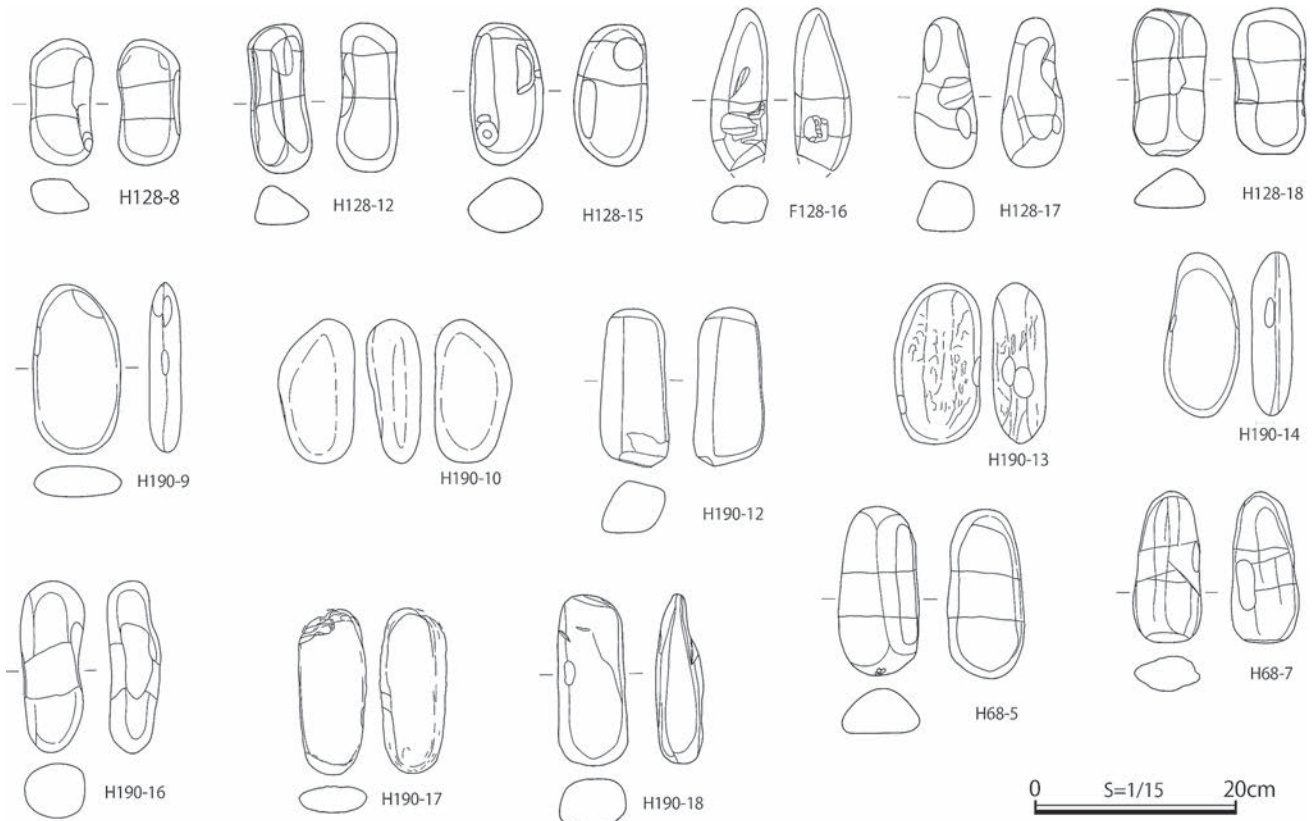




第5図 多比良追部野遺跡出土こも編み石(1)



第6図 多比良追部野遺跡出土こも編み石(2)



第7図 多比良追部野遺跡出土こも編み石(3)

石の多い遺跡もあるが、多比良追部野遺跡出土資料では、磨石が主体(転用品の85.6%)であり、敲石は9点(転用品の9.3%)と少ない。資料は提示しないが、筆者が近年目にしたこも編み石も敲石の転用、或いは敲石様の使い方をしている例を散見している。しかし多比良追部野遺跡出土例に敲石が少ないのは、本遺跡例の使用石材に片岩が多く、従位に剥離する性質を持つため、敲石としての使用が少ないものと思料される。

④ こも編み石の要件となる加工痕1—摩耗周—

こも編み石に見られる使用・加工痕跡のうち「横位を一周する摩耗痕」と側縁に確認された「抉れ」は、こも編み石としての使用を確認するものである。尚、本稿では横位を一周する摩耗痕を、以下「摩耗周」と仮称することとする。

摩耗周の見られたこも編み石は373点で、これは今回分析対象とした469点のこも編み石の79.5%に当たるものである。このうち殆どは1条の摩耗周であるが、16例(4.3%)に2条の摩耗周が確認されている。2条の摩耗周の確認された16例の摩耗周の位置は、両端寄りにあるものが6例、中位と端部よりにあるもの6例、中位の両端側にあるもの3例、中位の一端に寄ったところと端部寄りにあるものが1例であった。また、摩耗周1条のこも編み石368点のうち、摩耗周が中位にあるものが

229点、中位のやや片端部寄りにあるものが78点、端部寄りにあるもの46点、上半部にあるもの4点であった。また斜方向に摩耗種のあるもの1例と、切断して1条か2条か明らかでないもの1例があった。中位に摩耗周の見られるものが64.1%と、多い傾向が見られた。また、摩耗周の幅は、切断して測定できなかったものを除き1.0～7.0cmを測ったが、平均3.5cmを測り、標準偏差は1.1であった。

住居別の摩耗周を有するこも編み石の割合は、4軒が25%以下、4軒が40～60%、12軒が75～99%であったが、残り14軒は100%を記録した。また、摩耗周を伴うこも編み石の割合が75～99%であるもののうち、4軒が90%以上、残り8軒のうち2軒が89.9%と高い比率であった。全てのこも編み石が摩耗周を伴う住居は全体の41.1%であるが、摩耗周を伴うこも編み石が89.9%以上を占める住居は58.8%、75%以上では76.5%を占めている。

一方、摩耗周を伴うこも編み石の比率が25%以下の住居は、F区190号住居(11.5%)、B区14号住居(12.5%)、B区10号住居(16.7%)、B区19号住居(23.5%)の4件であったが、これらは新しい河原石で作業を始めてからあまり時間が経過していないことを示唆しているものと思料される。換言すれば摩耗周を伴うこも編み石が100%であるB区18号住居、C区111号住

居等14軒の竪穴住居では、長期間使用したこも編み石で編物を作製する作業が行われたことが示唆するのであり、75～100%以上が確認された26軒の竪穴住居では長期に使用されたこも編み石を使用したことが窺われるのである。

⑤ こも編み石の要件となる加工痕2一挟れ一

摩耗周とともに側縁に確認される「挟れ」はこも編み石としての使用を確認する要件となるものである。

こも編み石は縦糸となる縄或いは紐を巻いて使用するが、その手掛かりとして側縁に「挟れ」を有する事例が、検討対象の469点のうち229点、48.8%に見受けられた。このうち117点(48.3%)に明らかな加工痕が見られ、18点(7.4%)が明らかな自然面であった。加工による挟れを有するこも編み石は、摩耗によるものが42点で、左右両側に施されているもの28点、片側のみに施されているもの14点であり、研磨によるもの13点中、左右両側に施されているもの8点、片側のみに施されているもの5点、削りによるもの3点は全て両側に施されている。また敲打によるもの36点では、左右両側に施されているもの22点、片側のみに施されているもの14点、剥離によるもの23点で、右両側に施されているもの7点、片側のみに施されているもの16点であった。尚剥離によるものは、当遺跡のこも編み石の石材が片岩が多いことによる特性であろうと思料される。この加工により形成された挟れを有するこも編み石は、摩耗によるものが35.9%、敲打によるものが30.8%と多い。

一方自然面を挟れとして使用したこも編み石18点が確認されたが、左右両側に挟れを持つもの5点、片側のみのもの13点であった。先に、こも編み石の平面形態は主に楕円形や隅丸長方形を呈すると述べたが、表3には記した形態の中で器物からその形態名を取ったものは概ね幅広のものであり、瓢箪形と記した幅広の瓢箪形を呈したものは中位の絞り部分を利用し、或いは鳶口形と記した端部の一縁側が突出した幅広の鳶口形の石材も縄或いは紐を掛ける手掛かりとなったものと思料される。

多比良追部野遺跡出土のこも編み石はのうち、8個以上が出土した竪穴住居出土の469点について検討した。本遺跡では磨石を主体としたが、先学が指摘したようにこも編み石には石器、石製品からの転用品があり、摩耗痕、研磨痕、敲打痕等の人為的所作の痕跡が確認された。しかし、こも編み石がこも編み石である根拠となる加工は、本稿では摩耗周と仮称した、礫の中位に一周する摩耗痕跡と側縁に見られる挟れである。挟れには摩耗、敲打等により加工したものと、自然面を利用したものがあつた。



第8図 河原石調査地点位置図(S=1/10万)

## 5 利根川の川原石

### ① 利根川と川原石の調査方法

それでは自然石ではこのような加工痕は見られるのであろうか。そこで、これを確認するため、河原石を観察、記録して確認することとした。

調査は利根川河原の3地点4か所で令和2年10月から11月にかけて実施した。一級河川である利根川は、群馬県利根郡みなかみ町大水上山を源とし、関東平野を横断して太平洋に注ぐ大規模河川である。調査域は利根川の上流部に当たり、山間地から関東平野に現れた付近に所在する。

調査地点は渋川市南部の国道291号(旧国道17号)の坂東橋上流側袂の右岸(第1地点)、前橋市と北群馬郡吉岡町市町境の国道17号前橋渋川バイパスの新坂東橋上流側左岸(第2地点)、前橋市岩上町・総社町間の県道6号線の大渡橋左岸の上流側(第3U地点)及び下流側(第3D)の4地点である。第1地点では10点、第2地点で



写真1 第1地点調査の川原石



写真2 第2点調査の川原石(1)

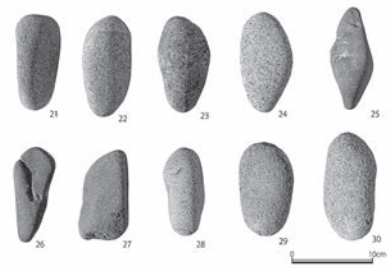


写真3 第2地点調査の川原石(2)



写真4 第2地点調査の川原石(3)



写真5 第3 U地点調査の川原石(1)



写真6 第3 U地点調査の川原石(2)



写真7 第3 U地点調査の川原石(3)



写真8 第3 D地点調査の川原石(1)



写真9 第3 D地点調査の川原石(2)

は29点、第3 U地点では28点、第3 D地点では19点の合計86点の「こも編み石に見える礫」を選定し、長さ、幅、厚みを測定し、重量を測った。また石材を同定し、写真撮影を行った。尚、石材同定は筆者が行ったため、或いは誤りがある可能性のあることを付記しておく。

① 利根川の川原石の概要

調査した川原石は上述のように86点であったが、その長さは9.6～16.5cm、平均12.19cmを測り、標準偏差は1.43であった。また重量は164～860g、平均418.87gを測り、標準偏差は145.43であった。

また、河原石の表面を洗浄し、短時間ではあったが表面観察を行った。その結果、No.29は任意に据えた表面左寄りに3.7×3.8cmの摩耗痕を確認し、No.78の一端に敲打痕を確認したが、他の河原石にはこうした加工痕様の痕跡は確認されなかった。また幅は測定しなかったが、中位を横断するように薄層理(幅3cm以上)程度の層理が確認されたものが29点あった。これは調査対象の33.7%に当たるものである。写真10に多比良追部野

遺跡のB区19号住居-21(左側)と川原石(No.19)を並べて示したが、観察に慣れていないと、この薄層理と摩耗周とは見間違える可能性を有するもので、疑似摩耗周とも呼べるものである。疑似摩耗周に比べ摩耗周は円滑な面を呈している。

川原石には抉れとして使用できる自然面を有するものが16点あった。これは調査対象の18.6%を占めるもので、換言すれば、こも編み石としての使用を前提として川原石を採集するに当たり、こうした形態のものを敢えて採集した可能性が考えられるものである。

以上のように、自然の川原石には摩耗周と見間違える



川原石(左:19住-21、右:No.19)  
(▼ 摩耗周 △ 層理(疑似摩耗周))



されるのである。勿論、今回調査対象とした多比良追部野遺跡出土こも編み石についても、全てに摩耗周が確認できないことは既述の通りであり、単体としては残念ながら摩耗周のない礫はこも編み石として認定できない。こうした礫は複数個のまとまりとしての出土がなければこも編み石と認定することはできないのである。

さて、本稿で取り上げたこも編み石を、当事業団でかつまとめられたのは、同窓の先輩であり、職場の先輩でもあった黒沢はるみ氏で、昭和の時代のことであった。その後、氏の成果を評価する機会もないまま時間のみが過ぎてゆき、今日では、こも編み石は竪穴住居から複数個がまとまりとして出土した場合にのみ、発掘調査報告書へ取り上げられることが一般的になってきている。そうした中、「1点ではこも編み石と認められない」という指摘をときおり耳にしてきた。しかし多比良追部野遺跡の整理作業を経験し、その後多数のこも編み石を実見してきた経験から、竪穴住居からまとめて出土した状態になくとも、詳細な観察でこも編み石を識別できるのではないかという考えが、本稿を起こしたきっかけであり、目的とするところであった。しかし浅学の悲しさで、冗長なだけで、十分な検討を成し得なかったことは慚愧に堪えないのである。しかし、繰り返しになるが、上述のように摩耗周や人為的加工による挟れが確認できるのであれば、1点でもこも編み石として認識できるのであり、たかがこも編み石と雖も詳細な観察によりたった1点でも自然石とこも編み石を識別できることを示せたのではないかと思うのである。

最後になるが、本稿執筆の遠因となったのは筆者にこも編み石の観察の視点が与えられたことであり、その視点をご教示賜った大木紳一郎氏に感謝申し上げたい。また、こも編み石への関心を失わせないアンカーとしてあったのは国分寺中間地域の発掘調査報告書に掲載されたこも編み石の論考であり、これを執筆された黒沢はるみ氏と、その業績の掲載をご教示戴いた桜岡正信氏にも謝意を伝えたいと思う。そして、実は今年も執筆が進まず辞退を申し出たものの、却って叱咤激励戴き、ついには提出まで導いて下さった当事業団年報紀要委員会の担当である谷藤保彦氏にも謝意を伝え、稿を閉じたいと思う。

## 【註】

- (1)大場利夫・石川徹(1956)は原典に当たりたかったが、新型コロナウイルスの発生により、所蔵図書館への往来が困難なため、渡辺誠(1981)からの孫引きとして提示した。
- (2)黒澤は『石墨遺跡』(1985)の共著者である石北直樹の説として記しているが、水田実の見解である。
- (3)石材鑑定は陣内圭一先生が行っている。
- (4)多比良追部野遺跡出土こも編み石の重量標記は10g単位のものとして1g単位のものがあるが、整理途中で重量計の更新があったためであるが、該当資料が多量であるため、測定の上直しは行わなかった。

## 【引用文献】

- 大場利夫、石川徹『手稲遺跡』(1956)、手稲町  
 児玉作左衛門、大場利夫『天塩国豊富遺跡の発掘調査について』(1959)、「北方文化研究報告」第14輯、pp.133-180、北海道大学北方文化研究室  
 大川 清「むすび」(1968)『長野県伊那市福島遺跡(資料編)』、pp.84-86、国土館大学文学部考古学研究室  
 尾崎喜左雄『入野遺跡』(1962)、群馬県多野郡吉井町教育委員会  
 尾崎喜左雄「群馬県入野遺跡」(1970)『新版考古学講座 第6巻 有史文化(上)』、pp.161-168、雄山閣、1973年刊行の再販本を使用した。  
 尾崎喜左雄「群馬県入野遺跡」(1962)、多野郡吉井町教育委員会  
 柿沼幹夫「2 下田遺跡43号住居跡出土の川原石について」(1979)『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告—Ⅲ— 下田・諏訪』、pp.172-176、埼玉県教育委員会、V結語  
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『多比良追部野遺跡』(1997)  
 黒沢はるみ「第3項 住居出土の礫について」(1988)『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』、pp.411-415、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、「第5章まとめ 第2節遺物」  
 柴田 徹『河原の石のC D 岩石鑑定図鑑』(2005)、(有)考古石材研究所  
 千葉とき子、斎藤誠二『かわらの小石の図鑑』(1996)、東海大学出版  
 比留間博「ii」五領期の石器」(1969)『船田』、pp.106-107、八王子市船田遺跡調査会、服部敬史他執筆  
 水田 稔「<敲石>」(1985)『石墨遺跡』、p.380、沼田市教育委員会、[VI 成果と問題点 2 弥生時代・古墳時代前期 (3) その他の道具]  
 吉井雅勇「荒川町端端遺跡出土の楕円礫について—古墳時代中後期の編物石錘の出土例—」(2007)『新潟考古学談話会会報』第33号、pp.43-48、新潟考古学談話会  
 渡辺 誠「編み物用錘具としての自然石の研究」(1981)『名古屋大学文学部研究論集LXXX』、pp.1-pp.46

## 【図版】

- 第1図 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第47図に石守加筆転載
- 第2図 上：石守が作成 中・下：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第1図・第2図を石守加筆転載
- 第3図 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第63・140・165・168・170-171・212-213・349-351図に石守が加筆転載
- 第4図 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第369・414-415・586-587図に石守が加筆転載
- 第5図 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第32・40・47・49・53・66・70・109・123・142・157・160・167・169・173・214図から抽出、転載
- 第6図 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第214・268・277・310・320・329・348・354・363・369・416図から抽出、転載
- 第7図 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1997) 第435・589・647図から抽出、転載
- 第8図 国土地理院「前橋」1/50,000地形図に石守加筆

## 【写真】

写真1～10 石守が撮影、修正



# 江戸時代の出土金属製品の材質分析について

## — 天明泥流により被災した煙管を中心に —

板垣 泰之

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. はじめに      | 4. 煙管の形態等について |
| 2. 分析資料・分析方法 | 5. 分析結果       |
| 3. 先行研究      | 6. まとめ        |

### — 要 旨 —

江戸時代の金属製品の分析は発掘調査が多くないことも関係して、材質分析が漆椀や一部金属製品を除き多くなされていない。しかしながら、江戸時代の遺物には高度な技術が使用されていることがみて取られる。また、電気やガスなどが使用できないという制約がある中で、現代の金属加工技術とは異なる方法で加工をおこなっている事が考えられるそれに伴い、材質も異なる事が予想される。

今回は群馬県長野原町の天明3年(1783)に浅間山の噴火による影響で泥流に飲み込まれた、西宮遺跡、石川原遺跡を対象にし、多くの金属製品がある中でも金属光沢を持つ煙管と鑄掛けについて分析をおこなった。

分析の結果、金色光沢をもつ煙管の中でも微妙な銅と亜鉛の配分がおこなわれていることや銀色光沢、黒色光沢があるものは銅、亜鉛、錫、鉄の配分をそれぞれで工夫することにより発色させていることがわかった。鑄掛けの材質を鍋と茶釜のそれぞれ分析したところ、合金の配分が異なり使用用途によって使い分けをしている可能性がでてきた。

今回、分析をおこなった点数が限られているため、総括するような結論に至ることはできなかったが、江戸時代の地方における金属製品の材質が様々であることから、都市部だけではない技術の発達や利用のようすを見ることができた。今後も江戸時代の遺物であっても分析により、新たな研究が検討できると考えられる。

#### キーワード

対象時代 江戸時代 天明3年

対象地域 群馬県 八ッ場地域

研究対象 煙管・鑄掛け

## 1. はじめに

江戸時代の金属製品を観察すると、現代と変わらないような製品や当時の技術でどのように製作しているのか疑問を覚える製品が多くある事に気づいた。特に、今回取り上げる西宮遺跡や石川原遺跡は天明三年(1783)に浅間山の噴火による被害で埋没した遺跡であることから年代も確定しており、江戸時代後期の成熟してきた技術が使用されている事が予測される。また、江戸時代の遺跡でも、江戸や城下町以外の遺跡の調査は少なく、自然科学分析例も今回対象とする一般村落での出土遺物は例が少ない。

その中でも、今回注目したのは煙管と鍋の鋳掛である。出土品として煙管は多く発見されているが、金色の光沢を持つ煙管について肉眼で確認するとやや色が異なるように感じられるものがあり、銅と亜鉛の合金である真鍮であろうという想定はできるが、詳しく分析すると一律の配分でないのではないかと考えた。また、煙管本体を銅板で作り出し、丸めてろう付けをしているが、ろう付けに使用している金属は銅、亜鉛、錫が使用されている真鍮蝋という分析結果が出されている(原祐一ら1999)が、江戸と群馬での違いがある可能性があり、確認をおこなうことにした。鍋の鋳掛は鍋が破損した際に修復をおこなったものであるが、鋳掛の作業時には溶けやすい合金でありつつ、実際に鍋として使用時には溶けないようにしなければならず、配分が異なると使用できない可能性もあると思われる。当時の職人がそれぞれの修理に最適な金属の配合を把握している可能性がある。

今回、蛍光X線分析をおこなうことで、江戸時代の金属製品の材料について使用金属の元素について一部判明することができたので報告する。

## 2. 分析資料・分析方法

分析資料は西宮遺跡から出土した煙管18点(金色光沢10点、銀色光沢2点、黒色光沢1点、材質分析として5点)、鋳掛部分1点と石川原遺跡から出土した鋳掛部分1点の計20点(表1)となる。分析資料は劣化が少ない部分を測定点としておこない、1点につき同様の条件をもつ測定点で3回分析をおこなった。1回目は測定時間300秒、2、3回目は100秒での測定をおこなった。ただし、資料4については分析箇所が小さいために1回の分析しかおこなえなかった。

材質分析として検出元素全体でのwt%を検出し、金色光沢を持つ煙管については銅と亜鉛の合金の真鍮であると判明したうえで、銅と亜鉛の配分だけに着目し2種類の元素でのwt%で検出をおこなった。

分析は群馬大学研究・産学連携推進機構機器分析センターに依頼し、専任准教授の林史夫氏、分析担当者の西脇拓哉氏に分析をしていただいた。

分析条件は群馬大学研究・産学連携推進機構機器分析センターより提出された分析報告書を以下に引用する。

## 【測定装置】

蛍光X線分析装置(XRF、日立ハイテクサイエンス製 エレメントモニタSEA1200VX)

## 【測定条件】

・使用管球：ロジウム

・加速電圧+

1次フィルタ：

15 kV + フィルタなし (Na ~ S の測定に使用)、

15 kV + Cr フィルタ (Cl ~ Cr の測定に使用)、

50kV+Pb フィルタ (Mn ~ Y, Hf ~ U の測定に使用)、

表1 分析試料一覧

資料番号1	石川原遺跡	7区1屋敷	取上げ番号1	未発刊	茶釜鋳掛部分
資料番号2	西宮遺跡	6区1面	報告書第670集	287図183	鍋鋳掛部分
資料番号3	西宮遺跡	6区1建物	報告書第670集	279図98	金色光沢を持つ煙管
資料番号4	西宮遺跡	6区3建物	報告書第670集	426図22	煙管(ろう付け分析)
資料番号5	西宮遺跡	6区1建物	報告書第670集	279図89	金色光沢を持つ煙管
資料番号6	西宮遺跡	6区1建物	報告書第670集	279図85	金色光沢を持つ煙管
資料番号7	西宮遺跡	6区1建物	報告書第670集	279図86	銀色光沢を持つ煙管
資料番号8	西宮遺跡	6区2建物	報告書第670集	381図39	黒色光沢を持つ煙管
資料番号9	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図43	金色光沢を持つ煙管
資料番号10	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図47	煙管(煙管本体の材質分析)
資料番号11	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図50	金色光沢を持つ煙管
資料番号12	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図53	金色光沢を持つ煙管
資料番号13	西宮遺跡	7区5建物	報告書第670集	435図61	銀色光沢を持つ煙管
資料番号14	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図52	金色光沢を持つ煙管
資料番号15	西宮遺跡	7区11建物	報告書第670集	530図4	煙管(本体の材質分析)
資料番号16	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図48	煙管(本体の材質分析)
資料番号17	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図49	金色光沢を持つ煙管
資料番号18	西宮遺跡	7区7建物	報告書第670集	453図45	金色光沢を持つ煙管
資料番号19	西宮遺跡	6区1号屋敷	報告書第670集	279図88	煙管(本体の材質分析)
資料番号20	西宮遺跡	6区1建物	報告書第670集	279図82	金色光沢を持つ煙管

50kV+Cd(Zr ~ Ba の測定に使用)

- ・ピーキングタイム：1.0  $\mu$  sec
- ・コリメータ： $\Phi$  1mm
- ・雰囲気：大気
- ・測定時間：300s(フィルタごと)、100s(比較の為の測定)

#### 【解析方法】

装置に搭載されている汎用的な標準試料のデータを適用し、ファンダメンタルパラメータ法による定量を行った。

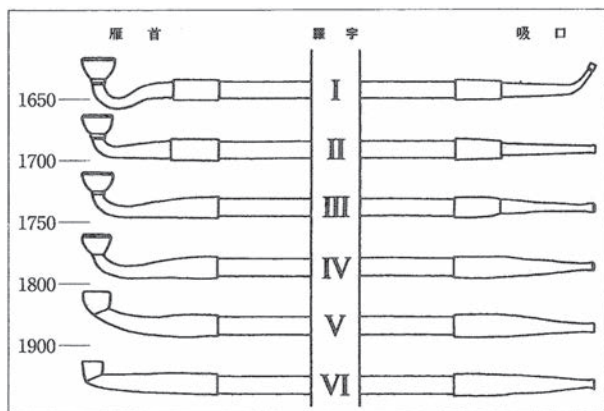
### 3. 先行研究

今回、分析をおこなった鋳掛痕、煙管、真鍮の分析の先行研究について提示する。

江戸時代の鍋本体、鋳掛けについて現時点では1点の蛍光X線分析報告がなされており、(田口2018)その結果は地金部分が鉄で鋳掛部分<sup>(1)</sup>は銅であることが指摘されている。

江戸時代の煙管の分析として東京大学本郷行内遺跡病棟建設予定地点SK03遺構(1683年以前)の煙管の分析がある。(原ら1999)その結果、亜鉛10～30wt%、銅90～70wt%の濃度範囲との報告がなされている。

真鍮に関する先行研究は1600年代初頭から真鍮の原料である亜鉛が輸入されており、大阪に「真鍮吹屋」という真鍮製造に関連した記載があるとされている。奈良県奈良町遺跡の坩堝などの真鍮関連資料が発見され、江戸時代(17世紀)との報告がある。江戸以前の研究として、平安時代後期から金字経に金の代用品として真鍮が使用されている例が確認され、文献資料の調査から『三国史記』巻33(雑志2、色服・車騎)に新羅の官人の鍮石の使用に関する規定があることが判明している。(西山ら2015)



煙草の変遷 古泉弘「江戸の考古学」(1987)を改変

図1 煙管の変遷

### 4. 各煙管の形態等について

形態と各煙管の特徴について確認する。煙管の変遷はおおむね六段階に推定されており、変遷図1を転載する。(古泉2001)ただし、既存の編年では対応しきれない煙管については、火皿の形状がしっかりとした椀状のものを第4期とした。

金色光沢を持つ煙管(写真1、写真2)

資料番号3 吸口で羅字との接続部分は丸いが、中ほどで角になり、口付けにかけてまた丸くなる。肩といえるほど明瞭な変換点は見られない。特殊な形をしているが、第4段階と見られる。

資料番号5 雁首。首は比較的長く、やや細くなりながら立ち上がり、火皿につながる。第4段階に該当する。金色光沢部分が少なく、わずかに鍍金が付着部分も分析対象となっている。

資料番号6 肩を持つ雁首。比較的の火皿までが短く、火皿には補強帯は見られない。肩が短く装飾的な意味合いが強い。肩を持つ点は第1期、第2期の古い形だが、補強帯がないことは第3期以降の特徴もあり、例外的といえる。

資料番号9 火皿部分のみが残存する。全面に金色の光沢が残り、分析結果としては良好であった。火皿は小さく、中期以降の葉の刻みが小さくなってからのものと見られる。

資料番号11 吸口。肩を持たず口付け部分がやや太くなっている。金色の光沢がよく確認できる。第4期以降となる。

資料番号12 吸口。肩を持たない形。第4期以降。

資料番号14 吸口。小口に近い部分が太くなり、肩状に成形されている。肩の形状を踏襲しようとしたようにも見える。明瞭な肩ではないことから第4段階とみる。

資料番号17 吸口。やや全体が細身の印象を受ける。小口部分から吸い口に平行に刻みが付けられ、装飾性が高い。第4期以降。

資料番号18 やや大ぶりの火皿を持つ。肩はなく、小口から首までの長さが短い。大ぶりの火皿はやや古い形状にも思えるが、脂反しが短く、第4期とみられる。

資料番号20 小型の雁首。小口部分はつぶれてしまっ

ているが、火皿は小さく、脂返しも短い。第4期となる。

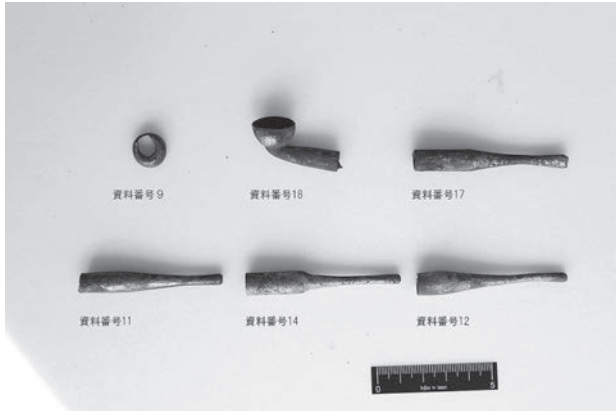


写真1 金色光沢を持つ煙管



写真2 金色光沢を持つ煙管

銀色光沢を持つ煙管(写真3)

資料番号7 雁首。銀色の光沢はわずかに残るのみで、やや錆と一緒に分析をおこなっている可能性もある。火皿は大きい、脂返しは短い。第4段階となる。



写真3 銀色光沢を持つ煙管

資料番号13 口付け部分が破損している吸口。全体に銀色の光沢が残る。肩を持つが破損し、分類は難しい。

黒色光沢を持つ煙管(写真4)

資料番号8 吸口。小口が六角形の断面を呈しており、口付け部分の断面は丸い。表面が黒色の光沢を持ち、滑らかな金属表面となっている。分類としては例外にあたる。第4段階以降となる。



写真4 銀色光沢を持つ煙管

光沢は見られない煙管(写真5)

資料番号4 火皿が大きい雁首。脂返しが分析例の中でははっきり湾曲としている。第4期ではあるが火皿も大きいことから、やや古めの雰囲気を持つ。

資料番号10 火皿が大きい雁首。脂返しが短く、小口までの長さも短めである。第4期である。

資料番号15 細めの吸口。つなぎ目の蠟付けが明瞭である。小口、口付けが一部欠損。第4期以降である。

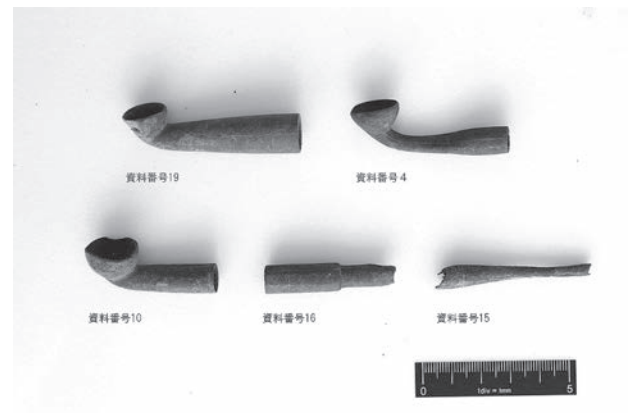


写真5 銀色光沢を持つ煙管

資料番号16 小口は六角形の断面で、肩を持ち、肩部分に水口と彫られ、模様が刻まれている。口付け部は欠損している。先行事例によると、水口煙管は断面八角形で第3段階まで製作されているとされている。(江戸遺跡研究会編2001)年代としては、第4期に該当し、形状が異なることから、模倣品となるか。

資料番号19 火皿が小さく側面がまっすぐ近く立ち上がる。小口が太く、火皿に向かうにつれてやや細くなる。首は見られない。第5期に近い例外のものとなる。

## 5. 分析結果

分析データは群馬大学機器分析センターより報告を受けたデータを一部結合、整理して掲載している。(表3) X線スペクトルのグラフデータは筆者が保管している。

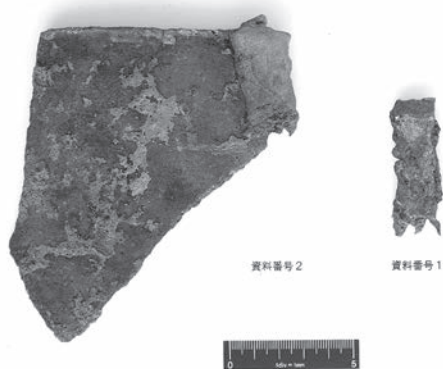


写真6 鑄掛け分析資料

鑄掛2点(資料番号1、2)(写真6)

資料番号1の石川原遺跡で出土した茶釜に使用されていた鑄掛は3回の分析結果の平均がFe0.55wt%、Cu87.61wt% Zn0.36wt%と銅がほとんどを占めていることがわかった。一方、資料番号2の西宮遺跡出土の鑄掛は鍋に使用されていたものである。三回の分析結果の平均はFe39.60wt%、Cu50.97wt%、Zn1.05wt%となり、銅と鉄、わずかな亜鉛が含まれる合金であることがわかった。一方、これは、使用用途によって素材の配分を変えて鑄掛をおこなった可能性が高いと考えられる。

先行研究(田口2018)では定性分析のみをおこなっており、今回の分析結果を相違ない銅と鉄を検出している。定量分析をおこなった場合にどのような結果になるか興味深いところである。

鑄掛の資料は2点のみの分析結果のため分析例は多いとは言えず、不完全であることは否めない。今後の分析点数が増加することでより詳細な検討ができると考えている。

真鍮煙管(資料番号3、5、6、9、11、12、14、17、18、20)

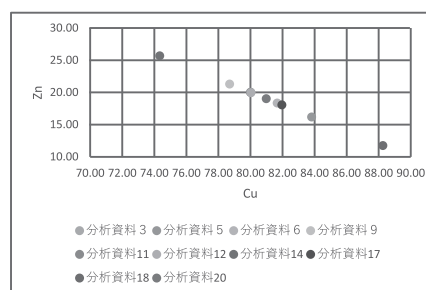
金色の光沢を持つ煙管について10点分析をおこなった。Cu75~83wt%前後、Zn15~26wt%前後となった。土壌成分と考えられるSiを除くその他の元素についてはほぼ1%以下となり、真鍮として元素を限定してもよいと考えた。続いてCuとZnの2元素での分析も同時におこなった。2元素での分析結果を基にしてCu/Zn比を取ったところ、数値的には大きな差ではないが資料番号

表2 金色光沢を持つ煙管のCu/Zn比

	分析資料3		分析資料5		分析資料6	
	Cu	Zn	Cu	Zn	Cu	Zn
1回目	80.01	19.99	83.46	16.54	81.84	18.16
2回目	80.13	19.87	83.12	16.88	82	18
3回目	79.9	20.1	84.86	15.14	81.15	18.85
平均	80.01	19.99	83.81	16.19	81.66	18.34

	分析資料9		分析資料11		分析資料12	
	Cu	Zn	Cu	Zn	Cu	Zn
1回目	78.72	21.28	79.93	20.07	80.04	19.96
2回目	78.45	21.55	79.87	20.13	79.91	20.09
3回目	78.93	21.07	80.18	19.82	80.15	19.85
平均	78.70	21.30	79.99	20.01	80.03	19.97

	分析資料14		分析資料17		分析資料18		分析資料20	
	Cu	Zn	Cu	Zn	Cu	Zn	Cu	Zn
1回目	74.27	25.73	82.08	17.92	88.41	11.59	80.71	19.29
2回目	73.64	26.36	81.53	18.47	88.05	11.95	81.33	18.67
3回目	75.11	24.89	82.27	17.73	88.32	11.68	80.9	19.1
平均	74.34	25.66	81.96	18.04	88.26	11.74	80.98	19.02



14と資料番号18の2点は大きく外れた。(表3)その他は、ほぼ近い位置に密集しているため同様の材料比率で作られたものと考えられる。

#### 銀色光沢を持つ煙管(資料番号7、13)

銀色光沢を持つ煙管は2点分析をおこなった。CuとZnが含有されているところは真鍮の煙管と同じであったが、銀色光沢を持つ煙管はCuが多く含まれ、Pb、Snがやや多いことが特筆される。一部誤差はあるが、多くの分析箇所では1%に近い数値から含有量が多い部分では3%を超えるPbが検出された。Snは資料番号7では1%前後、13ではほぼ2%以上という結果になった。その他の元素については資料番号13がCaの含有量が多い事が特筆される。

#### 黒色光沢を持つ煙管(資料番号8)

黒色光沢を持つ煙管は1点である。3回の分析結果を平均すると、Cu58.82wt%、Zn20.35wt%、Sn2.21wt%、Fe1.80wt%、Ca3.03wt%となる。Cuの値が60wt%を下回っており、他の煙管と比較して特に低いことが確認できる。Znがやや多く20wt%を超えるが、その他Ca、Sn、Feの値が他の煙管よりも多いことから、微量の元素の配合が黒色光沢を生み出す配分であると予想される。

#### つなぎ目の蝋付けの材質(資料番号4)

CuとSn、Znが含まれることがわかった。Cu73.81wt%、Sn12.94wt%となっており、分析結果のみで判断すると銅と錫、亜鉛の合金で、先行研究事例と同様の材料であると言える。ただし、今回の分析では分析の有効範囲が広いので、つなぎ目以外にも元素も検出している可能性があり検討が必要である。

#### 煙管の材質分析(資料番号10、15、16、19)

光沢がなく銅製品としての煙管と光沢を持つ煙管を比較するために分析をおこなった。分析は錆などによる劣化が少ない部分を分析した。資料番号10、19はCu70wt%、Znが11wt%～16wt%である。一方、資料番号16はCu75wt%、Zn15wt%以上の結果が出た。資料番号19についてはCuが72wt%～80wt%まで幅広く、Znは11wt%～14wt%になっている。Snの値は0.4wt%以上となり、他の資料番号10、15、16煙管が0.2wt%であることを考えるとやや高い値が見られた。また、資料番号10、資料番号16を用いて、劣化している部分と比較的狀態が良い部分での分析結果を比較した。結果を見ると、CuとZnの比率が変化している。劣化が多い方がZnが少なくなっていることから、Znが埋蔵中に劣化とともに減少し、それに伴って比率とし

てはCuが増加しているものと考えられる。

#### 6. まとめ

以上、今回の研究では天明泥流で被害を受けた江戸時代の金属製品の材料について分析を進めてきた。煙管については年代がはっきりしている中で、形態も含めてバラエティに富んでいる点が指摘できる。今回は分析をおこなったもののみの形態を確認したが、同遺跡内や周辺遺跡でも羅字が残存し、取り扱いに注意が必要なため分析をおこなえなかったものなどもあった。それらの遺物を追加で検討していく事により、また新たな見解が生まれる可能性が大いにあると感じている。

分析結果としては、鑄掛の資料について分析点数は少なかったものの、鑄掛材料の元素配分に差異が現れたことは大きな成果である。石川原遺跡の茶釜の修理材料は銅が主だったのに対して、西宮遺跡の鍋は鉄と銅が約半分ずつとわずかな亜鉛を含む合金であることが判明した。これは、茶釜の方が温度が上がらない使用方法をしていたために銅での修理をおこない、鍋は茶釜より高い熱を受けるために鉄を含む合金を使用していたのではないかと仮説を立てることができる。しかし、今回は分析点数が少なく、他の鍋の鑄掛について分析をおこなえていないため積極的に言うことは難しい。他の可能性としては、鑄掛職人の経験としての配分決定である場合、同一の手法を持つ職人の作業が検討できる可能性も考えられる。今後分析例が増えていく事で今回の結果を検討する事ができるのではないかと期待している。

煙管の分析では金色光沢をもつ煙管が真鍮であることが確認できた。ほぼ、銅が79wt%～82wt%、亜鉛が18wt%～22wt%の辺りに分布している。例外として資料番号14、18が離れた値となった。14は肩を持つ吸口で、18が火皿が大きい雁首である。どちらも光沢部は多く、分析試料としての性質は十分であると思われる。どちらも西宮遺跡7区7建物から出土しており同建物からは他の真鍮の煙管も出土している。しかし、それらの煙管との違いなどは確認できない。ほぼ同一の配分になることを仮定していたが、配分の異なる真鍮の煙管があり、その煙管が特徴ある加工を施すなどの特殊な事例でもなかったため、こちらも他の遺跡や分析例を今後積み重ねていく必要があるといえる。

銀色の光沢を持つ煙管や黒色の光沢を持つ煙管も一般の煙管とは元素配分が異なることが判明した。それぞれの色合いを出すために検討されたものであることが考えられる。

分析の点数を増やして今後も継続して調査していくことにより、江戸時代の技術の一端を解明する事ができるのではないかと考えている。また、他地域、他時代の出土遺物を分析していくことにより、より技術の伝播まで

検討することはできないかと期待している。

分析結果を中心に検討をおこなったため、不十分などころが多々あると感じているが、今後の研究課題として考えていきたい。

本研究は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団令和元年度職員自主研究活動事業を受けたものである。

(1) 参考文献の文中では修理痕という言葉を使用しており、鋳掛けについては言及していない。

【引用・参考文献】

古泉弘 2001「喫煙2 煙管」『図説江戸考古学研究事典』柏書房 pp.189～190  
 田口智子 2018「川口市戸塚山遺跡発掘の鉄鍋の分析」『日本文化財科学会第35回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会第35回大会実行委員会 pp.226～227  
 西山要一 2015「東アジアの真鍮と紺紙金銀字古写経の科学分析」『文化財学報第三十三集』奈良大学文学部文化財学科 pp.1～19  
 西山要一(編) 2019『古代～中世の「鍮石」「真鍮」の研究-金に等しい価値があったころ-』  
 原祐一・小泉好延・伊藤博之 1999「近世の真鍮製造と亜鉛輸入-東京大学本郷構内遺跡出土キセルの材質分析から-」『江戸遺跡研究会会報 No.75』江戸遺跡研究会 pp.1～19  
 原祐一 1999「東大構内出土のキセル材質および亜鉛輸入」『第1回考古学シンポジウム』東京大学原子力研究総合センター・東京大学アイソトープ総合センター・東京大学埋蔵文化財調査室 pp.39～46

表3 鋳掛け痕、煙管の蛍光X線分析装置(XRF)による分析結果

資料番号	1				2			3									
遺跡名	石川原遺跡				西宮遺跡			西宮遺跡									
整理番号	51668				51907			51780									
区	7				6			6									
遺構名	1屋敷				1面			1建物									
取上番号	1				18			411									
器種名	鋳掛け痕				鍋鋳掛け痕			煙管(吸口)									
測定場所	鋳が少の部分		鋳掛け痕の裏		鋳が少の部分		鋳掛け表面			金色光沢部							
目的	材質の配分		鋳掛け部と比較		材質の配分		金属の材質			真鍮かどうか		Cu、Znの配分		真鍮かどうか		Cu、Znの配分	
試験回数	1回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	1回目	2回目	2回目	3回目	3回目				
Si	3.78	4.07	5.37	5.09	5.92	4.12	14.55			2.16		4.44					
P	0.17	1.99	0.19	0.22	1.12	1.14	1.26	0.42		0.55		0.70					
Ca	0.00	8.69	0.06	0.44	0.33	0.41	0.55	0.04		0.12		0.10					
Ti																	
Mn		0.38															
Fe	37.56	73.49	45.55	35.70	0.33	0.58	0.75	0.30		0.65		0.85					
Cu	54.25	8.83	44.93	53.73	90.26	91.53	81.04	78.90	80.01	76.90	80.13	74.59	79.90				
Zn	1.21	0.20	0.91	1.02	0.39	0.38	0.33	19.67	19.99	18.99	19.87	18.65	20.10				
Ag					0.15	0.15	0.09										
Sn	2.04	1.65	1.51	1.66	0.29	0.41	0.28	0.22		0.14		0.15					
Hg																	
Pb	0.99	0.70	1.48	2.14	1.22	1.30	1.15	0.45		0.50		0.52					

研究紀要39

資料番号	4		5				6							
遺跡名	西宮遺跡		西宮遺跡				西宮遺跡							
整理番号	51782		51779				51765							
区	6		6				6							
遺構名	3建物P19		1建物				1							
取上番号	1		334				410							
器種名	煙管（雁首）		煙管（雁首）				煙管（雁首）							
測定場所	つなぎ目痕 <small>つなぎ目でない部分</small>		金色光沢部				金色光沢部							
目的	使用金属 <small>つなぎ目との比較</small>		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分	
試験回数	1回目	1回目	1回目	1回目	2回目	2回目	1回目	1回目	2回目	2回目	3回目	3回目		
Si	5.14	6.24	3.15		1.33		0.78		0.42		3.31			
P														
Ca	1.06	0.23	0.06		0.13		0.18		0.95		1.01			
Ti														
Mn	0.05	0.04												
Fe	0.41	0.35	0.40		0.40		0.21		0.22		0.27			
Cu	73.81	83.89	79.83	83.46	80.92	83.12	79.89	81.84	79.59	82.00	76.71	81.15		
Zn	5.99	8.77	15.76	16.54	16.39	16.88	17.68	18.16	17.40	18.00	17.72	18.85		
Ag														
Sn	12.94	0.37	0.38		0.23		0.65		0.57		0.47			
Hg														
Pb	0.60	0.10	0.42		0.60		0.61		0.86		0.51			

資料番号	7					8			9								
遺跡名	西宮遺跡					西宮遺跡			西宮遺跡								
整理番号	51774					51771			52015								
区	6					6			7								
遺構名	1建物P1					2建物			7建物								
取上番号	1					306			203								
器種名	煙管（雁首）					煙管（吸口）			煙管（雁首）								
測定場所	銀色光沢部					金属光沢(黒)部			金色光沢部								
目的	材質検討					金属の種類検討			真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分	
試験回数	1回目	2回目（ヘッド）	3回目（稀少布）	4回目（胴体）	5回目（胴体）	1回目	2回目	3回目	1回目	1回目	2回目	2回目	3回目	3回目			
Si	5.71	1.15	2.17	6.29	5.92	8.60	10.44	9.14	3.48		4.49		3.40				
P	2.92	1.72	2.27	2.29	1.59	4.15	3.62	4.21	0.27		0.21		0.68				
Ca	0.81		0.24	2.41	1.55	3.16	2.79	3.15	0.00		0.07		0.00				
Ti																	
Mn	0.03					0.04											
Fe	1.67	0.80	1.62	1.17	0.46	1.36	2.03	2.02	0.53		0.58		0.58				
Cu	83.49	82.73	83.85	79.94	80.02	59.38	58.60	58.29	74.42	78.72	73.28	78.45	74.32	78.93			
Zn	3.28	11.84	7.62	5.17	8.62	20.51	20.00	20.55	20.01	21.28	20.01	21.55	19.73	21.07			
Ag	0.04			0.04					0.03		0.05		0.04				
Sn	1.02	0.46	0.75	1.44	1.09	2.36	2.16	2.11	0.64		0.65		0.66				
Hg	0.09			0.35	0.22												
Pb	0.93	1.29	1.47	0.90	0.53	0.45	0.37	0.53	0.63		0.67		0.59				



資料番号	10				11						12			
遺跡名	西宮遺跡				西宮遺跡						西宮遺跡			
整理番号	51850				51852						51853			
区	7				7						7			
遺構名	7建物				7建物						7建物			
取上番号	178				183						718			
器種名	煙管 (雁首)				煙管 (吸口)						煙管 (吸口)			
測定場所	鍍少部	鍍多部	鍍少部		金色光沢部						金色光沢部			
目的	材質検討	鍍少部と比較	材質検討		真鍮かどうか	Cu、Znの配分	真鍮かどうか	Cu、Znの配分	真鍮かどうか	Cu、Znの配分	真鍮かどうか	Cu、Znの配分	真鍮かどうか	Cu、Znの配分
試験回数	1回目	1回目	2回目	3回目	1回目	1回目	2回目	2回目	3回目	3回目	1回目	1回目	2回目	2回目
Si	16.54	3.32	12.38	6.97	2.56		1.47		7.40		0.80		1.52	
P	1.27	0.20	0.50	1.47	0.76		0.46		1.14		0.36		0.43	
Ca	0.99	0.09	0.60	0.48	0.00		0.05		0.12		0.04		0.04	
Ti	0.01	0.00												
Mn														
Fe	1.00	0.35	0.49	0.62	0.57		0.61		0.64		0.28		0.30	
Cu	66.59	87.94	72.72	73.72	75.74	79.93	76.73	79.87	71.68	80.18	78.33	80.04	77.54	79.91
Zn	13.05	7.60	12.95	16.13	18.92	20.07	19.24	20.13	17.56	19.82	19.48	19.96	19.44	20.09
Ag	0.03	0.03			0.03						0.03		0.05	
Sn	0.26	0.31	0.22	0.32	0.82		0.85		0.73		0.19		0.16	
Hg														
Pb	0.25	0.15	0.14	0.28	0.60		0.58		0.73		0.50		0.53	

資料番号	12				13					14					
遺跡名	西宮遺跡				西宮遺跡					西宮遺跡					
整理番号	51853				51848					51856					
区	7				7					7					
遺構名	7建物				5建物					7建物					
取上番号	718				102					720					
器種名	煙管 (吸口)				煙管 (不明)					煙管 (吸口)					
測定場所	金色光沢部				銀色光沢部					金色光沢部					
目的	真鍮かどうか	Cu、Znの配分	材質検討		材質検討					真鍮かどうか	Cu、Znの配分	真鍮かどうか	Cu、Znの配分	真鍮かどうか	Cu、Znの配分
試験回数	3回目	3回目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	1回目	1回目	2回目	2回目	3回目	3回目		
Si	2.82		6.37	7.26	7.70	6.66	6.06	0.45		4.02		1.58			
P	0.29		2.03	3.16	3.54	2.25	2.25	0.31		0.71		0.54			
Ca	0.06		4.13	4.36	3.73	4.51	3.44	0.03		0.03		0.06			
Ti															
Mn															
Fe	0.32		1.47	0.96	2.35	3.23	0.81	0.27		0.32		0.30			
Cu	76.88	80.15	75.32	75.35	72.79	72.72	82.05	73.11	74.27	69.56	73.64	72.93	75.11		
Zn	18.97	19.85	6.34	4.92	4.26	4.40	1.99	25.28	25.73	24.78	26.36	24.10	24.89		
Ag					0.08										
Sn	0.20		2.10	2.21	2.05	2.81	1.90	0.22		0.18		0.21			
Hg															
Pb	0.46		2.24	1.78	3.50	3.42	1.50	0.31		0.41		0.28			

研究紀要39

資料番号	15			16				17										
遺跡名	西宮遺跡			西宮遺跡				西宮遺跡										
整理番号	51854			51857				50574										
区	7			7				7										
遺構名	11建物			7建物				7建物										
取上番号	16			723				116										
器種名	煙管（吸口）			煙管（雁首）				煙管（吸口）										
測定場所	鍍少部			鍍少部	鍍多部		鍍少部		金色光沢部									
目的	材質検討			材質検討		鍍少部と比較		材質検討		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分	
試験回数	1回目	2回目	3回目	1回目	1回目	2回目	3回目	1回目	1回目	1回目	1回目	2回目	2回目	2回目	2回目	3回目	3回目	3回目
Si	8.28	7.99	19.29	6.94	5.16	2.97	6.73			0.85				3.08				
P	0.56	0.23	0.43	1.05	0.33	0.63	0.31	0.34		0.64				1.18				
Ca	0.48	0.21	0.23	0.40	0.47	0.10	0.18							0.13				
Ti																		
Mn																		
Fe	0.56	0.43	0.76	0.35	0.35	0.41	0.64	0.32		0.40				0.39				
Cu	81.84	81.68	73.67	75.22	83.63	74.82	73.34	80.59	82.08	78.82	81.53	77.32	82.27					
Zn	7.99	9.15	5.44	15.44	9.74	20.03	18.10	17.55	17.92	17.79	18.47	16.57	17.73					
Ag																		
Sn	0.19	0.21	0.10	0.20	0.20	0.22	0.14	0.42		0.39				0.47				
Hg																		
Pb	0.11	0.09	0.08	0.40	0.13	0.83	0.55	0.77		1.10				0.87				

資料番号	18						19			20								
遺跡名	西宮遺跡						西宮遺跡			西宮遺跡								
整理番号	50573						50488			50431								
区	7						6			6								
遺構名	7建物						1号屋敷			1建物								
取上番号	200						99			311								
器種名	煙管（雁首）						煙管（雁首）			煙管（雁首）								
測定場所	金色光沢部						鍍少部			金色光沢部								
目的	真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		材質検討			真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分		真鍮かどうか	Cu、Znの配分	
試験回数	1回目	1回目	2回目	2回目	3回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	1回目	2回目	2回目	2回目	3回目	3回目	3回目	3回目
Si							11.65	5.98	9.25	0.64		2.78			0.99			
P	0.51		0.76			0.30	1.05	0.42	0.91	0.46		1.56			0.67			
Ca							0.57	0.11	0.42	0.19		0.56			0.19			
Ti							0.00											
Mn							0.04											
Fe	0.09		0.09			0.11	0.57	0.38	0.52	0.24		0.26			0.23			
Cu	87.46	88.41	86.86	88.05	87.51	88.32	72.71	80.79	73.06	78.71	80.71	76.25	81.33	78.44	80.90			
Zn	11.45	11.59	11.78	11.95	11.56	11.68	12.67	11.64	14.99	18.76	19.29	17.40	18.67	18.46	19.10			
Ag																		
Sn	0.05		0.04			0.04	0.45	0.48	0.44	0.23		0.24			0.33			
Hg																		
Pb	0.43		0.48			0.47	0.29	0.20	0.39	0.77		0.94			0.70			

## 投稿規定

- 1 執筆者：投稿できるのは、本事業団職員及び年報・紀要委員会（以下、委員会という）が認める者とする。
- 2 提出及び掲載：投稿原稿は当該年度の委員会が定める期日までに提出し、委員会が定める査読を経た上で掲載する。  
なお、掲載の採否及び掲載順序は委員会が決する。
- 3 種類：原稿は埋蔵文化財及び関連する諸分野を含む内容の論文・研究ノート・資料紹介とする。  
なお1号内で完結することを原則とする。既発表のものは受理しない。
- 4 頁数及び件数：1編あたりの分量は20頁以内、1人1件を原則とする。

## 執筆要項

（平成28年12月改訂）

### A 締切

- 1 当該年度の年報・紀要委員会が定める。

### B 内容

- 1 冒頭に要旨・キーワードを付ける。キーワードは対象時代・対象地域・研究対象を各10文字・3点以内とする。
- 2 学術的内容を維持するため、提出後、査読を行い、投稿原稿の加筆・修正等を要請することがある。
- 3 題名は簡潔なものが望ましい。また英文タイトルを付ける。
- 4 本文は日本語使用を原則とするが、文末に外国文要約を付けることができる。

### C 体裁・表現

#### 1 本文体裁はA4版

- 1-1 要旨を含め全体を偶数頁とする。
- 1-2 本文は25字×48行×横2段組、註は34字×63行×横2段組、要旨は44字×20行程度×横1段組(版型は53字×48行×横1段組)とする。
- 1-3 提出原稿は原則としてワードで作成すること。本文・図版等をフル・デジタル入稿する場合も含めてCD等のほかに、必ず本文・図版等の位置をレイアウトした打ち出し原稿も添付する。
- 1-4 本文・図版等をデジタル入稿する場合は、原稿作成に際して使用したOS名及び使用編集ソフト名等を明記する。

#### 2 文章表現は次のようにする。

- 2-1 原則として現代仮名遣い・「である」体・常用漢字を使用する。
- 2-2 外国関係固有名詞はカタカナ書きで[ ]内に原文表記とする。
- 2-3 註は通し番号右肩付き片括弧、文末参考文献前に一括記載とする。
- 2-4 本文中と註での参考文献は(小林1998)のように表記する。引用箇所が明確な場合は頁数も表記する。
- 2-5 参考文献配列は原則50音順ないし、欧文が入る場合にはアルファベット順でも可とする。
- 2-6 参考文献表記の例

論文・報告書部分表記 群馬太郎 2015「論文名・引用か所」『文献名』号名 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団pp.1-10

報告書単著表記 群馬次郎 2014『文献名』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

報告書共著全体表記 群馬三郎・利根四郎 2013『文献名』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

ただし、共著者3名以上の場合代表編者のみを表記し、群馬三郎(編)と表記。

#### 3 図・写真図版の体裁

- 3-1 版面は1頁大 縦238.25mm×横172.25mm 左右半頁 縦238.25mm×横81.25mmとする。
- 3-2 図および写真はデジタル・データを原則とする。異なる場合、事前に委員会に相談し、その了解を得るものとする。
- 3-3 写真および図版データの仕様については、委員会が定めるものによる。
- 3-4 印刷は原則として単色印刷とする。カラー図版掲載の場合、本紙と異なる用紙を使用する場合には当該執筆者に印刷経費の個人負担を求める場合がある。また原則として折込・別刷り等は認めない。
- 3-5 図版などのキャプションは「図○」「表○」「写真○」のように表記する。

D その他

- 1 上記以外は当該年度の年報・紀要委員会が定める。
- 2 当事業団職員自主研究活動指定研究による成果の投稿は優先して取り扱う。
- 3 掲載料の徴収や原稿料の支払いはなく、抜刷の作成費用は個人負担とする。印刷部数の上限は原則200部とする。  
なお、執筆者が希望する場合に限り、執筆部分のPDFデータを無償で提供することができるものとする。
- 4 図版などの引用については、著作権に留意し、執筆者の責任において行うものとする。

## 執 筆 者

小原俊行(こはら としゆき)	群馬県地域創生部文化財保護課・当事業団元職員
鈴木 茂(すずき しげる)	日本大学文理学部非常勤講師
関口博幸(せきぐち ひろゆき)	当事業団職員
谷藤保彦(たにふじ やすひこ)	当事業団職員
友廣哲也(ともひろ てつや)	当事業団職員
杉山秀宏(すぎやま ひでひろ)	当事業団職員
高島英之(たかしま ひでゆき)	当事業団職員
石守 晃(いしもり あきら)	当事業団職員
板垣泰之(いたがき やすゆき)	当事業団職員

[掲載順。所属は、令和2年4月現在]

### 令和2年度年報・紀要委員

委員長：桜岡正信(資料部長)  
紀要委員：谷藤保彦 高島英之 齋藤 聡  
年報委員：須田正久 鈴木佑太郎 岩崎泰一  
事務局：鈴木真理子 齊田智彦

[令和2年4月現在]

## 研 究 紀 要 39

令和3年3月16日発行

編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2  
電話 0279(52)2511 (代)  
FAX 0279(52)2904  
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>  
印 刷 上武印刷株式会社

# BULLETIN OF GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

2021.3

39

GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

## CONTENTS

- KOHARA, Toshiyuki / SUZUKI, Shigeru / SEKIGUCHI, Hiroyuki ····· 1  
The Current Study of Paleoenvironmental Changes and Tephrochronology in the Upper Paleolithic Period  
– Focus on the Analyses in Hagiwara Site –
- TANIFUJI, Yasuhiko ····· 21  
Jomon Clay Earrings Unearthed in Gunma Prefecture  
– From the Middle to the First Half of the Late Jomon –
- TOMOHIRO, Tetsuya ····· 41  
Grave System in Gunma Prefecture – Positioning in the Late Yayoi Period –
- SUGIYAMA, Hidehiro ····· 59  
Review of the No. 3 Ritual Remains, Kanai Higashiura Site
- TAKASHIMA, Hideyuki ····· 79  
Historical Developments of Ancient Azuma County, Ueno Province, from the Viewpoint of  
the Trends in Ink-inscribed Pottery
- ISHIMORI, Akira ····· 99  
Is Even a Single Relic Stone Recognizable as a Component of “Straw-mat Weaving Stones” ?
- ITAGAKI, Yasuyuki ····· 119  
Material Analysis of Unearthed Metalware Manufactured in the Edo Period  
– Focusing on “kiseru” metal pipes hit by the Tenmei Mudflow –